彼岸過迄

夏目漱石

青空文庫

彼岸過迄に就て

事実を読者の前に告白すると、去年の八月頃すでに自分の小説を紙上に連載すべきはずだったのである。ところが余り暑い盛りに大患後の身体からだをぶつ通しとおに使うのはどんなものだろうという親切な心配をしてくれる人が出て来たので、それを好いいい機会しおに、なお二箇月の暇むさぼを貪ることにとりきめて貰ったのが原もとで、とうとうその二箇月が過去った十月にも筆を執とらず、十一十二もつい紙上へは杳ようたる有様で暮してしまった。自分の当然やるべき仕事しごとが、こういう風に、崩くずれた波の崩れながら伝わって行くような具合で、

ただだらしなく延びるのはけつして心持の好いものではない。

歳の改まる元旦から、いよいよ事始める緒口いとぐちを開くように事がきまつた時は、長い間抑えられたものが伸びる時の樂たのしみよりは、背中に背負しよわされた義務を片づける時機が来たという意味でまず何よりも嬉うれしかった。けれども長い間抛り出しておいたこの義務を、どうしたら例いつもよりも手際てぎわよくやつてのけられるだろうかと考えると、また新しい苦痛を感じずにはいられない。

久しぶりだからなるべく面白いものを書かなければすまないという気がいくらもある。それに自分の健康状態やらその他の事情に対して寛容の精神に充みちた取り扱い方をしてくれた社友の好意だの、また自分の書くものを毎日日課のようにして読んでくれる

読者の好意だのに、むく 酬いなくてはすまないという心持がだいぶつ
け加わつて来る。で、どうかしてうま 旨いものができると念じ
ている。けれどもただ念力だけではさくぶつ 作物のできればえを左右する
訳にはどうしたつて行きつこない、いくら佳いいものをも思つても、
思うようになるかならないか自分にさえ予言のできかねるのが述
作の常であるから、今度こそは長い間休んだ埋うめあわ 合せをするつも
りであると公言する勇氣が出ない。そこに一種の苦痛が潜ひそんでい
るのである。

この作を公おおやけにするにあつて、自分はただ以上の事だけを言つ
ておきたい気がする。作の性質だの、作物に対する自己の見識だ
の主張だのは今述べる必要を認めていない。実をいうと自分は自

然派の作家でもなければ象徴派の作家でもない。近頃しばしば耳にするネオ浪漫派ローマンはの作家ではなおさらない。自分はこれらの主義を高く標ひょうぼう榜ぼうして路傍ろぼうの人の注意を惹ひくほどに、自分の作物が固定した色に染つけられているという自信を持ち得ぬものである。またそんな自信を不必要とするものである。ただ自分は自分であるという信念を持っている。そうして自分が自分である以上は、自然派でなかりうが、象徴派でなかりうが、ないしネオのつく浪浪漫派でなかりうが全く構わないつもりである。

自分はまた自分の作物を新しい新しいと吹ふいちよう聴ちようする事も好まない。今の世にむやみに新しがっているものは三越呉服店とヤンキーとそれから文壇における一部の作家と評家だろうと自分はと

うから考えている。

自分はすべて文壇に濫用らんようされる空疎な流行語を藉りかて自分の作物の商標としたくない。ただ自分らしいものが書きたいだけである。手腕が足りなくて自分以下のものができたり、銜気げんきがあつて自分以上を装よそおうようなものができたりして、読者にすまない結果を齎もたらすのを恐れるだけである。

東京大阪を通じて計算すると、吾朝わが日新聞の購読者は実に何十万という多数に上つてゐる。その内で自分の作物さくぶつを読んでくれる人は何人あるか知らないが、その何人かの大部分はおそらく文壇の裏通りも露路ろじも覗のぞいた経験はあるまい。全くただの人間として大自然の空気を真率しんそつに呼吸しつつ穩当に生息しているだけだ

ろうと思う。自分はこれらの教育あるかつ尋常なる士人の前にわが作物を公おおよけにし得る自分を幸福と信じている。

「彼岸過迄ひがんすぎまで」というのは元日から始めて、彼岸過まで書く予定

だから単にそう名づけたまでに過ぎない実は空むなしい標題みだしである。

かねてから自分は個々の短篇を重ねた末に、その個々の短篇が相合して一長篇を構成するように仕組んだら、新聞小説として存外面白く読まれはしないだろうかという意見じを持していた。が、ついそれを試みる機会もなくて今こんにち日まで過ぎたのであるから、もし自分の手際てぎわが許すならばこの「彼岸過迄」をかねての思わく通りに作り上げたいと考えている。けれども小説は建築家の図面と違って、いくら下手でも活動と発展を含まない訳に行かないので、

たとい自分が作るとは云いながら、自分の計画通りに進行しかねる場合がよく起つて来るのは、普通の実世間において吾々の企てくわだが意外の障害を受けて予期のごとくに纏まとまらないのと一般である。したがってこれはずっと書進んで見ないとちよつと分らない全く未来に属する問題かも知れない。けれどもよしうま旨く行かなくつても、離れるともつくとかた片のつかない短篇が続くだけの事だろうとは予想できる。自分はそれでも差さしつか支えなかうと思つてゐる。

(明治四十五年一月此作を朝日新聞に公けにしたる時の緒言)

風呂の後

一

敬太郎けいたろうはそれほど験げんの見えるないこの間からの運動と奔走に少し厭いや気が注さして来た。元々頑がん頑じょう丈しようにできた身体からだだから単に馳かけ歩くという労力だけなら大して苦にもなるまいとは自分でも承知しているが、思う事が引ひつ懸かつたなり居い据すつて動うごかなかつたり、または引ひつ懸かろうとして手を出す途端とたんにすぼりと外はずれたりする反へ間まが度たび重かさなるに連れて、身体よりも頭の方がだんだん云う事を聞かなくなつて来た。で、今夜は少し癩しやくも手伝つて、飲のみたくもない麦酒ビールをわざとポンポン抜いて、できるだけ快かい豁かつな気分を自

分と誘いざなつて見た。けれどもいつまで経たつても、ことさらに借着たをして陽氣がろうとする自覚が退のかないので、しまいには下女を呼んで、そこいらを片づけさせた。下女は敬太郎の顔を見て、「まあ田川さん」と云つたが、その後あとからまた「本当にまあ」とつけ足した。敬太郎は自分の顔を撫なでながら、「赤いだろう。こんな好い色をいつまでも電灯に照らしておくのはもつたないから、もう寝るんだ。ついでに床を取つてくれ」と云つて、下女がまだ何かやり返そうとするのをわざと外はずして廊下へ出た。そうして便所から帰つて夜具の中に潜もぐり込む時、まあ当分休養する事にするんだと口の内で呟つぶやいた。

敬太郎は夜中に二返眼へんを覚さました。一度は咽喉のどが渴いたため、

一度は夢を見たためであった。三度目に眼が開いた時は、もう明るくなっていた。世の中が動き出しているなど気がつくや否や敬太郎は、休養休養と云つてまた眼を眠つてしまった。その次には気の利かないボンボン時計の大きな音が無遠慮に耳に響いた。それから後はいくら苦心しても寝つかれなかつた。やむを得ず横になつたまま巻煙草を一本吸つていると、半分ほどに燃えて来た敷島の先が崩れて、白い枕が灰だらけになつた。それでも彼はじつとしてゐるつもりであつたが、しまいに東窓から射し込む強い日脚ひあしに打たれた気味で、少し頭痛がし出したので、ようやく我を折つて起き上つたなり、楊枝ようじを銜くわえたまま、手拭てぬぐいをぶら下げて湯に行つた。

湯屋の時計はもう十時少し廻っていたが、流しの方はからりと片づいて、小桶一つ出ていない。ただ浴槽の中に一人横向になつて、硝子越ガラスこしに射し込んでくる日光を眺めながら、呑気のんきそうにじやぶじやぶやってるものがある。それが敬太郎と同じ下宿にいる森本もりもとという男だったので、敬太郎はやあ御早うと声を掛けた。すると、向うでも、やあ御早うと挨拶あいさつをしたが、

「何です今頃楊枝ようじなぞを銜くわえ込んで、冗談じょうだんじゃない。そう云やあ昨夕ゆうべあなたの部屋に電気が点ついていないようでしたね」と云つた。

「電気は宵よいの口から煌こうこう々と点ついていたさ。僕はあなたと違って品行方正だから、夜遊めつたびなんか滅多めつたにした事はありませんよ」

「全くだ。あなたは堅いからね。羨ましいくらい堅いんだから」
 敬太郎は少し羞痒くすぐつたいような気がした。相手を見ると依然として横隔膜おうかくまくから下を湯に浸つけたまま、まだ飽あきずにじやぶじやぶやっている。そうして比較的眞面目まじめな顔をしている。敬太郎はこの気楽そうな男の口髭くちひげがだらしなく濡ぬれて一本一本下向したむきに垂れたところを眺めながら、

「僕の事はどうでも好いが、あなたはどうしたんです。役所は」と聞いた。すると森本は倦怠だるそうに浴槽ふちの側りようひじに両肱りようひじを置いてその上に額のを載のせながら俯伏うつぶしになったまま、

「役所は御休みです」と頭痛でもする人のように答えた。

「何で」

「何でもないが、僕の方で御休みです」

敬太郎は思わず自分の同類を一人発見したような気がした。それでつい、「やっぱり休養ですか」と云うと、相手も「ええ休養です」と答えたなり元のとおり湯槽ゆづねの側に突伏つつぶしていた。

二

敬太郎けいたろうが留桶とめおけの前へ腰をおろして、三助さんすけに垢擦あかすりを掛けさせている時分になつて、森本はやつと煙けむの出るような赤い身体からだを全く湯の中から露出した。そうして、ああ好い心持だという顔つきで、流しの上へぺたりと胡坐あぐらをかいたと思うと、

「あなたは好い体格だね」と云つて敬太郎の肉付にくづきを賞ほめ出した。

「これで近頃はだいぶ悪くなつた方です」

「どうしてどうしてそれで悪かつた日にや僕なんざあ」

森本は自分で自分の腹をポンポン叩たたいて見せた。その腹は凹へこんで背中の方へ引ひっつけられてるようであつた。

「何しろ商売が商売だから身体は毀こわす一方ですよ。もつとも不養生もだいぶりでしたがね」と云つた後で、急に思い出したようにアハハハと笑つた。敬太郎はそれに調子を合せる気味で、

「今日は僕も閑ひまだから、久しぶりでまたあなたの昔話でも伺いましようか」と云つた。すると森本は、

「ええ話しましょう」とすぐ乗氣な返事をしたが、活澆かっぱつなのは

ただ返事だけで、挙動の方は緩慢かんまんというよりも、すべての筋肉が湯に燻うでられた結果、当分作用はたらきを中止している姿であった。

敬太郎が石鹼シヤボンを塗つけた頭をごしごしいわしたり、堅い足の裏や指の股を擦こすったりする間、森本は依然として胡座をかいたまま、どこ一つ洗う気色けしきは見えなかつた。最後に瘡やせたひとかたまり一塊の肉団をどぶりと湯の中に抛ほうり込むように浸つけて、敬太郎とほぼ同時に身体を拭きながら上つて来た。そうして、

「たまに朝湯へ来ると綺麗きれいで好い心持ですな」と云つた。

「ええ。あなたのは洗うんでなくつて、本当に湯に這入はいるんだからことにそうだろう。実用のための入湯にゆうとうでなくつて、快感を貪むさぼるための入浴なんだから」

「そうむずかしい這入り方でもないんでしようが、どうもこんな時に身体なんか洗うな億劫おっくうでね。ついぼんやり浸つかつてぼんやり出ちまいますよ。そこへ行くと、あなたは三層倍も勤勉まめだ。頭から足からどこからどこまで実によく手落なく洗いますね。御負おまけに楊枝ようじまで使つて。あの綿密な事には僕もほとんど感心しちまつた」

二人は連立つて湯屋の門かどぐち口を出た。森本がちよつと通りまで行つて巻紙を買うからというので、敬太郎もつき合う気になつて、横丁を東へ切れると、道が急に悪くなつた。昨夕ゆうべの雨が土を潤ふやかし抜いたところへ、今朝からの馬や車や人通りで、踏み返したり蹴け上げたりした泥あつの痕あとを、二人は厭いとうような軽蔑けいべつするような様子で歩いた。日は高く上のぼつているが、地面から吸い上げられる水

蒸気はいまだに微かな波動を地平線の上に描いているらしい感じがした。

「今朝の景色は寝坊のあなたに見せたいようだった。何しろ日がかんかん当つてる癖に霧がいつぱいなんでしょう。電車をこつちから透かして見ると、乗客がまるで障子に映る影画のように、はつきり一人一人見分けられるんです。それでいて御天道様が向う側にあるんだからその一人一人がどれもこれもみんな灰色の化物に見えるんで、すこぶる奇観でしたよ」

森本はこんな話をしながら、紙屋へ這入って巻紙と状袋で膨らました懐をちよつと抑えながら出て来た。表に待っていた敬太郎はすぐ今来た道の方へ足を向け直した。二人はそのままいっしょ

に下宿へ歸つた。上靴スリッパの踵かかとを鳴らして階段はしごだんを二つ上り切のぼ

つた時、敬太郎は自分の部屋の障子を手早く開けて、

「さあどうぞ」と森本を誘いざなつた。森本は、

「もう直午飯じきひるでしょう」と云つたが、躊躇ちゆうちよすると思ひの外、

あたかも自分の部屋へでも這入るような無雑作むぞうさな態度で、敬太郎の後に跟ついて来た。そうして、

「あなたの室へやから見た景色はいつ見ても好いね」と自分で窓の障子を開けながら、手摺付てすりつきの縁板の上へ濡手拭ぬれてぬぐいを置いた。

敬太郎けいたろうはこの瘡やせながら大した病氣にも罹からないで、毎日新橋の停車場ステーションへ行く男について、平生から一種の好奇心を有もつていた。彼はもう三十以上である。それでいまだに一人で下宿ずまい住居をして停車場へ通勤している。しかし停車場で何の係りをして、どんな事務を取扱っているのか、ついで当人に聞いた事もなければ、また向うから話した試ためしもないので、敬太郎には一切がXエックスである。たまたま人を送って停車場へ行く場合もあるが、そんな時にはつい混雑とまぎに取り紛れて、停車場と森本とをいつしよに考えるほどの余裕よゆうも出ず、そうかと云つて、森本の方から自己の存在を思い起させるように、敬太郎の眼につくべき所へ顔を出す機会も起らなかった。ただ長い間同じ下宿たてこもに立籠たてこもつているといふ縁故だ

か同情だかが本もとで、いつの間にか挨拶あいさつをしたり世間話をする仲間になったまである。

だから敬太郎の森本に対する好奇心というのは、現在の彼にあると云うよりも、むしろ過去の彼にあると云った方が適當かも知れない。敬太郎はいつか森本の口から、彼が歴れつき乎とした一家の主人公であつた時分の話を聞いた。彼の女房の話も聞いた。二人の間でできた子供の死んだ話も聞いた。「餓鬼がきが死んでくれたんで、まあ助かつたようなもんでさあ。山神さんじんの崇たたりには實際恐れを作なしていたんですからね」と云つた彼の言葉を、敬太郎はいまだに覚えてゐる。その時しかも山神が分らなくつて、何だと聞き返したら、山の神の漢語じゃありませんかと教えられたおかしさまでま

だ記憶に残っている。それらを思い出しても、敬太郎から見ると、すべて森本の過去には一種ロマンスの臭においが、箒ほうき星ぼしの尻尾しっぽのようにはぼうつとおつかぶさつて怪しい光を放っている。

女についてできたとか切れたとかいう逸話以外に、彼はまたさまざまな冒険譚ぼうけんだんの主人公であった。まだ海豹島かいひょうとうへ行つて膾お炙とは打つていないようであるが、北海道のどこかで鮭さけを漁とつて儲もうけた事はたしかであるらしい。それから四国辺のある山から安質莫尼アンチモニーが出ると触れて歩いて、けっして出なかつた事も、当人がそう自白するくらいだから事實に違ちがない。しかし最も奇抜なのは呑のみぐち口がいしや会社しゃの計画で、これは酒樽さかだるの呑口を作る職人が東京にごく少ないというところから思いついたのだそうだが、せつか

く大阪から呼び寄せた職人と衝突したために成立しなかつたと云つて彼はいまだに残念がつている。

もうけぐち
儲

口を離れた普通の浮世話になると、彼はまた非常に豊富

な材料の所有者であるという事を容易に証拠立てる。筑摩川の

上流の何とかいう所から河を隔てて向うの山を見ると、巖の上に

熊がごろごろ昼寝をしているなどはまだ尋常の方なので、それが

一層色づいて来ると、信州戸隠山とがくしやまの奥の院めくらというのは普通の人の

の登れっこない難所だのに、それを盲目めくらが天辺てっぺんまで登つたから

驚ろいたなどという。そこへ御参おまいりをするには、どんなに脚あしの達

者なものでも途中で一晩明かさなければならぬので、森本も仕

方なしに五合目あたりで焚火たきびをして夜の寒さを凌しのいでいると、下

から鈴れいの響ひびが聞えて来たから、不思議に思っているうちに、その鈴ねの音がだんだん近くなつて、しまいに座頭ざとうが上のぼつて来たんだと云う。しかもその座頭が森本に今晚はと挨拶あいさつをしてまたすた上つて行つたと云うんだから、余り妙だと思つてなおよく聞いて見ると、実は案内者が一人ついていたのでそうである。その案内者の腰に鈴を着けて、後あとから来る盲者めくらがその鈴の音を頼りに上る事ができるようにしてあつたのだと説明されて、やや納得なつとくもできたが、それにしても敬太郎には随分意外な話である。が、それがもう少し高こじると、ほとんど妖怪談ようかいだんに近い妙なものとなつて、だらしない彼の口髭くちひげの下から最も慇懃いんぎんに発表される。彼が耶馬溪やばけいを通つたついでに、羅漢寺らかんじへ上つて、日暮に一本道を

急いで、杉並木の間を下りて来ると、突然一人の女と擦れ違つた。その女は臙脂べにを塗つて白粉おしろいをつけて、婚礼に行く時の髪を結つて、裾模様すそもようの振袖ふりそでに厚い帯を締めて、草履穿ぞうりばきのままたつた一人すたすた羅漢寺らかんじの方へ上つて行つた。寺に用のあるはずはなし、また寺の門はもう締ましまっているのに、女は盛装したまま暗い所をたつた一人で上つて行つたんだそうである。——敬太郎はこんな話を聞きたびにへえーと云つて、信じられ得ない意味の微笑を洩もらすにかかわらず、やっぱり相当の興味と緊張とをもつて森本の弁口べんこうを迎えるのが例であつた。

四

この日も例によつて例のような話が出るだろうという下心から、わざと廻り路までしていっしょに風呂ふろから帰つたのである。年こそそれほど取つていないが、森本のように、大抵な世間の関門を潜くぐつて来たとししか思われぬ男の経歴談は、この夏学校を出たばかりの敬太郎けいたろうに取つては、多大の興味があるのみではない、聞きようしだいで随分利益も受けられた。

その上敬太郎は遺傳的に平凡を忌む浪漫趣味ロマンチックの青年であつた。かつて東京の朝日新聞に兎玉音松こだまおとまつとかいう人の冒険談が連載された時、彼はまるで丁年ていねん未満の中学生のような熱心をもつて毎日それを迎え読んでいた。その中うちでも音松君が洞穴おんどの中から躍り

出す大蛸おおだこと戦った記事を大変面白がつて、同じ科の学生に、君の蛸の大頭を目がけて短銃ピストルをポンポン打つんだが、つるつる滑すべつて少しも手てごたえ応がないというじゃないか。そのうち大将の後からぞろぞろ出て来た小蛸こだこがぐるりと環わを作つて彼を取り巻いたから何をするのかと思うと、どっちが勝つか熱心に見物しているんだ。そうだからねと大いに乗気で話した事がある。するとその友達が調戯ひらかい半分に、君のような剽ひょうきん軽けいものはとうてい文官試験などを受けて地道じみちに世の中を渡つて行く気になるまい、卒業したら、いつその事思い切つて南洋へでも出かけて、好きな蛸狩たこがりでもしたらどうだと云つたので、それ以来「田川の蛸狩」という言葉が友達間にだいぶ流行はやり出した。この間卒業して以来足を搦すりこぎ木の

ようにして世の中への出口を探して歩いている敬太郎に会うたびに、彼らはどうだね蝟狩は成功したかいと聞くのが常になつていくくらいである。

南洋の蝟狩はいかな敬太郎にもちと奇抜きばつ過ぎるので、真面目まじめに思い立つ勇氣も出なかつたが、新嘉坡シンガポールの護謨林栽培ゴムりんなどは学生のうちすでに目論もくろんで見た事がある。当時敬太郎は、果しはてのないひろの広野を埋め尽す勢いきおいで何百万本という護謨の樹が茂っている真中に、一階建のバンガローを拵こしらえて、その中に栽培監督者としての自分が朝夕起臥あさゆうきがする様を想像してやまなかつた。彼はバンガローの床ゆかをわぎと裸にして、その上に大きな虎の皮を敷くつもりであった。壁には水牛の角を塗り込んで、それに鉄砲をかけ、なおその

下に錦の袋に入れたままの日本刀を置くはずにした。そうして自分は真白なターバンをぐるぐる頭へ巻きつけて、広いヴェランダに据えつけてある籐椅子の上に寝そべりながら、強い香のハヴァナをぷかりぷかりと鷹揚に吹かす氣でいた。それのみか、彼の足の下には、スマタラ産の黒猫、——天鷲絨のような毛並と黄金そのままの眼と、それから身の丈よりもよほど長い尻尾を持った怪しい猫が、背中を山のごとく高くして蹲踞まっている訳になっていた。彼はあらゆる想像の光景をかく自分に満足の行くようにあらかじめ整えた後で、いよいよ実際の算盤に取りかかったのである。ところが案外なもので、まず護謨を植えるための地面を借り受けるのにだいぶんな手数と暇が要る。それから借りた地面

を切り開くのが容易の事でない。次に地ならし植えつけに費やすべき金かなだか高かが以外に多い。その上絶えず人夫を使つて草取をした上で、六年間苗木なえぎの生長するのを馬鹿見たようにじつと指を銜くわえて見ていなければならぬ段になつて、敬太郎はすでに充分退却に価すると思ひ出したところへ、彼にいろいろの事情を教えてくれた護謨つうも通は、今しばらくすると、あの辺でできる護謨の供給が、世界の需用以上に超過して、栽培者は非常の恐慌を起すに違ないと威嚇いかくしたので、彼はその後護謨の護の字も口にしなくなつてしまつたのである。

五

けれども彼の異常に対する嗜欲しよくはなかなかこれくらいの事で冷却しそうには見えなかつた。彼は都の真中にいて、遠くの人や国を想像の夢に上のぼして楽しんでゐるばかりでなく、毎日電車の中で乗り合わせる普通の女だの、または散歩の道すから行き逢う實際の男だのを見てさえ、ことごとく尋常以上に奇きなあるものを、マントの裏かコートそでの袖に忍ばしていはしなないだらうかと考える。そうしてどうかこのマントやコートを引ひつくり返してその奇なところをただ一目ひとめで好いからちらりと見た上、後は知らん顔をして済ましていたましいような気になる。

敬太郎けいたろうのこの傾向は、彼がまだ高等学校にいた時分、英語の

教師が教科書としてスチーヴンソンの しんアラビヤものがたり 新亞刺比亞物語 という書物を読ました頃からだんだん頭を持ち上げ出したように思われる。それまで彼は だい 大の えいごぎらい 英語嫌であつたのに、この書物を読むようになってから、一回も下読を怠らずに、あてられさえすれば、必ず起立して訳を付けたのでも、彼がいかにそれを面白がつていたかが分る。ある時彼は興奮の余り小説と事実の区別を忘れて、十九世紀の ロンドン 倫敦に実際こんな事があつたんでしようかと まじめ 真面目な顔をして教師に質問を掛けた。その教師はついこの間英国から帰つたばかりの男であつたが、黒いメルトンのモーニングの尻から麻 ハンケチ の手帛を出して鼻の下を拭 ぬぐ いながら、十九世紀どころか今でもあるでしょう。倫敦という所は実際不思議な都ですと答えた。敬

太郎の眼はその時驚嘆の光を放った。すると教師は椅子いすを離れてこんな事を云った。

「もつとも書き手が書き手だから観察も奇抜だし、事件の解釈もおおのず自から普通の人間とは違うんで、こんなものができ上ったのかも知れません。実際スチーヴンソンという人は辻つじ待まちの馬車を見てさえ、そこに一種のロマンスを見出すという人ですから」

辻馬車とロマンスに至って敬太郎は少し分らなくなつたが、思いついてその説明を聞いて見て、始めてなるほどと悟つた。それから以後は、この平凡きわ極まる東京のどこにでもごろごろして、最も平凡を極めている辻待の人力車を見るたんびに、この車だつて昨夕ゆうべ人殺しをするための客を出刃でばぐるみ乗せていっさんに馳かけた

のかも知れないと考えたり、または追手おつての思わくとは反対の方角へ走る汽車の時間に間に合うように、美くしい女を幌ほろの中に隠して、どこかの停車場ステーションへ飛ばしたのかも分らないと思つたりして、一人で怖こわがるやら、面白がるやらしきりに喜こんでいた。

そんな想像を重ねるにつけ、これほど込み入った世の中だから、たとい自分の推測通りとまで行かなくつても、どこか尋常と變つた新らしい調子を、彼の神経にはつと響かせ得るような事件に、一度ぐらゐは出会であつて然しかるべきはずだという考えが自然と起つてきた。ところが彼の生活は学校を出て以来ただ電車に乗るのと、紹介状を貰つて知らない人を訪問するくらいのもので、その他に何といつて取り立てて云うべきほどの小説は一つもなかつた。彼

は毎日見る下宿の下女の顔に飽き果てた。毎日食う下宿の菜にも飽き果てた。せめてこの単調を破るために、満鉄の方ができるとか、朝鮮の方が纏まるとかすれば、まだ衣食の途以外に、幾分かの刺戟が得られるのだけれども、両方共二三日前に当分望がないと判然して見ると、ますます眼前の平凡が自分の無能力と密接な関係でもあるかのように思われて、ひどくぼんやりしてしまった。それで糊口のための奔走はもちろんの事、往來に落ちたばら錢を探して歩くような長閑な気分で、電車に乗って、漫然と人事上の探検を試みる勇氣もなくなつて、昨夕はさほど好きでもない麦酒を大いに飲んで寝たのである。

こんな時に、非凡の経験に富んだ平凡人とても評しなければ評

しようのない森本の顔を見るのは、敬太郎にとってすでに一種の興奮であった。巻紙を買う御供までして彼を自分の室へ連れ込んだのはこれがためである。

六

森本は窓際へ坐つてしばらく下の方を眺めていた。

「あなたの室から見た景色は相変わらず好うがすね、ことに今日は好い。あの洗い落したような空の裾に、色づいた樹が、所々暖たかく塊かたまっている間から赤い煉瓦れんがが見える様子は、たしかに画えになりそうですね」

「そうですね」

敬太郎けいたろうはやむを得ずこういう答をした。すると森本は自分が

肱ひじを乗せている窓から一尺ばかり出張った縁板を見て、

「ここはどうしても盆栽ぼんさいの一つや二つ載のせておかないと納まらない所ですよ」と云った。

敬太郎はなるほどそんなものかと思つたけれども、もう「そうですね」を繰り返す勇氣も出なかつたので、

「あなたは画や盆栽まで解るんですか」と聞いた。

「解るんですかは少し恐れ入りましたね。全く柄からにないんだから、そう聞かれても仕方はないが、——しかし田川さんの前だが、こ
う見えて盆栽も弄いじくるし、金魚も飼うし、一時は画も好きでよく

描いたもんですよ」

「何でもやるんですね」

「何でも屋に碌なものなしで、とうとうこんなもんになっちゃった」

森本はそう云い切って、自分の過去を悔ゆるでもなし、またその現在を悲観するでもなし、ほとんど鋭どい表情のどこにも出ない不断の顔をして敬太郎を見た。

「しかし僕はあなた見たように変化の多い経験を、少しでも好いから嘗めて見たいといつでもそう思っているんです」と敬太郎が真面目に云いかけると、森本はあたかも酔っ払のように、右の手を自分の顔の前へ出して、大袈裟に右左に振って見せた。

「それがごく悪い。若い内——と云つたところで、あなたと僕は
そう年も違つていないようだが、——とにかく若い内は何でも変
つた事がしてみたいもんでね。ところがその変つた事を仕尽した
上で、考えて見ると、何だ馬鹿らしい、こんな事ならしない方が
よつぽど増しだと思つただけでさあ。あなたなんざ、これからの身
体だ。おとなしくさえしていりやどんな発展でもできようつても
んだから、肝心なところで山気だの謀叛気だのつて低気圧を起
しちや親不孝に当らあね。——時にどうです、この間から伺がお
う伺がおうと思つて、つい忙がしくつて、伺がわずにいたんだが、
何か好い口は見付かりましたか」

正直な敬太郎は慚然としてありのままを答えた。そうして、と

うてい当分これという期待あてもないから、奔走をやめて少し休養するつもりであるとなつて加えた。森本はちよつと驚ろいたような顔をした。

「へえー、近頃は大学を卒業しても、ちよつくらちよいと口が見付からないもんですかねえ。よつぽど不景気なんだね。もつとも明治も四十何年というんだから、そのはずには違ないが」

森本はここまで来て少し首を傾かしげて、自分の哲理を自分で囁かみしめるような素振そぶりをした。敬太郎は相手の様子を見て、それほど滑稽こっけいとも思わなかつたが、心の内で、この男は心得があつてわざとこんな言葉遣ことばづかいをするのだろうか、または無学の結果こうよりほか言い現てわす手段てだてを知らないのだろうかと考えた。すると森

本が傾かしげた首を急に豎たてに直した。

「どうです、御厭おいやでなきや、鉄道の方へでも御出おでなすつちや。何なら話して見ましようか」

ロマンチック

いかな浪漫的な敬太郎もこの男に頼んだら好い地位が得られるとは想像し得なかつた。けれどもさも軽々と云つて退のける彼の愛あい嬌きようを、翻ほん弄ろうと解釈するほどの僻ひがみももたなかつた。扱よんどこ処ろなく苦笑しながら、下女を呼んで、

「森本さんの御膳おぜんもここへ持つて来るんだ」と云いつけて、酒を命じた。

七

森本は近頃身体からだのために酒を慎しんんでいると断わりながら、注ついでやりさえすれば、すぐ猪口ちよくを空からにした。しまいにはもう止しましようという口の下から、自分で徳利の尻しりを持ち上げた。彼は平生から閑静なうちにごどこか気楽な風を帯びている男であったが、猪口を重ねるにつれて、その閑静が熱ほてってくる、気楽はしだいしだいに膨ぼうちよう脹ちようするように見えた。自分でも「こうなりや併へい呑どん自じ若じやくたるもんだ。明日免職あしたになったって驚ろくんじやない」と威張り出した。敬太郎が飲めない口なので、時々思い出すように、盃さかずきに唇ちびるを付けて、付合つきあっているのを見て、彼は、

「田川さん、あなた本当に飲いけないんですか、不思議です。酒

を飲まない癖くせに冒険を愛するなんて。あらゆる冒険は酒に始まるんです。そうして女に終るんです」と云った。彼はつい今まで自分の過去を碌ろくでなしのように蹴けなしていたのに、酔ったら急に模様ようが變つて、後光ごこうが逆ぎやくに射すとでも評すべき態度で、氣きえんを吐はき始めた。そうしてそれが大抵は失敗の氣であつた。しかも敬太郎を前に置いて、

「あなたなんざあ、失礼ながら、まだ学校を出たばかりで本当の世せの中は御存じないんだからね。いくら学士でございの、博士とうしで候そうろうのつて、肩書ばかり振り廻したつて、僕は慥おびえないつもりだ。こつちやちやんと実地を踏んで来ているんだもの」と、さつきまで教育に対して多大の尊敬を払っていた事はまるで忘れたような

風で、無遠慮なきめつけ方をした。そうかと思うと噫げつぷのような溜た息めいきを洩もらして自分の無学をさも情なさけなさそうに恨うらんだ。

「まあ手つ取り早く云やあ、この世の中を猿どうぜん同然渡つて来たんでさあ。こう申しちやおかしいが、あなたより十層倍の経験はたしかに積んでるつもりです。それでいて、いまだにこの通り解脫げだつができないのは、全く無学すなわち学がないからです。もつとも教育があつちや、こうむやみやたらと変化する訳にも行かないよ
うなもんかも知れませんよ」

敬太郎はさつきから気の毒なる先覚者とても云つたように相手を考えて、その云う事に相応の注意を払って聞いていたが、なまじい酒を飲ましたためか、今日はいつもより気だの愚痴ぐちだのが

多くつて、例のように純粹の興味が湧かないのを残念に思った。

好い加減に酒を切り上げて見たが、やっぱり物足らなかつた。それで新らしく入れた茶を勧めながら、

「あなたの経歴談はいつ聞いても面白い。そればかりでなく、僕のような世間見ずは、御話を伺うたんびに利益を得ると思つて感謝しているんだが、あなたが今までやつて来た生活のうちで、最も愉快だったのは何ですか」と聞いて見た。森本は熱い茶を吹き吹き、少し充血した眼を二三度ぱちつかせて黙っていた。やがて深い湯呑ゆのみを干してしまふとこう云つた。

「そうですね。やつた後あとで考えると、みんな面白いし、またみんなつまらないし、自分じやちよつと見分がつかないんだが。――

全体愉快つてえのは、その、女おんな気なつげのある方を指すんですか」

「そう云う訳でもないんですが、あつたつて差支さしつかえありません」

「なんて、実はそっちの方が聞きたいんですよ。——しかし雑じようだんん

談

抜きでね、田川さん。面白い面白くないはさておいて、あ

れほど呑気のんきな生活は世界にまたとなかろうという奴をやった覚おぼえがあるんですよ。そいつを一つ話しましょうか、御茶受の代りに」

敬太郎は一も二もなく所望した。森本は「じやあちよつと小便をして来る」と云つて立ちかけたが、「その代り断わっておくが女気はありませんよ。女気どころか、第一人間の気けがないんだもの」と念を押して廊下の外へ出て行つた。敬太郎は一種の好奇心を抱いだいて、彼の帰るのを待ち受けた。

八

ところが五分待つても十分待つても冒険家は容易に顔を現わさなかつた。敬太郎けいたろうはどうとうじつと我慢しきれなくなつて、自分で下へ降りて用場を探して見ると、森本の影も形も見えない。念のためまた階はしご段だんを上あがつて、彼の部屋の前まで来ると、障しょう子を五六寸明け放したまま、真中に手枕をしてごろりと向うむきに転ころがつているものがすなわち彼であつた。「森本さん、森本さん」と二三度呼んで見たが、なかなか動きそうにないので、さすがの敬太郎もむつとして、いきなり室へやに這はい入り込むや否や、森

本の首筋を攫つかんで強く揺振ゆすぶつた。森本は不意はちに蜂はちにでも螫さされたように、あつと云つて半ば跳ね起はきた。けれども振り返つて敬太郎の顔を見ると同時に、またすぐ夢ゆめのたるい眼つきに戻つて、

「やああなたですか。あんまりちようだいしたせいか、少し気分が変になつたもんだから、ここへ来てちよつと休んだらついで眠くなつて」と弁解する様子に、これといつて他ひとを愚弄ぐろうする体ていもないので、敬太郎もつい怒おこれなくなつた。しかし彼の待ち設けた冒険談はこれで一頓挫いちとんざを来きたしたも同然なので、一人自分の室へやに引取ろうとすると、森本は「どうもすみません、御苦勞様でした」と云いながら、また後あとから敬太郎について来た。そうして先刻さつきまで

自分の坐^{すわ}つていた座蒲団^{ざぶとん}の上に、きちんと膝^{ひざ}を折^ひつて、

「じやいよいよ世界に類のない呑気生活の御話でも始めますかな」と云つた。

森本の呑気生活というのは、今から十五六年前^{ぜん}彼が技手に雇^もわ
れて、北海道の内地を測量して歩いた時の話であつた。固^{もと}より人
間のいない所に天幕^{テント}を張つて寝起をして、用が片づきしだい、ま
た天幕^{かっ}を担^かいで、先へ進むのだから、当人の断つた通り、とうて
い女^けつ気のありようはずはなかつた。

「何しろ高さ二丈もある熊^{くま}笹^{ざさ}を切り開いて途^{みち}をつけるんですか
らね」と彼は右手を額より高く上げて、いかに熊笹が高く茂つて
いたかを形容した。その切り開いた途の両側に、朝起きて見ると、

蝮蛇まむしがとぐろを巻いて日光うろこを鱗の上に受けている。それを遠くから棒おきで抑えておいて、傍そばへ寄つて打ち殺して肉を焼いて食うのだと彼は話した。敬太郎がどんな味がすると聞くと、森本はよく思い出せないが、何でも魚肉さかなと獣肉にくの間ぐらいだろうと答えた。

テント
天幕の中へは熊笹の葉と小枝を山のように積んで、その上に疲からだれた身体うづを埋めぬばかりに投げかけるのが例であるが、時には外へ出て焚火たきびをして、大きな熊を眼の前に見る事もあった。虫が多いので蚊帳かやは始終釣しじゅうついていた。ある時その蚊帳を担かついで谷川へ下りて、何とかいう川魚すくを掬つて帰つたら、その晩から蚊帳が急なまぐに腥なまぐさくなくなつて困つた。——すべてこれらは森本のいわゆる呑気生活の一部分であつた。

彼はまた山であらゆる茸たけを採とつて食たつたそうである。ます茸だけと
 いうのは広蓋ひろぶたほどの大きさで、切きつて味噌汁みそじるの中へ入れて煮にる
 とまるで蒲鉾かまぼこのようだとか、月見茸つきみだけというのは一ひと抱かかえもあ
 るけれども、これは残念だが食たべないとか、鼠ねずみだけ茸だけというの
 は三つ葉の根のようで可愛かわいらしいとか、なかなか精くわしい説明をした。
 大きな笠かさの中へ、野葡萄のぶどうをいっぱい採とつて来て、そればかり食たべ
 っていたものだから、しまいに舌したが荒あれて、飯いが食たべなくなつて
 困こつたという話もついでにつけ加くえた。

食たべ話わばかりかと思うと、また一週間絶食をしたという悲酸ひさんな
 物語もあつた。それはみんなの糧かてが尽つきたので、人足ひとあしが村まで米
 を取りに行つた留守中に大變な豪雨があつた時の事である。元々

村へ出るには、沢辺さわべまで降りて、沢伝いに里へ下るのだから、俄に
わかあめ雨で谷が急にいつぱいになったが最後、米など背負しよつて帰れ
 る訳のものでない。森本は腹が減つて仕方がないから、じつと仰あ
おむけ向に寝て、ただ空を眺ながめていたところが、しまいにぼんやりし
 出して、夜も昼もめちやくちやに分らなくなつたそうである。
 「そう長い間飲まず食わずじゃ、両りょうべん便べんとも留とまるでしょう」
 と敬太郎が聞くと、「いえ何、やつぱりありますよ」と森本はす
 こぶる気楽そうに答えた。

九

敬太郎^{けいたろう}は微笑せざるを得なかつた。しかしそれよりもおかし

く感じたのは、森本の形容した大風の勢であつた。彼らの一行が

測量の途次茫々^{ぼうぼう}たる芒^{すすきはら}原の中で、突然面^{おもて}も向けられないほ

どの風に出会つた時、彼らは四つ這^{よばい}になつて、つい近所の密林の

中へ逃げ込んだところが、一^{ひとかかえ}抱^{ふたかかえ}もある大木の枝も

幹も凄まじい音を立てて、一度に風から痛振^{いたぶ}られるので、その動

揺が根に伝わつて、彼らの踏んでいる地面が、地震の時のように

ぐらぐらしたと云うのである。

「それじゃたとい林の中へ逃げ込んだところで、立っている訳に

行かないでしょう」と敬太郎が聞くと、「無論突伏していました」

という答であつたが、いくら非道^{ひど}い風だつて、土の中に張つた大

木の根が動いて、地震を起すほどの勢いきおいがあろうとは思えなかつたので、敬太郎は覚えす吹き出してしまった。すると森本もまるで他事ひごとのように同じく大きな声を出して笑い始めたが、それがすむと、急に真面目まじめになつて、敬太郎の口を抑えるような手つきをした。

「おかしいが本当です。どうせ常識以下に飛び離れた経験をするくらいの僕だから、不中用やくざにやあ違ちがいが本当です。——もつともあなた見たいに学のあるものが聞きやあ全く嘘うそのような話さね。だが田川さん、世の中には大風に限らず随分面白い事がたくさんあるし、またあなたなんざあその面白い事にぶつかろうぶつかろうと苦勞くろうして御出おいでなさる御様子だが、大学を卒業しちやもう駄目

ですよ。いざとなると大抵は自分の身分を思いますからね。よしんば自分でいくら身を落すつもりでかかっても、まさか親の敵かたき討うちじやなしね、そう真剣に自分の位地いちを棄すてて漂ひょうろう浪なみするほどの物数奇ものずきも今の世にはありませんからね。第一はた傍はたがそうさせないから大丈夫です」

敬太郎は森本のこの言葉を、失意のようにもまた得意のようにも聞いた。そうして腹の中で、なるほど常じょうちよう調ちよう以上の変つた生活は、普通の学士などには送れないかも知れないと考えた。ところがそれを自分にさえ抑おさえたい気がするので、わざと抵抗するよ
うな語気で、

「だって、僕は学校を出たには出たが、いまだに位置などは無い

んですぞ。あなたは位置位置ってしきりに云うが。——實際位置の奔走にも厭々あきあきしてしまつた」と投げ出すように云つた。すると森本は比較的げんしゆく厳肅な顔をして、

「あなたのは位置がなくなつてある。僕のは位置があつて無い。それだけが違ふんです」と若いものに教える態度で答えた。けれども敬太郎にはこの御籤おみくじめいた言葉がさほどの意義を齎もたらさなかつた。二人は少しの間煙草たばこを吹かして黙つていた。

「僕もね」とやがて森本が口を開いた。「僕もね、こうやつて三年越、鉄道の方へ出ているが、もう厭いやになつたから近々きんきん罷めようと思ふんです。もつとも僕の方で罷めなけりや向うで罷めるだけなんだからね。三年越と云やあ僕にしちや長い方でさあ」

敬太郎は罷めるが好かろうとも罷めないが好かろうとも云わなかつた。自分が罷めた経験も罷められた閱歴もないので、他の進退などはどうでも構わないような気がした。ただ話が理に落ちて面白くないという自覚だけあつた。森本はそれと察したか、急に調子を易^かえて、世間話を快活に十分ほどした後で、^{あと}「いやどうも御馳走^{ごちそう}でした。——とにかく田川さん若いうちの事ですよ、何をやるのも」と、あたかも自分が五十ぐらいの老人のようなことを云つて歸つて行つた。

それから一週間ばかりの間、田川は落ちついて森本と話す機会^もを有たなかつたが、二人共同じ下宿にいるのだから、朝か晩に彼の姿を認めない事はほとんど稀^{まれ}であつた。顔を洗う所などで落ち

合う時、敬太郎は彼の着ている黒襟くろえりの掛ったドテラが常に目についた。彼はまた襟えりあき開の広い新調の背広せびろを着て、妙な洋杖ステッキを突いて、役所から帰るとよく出て行つた。その洋杖が土間の瀬戸物製の傘かさいれ入に入れてあると、ははあ先生今日は宅うちにいるなど思いながら敬太郎は常に下宿の門かどを出入した。するとその洋杖ステッキがちやんと例の所に立ててあるのに、森本の姿が不意に見えなくなつた。

十

一日二日はつい気がつかずに過ぎたが、五日目ぐらいになつて

も、まだ森本の影が見えないので、敬太郎けいたろうはようやく不審の念を起し出した。給仕に来る下女に聞いて見ると、彼は役所の用でどこかへ出張したのだそうである。固もとより役人である以上、いつ出張しないとも限らないが、敬太郎は平生からこの男を相そうして、何でも停車場ステーションの構内で、貨物の発送係ぐらいを勤めているに違ないと判じていたものだから、出張と聞いて少し案外な心持がした。けれども立つ時すでに五六日と断って行つたのだから、今日か翌日あしたは帰るはずだと下女に云われて見ると、なるほどそうかとも思った。ところが予定の時日が過ぎても、森本の変な洋杖が依然として傘入の中にあるのみで、当人のドテラ姿はいつこう洗面所へ現われなかつた。

しまい、宿の神かみさんが来て、森本さんから何か御音信おたよりがございましたかと聞いた。敬太郎は自分の方で下へ聞きに行こうと思つていたところだと答えた。神さんは多少心元ない色を梟ふくろのようない眼うちの中に漂ただよわせて出て行つた。それから一週間ほど経たつても森本はまだ帰らなかつた。敬太郎も再び不審いだを抱いだき始めた。帳場の前を通る時に、まだですかとわざと立ち留とどつて聞く事さえあつた。けれどもその頃は自分がまた思い返して、位置の運動を始め出した出花でばななので、自然その方にばかり頭を専領される日が多いため、これより以上立ち入つて何物をも探る事をあえてしなかつた。実を云うと、彼は森本の予言通り、衣食はかりごとの計のために、好奇家の権利を放棄したのである。

すると或晩主人がちよつと御邪魔をしても好いかと断わりながら障しょうじ子こを開けて這入はいつて来た。彼は腰から古めかしい煙草たばこ入いれを取り出して、その筒つつを抜く時ぽんという音をさせた。それから銀の煙管きせるに刻草きざみを詰めて、濃い煙を巧者に鼻の穴から迸ほとばしらせた。こうゆつくり構える彼の本意を、敬太郎は判はつきり然向うからそうと切り出されるまで覺さとらずに、どうも変だとばかり考えていた。

「実は少し御願があつて上つたんですが」と云つた主人はやや小声になつて、「森本さんのいらつしやる所をどうか教えて頂く訳に参りますまいか、けつしてあなたに御迷惑のかかるような事は致しませんから」と藪やぶから棒につけ加えた。

敬太郎はこの意外の質問を受けて、しばらくは何という挨拶あいさつ

も口へ出なかつたが、ようやく、「いったいどう云う訳なんです」と主人の顔を覗き込んだのぞ。そうして彼の意味を読もうとしたが、主人は煙管が詰つたと見えて、敬太郎の火箸ひばしで雁首がんくびを掘つていた。それが済んでから羅宇らうの疎通をぶつぶつ試した上、そろそろと説明に取りかかった。

主人の云うところによると、森本は下宿代が此家ここに六カ月ばかり滞とどつてこいるのだそうである。が、三年越こしいる客ではあるし、遊んでいる人じゃなし、此年ことしの末にはどうかするからという当人の言訳を信用して、別段催促もしなかつたところへ、今度の旅行になつた。家うちのものは固もとより出張とばかり信じていたが、その日ちげん限げんが過ぎていくら待つても帰らないのみか、どこからも何の音た

信よりも来ないので、しまいにととう不審を起した。それで一方に本人の室へやを調べると共に、一方に新橋へ行つて出張先を聞き合せた。ところが室の方は荷物もそのまま、彼のおつた時分と何の変りもなかったが、新橋の答はまた案外であつた。出張したとばかり思つていた森本は、先月限り罷やめられていたそうである。

「それでああなたは平生森本さんと御懇意の間柄でいらつしやるんだから、あなたに伺つたら多分どこに御出おいでか分るだろうと思つて上つたような訳で。けつしてあなたに森本さんの分をどうのこうのと申し上げるつもりではないのですから、どうか居所だけ知らして頂きますまいか」

敬太郎はこの失しつ踪者そうしやの友人として、彼の香かんばしからぬ行為に

立ち入った関係でもあるかのごとく主人から取扱われるのをはなはだ迷惑に思った。なるほど事実をいえば、ついこの間までである意味の嘆賞たんしやうを懐ふところにして森本に近づいていたには違ないが、こんな実際問題にまで秘密の打ち合せがあるように見做みなされては、未来を有もつ青年として大いなる不面目だと感じた。

十一

正直な彼は主人の疝かんちがい違ちがいを腹の中で怒おこった。けれども怒る前にまず冷たい青あお大将おだいしやうでも握にぎらせられたような不気味さを覚えた。この妙に落ちつき払はらって古風な煙草たばこ入いれから刻きざみを撮つまみ出し

ては雁首^{がんくび}へ詰める男の誤解は、正解と同じような不安^{けいたろ}を敬太郎^うに与えたのである。彼は談判に伴なう一種の芸術のごとく巧みに煙管^{きせる}を扱かう人であつた。敬太郎は彼の様子をしばらく眺め^{なが}ていた。そうしてただ知らないというよりほかに、向うの疑惑を晴らす方法がないのを残念に思つた。はたして主人は容易に煙草入を腰へ納めなかつた。煙管を筒へ入れて見たり出して見たりした。そのたびに例の通りぽんぽんという音がした。敬太郎はしまいにどうしてもこの音を退治^{たいじ}てやりたいような気がし出した。

「僕はね、御承知の通り学校を出たばかりでまだ一定の職業もなにもない貧書生だが、これでも少しは教育を受けた事のある男だ。森本のような浮浪の徒^とといっしよに見られちゃ、少し体面にかか

わる。いわんや後うしろぐら暗くい関係でもあるように邪推して、いくら知らないと言つても執濃しつこく疑つてゐるのは怪けしからんじやないか。君がそういう態度で、二年もいる客に対する気ならそれで好い。こつちにも料りょうけん簡かんがある。僕は過去二年の間君のうちに厄介やくかいになつてゐるが、一カ月でも宿しゆくりよう料とどこを滞おらした事があるかい」

主人は無論敬太郎の人格に対して失礼に当るような疑を毛頭いだ抱いだいていないつもりであるという事を繰り返して述べた。そうして万一森本から音信でもあつて、彼の居所が分つたらどうぞ忘れずに教えて貰もらいたいと頼んだ末、もしさつき聞いた事が敬太郎の氣きに障さわつたら、いくらでも詫あやまるから勘弁してくれと云つた。敬太郎は主人の煙草たばこいれ入いれを早く腰に差させようと思つて、単よろに宜よろしい

と答えた。主人はようやく談判の道具を角帯かくおびの後へしまい込んだ。室へやを出る時の彼の様子に、別段敬太郎を疑ぐる気色けしきも見えなかつたので、敬太郎は怒ってやって好い事をしたと考えた。

それからしばらく経つと、森本の室に、いつの間にか新しい客が這入はいつた。敬太郎は彼の荷物を主人がどう片づけたかについて不審を抱いだいた。けれども主人がかの煙草入を差して談判に来て以来、森本の事はもう聞くまいと決心したので、腹の中はともかく、上部うわべは知らん顔をしていた。そうして依然としてできるようなまたできないような地位を、元ほど焦燥あせらない程度ながらも、まず自分のやるべき第一の義務として、根氣に狩かり歩あるいていた。或る晩もその用で内幸町まで行って留守を食くつたのでやむを得

ずまた電車で引き返すと、偶然向う側に黄八丈きはちじようの袴はんでん天てんで赤ん坊おぶを負おつた婦人が乗り合せているのに気がついた。その女は眉毛まゆげの細くて濃い、首筋の美しくしうできた、どつちかと云えば粹いきな部類ぶるいに属する型だったが、どうしても袴天負おんぶをするという柄がらではなかつた。と云つて、背中の子はたしかに自分の子に違ないと敬太郎は考えた。なおよく見ると前垂まえだれの下から格子縞こうしじまか何かの御召おめしが出ていたので、敬太郎はますます変に思った。外面そとは雨なので、五六人の乗客は皆傘かさをつぼめて杖つえにしていた。女のは黒蛇くろじやの目のめであつたが、冷たいものを手に持つのが厭いやだと見えて、彼女はそれを自分の側わきに立て掛けておいた。その畳んだ蛇じやの目の先めに赤い漆うるしで加留多かるたと書いてあるのが敬太郎の眼に留つた。

この黒くろうと人だか素しろうと人だか分らない女と、私生児だか普通の子だか怪しい赤ん坊と、濃い眉まゆを心持八の字に寄せて俯目勝ふしめがちな白い顔と、御召おめしの着物と、黒蛇の目に鮮あざやかな加留多という文字とが互たがいちがい違ちがいに敬太郎の神経を刺戟しげきした時、彼はふと森本といつしよになつて子まで生んだという女の事を思い出した。森本自身の口から出た、「こういうと未練があるようでおかしいが、顔かおだち質しつは悪い方じやありませんでした。眉毛まみえの濃い、時々八の字を寄せて人に物を云う癖のある」といったような言葉をぼつぼつ頭の中で憶おもい起しながら、加留多と書いた傘の所有主もちぬしを注意した。すると女はやがて電車を下りて雨の中に消えて行つた。後に残つた敬太郎は一人森本の顔や様子を心に描きつつ、運命が今彼をどこに連

れ去つたろうかと考え考え下宿へ歸つた。そうして自分の机の上に差出人の名前の書いてない一封の手紙を見出した。

十二

好奇心に驅かられた敬太郎けいたろうは破るようにこの無名氏の書信を披ひらいて見た。すると西洋せいよう罫紙けいしの第一行目に、親愛なる田川君として下に森本よりとあるのが何より先に眼に入った。敬太郎はすぐまた封筒を取り上げた。彼は視線の角度を幾通りにも変えて、そこに消印の文字を読もうと力つとめたが、肉が薄いのでどうしても判断がつかなかった。やむを得ず再び本文に立ち歸つて、まずそれ

から片づける事にした。本文にはこうあつた。

「突然消えたんで定めて驚ろいたでしょう。あなたは驚ろかないにしても、雷らいじゆう獣とそうしてズク（森本は平生下宿の主人夫婦を、雷獣とそうしてズクと呼んでいた。ズクは耳ズクの略である）彼ら兩人は驚ろいたに違ない。打ち明けた御話をすると、実は少下宿代を滞とどおらしていたので、話をしたら雷獣とそうしてズクが面倒をいうだろうと思つて、わざと断らずに、自由行動を取りました。僕の室へやに置いてある荷物を始末したら——行李こりの中には衣類その他がすっかり這はい入っていますから、相当の金になるだろうと思ふんです。だから兩人にあなたから右を売るなり着るなりしろとおっしゃっていたただきたい。もつとも彼雷獣は御承知のご

とき曲くせ者故僕ものゆえの許諾を待たずして、とつくの昔にそう取計つて
いるかも知れない。のみならず、こつちからそう穩おん便びんに出ると、
まだ残っている僕の尻を、あなたに拭つて貰いたいなどと、とん
でもない難題を持ちかけるかも知れませんが、それにはけつして
取り合つちやいけません。あなたのように高等教育を受けて世の
中へ出たての人とはかく雷獸らいじゆう輩はいが食く物いものにしたがるものですから、
その辺へんはよく御注意なさらないといけません。僕だつて教育こそ
ないが、借金を踏んじや善よくないくらいの事はまさかに心得てい
ます。来年になればきつと返してやるつもりです。僕に意外な経
歴が数々あるからと云つて、あなたにこの点まで疑いわかねんられては、せ
つかくの親友を一人失くしたも同様、はなはだ遺憾いのいたりだから、

どうか雷獣ごときもののために僕を誤解しないように願います」

森本は次に自分が今大連で電気公園の娯樂がかりを勤めている由よしを書いて、来年の春には活動写真買入の用向を帯びて、是非共

出京するはずだから、その節は御地で久しぶりに御目にかかるのを今から樂たのしみにして待つているとつけ加えていた。そうしてその後あと

へ自分が旅行した満まん洲しゅう地方の景況をさも面白そうに一口ぐら

いずつ吹ふい聴ちようしていた。中で最も敬太郎を驚ろかしたのは、長ち

春ようしゆんとかにある博打場ばくちばの光景で、これはかつて馬賊の大將をし

たというさる日本人の経営に係るものだが、そこへ行つて見ると、

何百人と集まる汚ない支那人が、折詰しりのようにぎつしり詰つて、

血眼ちまなこになりながら、一種の臭氣しゆうきを吐き合つているのだそうで

ある。しかも長春の富豪が、慰み半分わざと垢だらけな着物を着て、こつそりここへ出入するとうんだから、森本だつてどんな真似をしたか分らないと敬太郎は考えた。

手紙の末段には盆裁の事が書いてあつた。「あの梅の鉢は動か坂の植木屋で買ったので、幹はそれほど古くないが、下宿の窓などに載せておいて朝夕眺めるにはちようど手頃のものです。あれを献上するからあなたの室へ持つていらつしやい。もつとも雷獣とそうしてズクは兩人共極めて不風流故、床の間の上へ据えたなり放つておいて、もう枯らしてしまつたかも知れません。それから上り口の土間の傘入に、僕の洋杖が差さつてゐるはずです。あれも価格から云えばけつして高く踏めるもので

はありませんが、僕の愛用したものだから、記念のため是非あなたに進上したいと思います。いかな雷獣とそうしてズクもあの洋杖をあなたが取ったって、まさか故障は申し立てますまい。だからけっして御遠慮なさらずと好い。取って御使いなさい。——満洲ことに大連ははなはだ好い所です。あなたのような有為の青年が発展すべき所は当分ほかに無いでしょう。思い切つて是非いらつしやいませんか。僕はこつちへ来て以来満鉄の方にもだいぶ知人ができたから、もしあなたが本当に来る気なら、相当の御世話ができるつもりです。ただしその節は前もつてちよつと御通知を願います。さよなら」

敬太郎は手紙を畳んで机の抽出^{ひきだし}へ入れたなり、主人夫婦へは

森本の消息について、何事も語らなかつた。洋杖は依然として、傘入の中に差さっていた。敬太郎は出入でいりの都度つど、それを見るたびに一種妙な感に打たれた。

停留所

一

敬太郎けいたろうに須永すながという友達があつた。これは軍人の子でありながら軍人が大嫌だいきらひで、法律を修めおさながら役人にも会社員にもな

る気のない、至つて退嬰主義たいえいしゆぎの男であつた。少くとも敬太郎にはそう見えた。もつとも父はよほど以前に死んだとかで、今では母とたった二人ぎり、淋しいさみような、また床ゆかしいような生活を送つている。父は主計官としてだいぶ好い地位にまで昇のぼつた上、元来が貨殖かしよくの道に明らかな人であつただけ、今では母子共衣食の上なかに不安の憂うれいを知らない好い身分である。彼の退嬰主義も半ばはこの安泰な境遇に慣なれて、奮闘の刺戟しげきを失つた結果とも見られる。というものは、父が比較的立派な地位にいたせいか、彼には世間体せけんていの好いばかりでなく、実際ためになる親類があつて、いくらでも出世の世話をしてやろうというのに、彼は何だかだと手前勝手ばかり並べて、今もつてぐずぐずしているのを見ても分る。

「そう贅ぜいたく沢ばかり云つてちやもつたない。厭いやなら僕に譲るがいい」と敬太郎は冗じょうだん談半分はんぶんに須永を強請せびることもあつた。すると須永は淋さびしそうなまた気の毒にくそうな微笑えいごうを洩もらして、「だつて君じゃいけないんだから仕方がないよ」と断るのが常であつた。断られる敬太郎は冗談にせよ好い心持はしなかつた。おれはおれでどうかするといふ気概きがいも起して見た。けれども根ねが執念しゅうねん深ふかくない性質せいかつだから、これしきの事で須永に対する反抗心などが永く続きようはずがなかつた。その上身分が定まらないので、氣の落ちつく背景はいけいを有もたない彼は、朝から晩まで下宿ひまの一ひとと間にじつと坐まっている苦痛くつうに堪たえなかつた。用もちがなくなつても半日は是非出でて歩あるいた。そうしてよく須永の家うちを訪問おとずれた。一つはいつ行つ

ても大抵留守の事がないので、行く敬太郎の方でも張合があつたのかも知れない。

「糊くち口も糊口だが、糊口より先に、何か驚嘆あたいに価する事件に会いたいと思つてるが、いくら電車に乗つて方々歩いてても全く駄目だね。攫すり徒にさえ会わない」などと云うかと思つと、「君、教育は一種の権利かと思つていたら全く一種の束縛そくばくだね。いくら学校を卒業したつて食うに困るようじゃ何の権利かこれあらんやだ。それじゃ位地いちちはどうでもいいから思う存分勝手な真似まねをして構わないかというと、やっぱり構うからね。厭いやに人を束縛するよ教育が」と忌いま々しそうに嘆息する事がある。須永は敬太郎のいずれの不平に対しても余り同情がないらしかった。第一彼の態度から

してが本当に真面目まじめなのだか、またはただ空焦燥からはしやぎに焦燥こいでいるのか見分がつかなかったのだろう。ある時須永はあまり敬太郎がこういような浮つずった事ばかり言い募つるので、「それじゃ君はどんな事がして見たいのだ。衣食問題は別として」と聞いた。敬太郎は警視庁の探偵見たよな事がして見たいと答えた。

「じゃするが好いじやないか、訳ないこつた」
「ところがそうは行かない」

敬太郎は本気になぜ自分に探偵ができないかという理由を述べた。元来探偵なるものは世間の表面から底へ潜もぐる社会の潜水夫のよなものだから、これほど人間の不思議つを攫つかんだ職業はたんとあるまい。それに彼らの立場は、ただ他ひとの暗黒面を觀察するだけ

で、自分と墮落してかかる危険性を帯びる必要がないから、なおの事都合がいいには相違ないが、いかんせんその目的がすでに罪悪の暴露ばくろにあるのだから、あらかじめ人を陥れおとしようとする成心の上うに打ち立てられた職業である。そんな人の悪い事は自分にはできない。自分はただ人間の研究者いな否人間の異常なる機関からくりが暗い闇夜やみよに運転する有様を、驚嘆の念をもつて眺ながめていたい。——こういうのが敬太郎の主意であつた。須永は逆さからずに聞いていたが、これという批判の言葉も放たなかつた。それが敬太郎には老成と見えながらその実平凡なのだとか受取れなかつた。しかも自分を相手にしないような落ちつき払つた風のあるのを悪にくく思つて別れた。けれども五日と経たたないうちにまた須永の宅うちへ行きたくな

つて、表へ出ると直神田行の電車に乗った。

二

須永すながはもとの小川亭即ち今の天下堂という高い建物を目標めじるしに、須田町の方から右へ小さな横町を爪先つまさき上りに折れて、二三度不規則に曲つた極きわめて分り悪い所にくにいた。家並いえなみの立て込んだ裏通りだから、山の手と違って無論屋敷を広く取る余地はなかつたが、それでも門から玄関まで二間ほど御影みかげの上を渡らなければ、格こうし子先さきの電鈴ベルに手が届かないくらいの一ひと構かまえであつた。もとから自分の持家もちいえだつたのを、一時親類の某なにがしに貸したなり久しく過

ぎたところへ、父が死んだので、無人ぶにんの活計くわしには場所も広さも恰かつころ

好こうだろとうという母の意見から、駿河台するがだいの本宅を売払つてここ

へ引移つたのである。もつともそれからだいぶ手を入れた。ほと

んど新築したも同然さとかつて須永が説明して聞かせた時に、敬けいたろう

太郎はなるほどそうかと思つて、二階の床柱や天井板てんじょういたを見

廻した事がある。この二階は須永の書齋にするため、後から継つぎ

足したので、風が強く吹く日には少し揺れる気味はあるが、ほか

にこれと云つて非の打ちようのない綺麗きれいに明かな四畳六畳二間ふたまたつ

づきの室へやであつた。その室すわに坐つてみると、庭に植えた松の枝と、

手斧目ちようなめの付いた板いた塀べいの上の方と、それから忍び返しが見えた。

縁てすりに出て手摺てすりから見下した時、敬太郎は松の根に一面と咲いた鷺さ

ぎそう
草を眺めて、あの白いものは何だと須永に聞いた事もあつた。

彼は須永を訪問してこの座敷に案内されるたびに、書生と若旦那の区別を判然と心に呼び起さざるを得なかつた。そうしてこう小ぢんまり片づいて暮している須永を軽蔑けいべつすると同時に、閑静ながら余裕よゆうのあるこの友の生活を羨うらやみもした。青年があんなでは駄目だと考えたり、またあんなにもなつて見たいと思つたりして、今日も二つの矛盾からでき上つた斑まだらな興味を懐ふところに、彼は須永を訪問したのである。

例の小路こうじを二三度曲折して、須永の住居すまつている通りの角まで来ると、彼より先に一人の女が須永の門を潜くぐつた。敬太郎はただ一目ひとめその後姿を見ただけだったが、青年に共通の好奇心と彼に固

有ロマンしゆみの浪漫趣味とが力を合せて、引き摺ずるように彼を同じ門前に急
 がせた。ちよつと覗のぞいて見ると、もう女の影は消えていた。例の
 通り紅葉もみじを引手ひきてに張り込んだ障子しょうじが、閑静しまに閉しまっているだけな
 のを、敬太郎は少し案外げたにかつ物足らず眺ながめていたが、やがて沓く
つぬぎ脱ぬぎの上に脱ぎ捨てた下駄げたに気をつけた。その下駄はもちろんな女
 物であつたが、行儀ぎよよく向うむきに揃そろっているだけで、下女が
 手をかけて直した迹あとが少しも見えない。敬太郎は下駄むきの向と、思
 ったより早く上あがつてしまつた女の所作しよさとを継つぎ合あわして、これは
 取次とりごを乞こわずに、独ひとりで勝手に障子しょうじを開けて這入はいつた極きわめて懇意
 の客きやくだろうと推察すいさつした。でなければ家うちのものだが、それでは少し
 変である。須永いえの家は彼と彼の母と仲なかばたらばたら働はたらきと下女よつたりの四人暮

しである事を敬太郎はよく知っていたのである。

敬太郎は須永の門前にしばらく立っていた。今這入った女の動静をそつと塀の外から窺ううかがというよりも、むしろ須永とこの女がどんな文あやに二人の浪漫ロマンを織つっているのだろうと想像するつもりであつたが、やはり聞きき耳みみは立てていた。けれども内なはいつもの通りしんとしていた。艶なまめいた女の声どころか、咳せき嗽せき一つ聞えなかつた。

「許いいなずけ嫁なかな」

敬太郎はまず第一にこう考えたが、彼の想像はそのくらいで落ちつくほど、訓練を受けていなかった。——母は仲働ななを連れて親類へ行つたから今日は留守である。飯めしたき焚たきは下女部屋しやにやぶに引き下が

っている。須永と女とは今差向いで何か私語ささやしている。——はたしてそうだとするといつものように格子戸こうしどをがらりと開けて頼むと大きな声を出すのも変なものである。あるいは須永も母も仲働もいっしょに出たかも知れない。おさんはきつと昼寝ひるねをしている。女はそこへ這入はいったのである。とすれば泥棒である。このまま引返してはすまない。——敬太郎は狐憑きつねつきのようにのそりと立っていた。

三

すると二階の障子しょうじがすうと開あいて、青い色の硝子瓶ガラスびんを提さげ

た須永すながの姿が不意に縁側えんがわへ現われたので敬太郎けいたろうはちよつと吃驚びっくりした。

「何をしているんだ。落し物でもしたのかい」と上から不思議そうに聞きかける須永を見ると、彼は咽喉のどの周圍まわりに白いフラネルを捲まいていた。手に提さげたのは含嗽劑がんそうざいらしい。敬太郎は上を向いて、風邪かぜを引いたのかとか何とか二三言葉を換かわしたが、依然として表に立ったまま、動こうともしなかった。須永はしまいに這入れと云った。敬太郎はわざと這入っていいかと念を入れて聞き返した。須永はほとんどその意味を覺さとらない人のごとく、軽く首う肯なすいたぎり障子の内に引き込んでしまった。

階段はしごだんを上あがる時、敬太郎は奥の部屋で微かすかに衣摺きぬずれの音がす

るような気がした。二階には今まで須永の羽織っていたらしい黒くろろろははちちじじょうじょうの襟えりの掛かつたどてらが脱ぎ捨ててあるだけで、ほかに平生と変ったところはどこにも認められなかった。敬太郎の性質から云つても、彼の須永に対する交情から云つても、これほど気にかかる女の事を、率直に切り出して聞けないはずはなかったのだが、今までにどこか罪な想像をたく逞たくましくしたという疚やましさもあり、また面めんと向つてすぐとは云い悪い皮肉ねらいな覷ねらいを付けた自覚もあるので、今しがた君の家うちへ這入った女は全体何者だと無邪気に尋ねる勇氣も出なかった。かえつて自分の先へ先へと走りたがる心をお押し隠すような風に、

「空想はもう当分やめだ。それよりか口の方が大事だからね」と

云つて、兼かねて須永から聞いている内幸町うちさいわいちようの叔父さんという人に、一応そういう方の用向で会つておきたいから紹介してくれと真面目まじめに頼んだ。叔父というのは須永の母の妹の連つれあい合で、官吏から実業界へ這入つて、今では四つか五つの会社に関係を有もつている相当な位地の人であつたが、須永はその叔父の力を藉かりてどうしようという料簡りようけんもないと見えて、「叔父がいろいろ云つてくれるけれども、僕は余進あんまりまないから」と、かつて敬太郎に話した事があつたのを、敬太郎は覚えていたのである。

須永は今朝すでにその叔父に会はずであつたが、咽喉のどを痛めたため、外出を見合せたのだそうで、四五日内には大抵行けるだろうから、その時には是非話して見ようと答えたあとで、「叔父

も忙がしい身体からだだしね、それに方々から頼まれるようだから、きつとは受合われないが、まあ会つて見たまえ」と念のためだか何だかつけ加えた。余り望のぞみを置き過ぎられては困るといふのだらうと敬太郎は解釈したが、それでも会わないよりは増しだぐらゐに考えて、例に似ず宜よろしく頼む氣になつた。が、口で頼むほど腹の中では心配も苦勞もしていなかつた。

元來彼が卒業後相当の地位を求めめるために、腐心し運動し奔走し、今もなおしつゝあるのは、当人の公言するごとく伴いっわりなき事実はあるが、いまだに成せい効こうの曙しよこう光を拝まないと云つて、さも苦しそうな声を出して見せるうちには、少なくとも五割方の懸か値ねが籠こもつていた。彼は須永のような一人息子ではなかつたが、

(妹が片づいて、) 母一人残っているとところは両方共同じであった。彼は須永のように地面家作の所有主でない代りに、国に少し田地でんじを有もつていた。固もとより大した穀高こくだかになるといふほどのものでもないが、俵ひょうがいくらというきまつた金に毎年替えられるので、二十や三十の下宿代に窮する身分ではなかつた。その上女親の甘いにつけ込んで、自分で自分の身を喰うような臨時費を請求した事も今までに一度や二度ではなかつた。だから位地位と云つて騒ぐのが、全くの空騒からさわぎでないにしても、郷党ほうゆうだの朋友ゆうゆうだのまたは自分だのに対する虚栄心に煽あおられている事はたしかであつた。そんなら学校にいるうちもつと勉強して好い成績でも取つておきそうなものなのに、そこが浪漫家ロマンかだけあつて、学課はなる

べく怠けよう怠けようと心がけて通して来た結果、すこぶる鮮あざやかならぬ及第をしてしまったのである。

四

それで約一時間ほど須すなが永と話す間にも、敬けいたろう太郎は位地とか衣食とかいう苦しい問題を自分と進んで持ち出しておきながら、やつぱり先刻さつき見た後うしろすがたの女の事が気に掛つて、肝かんじん心の世渡りの方には口先ほど真面目まじめになれなかつた。一度下座敷したざしきで若々しい女の笑い声が聞えた時などは、誰か御客が来ているようだねと尋ねて見ようかしらんと考えたくらいである。ところがその考え

ている時間が、すでに自然をぶち壊す道具になつて、せつかくの問が間外れまはずになろうとしたので、とうとう口へ出さずにやめてしまつた。

それでも須永の方ではなるべく敬太郎の好奇心に媚こびるような話題を持ち出した気でいた。彼は自分の住んでいる電車の裏通りが、いかに小さな家と細い小路こうじのために、賽さいの目めのように区切られて、名も知らない都会人士の巢を形づくっているうちに、社会の上層に浮き上らない戯曲がほとんど戸こごとに演ぜられていると云うような事実を敬太郎に告げた。

まず須永の五六軒先には日本橋辺の金物屋かなものやの隠居めかけの妾めかけがいる。その妾めかけが宮戸座みやとざとかへ出る役者を情夫いろにしている。それを隠居が

承知で黙っている。その向う横町に代言だいげんだか周旋屋しゅうせんやだか分らない小綺麗こぎれいな格子戸こうしどづく作りの家うちがあつて、時々表へ女記者一名、女コック一名至急入用などという広告を黒板ボードへ書いて出す。そこへある時二十七八の美しい女が、髻ひだを取つた紺綾こんあやの長いマントをすぼりと被かぶつて、まるで西洋の看護婦という服装なりをして来て職業の周旋を頼んだ。それが其家そこの主人むかの昔し書生をしていた家の御嬢さんなので、主人はもちろん妻君も驚ろいたという話がある。次に背中合せの裏通りへ出ると、白髪頭しらがあたまで甘はたちぐらいの妻君を持つた高利貸がいる。人の評判では借金の抵当かたに取つた女房だそうである。その隣りの博奕打ぼくちうちが、大勢同類を寄せて、互に血ち眼まなこを擦り合っている最中に、ねんね子で赤ん坊おっふを負つたかみさ

んが、勝負で夢中になつてゐる亭主を迎むかえに来る事がある。かみさんが泣きながらどうかいつしよに帰つてくれというと、亭主は帰るには帰るが、もう一時間ほどして負けたものを取り返してから帰るといふ。するとかみさんはそんな意地を張れば張るほど負けるだけだから、是非今帰つてくれと縋すがりつくように頼む。いや帰らない、いや帰れといつて、往来の氷る夜中でも四隣あたりの眠ねむりを驚ろかせる。……

須永の話をだんだん聞いているうちに、敬太郎はこういう実地小説のはびこる中に年来住み慣れて来た須永もまた人の見ないよな芝居をこつそりやつて、口を拭ぬぐつてすましているのかも知れないという気が強くなつて来た。固もとよりその推察の裏には先刻見

た後姿の女が薄い影を投げていた。「ついでに君の分も聞こうじやないか」と切り込んで見たが、須永はふんと云つて薄笑いをしただけであつた。その後で簡単に「今日は咽喉のどが痛いから」と云つた。さも小説は有もつてゐるが、君には話さないのだと云わんばかりの挨拶あいさつに聞えた。

敬太郎が二階から玄関へ下りた時は、例の女下駄がもう見えなかつた。歸つたのか、下駄箱へしまわしたのか、または氣を利きかして隠したのか、彼にはまるで見当けんとうがつかなかつた。表へ出るや否や、どういう料簡りょうけんか彼はすぐ一軒の煙草屋たばこやへ飛び込んだ。そうしてそこから一本の葉巻を銜くわえて出て来た。それを吹かしながら須田町まで来て電車に乗ろうとする途端とたんに、喫煙御断りとい

う社則を思い出したので、また万世橋の方へ歩いて行つた。彼は本郷の下宿へ帰るまでこの葉巻を持たすつもりで、ゆつくりゆつくり足を運ばせながらなお須永の事を考えた。その須永はけつしていつものように単独には頭の中へは這入^{はい}つて来なかつた。考えるたびにきつと後姿の女がちらちら跟^ついて来た。しまいに「本郷台町の三階から遠^{とおめが}眼鏡で世の中を覗^{のぞ}いていて、浪漫的探^{ロマン}険なんて気の利いた真似^{まね}ができるものか」と須永から冷笑^{ひや}かされたような心持がし出した。

五

彼は今日こんにち日まで、俗にいう下町生活に昵懇なじみも趣味も有もち得ない男であつた。時たま日本橋の裏通りなどを通つて、身を横にしなければ潜くぐれない格子戸こうしどだの、三和土たたきの上から訳わけもなくぶら下がつている鉄灯籠かなどうろうだの、上り框あががまちの下を張り詰めた綺麗きれいに光る竹だの、杉だか何だか日光ひびが透とおつて赤く見えるほど薄つぺらな障子しょうじの腰だのを眼にするたびに、いかにもせせこましそうな心持になる。こう万事がきちりと小さく整のつてかつ光つていられては窮屈きつこくでたまらないと思う。これほど小ぢんまりと几帳面きちようめんに暮らして行く彼らは、おそらく食後に使う楊枝ようじの削り方けずかたまで気にかけているのではなからうかと考える。そうしてそれがことごとく伝説たばこぼん的法則に支配されて、ちやうど彼らの用いる煙草盆たばこぼんのように、先

祖代々順々に拭き込まれた習慣を笠に、恐るべく光っているのだ
 ろうと推察する。須永の家へ行って、用もない松へ大事そうな雪
 除をした所や、狭い庭を馬鹿丁寧に枯松葉で敷きつめた景色な
 どを見る時ですら、彼は繊細な江戸式の開花の懐に、ぼうと育つ
 た若旦那を聯想しない訳に行かなかつた。第一須永が角帯
 をきゆうと締めてきちりと坐る事からが彼には変であつた。そこ
 へ長唄の好きだとかいう御母さんが時々出て来て、滑っこい癖
 にアクセントの強い言葉で、舌触の好い愛嬌を振りかけ
 てくれる折などは、昔から重詰にして蔵の二階へしまつてお
 いたものを、今取り出して来たという風に、出来合以上の旨さがある
 ので、紋切形とは無論思わないけれども、幾代もかかつ

て辞令の練習を積んだ巧みが、その底に潜ひそんでいるとしか受取れなかつた。

要するに敬太郎けいたろうはもう少し調子外ちようしはずれの自由なものが欲しか

つたのである。けれども今日きようの彼は少くとも想像の上において平

生の彼とは違つていた。彼は徳川時代の湿しめっぽい空気がいまだに

漂ただよつている黒い蔵造くらづくりの立ち並ぶ裏通に、親譲りの家を構え

て、敬ちゃん御遊ごびなどという友達を相手に、泥棒ごつこや大将ご

つこをして成長したかつた。月に一遍かきずつ蠣殻かきがら町の水天すいてんぐう

宮様さまと深川の不動様へ御参りをして、護摩ごまでも上げたかつた。

(現に須永は母の御供をしてこういう旧弊きゆうへいな真似まねを当り前の

ごとくやっている。)それから鉄無地てつむじの羽織でも着ながら、歌舞

伎を当世とうせいに崩くずして往来へ流した匂においのする町内を恍惚こうこうと歩きたかった。そうして習慣しじに縛しばられた、かつ習慣を飛び超こえた艶なまめかしい葛藤かつとうでもそこに見出したかった。

彼はこの時たちまち森本の二字を思い浮かべた。するとその二字の周囲にある空想が妙に色を変えた。彼は物好ものずきにも自ら進みずかんでこの後うしろ暗ぐらい奇人に握手を求めた結果として、もう少しでとんだ迷惑ごうを蒙こうむるところであつた。幸いに下宿の主人が自分の人格を信じたからいいようなものの、疑ぐらうとすればどこまでも疑ぐられ得る場合なのだから、主人の態度いかに依よつては警察ぐらいへ行かなければならなかつたのかも知れない。と、こう考えると、彼の空中に編み上げる勝手な浪漫ロマンが急に温あたたかみ味あじを失つて、

醜みにくい想像からでき上った雲の峰同様に、意味もなく崩れてしま
 った。けれどもその奥に口くちひげ髭をだらしなく垂らしたふたえまぶち二重瞼の
 瘡やせぎすの森本の顔だけは粘ねばり強く残っていた。彼はその顔を愛し
 たいような、侮あなどりたいような、また憐あわれみたいような心持になった。
 そうしてこの凡ぼんよう庸な顔の後に解うしろすべからざる怪しい物がぼんや
 り立っているように思った。そうして彼が記念かたみにくれると云った
 妙な洋杖ステッキを聯れんそう想した。

この洋杖は竹の根の方を曲げて柄えにした極きわめて単たんかん簡かんのものだ
 が、ただ蛇へびを彫つつてあるところが普通の杖つえと違ちがっていた。もつと
 も輸出向によく見るように蛇の身をぐるぐる竹に巻きつけた毒々
 しいものではなく、彫つつてあるのはただ頭だけで、その頭が口を

開けて何か呑みかけているところを握にぎりにしたものであった。けれどもその呑みかけているのが何であるかは、握りの先が丸く滑すべつこく削けずられているので、蛙かえるだか鶏卵たまごだか誰にも見当けんとうがつかなかった。森本は自分で竹を伐きって、自分でこの蛇を彫ったのだと云っていた。

六

敬太郎けいたろうは下宿の門口かどぐちを潜くぐるとき何より先にまずこの洋杖やうじょうに眼をつけた。というよりも途みちすがらの聯想れんさうが、硝子戸ガラスどを開けるや否や、彼の眼を瀬戸物の傘かさ入いれの方へ引きつけたのである。実を

いうと、彼は森本の手紙を受取った当座、この洋杖を見るたびに、自分にも説明のできない妙な感じがしたので、なるべく眼を触れないように、出入でいりの際視線を逸そらしたくらいである。ところがそうすると今度はわざと見ないふりをして傘入そばの傍を通るのが苦になつてきて、極きわめて軽微な程度ではあるけれどもこの変な洋杖におのずと崇たたられたと云う風になつて、しまった。彼自身もついには自分の神経を不思議に思い出した。彼は一種の利害関係から、過去に溯さかのぼる嫌疑けんぎを恐れて、森本の居所もまたその言ことづて伝も主人夫婦に告げられないという弱味を有もつているには違ないが、それは良心の上にどれほどの曇くもりもかけなかつた。記念かたみとして上げるとわざわざ云つて来たものを、快よく貰い受ける勇氣の出ないのは、

他の好意を空くする点において、面白くないにきまつているが、これとても苦になるほどではない。ただ森本の浮世の風にあたる運命が近いうちに終りを告げるとする。（おそらくはのたれ死という終りを告げるのだらう。）その憐れな最期を今から予想して、この洋杖が傘入の中に立っているとする。そうして多能な彼の手によつて刻まれた、胴から下のない蛇の首が、何物かを吞もうとして吞まず、吐こうとして吐かず、いつまでも竹の棒の先に、口を開いたまま喰付いているとする。——こういう風に森本の運命とその運命を黙つて代表している蛇の頭とを結びつけて考えた上に、その代表者たる蛇の頭を毎日握つて歩くべく、近い内にのたれ死をする人から頼まれたとすると、敬太郎はその時に始めて妙

な感じが起るのである。彼は自分でこの洋杖を傘入の中から抜き取る事もできず、また下宿の主人に命じて、自分の目の届かない所へ片づけさせる訳にも行かないのを大袈裟ではあるが一種の因果んがのように考えた。けれども詩で染めた色彩と、散文で行く活計いとはだいぶ一致しないところもあって、實際を云うと、これがために下宿を変えて落ちついた方が楽だと思ふほど彼は洋杖に災わざわいされていなかったのである。

今日も洋杖ステッキは依然として傘入の中に立っていた。鎌首げたは下駄ばこ箱の方を向いていた。敬太郎はそれを横に見たなり自分の室へやに上ったが、やがて机の前に坐つて、森本にやる手紙を書き始めた。まずこの間向うから来た音信たよりの礼を述べた上、なぜ早く返事を出

さなかつたかという弁解を二三行でもいいからつけ加えたいと思つたが、それを明らさまに打ち開けては、君のような漂浪者ヴァガボンドを知己ともに有つ僕の不名誉を考えると、書信の往復などはする気になれなかつたからだとても書くよりほかに仕方がないので、そこは例の奔走に取り紛れまぎと簡単な一句でごまかしておいた。次に彼が大連で好都合な職業にありついた祝いの言葉をちよつと入れて、その後あとへだんだん東京も寒くなる時節柄、満洲まんしゅうの霜しもや風はさぞしの凌にぎ悪いだろう。ことにあなたの身体からだではひどくこた応ちがえるに違ちがいから、是非用心して病氣かかに罹からないようになさいと優しい文句を数すぎ行よう綴つづつた。敬太郎から云うと、実にここが手紙を出す主意うまなのだから、なるべく自分の同情が先方へ徹するように旨うまくかつ

長く、そうして誰が見ても実意の籠こもっているように書きたかったのだけれども、読み直して見ると、やっぱり普通の人が普通時候の挨拶あいさつに述べる用語以外に、何の新らしいところもないので、彼は少し失望した。と云つて、固もともと々恋人に送る艶書えんしよほど熱烈な真まごころ心を籠こめたものでないのは覚悟の前である。それで自分は文章が下手だから、いくら書き直したつて駄目だめだからの口実の下に、そこはそのままにして前まへへ進んだ。

七

森本が下宿へ置き去りにして行つた荷物の始末については義理

にも何とか書き添えなければすまなかつた。しかしその処置のつけ方を亭主に聞くのは厭いやだし、聞かなければ委細の報道はできるはずはなし、敬けいたろう太郎は筆の先を宙に浮かしたまま考えていたが、とうとう「あなたの荷物は、僕から主人に話して、どうでも彼の都合の宜いいように取り計らわせるとの御依頼でしたが、あなたの千里眼の通り、僕が何にも云わない先に、雷らいじゆう獣の方で勝手に取計ってしまったようですからさよう御承知を願います。梅の盆ぼん裁んさいを下さるといふ事ですが、これは影も形も見えないようですから、頂きません。ただ御礼だけ申し述べておきます。それから」とつづけておいて、また筆を休めた。

敬太郎はいよいよ洋ステッキ杖のところへ来たのである。根が正直な

男だから、あの洋杖はせつかくの御覚召おぼしめしだから、ちようだいして毎日散歩の時突いて出ますなどと空々しい嘘うそは吐けず、と言つて御親切はありがたいが僕は貰いませんとはなおさら書けず。仕方がないから、「あの洋杖はいまだに傘かさ入いれの中に立っています。持主の帰るのを毎日毎夜待ち暮しているごとく立っています。雷獣もあの蛇の頭へは手を触れる事をあえてしません。僕はあの首を見るたびに、彫刻家としてのあなたの手腕に敬服せざるを得ないです」と好加減いかげんな御世辞おせじを並べて、事実を暈ぼかす手段とした。

状袋へ名宛を書くときに、森本の名前を思い出そうとしたが、どうしても胸に浮ばないので、やむを得ず大連電気公園内娯楽掛り森本様とした。今までの関係上主人夫婦の眼を憚はばからなければ

ならない手紙なので、下女を呼んでポストへ入れさせる訳にも行
かなかつたから、敬太郎はすぐそれを自分の袂たもとの中に蔵かくした。彼
はそれを持って夕食後散歩かたがた外へ出かける気で寒い梯子はしご
段んを下まで降り切ると、須永すながから電話が掛つた。

今日内幸町から従妹いとこが来ての話に、叔父は四五日内に用事で大
阪へ行くかも知れないそうだから、余り遅くなつてはと思つて、
立つ前に会つて貰もらえまいかと電話で聞いて見たら、宜よろしいという
返事だから、行く気ならなるべく早く行つた方がよからう。もつ
とも電話の上に咽喉のどが痛いので、詳しい話はできなかつたから、
そのつもりでいてくれというのが彼の用向であつた。敬太郎は
「どうもありがとう。じやなるべく早く行くようにするから」と

札を述べて電話を切つたが、どうせ行くなら今夜にでも行つて見ようという気が起つたので、再び三階へ取つて返してこの間拵らえたセルの袴はかまを穿はいた上、いよいよ表へ出た。

曲り角へ来てポストへ手紙を入れる事は忘れなかつたけれども、かんじん肝心の森本の安否はこの時すでに敬太郎の胸に、ただ微かすかな火ほとほりとほり気を残すのみであつた。それでも状袋が郵便函の口を滑すべつて、

すくとんと底へ落ちた時は、受取人の一週間以内に封を披ひらく様を想見して、満まんざら更悪い心持もしまいと思つた。

それから電車へ乗るまではただ一直線にすたすた歩いた。考も一直線に内幸町の方を向いていたが、電車が明みょうじん神下へ出る時分、何気なく今しがた電話口で須永から聞いた言葉を、頭の内

繰り返して見ると、覚えはずと思うところが出て来た。須永は「今日内幸町からイトコが来て」とたしかに云ったが、そのイトコが彼の叔父さんの子である事は疑うまでもない。しかしその子が男であるか女であるかは不完全な日本語のまるで関係しないところである。

「どつちだろう」

敬太郎は突然気にし始めた。もしそれが男だとすれば、あの後姿の女についての手がかりにはならない。したがって女は彼の好奇心を徒らに刺戟した^いただけで、ちつとも動いて来ない。しかしもし女だとすると、日といい時刻といい、須永の玄関から上り具合といい、どうも自分より一足先へ這入^はったあの女らしい。想像と

事実を継ぎ合わせる事に巧みな彼は、そうと確かめないうちに、
てつきりそうときめてしまった。こう解釈した時彼は、今まで泡あ
立わだつていた自分の好奇心に幾分の冷水を注さしたような満足を覚え
ると共に、予期したよりも平凡な方角に、手がかりが一つできた
と云うつまらなさをも感じた。

八

彼は小川町まで来た時、ちよつと電車を下りても須永すながの門かどぐち口
まで行つて、友の口から事実を確かめて見たいくらいに思ったが、
単純な好奇心以外にそんな立ち入った詮議せんぎをすべき理由をどこに

も見出し得ないので、我慢してすぐ三田線に移った。けれども真ま直つに神田橋を抜けて丸の内を疾駆する際にも、自分は今須永の従妹いとこの家に向つて走りつつあるのだという心持は忘れなかつた。彼は勧業銀行の辺あたりで下りるはずのところを、つい桜田本郷町まで乗り越して驚ろいてまた暗い方へ引き返した。淋さびしい夜であつたが尋ねる目的の家はすぐ知れた。丸い瓦斯ガスに田口たぐちと書いた門の中を覗のぞいて見ると、思ったより奥深みちそうな構かまえであつた。けれども實際は砂利を敷いた路みちが往来から筋違すじかいに玄関を隠しているのと、正面を遮さかぎる植込さかえがこんもり黒ずんで立っているのとで、幾分か厳いめしい景氣を夜陰に添そえたままで、門内に這入はいったところでは見付みつきほど手広すまな住居でもなかつた。

玄関には西洋擬いの硝子戸ガラスドが二枚閉ててあつたが、頼むといつても、電鈴ベルを押しても、取次がなかなか出て来ないので、敬けいた太郎ろうはやむを得ずしばらくその傍そばに立って内の様子を窺うかがつていた。すると、どこからかようやく足音が聞こえ出して、眼の前の擦硝子すりガラスがぱつと明るくなつた。それから庭下駄にわげたで三和土たつきを踏む音が二足三足したと思うと、玄関の扉が片方開あいた。敬太郎はこの際取次の風采ふうさいを想望するほどの物数奇ものずきもなく、全く漫然と立っていただけであるが、それでも緋かすりの羽織はおりを着た書生か、双ふたこ子の綿入わたいりを着た下女が、一応御辞儀をして彼の名刺を受取る事とのみ期待していたのに、今戸いまを半分開けて彼の前に立ったのは、思おもいも寄らぬ立派な服装なりをした老紳士であつた。電氣の光を背中に

受けているので、顔は判然はつきりしなかつたが、白縮緬しろちりめんの帯だけはすぐ彼の眼に映じた。その瞬間にすぐこれが田口という須永の叔父さんだろうという感じが敬太郎の頭に働いた。けれども事が余り意外なので、すぐ挨拶あいさつをする余裕よゆうも出ず少しはあつけに取られた気味で、ぼんやりしていた。その上自分をはなはだ若く考えている敬太郎には、四十代だろうが五十代だろうが乃至ないし六十代だろうがほとんど区別のない一様いちようの爺さんに見えるくらい、彼は老人に対して親しみのない男であつた。彼は四十五と五十五を見分けてやるほどの同情心を年長者に対して有もたなかつたと同時に、そのいずれに向つても慣れないうちは異人種のような無気味ぶきみを覚えるのが常なので、なおさら迷兎まごついたのである。しかし相手は

何も気にかからない様子で、「何か用ですか」と聞いた。丁寧でもなければ軽蔑でもない至って無雑作なその言葉つきが、少し敬太郎の度胸を回復させたので、彼はようやく自分の姓名を名乗ると共に手短かく来意を告げる機会を得た。すると年嵩な男は思い出したように、「そうそう先刻市蔵さつきいちぞう（須永の名）から電話で話がありました。しかし今夜御出おいでになるとは思いませんでしたよ」と云った。そうして君そう早く来たつていけないという様子がその裏に見えたので、敬太郎は精一杯言訳せいいつぱいをする必要を感じた。老人はそれを聞くでもなし聞かぬでもなしといった風に黙つて立っていたが、「そんならまたいらつしやい。四五日うちにちよつと旅行しますが、その前に御目にかかれる暇さえあれば、

御目にかかっても宜うござんす」と云った。敬太郎は篤く礼を述べてまた門を出たが、暗い夜の中で、礼の述べ方がちと馬鹿丁寧過ぎたと思つた。

これはずっと後になつて、須永の口から敬太郎に知れた話であるが、この主人は、この時玄関に近い応接間で、たつた一人碁盤に向つて、白石と黒石を互違に並べながら考え込んでいたのだそうである。それは客と一石やつた後の引続きとして、是非共ある問題を解決しなければ気がすまなかつたからであるが、肝心のところで敬太郎がさも田舎者らしく玄関を騒がせるものだから、まずこの邪魔を追つ払つた後でというつもりになつて、じれつたさの余り自分と取次に出たのだという。須永にこの顛

末^つを聞かされた時に、敬太郎はますます自分の挨拶^{あいさつ}が丁寧^{ていねい}過ぎたような気がした。

九

中^{なか}一^{いち}日^{にち}置^いて、敬^{けい}太^た郎^{ろう}は堂々と田口へ電話をかけて、これからすぐ行つても差支^{さしつかえ}ないかと聞き合わせた。向うの電話口へ出たものは、敬太郎の言葉つきや話しぶりの比較的横^{おうふう}風^{ふう}なところからだいぶ位地の高い人とでも思つたらしく、「どうぞ少々御待ち下さいまし、ただいま主人の都合をちよつと尋ねますから」と丁寧な挨拶をして引き込んだが、今度返事を伝えるときは、「あ

あ、もしもし今ね、来客中で少し差支えるそうです。午後の一時頃来るなら来ていただきたいという事です」と前よりは言葉がよほど粗末ぞんざいになつていた。敬太郎は、「そうですか、それでは一時頃上りますから、どうぞ御主人に宜しくよろ」と答えて電話を切つたが、内心は一種厭いやな心持がした。

十二時かつきりに午飯ひるめしを食うつもりで、あらかじめ下女に云いつけておいた膳ぜんが、時間通り出て来ないので、敬太郎は騒々しく鳴る大学の鐘に急せぎ立てられでもするように催促をして、できるだけ早く食事を済ました。電車の中では一昨日おとといの晩会むざうさった田口の態度を思い浮べて、今日もまたああいう風むざうさに無雑作な取扱を受けるとは知らん、それとも向うで会うというくらいだから、もう少

しは愛嬌あいぎようのある挨拶でもしてくれるか知らんと考えなどした。彼はこの紳士の好意で、相当の地位さえ得られるならば、多少腰かがを曲めて窮屈な思をするぐらひは我慢するつもりであつた。けれども先刻電話さつきの取次に出たもののように、五分と経たないうちに、言葉使いを悪い方に改められたりすると、もう不愉快になつて、どうかそいつがまた取次に出なければいいがと思う。その癖くせ自分のかけ方の自分としては少し横風過ぎた事にはまるで気がつかない性質たちであつた。

小川町の角で、斜はすに須永すながの家うちへ曲まがる横町を見た時、彼ははつと例の後姿の事を思い出して、急に日蔭ひかげから日向ひなたへ想像を移した。今日も美しい須永の従妹いとこのいる所へ訪問に出かけるのだと自分

で自分に教える方が、億劫おつくうな手数てかずをかけて、好い顔じいもしない爺じいさんに、衣食みちの途みちを授けて下さいと泣なきつきに行くのだと意識するよりも、敬太郎に取つては遥はるかに麗うらちかであつたからである。彼は須永の従妹いとこと田口の爺さんを自分勝手に親子ときめておきながらどこまでも二人を引き離して考えていた。この間の晩田口と向き合つて玄関先に立つた時も、光線の具合さきで先方の人品はつきりは判然分はつきりらなかつたけれども、眼鼻りんかくだちの輪廓りんかくだけで評したところが、あまり立派な方よめでなかつた事は、この爺さんの第一印象として、敬太郎の胸うたがいに夜目よめにも疑うたがいなく描かれたのである。それでいて彼はこの男の娘なら、須永との関係はどうあろうとも、器量きりようはあまりいい方じやあるまいという気がどこにも起らなかつた。そこで

離れていて合い、合っていて離れるような日向日蔭ひなたひかげの裏表を一枚にした頭を彼は田口家に対して抱いだいていたのである。それを互違たがひにくり返した後あと、彼は田口の門前に立った。するとそこに大きな自働車ぎよしやが御者ごしやを乗せたまま待つていたので、少し安からぬ感じがした。

玄関へ掛つて名刺を出すと、小倉こくらの袴はかまを穿はいた若い書生がそれを受取つて、「ちよつと」と云つたまま奥へ這入はいつて行つた。その声こゑが確かに先刻さつき電話口で聞いたのに違ちがないので、敬太郎は彼かれのうしろすがた後姿ごしやを見送りながら厭いやな奴やつだと思つた。すると彼は名刺を持つたまままた現あらわれた。そうして「御氣ごきの毒どくですが、ただいま来客中きやくちゆうですからまたどうぞ」と云つて、敬太郎の前に突立つたつていた。

敬太郎も少しむつとした。

「先程電話で御都合を伺ったら、今客があるから午後一時頃来いという御返事でしたが」

「実はさっきの御客がまだ御帰りにならないで、御膳おぜんなどが出てごたごた混雑ごたごたしているんです」

落ちついて聞きさえすれば満更無理もない言訳なのだが、電話以後この取次しやくさわが癩しやくさわに障さわっている敬太郎には彼の云い草くさがいかにも気に喰くわなかつた。それで自分の方から先せんを越こすつもりか何かで、「そうですか、たびたび御足労ごそくでした。どうぞ御主人へよろしく」と平ひょうそく仄ひょうそくの合あわあない捨すて台たい詞ふのような事を云いつた上、何だこんな自働車じどうしゃがと云いわぬばかりにその傍そばを擦すり抜ぬけて表へ出た。

十

彼はこの日必要な会見を都合よく済ました後、新らしく築地に世帯を持った友人の所へ廻つて、須永すながと彼の従妹いとことそれから彼の叔父に当る田口とを想像の糸で巧みに継ぎ合せつつある一部始いちぶしじゆ終うを御馳走ごちそうに、晩まで話し込む気でいたのである。けれども田口の門を出て日比谷公園の傍わきに立った彼の頭には、そんな余裕よゆうはさらになかった。後姿を見ただけではあるが、在所ありかをすでに突き留めて、今その人の家を尋ねたのだという陽気な心持は固もとよりなかつた。位置を求めにここまで来たという自覚はなおなかつた。

彼はただ屈辱を感じた結果として、腹を立てていただけである。そうして自分を田口のような男に紹介した須永こそこの取扱に対して当然責任を負わなくてはならないと感じていた。彼は帰りがけに須永の所へ寄つて、逐ちくいち一顛てんまつ末を話した上、存分文句を並べてやろうと考えた。それでまた電車に乗つて一直線に小川町まで引返して来た。時計を見ると、二時にはまだ二十分ほど間まがあった。須永の家の前うちへ来て、わざと往来から須永須永と二声ばかり呼んで見たが、いるのかいないのか二階の障しょうじ子は立て切つたままついに開あかなかつた。もつとも彼は体てい裁家さいやで、平生からこういう呼び出し方を田舎者いなかもらしいといつて厭いやがつていたのだから、聞こえても知らん顔をしているのではなからうかと思つて、

敬太郎けいたろうは正式に玄関の格子こうしぐち口へかかった。けれども取次に出

た仲働なかばたらぎの口から「午少ひるし過に御出ましになりました」という言葉

を聞いた時は、ちよつと張合が抜けて少しの間黙つて立っていた。

「風邪かぜを引いていたようでしたが」

「はい、御風邪を召していらつしやいましたが、今日はだいぶ好
いからとおつしやつて、御出かけになりました」

敬太郎は帰ろうとした。仲働は「ちよつと御隠居さまに申し上
げますから」といつて、敬太郎を格子のうちに待たしたまま奥へ
這入はいった。と思うと襖ふすまの陰から須永の母の姿が現われた。背の高
い面長おもながの下町風ひんに品のある婦人であつた。

「さあどうぞ。もうそのうち帰りませうから」

須永の母にこう云い出されたが最後、江戸慣れない敬太郎はど
うそれを断つて外へ出ていいか、いまだにその心得がなかった。
第一^{だい}どこで断る隙間もないように、調子の好い文句がそれからそ
れへとずるずる彼の耳へ響いて来るのである。それが世^せ間^{けん}体^{てい}の
好い御世辞^{おせじ}と違つて、引き留められているうちに、上つては迷惑
だろ^ううという遠慮がいつの間にか失^なくなつて、つい気の毒だから
少し話して行こうという気になるのである。敬太郎は云われるま
まにとうとう例の書齋へ腰をおろした。須永の母が御寒いでしょ
うと云つて、仕切りの唐紙^{からかみ}を締^しめてくれたり、さあ御手をお出
しなさいと云つて、佐倉^{さくら}を埋^いけた火鉢^{ひばち}を勧めてくれたりするうち
に、一時^{こう}昂^{ふん}奮^{ふん}した彼の気分はしだいに落ちついて来た。彼はシ

キとかいう白い絹へ秋田^{あきたたぶき}露を一面に大きく摺^すつた襖^{ふすま}の模様だの、
 唐^{からくわ}桑らしくてらてらした黄色い手^{てあぶり}焙^{あぶり}だのを眺^{なが}めて、このしと
 やかで能弁^{そら}な、人を外^{そら}す事を知らないと言^いつた風の母と話をした。
 彼女の語るところによると、須永は今日^{やらい}矢来^{やらい}の叔父^{うち}の家へ行^いつ
 たのだそうである。

「じゃついでだから帰りに小日向^{こびなた}へ廻^{まわ}つて御寺参^{ごじさん}りをして来てお
 くれつて申しましたら、御母^{おんぼ}さんは近頃^{きんごう}無^む精^{しょう}になつたようです
 ね、この間^{ひと}も他に代理^{だいり}をさせたじやありませんか、年を取^とつたせ
 いかしらなんて悪口^{あくぐち}を云い云い出て参^{まゐ}りましたが、あれもねあな
 た、せんだつて中^{じゆう}から風邪^{かぜ}を引^ひいて咽喉^{のど}を痛^{いた}めておりますので、
 今日^{けふ}も何^{なに}なら止^とめた方がいじやないかととめて見^みましたが、や

つぱり若いものは用心深いようでもどこか我無しやらで、年寄の云う事などにはいつさい無頓着むとんじやくでございますから……」

須永の留守へ行くと、彼の母は唯一の楽みのようにこういう調子で俸せがれの話をするのが常であった。敬太郎の方で須永の評判でも持ち出そうものなら、いつまでもその問題の後あとへ喰付くつついて来て、容易に話頭を改めないのが例になっていた。敬太郎もそれにはだいぶ慣れていているから、この際も向うのいう通りをただふんふんとおとなしく聞いて、一段落の来るのを待っていた。

十一

そのうち話がいつか肝心の須永すながを逸それて、矢来の叔父おつかという人の方へ移つて行つた。これは内幸町と違つて、この御母おつかさんの実の弟に当る男だそうで、一種の贅沢屋ぜいたくやのように敬太郎けいたろうは須永から聞いていた。外套がいとうの裏は縞子しゆすでなくては見つともなくて着られないと云つたり、要いりもしないのに古渡りこわたの更紗玉さらさだまとか号して、石だか珊瑚さんごだか分らないものを愛玩あいがんしたりする話はいまだに覚えていた。

「何にもしないで贅沢ぜいたくに遊んでいられるくらい好い事はないんだから、結構な御身分ですね」と敬太郎が云うのを引き取るように母は、「どうしてあなた、打ち明けた御話が、まあどうにかこうにかやつて行けるといふまでで、楽だの贅沢だのという段には

まだなかなかなのでございますからいけません」と打ち消した。

須永の親戚に当る人の財力が、さほど敬太郎に關係のある訳でもないので、彼はそれなり黙ってしまった。すると母は少しでも談話の途切れるのを自分の過失でもあるように、すぐ言葉を継いだ。

「それでも妹婿の方は御蔭さまで、何だかだつて方々の会社へ首を突つ込んでおりますから、この方はまあ不自由なく暮しておる模様でございますが、手前共や矢来の弟などになりますと、云わば、浪人同様に、昔に比べたら、尾羽うち枯らさないばかりの体たらくだつて、よく弟ともそう申しては笑うこつてございますよ」

敬太郎は何となく自分の身の上を顧みてかえり気恥かしい思をした。

幸さいわいにさきがすらすら喋舌しゃべつてくれるので、こつちに受け答をする

文句を考える必要がないのをせめてもの得とくとして聞き続けた。

「それにね、御承知の通り市蔵がああいう引つ込思案の男だもんでござんすから、私もただ学校を卒業させただけでは、全く心配が抜けませんので、まことに困り切ります。早く氣に入つた嫁でも貰つて、年寄に安心でもさせてくれるようにおしなと申しますと、そう御母さんの都合のいいようにばかり世の中は行きやしませんで、てんで相手にしないんでございますよ。そんなら世話をしてくれる人に頼んで、どこへでもいいから、務つとめにでも出る氣になればまだしも、そんな事にはまたまるで無頓着むとんじやくであなた……」

敬太郎はこの点において實際須永が横着過ると平生から思っていた。「余計な事です、少し目上の人から意見でもして上げるようにしたらどうでしょう。今御話の矢来の叔父さんからでも」と全く年寄に同情する気で云った。

「ところがこれがまた大の交際嫌の変人でございまして、忠告どころか、何だ銀行へ這入って算盤なんかパチパチ云わすなんて馬鹿があるもんかと、こうでございますから頭から相談にも何にもなりません。それをまた市蔵が嬉しがりまますので。矢来の叔父の方が好きだとか気が合うとか申しちやよく出かけます。今日なども日曜じゃあるし御天気は好しするから、内幸町の叔父が大阪へ立つ前にちよつとあちらへ顔でも出せばいいのでございますけ

れども、やっぱり矢来へ行くんだって、とうとう自分の好きな方へ参りました」

敬太郎はこの時自分が今日何のために馳^かけ込むようにこの家を襲^{おそ}つたかの原因について、また新らしく考え出した。彼は須永の顔を見たら随分過激な言葉を使つてもその不都合を責めた上、僕はもう二度とあすこの門は潜^{くぐ}らないつもりだから、そう思つてくれたまえぐらいの台詞^{せりふ}を云つて帰る氣でいたのに、肝^{かんじん}心の須永は留守^{るす}で、事情も何も知らない彼の母から、逆^{さか}さにいろいろな話をしかけられたので、怒^{おこ}つてやろうという氣は無論抜けてしまつたのである。が、それでも行きがかり上、田口と会見^とを遂^とげ得なかつた顛^{てんまつ}末^{まつ}だけは、一応この母の耳へでも構われないから入れて

おく必要があるだろう。それには話の中に内幸町へ行くとか行かないとかが問題になっている今が一番よかろう。——こう敬太郎は思った。

十二

「実はその内幸町の方へ今日私も出たんですが」と云い出すと、自分の息子の事ばかり考えていた母は、「おやそうでございましてか」とやっと気がついてすまないという顔つきをした。この間から敬太郎けいたろうが躍起やつきになって口をさが探している事や、探しあぐんですなが須永に紹介を頼んだ事や、須永がそれを引き受けて内幸町の叔父

に会えるように周旋した事は、須永の傍そばにいる母として彼かの女おんなのことごとく見たり聞いたりしたところであるから、行き届いた人なら先方さきで何も云い出さない前に、こつちからどんな模様ですぐらいは聞いてやるべきだとも思つたのだらう。こう観察した敬太郎は、この一句を前置に、今までの成行を残らず話そうと力つとめにかかつたが、時々相手から「そうでございますとも」とか、「本当にまあ、間の悪い時にはね」とか、どつちにも同情したよまうな間投詞が出るので、自分がむかつ腹ばらを立てて悪あく体たいを吐ついた事などは話のうちから綺麗きれに抜ひいてしまった。須永の母は気の毒あつという言葉を何遍もくり返した後で、田口を弁護するようにこんな事を云つた。――

「そりやあ実のところ忙しい男なので。妹いもとなどもああして一つ家に住んでおりますよなもの、——何でござんしょう。——落おちおち々話のできるのはおそらく一週間に一日もございますまい。私が見かねて要ようやく作さんいくら御金が儲もうかるたつて、そう働らいてからだ身体を壊しちや何にもならないから、たまには骨休めをなさいよ、身体が資本もとでじゃありませんかと申しますと、おいらもそう思つてるんだが、それからそれへと用が湧わいてくるんで、傍そばから掬しゃくいで出さないと、用が腐くちまうから仕方がないなんて笑つて取り合いませんので。そうかと思うとまた妹や娘に今日はこれから鎌倉へ伴つれて行く、さあすぐ支度をしろつて、まるで足元から鳥が立つように急せぎ立てる事もございしますが……」

「御嬢さんがおありなのですか」

「ええ二人おります。いずれも年頃でございますから、もうそろそろどこかへ片づけるとか婿むこを取るとかしなければなりませんまいが」

「そのうちの一人の方が、須永君のところへ御出おいでになる訳でもないんですか」

母はちよつと口籠くちごもった。敬太郎もただ自分の好奇心を満足させるためにあまり立ち入った質問をかけ過ぎたと気がついた。何とかして話題を転じようと考えているうちに、相手の方で、

「まあどうなりますか。親達の考もございましょうし。当人達とうにんたちの存じ寄りもしかと聞ききただ糺して見ないと分りませんし。私ばかり

でこうもしたい、ああもしたいといくら熱急やきもき思つてもこればかりは致し方がございません」と何だか意味のありそうな事を云つた。一度退ひきかけた敬太郎の好奇心はこの答でまた打ち返して来そうにしたが、善よくないという克己こつきしん心にすぐ抑えられた。

母はなお田口の弁護をした。そんな忙がしい身体からだだから、時によると心にもない約束違ちがいなどをする事もあるが、いったん引き受けた以上は忘れる男ではないから、まあ旅行から帰るまで待つて、緩ゆるくり会あつたら宜よかろうという注意とも慰いしや藉せきともつかない助じ言ごんも与よえた。

「矢来のはおつても会わん方で、これは仕方がございませんが、内幸町のはいなくても都合さえつければ馳かけて帰つて来て会うとい

った風の性質たちでございますから、今度旅行から帰って来さえすれば、こつちから何とも云つてやらないでも、向うできつと市蔵のところへ何とか申して参りますよ。きつと」

こう云われて見ると、なるほどそういう人らしいが、それはこつちがおとなしくしていればこそで、先刻さつきのようにぶんぶん怒つてはどうてい物にならないにきまり切っている。しかし今更いまさらそれを打ち明ける訳には行かないので、敬太郎はただ黙っていた。須永の母はなお「あんな顔はしておりますが、見かけによらない実意のある 剽ひょう軽きん者ものでございますから」と云つて一人で笑つた。

剽軽者という言葉は田口の風采ふうさいなり態度なりに照り合わせて見て、どうも敬太郎けいたろうの腑ふに落ちない形容であつた。しかし實際を聞いて見ると、なるほど当つているところもあるように思われた。田口は昔むかしある御茶屋へ行つて、姉さんこの電気灯は熱ほてり過ぎるね、もう少し暗くしておくれと頼んだ事があるそうだ。下女が怪訝けげんな顔をして小さい球と取り換えましようかと聞くと、いいえさ、そこをちよいと捻ねじつて暗くするんだと真面目まじめに云いつけるので、下女はこれは電気灯のない田舎いなかから出て来た人に違ないと見て取つたものか、くすくす笑いながら、旦那電気はランプと違つて捻ひねつたつて暗くはなりませんよ、消えちまうだけですから。

ほらねとぱちツと音をさせて座敷を真暗にした上、またぱつと元通りに明るくするかと思うと、大きな声でばあと云つた。田口は少しも悄然しよげずに、おやおやまだ旧式を使つてるね。見つともないじゃないか、ここの家にも似合うちわなないこつた。早く会社の方へ改良を申し込んでおくといい。順番に直してくれるから。ときももつともらしい忠告を与えたので、下女もとうとう真まに受け出して、本当にこれじゃ不便ね、だいち点つけつ放ばなしで寝る時なんか明る過ぎて、困る人が多いでしょうからとさも感心したらしく、改良に賛成したそうである。ある時用事が出来て門司もんじとか馬関ばかんとかまで行つた時の話はこれよりもよほど念がい入っている。いつしよに行くべきはずのAという男に差支さしかえが起つて、二日ばかり彼は宿屋で

待ち合わしていた。その間の退屈たいくつ紛れまぎれに、彼はAを一つ担かついでやろうと巧たくらんだ。これは町を歩いている時、一軒の写真屋の店先でふと思いついた悪戯いたずらで、彼はその店から地方ところの芸者の写真を一枚買ったのである。その裏へA様と書いて、手紙を添えた贈物のように拵こしらえた。その手紙は女を一人雇つて、充分の時間を与えた上、できるだけAの心を動かすように艶なまめかしく曲くらしたもので、誰が貰もらつても嬉しい顔うれをするに足るばかりか、今日の新聞を見たら、明日あしたここへ御着のはずだと出ていたので、久しぶりにこの手紙を上げるんだから、どうか読みしだい、どこそこまで来ていたいただきたいと書いたなかなか安くないものであった。彼はその晩自分でこの手紙をポストへ入れて、翌日配達の時またそれを

自分で受取つたなり、Aの来るのを待ち受けた。Aが着いても彼はこの手紙をなかなか出さなかつた。力めて真面目な用談についての打合せなどを大事らしくし続けて、やつと同じ食卓で晚餐の膳に向つた時、突然思い出したように袂の中からそれを取り出してAに与えた。Aは表に至急親展とあるので、ちよつと箸を下に置くと、すぐ封を開いたが、少し読み下すと同時に包んである写真を抜いて裏を見るや否や、急に丸めるように懐へ入れてしまつた。何か急の用でもできたのかと聞くと、いや何というばかりで、不得要領にまた箸を取つたが、どことなくそわそわした様子で、まだ段落のつかない用談をそのままに、少し失礼する腹が痛いからと云つて自分の部屋に帰つた。田口は下女を呼んで、

今から十五分以内にAが外出するだろうから、出るときは車が待つてでもいたように、Aが何にも云わない先に彼を乗せて馳け出して、その思わく通りどこの何という家の門へおろすようにしろと云いつけた。そうして自分はAより早く同じ家へ行つて、主婦かみさを呼ぶや否や、今おれの宿の提灯ちようちんを点けた車に乗つて、これこれの男が来るから、来たらすぐ綺麗な座敷へ通して、町ていねに取扱つて、向うで何にも云わない先に、御連様おつれさまはどうかおまぢかねら御待兼でございますと云つたなり引き退がつて、すぐおれのところへ知らせてくれと頼んだ。そうして一人で煙草たばこを吹かして腕組をしながら、事件の経過を待つていた。すると万事が旨い具合うまに予定の通り進行して、いよいよ自分の出る順が来た。そこで

Aの部屋の傍へ行つて間の襖を開けながら、やあ早かつたねと挨拶すると、Aは顔の色を変えて驚ろいた。田口はその前へ坐り込んで、実はこれこれだと残らず自分の悪戯を話した上、「担いだ代りに今夜は僕が奢るよ」と笑いながら云つたんだという。「こういう飄氣た真似をする男なんでございますから」と須永の母も話した後でおかしそうに笑つた。敬太郎はあの自働車はまさか悪戯じゃなかつたらうと考えながら下宿へ歸つた。

十四

自動車事件以後敬太郎はもう田口の世話になる見込はないも

のと諦あきららめた。それと同時に須永すながの従弟いとこと仮定された例のうしろす後ご姿がたの正体も、ほぼ発端ほつたんの入口に当たる浅いところではたりと行きとまったのだと思うと、その底にはがゆいようなまた煮切にえきらないような不愉快があつた。彼は今こんにち日まで何一つ自分の力で、先へ突き抜けたという自覚を有もつていなかった。勉強だろうが、運動だろうが、その他何事に限らず本気にやりかけて、貫ぬき終おおせた試ためしがなかつた。生れてからたつた一つ行けるところまで行つたのは、大学を卒業したくらいなものである。それすら精を出さずにとぐろばかり巻きたがつているのを、向むこうで引き摺ずり出してくられたのだから、途中で動けなくなった間怠まだるさのない代りには、やつとの思いで井戸を掘り抜いた時の晴せいせい々せいせいした心持も知らなかつ

た。

彼はぼんやりして四五日過ぎた。ふと学生時代に学校へ招待したある宗教家の談話を思い出した。その宗教家は家庭にも社会にも何の不满もない身分なのに、自みずから進んで坊主になつた人で、その当時の事情を述べる時に、どうしても不思議でたまらないからこの道に入つて見たと云つた。この人はどんな朗らかに透すき徹とおるような空の下に立つても、四方から閉じ込められているような気がして苦しかったのだそうである。樹を見ても家を見ても往來を歩く人間を見ても鮮あざやかに見えながら、自分だけ硝ガラス子張はりの箱の中に入れられて、外しかの物と直じかに続いていない心持が絶えずして、しまいには窒ちっそく息するほど苦しくなつて来るんだという。敬太郎

はこの話を聞いて、それは一種の神経病に罹かかつていたのではなからうかと疑つたなり、今日こんにちまで気にもかけずにいた。しかしこの四五日ぼんやり屈くつたく託たくしているうちによくよく考えて見ると、彼自身が今までに、何一つ突き抜いて痛快だという感じを得た事のないのは、坊主にならない前のこの宗教家の心にどこか似た点があるようである。もちろん自分のは比較にならないほど微弱で、しかも性質がまるで違っているから、この坊さんのようにえらい勇断をする必要はない。もう少し奮発して気張きばる事さえ覚えれば、当こつても外はずれても、今よりはまだ痛快に生きて行かれるのに、今日こんにちまでついぞそこに心を用いる事をしなかつたのである。

敬太郎は一人でこう考えて、どこへでも進んで行こうと思つた

が、また一方では、もうすつぽ抜けの後の祭あとのような気がして、何あてという当もなくまた三四日さんよつかぶらぶらと暮した。その間に有樂座へ行ったり、落語を聞いたり、友達と話したり、往來を歩いたり、いろいろやったが、いずれも薬缶頭やかんあたまを攫つかむと同じ事で、世の中は少しも手に握れなかつた。彼は碁ごを打ちたいのに、碁を見せられるという感じがした。そうして同じ見せられるなら、もう少し面白い波瀾はらんきよくせつ曲折まげのある碁が見たいと思つた。

すると直須すぐ永と後姿の女との関係が想像された。もともと頭の中でむやみに色沢つやを着けて奥行おくゆきのあるように組み立てるほどの関係でもあるまいし、あつたところが他の事ひとを余計なおせつかいだと、自分で自分を嘲あざけりながら、ああ馬鹿らしいと思あとう後から、

やっぱり何かあるだろうという好奇心が今のようになちよいちよいと閃ひらめいて来るのである。そうしてこの道をもう少し辛抱強く先へ押して行ったら、自分が今まで経験した事のない浪漫的ロマンチックな或物にぶつかるかも知れないと考え出す。すると田口の玄関で怒おこつたなり、あの女の研究まで投げってしまった自分の短気を、自分の好奇心に釣り合わない弱味だと思い始める。

職業についても、あんな些細ささいな行違ゆきちがいのために愛想あいそづかしをとたとい一句でも口にして、自分と田口の敷居を高くするはずではなかったと思う。あれでできるともできないとも、まだ方かたのつかない未来を中途半端に仕切ってしまった。そうして好んで煮にえきらない思いに悩んでいる姿になってしまった。須永の母の保証する

ところでは、田口という老人は見かけに寄らない親切気のある人だそうだから、あるいは旅行から帰つて来た上で、また改めて会つてくれないとも限らない。が、こつちからもう一遍会見の都合を問い合せたりなどして、常識のない馬鹿だと軽蔑さげすまれてもつまらない。けれどもどの道突き抜けた心持をしっかりと捕つかまえるためには馬鹿と云われるまでも、そこまで突っかけて行く必要があるだろう。——敬太郎は屈託しながらもいろいろ考えた。

十五

けれども身の一大事を即座に決定するという非常な場合と違つ

て、敬太郎の思案には屈託の裏に、どこか呑気なものがふわふわしていた。この道をとどのつまりまで進んで見ようか、またはこれぎりやめにして、さらに新らしいものに移る支度をしようか。問題は煎じつめるまでもなく当初から至極簡単にでき上っていたのである。それに迷うのは、一度籤を引き損なつたが最後、もう浮ぶ瀬はないという非道い目に会うからではなくつて、どつちに転んでも大した影響が起らないため、どうでも好いという怠けた心持がいつしらず働らくからである。彼は眠い時に本を読む人が、眠気に抵抗する努力を厭いながら、文字の意味を判明頭に入れようと試みるごとく、呑気の懷で決断の卵を温めている癖に、ただ旨く孵化らない事ばかり苦にしていた。この不決断を逃れな

ればという口実の下に、彼は暗に自分の物数奇に媚びようとした。そうして自分の未来を売卜者の八卦に訴えて判断して見る気になった。彼は加持、祈祷、御封、虫封じ、降巫の類に、全然信仰を有つほど、非科学的に教育されてはいなかったが、それ相当の興味は、いずれに対しても昔から今日まで失わずに成長した男である。彼の父は方位九星に詳しい神経家であつた。彼が小学校へ行く時分の事であつたが、ある日曜日に、彼の父は尻を端折つて、鋤を担ついだまま庭へ飛び下りるから、何をするのかと思つて、後から跟いて行こうとすると、父は敬太郎に向つて、御前はそこにおいて、時計を見ている、そうして十二時が鳴り出したら、大きな声を出して合図をしてくれ、すると御父さんがあの

乾いぬいに当る梅の根つこを掘り始めるからと云いつけた。敬太郎は子供心にまた例の家相だと思つて、時計がちんと鳴り出すや否や命令通り、十二時ですようと大きな声で叫んだ。それで、その場は無事に済んだが、あれほど正確に鋏くわを下ろすつもりなら、肝心かんじんの時計が狂つていないようにあらかじめ直しておかなくてはならないはずだのにと敬太郎は父の迂闊うかつをおかしく思つた。学校の時計と自分の家うちのとはその時二十分近く違つていたからである。ところがその後摘草ごつみくさに行つた帰りに、馬に蹴けられて土堤どてから下へ転がり落ちた事がある。不思議に怪我けがも何もしなかつたのを、御お祖母ばあさんが大層喜んで、全く御地蔵様が御前の身代りに立つて下さつた御蔭おかげだこれ御覧ごらんと云つて、馬の繋つないであつた傍そばにある石地

蔵の前に連れて行くと、石の首がぼくりと欠けて、涎よだれ掛かけだけが残っていた。敬太郎の頭にはその時から怪しい色をした雲が少し流れ込んだ。その雲が身体からだの具合や四辺あたりの事情で、濃くなったり薄くなったりする変化はあるが、成長した今日こんにちに至るまで、いまだに抜け切らずにいた事だけはたしかである。

こういう訳わけで、彼は明治の世に伝わる面白い職業の一つとして、いつでも大道だいどう占うらないの弓張ゆみはり提灯ちようちんを眺ながめていた。もつとも金を払って筮竹ぜいちくの音を聞くほどの熱心はなかったが、散歩のついでに、寒い顔を提灯の光に映した女などが、悄然しよんぼりそこに立っているのを見かけると、この暗い影を未来に投げて、思案に沈んでいあわる憐あわれな人に、易者えきしやがどんな希望と不安と畏怖いふと自信とを与え

るだろうという好奇心に惹かされて、面白半分、そつと傍へ寄つて、陰の方から立聞たちぎきをする事がしばしばあった。彼の友の某なにがしが、自分の脳力に悲観して、試験を受けようか学校をやめようかと思わづらい煩わづらっている頃、ある人が旅行のついでに、善光寺如来ぜんこうじにょらいの御神おみ籤くじをいただいで第五十五の吉というのを郵便で送ってくれたら、その中に雲散くもさんじて月重ねて明らかなり、という句と、花発ひらいて再び重ちようえい栄ちようえいという句があつたので、物は試しだからまあ受けて見ようと言つて、受けたら綺麗きれいに及第した時、彼は興に乗つて、方々の神社で手当りしだい御神籤をいただき廻つた事さえある。しかもそれは別にこれという目的なしにいただいたのだから彼は平生でも、優うらないしやに売うらないしや卜者とくしやの顧客になる資格を充分具えていたに違な

い。その代り今度のような場合にも、どこか慰さみがてらに、まあやつて見ようという浮気がだいぶ交つていた。

十六

敬太郎けいたろうはどこうらの占しやない者しやに行つたものかと考えて見たが、あいにくどことあていう当あてもなかつた。白山はくさんの裏うらとか、芝公園しばこうえんの中なかとか、銀座何丁目ぎんざなんぢやうめいとか今までに名前なまえを聞いたのは二三軒あるが、むやみに流行はやるのは山師やましらしくつて行く気きにならず、と云つて、自分で嘘うそと知りつつ出鱈目でたらめを強しいてもつともらしく述やべる奴やつはなお不都合ふとくあひであるし、できるならば余り人ひとの込み合あわない家で、閑静かんせい

な髯ひげを生やした爺じいさんが奇警きけいな言葉で、簡潔にすばすばと道い破やぶつてくれるのがどこかにいれればいいがと思つた。そう思いながら、彼は自分の父がよく相談に出かけた、郷里くにの一本寺いっほんじの隠居の顔を頭の中に描えがき出した。それからふと気がついて、考えるんだかただ坐っているんだか分らない自分の様子が馬鹿馬鹿しくなつたので、とにかく出てそこいらを歩いてるうちに、運命が自分を誘い込むような占うらない者の看板しやにぶつかるだろうという漠然ぼくぜんたる頭に帽子のを載のせた。

彼は久しぶりに下谷くるまぎの車坂くるまぎへ出て、あれから東へ真直まつすぐに、寺の門だの、仏師屋ぶつしやだの、古臭ふるくさい生薬屋きぐすりやだの、徳川時代のがらくたを埃ほこりといっしよに並べた道具屋だのを左右に見ながら、わ

ざと門跡もんぜきの中を抜けて、奴やつ鰻こうなぎの角へ出た。

彼は小供の時分よく江戸時代の浅草を知っている彼の祖父じいさんから、しばしば観音かんのん様の繁華はんかを耳にした。仲見世なかみせだの、奥山おくやま

だの、並木なみきだの、駒形こまかただの、いろいろ云つて聞かされる中には、

今の人があまり口にしなない名前さえあつた。広小路に菜飯なめしと田でん

楽くを食わせるすみ屋すみやという洒落しやれた家があるとか、駒形の御堂の

前の綺麗きれいな縄なわ暖簾のれんを下くだげた鱒どじょう屋やは昔むかしから名代なだいなものだと

か、食物くいのものの話もだいぶ聞かされたが、すべての中で最も敬太郎うち

の頭しげきを刺戟しげきしたものは、長井兵助ながいひょうすけの居合拔いあいぬきと、脇差わきざしをぐ

いぐい呑のんで見せる豆蔵まめぞうと、江州伊吹山ごうしゅういぶきやまの麓ふもとにいる前足まへあしが

四つで後足あとあしが六つある大臺おおがまの干し固めたのであつた。それら

には蔵くらの二階の長持の中にある草双紙くさごとうしの画解えときが、子供の想像に都合の好いような説明をいくらでも与えてくれた。一本歯いっぴんはの下駄げたを穿はいたまま、小さい三三さんぼう宝たすきの上に曲しやがんだ男が、襷たすきがけで身体からだよりも高く反そり返かへつた刀を抜こうとするところや、大きな蝦蟆がまの上に胡坐あぐらをかいて、児雷也じらいやが魔法が何か使っているところや、顔より大きそうな天てん眼鏡がんきようを持った白い髯まげの爺おやさんが、唐とう机づくえの前に坐まつて、平へい突つばつつちちよんみおろ鬚まげを上から見下すところや、大抵の不思議なものはみんな絵本から抜け出して、想像の浅草に並んでいた。こういう訳で敬太郎の頭に映る観音の境内けいだいには、歴史的に妖よう嬌きよう陸りく離りたる色彩が、十八間の本堂を包んで、小供の時から常に陽炎かげろつていたのである。東京へ来てから、この怪し

い夢は固もとより手痛く打ち崩くずされてしまったが、それでも時々は今でも観音様の屋根に鶺鴒こうとりの鳥が巢を食っているだろうぐらいの考にふらふらとなる事がある。今日も浅草へ行つたらどうかなるだろうという料簡りようけんが暗あんに働あらいて、足あしが自おのずとこつちに向いたのである。しかしルナパークの後うしろから活動写真の前へ出た時は、こりや占うらない者しやなどのいる所ではないと今更いまさらのようにその雑沓ざつとうに驚おどろいた。せめて御寶頭おびんずるでも撫なでて行こうかと思つたが、どこにあるか忘れてしまったので、本堂あがへ上つて、魚河岸うおがしの大提おおぢよ灯うちんと頼政よりまさの鶴ぬえを退治たいじしている額かみなりもんだけ見えず雷門かみなりもんを出た。敬太郎の考えではこれから浅草橋へ出る間には、一軒や二軒の易者あはあるだろう。もし在あつたら何でも構あわなから入る事にしよ

う。あるいは高等工業の先を曲つて柳橋の方へ抜けて見ても好いなどと、まるで時分どきにかつこう恰好な飯屋めしやでも探す気で歩いていた。ところがいざ探すとあいにく生憎なもので、平生ふだんは散歩さえすればいたるところにしんえき神易の看板がぶら下つている癖に、あの広い表通りに門戸を張つているうらない卜者はまるで見当らなかつた。敬太郎はこの企くわだて図もまた例によつて例のごとく、突き抜けずに中途でおしまいになるのかも知れないと思つて少し失望しながら蔵くらま前えまで来た。するとやつとの事で尋ねる商売うちの家が一軒あつた。細長い堅木の厚板に、身の上判断と割わり書がきをした下に、文銭ぶんせん占うらないと白い字で彫つて、そのまた下に、漆うるしで塗つた真赤まっかな唐辛とうがら子しが描かいてある。この奇体な看板がまず敬太郎の眼を惹ひいた。

十七

よく見るとこれは一軒の生薬屋きぐすりやの店を仕切つて、その狭い方へこぎつぱりした差掛さしかけ様のものを作つたので、中に七色唐辛なないろとうが子の袋を並べてあるから、看板の通りそれを売る傍らかたわ、占ないを見る趣向に違ない。敬太郎けいたろうはこう観察して、そつと餡転餅あんころもち屋やに似た差掛の奥を覗のぞいて見ると、小作りな婆さんがたつた一人裁縫しごとをしていた。狭い室へや一つの住居すまいとしか思われぬのに、肝心んじんの易者の影も形も見えないから、主人は他行中たぎようちゆうで、細君が留守番をしているところかとも思つたが、店先の構造から推すと、奥は生薬屋の方と続いているかも知れないので、一概に留守

と見切みきりをつける訳にも行かなかつた。それで二三歩先へ出て、薬種店の方を覗のぞくと、八ツ目めうなぎ鰻の干したのも釣るしてなければ、大きな亀の甲も飾つてないし、人形の腹をがらん胴にして、五色の五臓を外から見えるように、腹の中の棚たなに載せた古風の裝飾もなかつた。一本寺いっほんじの隠居に似た髯ひげのある爺さんは固もとより坐つていながつた。彼は再び立ち戻つて、身の上判断文銭ぶんせん占うらないといふ看板のかかつた入口から暖簾のれんを潜くぐつて内へ入つた。裁縫しごとをしていた婆さんは、針の手をやめて、大きな眼鏡めがねの上から睨にらむように敬太郎を見たが、ただ一口、占うらないですかと聞いた。敬太郎は「ええちよつと見て貰もらいたいんだが、御留守おるすのようですね」と云つた。すると婆さんは、膝ひざの上のやわらか物を隅すみの方へ片づけな

がら、御上りなさいと答えた。敬太郎は云われる通り素直に上つて見ると、狭いけれども居心地の悪いほど汚れた室ではなかつた。現に畳などは取り替え立てでまだ新らしい香がした。婆さんは煮立った鉄瓶の湯を湯呑に注いで、香煎を敬太郎の前に出した。そうして昔は薬箱でも載せた棚らしい所に片づけてあつた小机を取りおろしにかかつた。その机には無地の羅紗がかけてあつたが、婆さんはそれをそのまま敬太郎の正面に据えて、そうして再び故の座に歸つた。

「占ないは私がするのです」

敬太郎は意外の感に打たれた。この小さい丸髻に結つた。黒縺子の襟のかかつた着物の上に、地味な縞の羽織を着た、一

心に縫物をしている、純然家庭的の女が、自分の未来に横たわる運命の予言者であろうとは全く想像のほかにあつたのである。その上彼はこの婦人の机の上に、ぜいちく 笠竹もさんぎ 算木もてんがんきよう 天眼鏡もないのを不思議に眺めた。なが 婆さんは机の上に乗っている細長い袋の中からちやらちやらと音をさせて、穴の開いたあ 銭をぜに 九つ出した。敬太郎は始めてこれが看板に「文銭占ない」とある文銭なるものだろうと推察したが、さてこの九枚の文銭が、暗い中で自分をあやつ 操っている運命の糸と、どんな関係を有つているか、固より想像し得るはずがないので、ただそこにいだ 鑄出された模様と、それがしまつてあつた袋とを見比べるだけで、何事も云わずにいた。袋は能のうし 装束ようぞく の切れ端か、懸物かけもの の表具の余りでこし 拵らえたらしく、金

の糸が所々に光っているけれども、だいぶ古いものと見えて、手^て擦^{すれ}と時代のため、派手な色を全く失つていた。

婆さんは年寄に似合わない白い織^き麗^{やし}な指で、九枚の文錢を三枚ずつ三列^{みけた}に並べたが、ひよつと顔を上げて、「身の上を御覽で
すか」と聞いた。

「さあ一生涯^{いつしやうがい}の事を一度に聞いておいても損はないが、それよりか今ここでどうしたらいいか、その方をきめてかかる方が僕には大切らしいから、まあそれを一つ願おう」

婆さんはそうですかと答えたが、それで御年はとまた敬太郎の年齢を尋ねた。それから生れた月と日を確認した。その後^{あと}で胸算^{むなざん}用^{よう}でもする案排^{あんばい}しきで、指を折つて見たり、ただ考^{かん}がえたり

していたが、やがてまた綺麗な指で例の文銭を新らしく並べ更えた。敬太郎は表に波が出たり、あるいは文字が現われたりして、三枚が三列に続く順序と排列を、深い意味でもあるような眼つきをして見守っていた。

十八

婆さんはしばらく手を膝の上に載せて、何事も云わずに古い銭おもとての面をじつと注意していたが、やがて考えの中心点が明快纏はつきりまとまったという様子をして、「あなたは今迷っていらつしやる」と云い切ったなり敬太郎けいたろうの顔を見た。敬太郎はわざと何も答えな

った。

「進もうかよそうかと思つて迷つていらつしやるが、これは御損ですよ。先へ御出おでになつた方が、たとい一時は思わしくないようでも、未始終御為すえしじゆうおためですから」

婆さんは一區限ひとくぎりつけると、また口を閉じて敬太郎の様子を窺うかがつた。敬太郎は始めからだだ先方のいう事をふんふん聞くだけに、こちらでは喋舌しゃべらないつもりにも、腹の中できめてかかったのであるが、婆さんのこの一言いちげんに、ぼんやりした自分の頭が、相手の声に映つてちらりと姿を現わしたような気がしたので、ついその刺戟しげきに應じて見たくなつた。

「進んでも失敗しくじするような事はないでしょうか」

「ええ。だからなるべくおとなしくして。短気を起さないようにね」

これは予言ではない、常識があらゆる人に教える忠告に過ぎないと思つたけれども婆さんの態度に、これという故意わざとらしい点も見えないので、彼はなお質問を続けた。

「進むつてどつちへ進んだものでしょう」

「それはあなたの方がよく分つていらつしやるはずですがね。私はただ最少せうしうし先まで御出おでなさい、そのほうが御為だからと申し上げるまでです」

こうなると敬太郎も行きがかり上そうですかと云つて引込ひっこむ訳に行かなくなつた。

「だけれども道が二つ有るんだから、その内でどつちを進んだらよかろうと聞くんです」

婆さんはまた黙つて文銭ぶんせんの上を眺ながめていたが、前よりは重苦しい口調で、「まあ同おんなじですネ」と答えた。そうして先刻裁縫さつきしごとをしていた時に散らばした糸屑いとくずを拾つて、その中から紺こんと赤の絹糸のかなり長いのを扱より出して、敬太郎の見ている前で、それを綺麗きれいに繕より始めた。敬太郎はただ手持無沙汰てもちぶさたの徒事いたずらとばかり思つて、別段意とどにも留めなかつたが、婆さんは丹念とどにそれを五六寸の長さに繕より上げて、文銭ぶんせんの上に載のせた。

「これを御覧なさい。こう繕り合あわせると、一本の糸が二筋の糸で、二筋の糸が一本の糸になるじゃありませんか。そら派手はでな赤

と地味な紺こんが。若い時にはとかく派手の方へ派手の方へと駆け出してやり損そこない勝がちのものです。あなたのは今のところこの縫よりい糸とみたように丁ちようど度好い具合に、いっしょに絡からまり合っているようですから御仕合せです」

絹糸たとえの喩は何とも知らず面白かったが、御仕合せですと云われて見ると、嬉うれしいよりもかえっておかしい心持の方が敬太郎を動かした。

「じゃこの紺糸じみちで地道じみちを踏んで行けば、その間にちらちら派手な赤い色が出て来ると云うんですね」と敬太郎は向うの言葉を呑の込んだような尋ね方をした。

「そうですそうなるはずですよ」と婆さんは答えた。始めから敬太

郎は占ないの一言で、是非共右か左へ片づけなければならぬとまで切に思いつめていた訳でもなかったけれども、これだけで帰るのも少し物足りなかつた。婆さんの云う事が、まるで自分の胸とかけ隔たつた別世界の消息なら、固より論はないが、意味の取り方ではだいぶ自分の今の身の上に、応用の利く点もあるので、敬太郎はそこに微かな未練を残した。

「もう何にも伺がう事はありませんか」

「そうですね。近い内にちよつとした事ができるかも知れませんが
「災難ですか」

「災難でもないでしょうが、気をつけないとやり損ないます。そうしてやり損なえばそれつきり取り返しがつかない事です」

十九

敬太郎けいたろうの好奇心は少し鋭敏になった。

「全体たいどんな性質たちの事ですか」

「それは起つて見なければ分りません。けれども盗難どなんだの水難すいなんだののではないようです」

「じゃどうして失敗しくじらない工夫くわふをして好いか、それも分らないでしようね」

「分らない事ありませんが、もし御望ごぼうみなら、もう一遍うっぺん占うらないを立て直して見て上げてても宜ようござんす」

敬太郎は、では御頼み申しますと云わない訳に行かなかつた。

婆さんはまたきやしや繊細な指先を小器用に動かして、例の文錢を並べ更かえた。敬太郎から云えば先せんの並べ方も今度の並べ方も大抵似たものであるが、婆さんにはそこに何か重大の差別があるものと見えて、その一枚を引つくり返すにも軽率に手は下さなかつた。ようやく九枚をそれぞれ念入に片づけた後あとで、婆さんは敬太郎に向つて「大体分りました」と云つた。

「どうすれば好いんですか」

「どうすればつて、占ないには陰陽いんようの理で大きな形が現われるだけだから、実地は各めいめい自がその場に臨んだ時、その大きな形に合あわして考えるほかありませんが、まあこうです。あなたは自分

のようなまた他人ひとのような、長いようなまた短かいような、出るようなまた這入はいるようなものを待つていらつしやるから、今度事件が起つたら、第一にそれを忘れないようになさい。そうすればうま旨うまく行きます」

敬太郎は煙けむに巻かれざるを得なかつた。いくら大きな形が陰陽の理で現われたにしたところで、これじゃ方角さえ立たない霧きりのようなものだから、たとい嘘うそでも本当でも、もう少し切りつめた応用の利くところを是非云わせようと思つて、二三押問答をして見たが、いつこう埒らちが明かなかつた。敬太郎はどうとうこの禅坊主の寢言ねごとに似たものを、手てぬぐい拭ぬぐに包くるんだ懐炉かいろのごとく懐中させられて表へ出た。おまけに出がけになないろとうがらし七色唐辛子を二袋買つて袂たもとへ

入れた。

翌日彼は朝飯あさはんの膳ぜんに向つて、煙の出る味噌汁みそしるわん椀わんの蓋ふたを取つたとき、たちまち昨日きのうの唐辛子を思い出して、袂たもとから例の袋を取り出した。それを十二分に汁しるの上に振りかけて、ひりひりするのを我慢しながら食事を済ましたが、婆さんの云わゆる「陰陽の理によつて現われた大きな形」と頭の中に呼び起して見ると、まだ漠ば然くぜんと瓦斯ガスのごとく残つていた。しかし手のつけようのない謎なぞに氣を揉もむほど熱心な占うらない信者でもないのです、彼はどうかそれを解釈して見たいと焦心あせする苦悶くもんを知らなかつた。ただその分らないところおもむきに妙な趣があるので、忘れないうちに、婆さんの云つた通りを紙片かみぎれに書いて机の抽出ひきだしへ入れた。

もう一遍田口に会う手段を講じて見る事の可否は、昨日^{きのう}すでに婆さんの助^{じよん}言^いで断定されたものと敬太郎は解釈した。けれども彼は占ないを信じて動くのではない、動こうとする矢先へ婆さんが動く縁をつけてくれたに過ぎないのだと思つた。彼は須永^{すなが}へ行つて彼の叔父がすでに大阪から帰つたかどうか尋ねて見ようかと考えたが、自動車事件の記憶がまだ新たに彼の胸を圧迫しているので、足を運ぶ勇気がちよつと出なかつた。電話もこの際利用しにくかつた。彼はやむを得ず、手紙で用を弁ずる事にした。彼はせんだつて須永の母に話したとほぼ同様の顛^{てんまつ}末^{まつ}を簡略に書いた後で、田口がもう旅行から帰つたかどうかを聞き合せて、もし帰つたなら御多忙中はなはだ恐れ入るけれども、都合して会つて

くれる訳には行くまいか、こつちはどうせ閑な身体ひまからだだから、いつでも指定されて時日に出られるつもりだがと、この間の権幕けんまくは、綺麗きれいに忘れたような口ぶりを見せた。敬太郎はこの手紙を出すと同時に、須永の返事を明日にも予想した。ところが二日立つても三日立つても何の挨拶あいさつもないので、少し不安の念に悩まされ出した。なまじい売卜者うらないしやの言葉などに動かされて、恥を搔かいてはつまらないという後悔も交まじった。すると四日目の午前になつて、突然田口から電話口へ呼び出された。

二十

電話口へ出て見ると案外にも主人の声で、今直来る事ができるかという簡単な問い合わせであった。敬太郎はすぐ出ますと答えたが、それだけで電話を切るのは何となくぶつきらぼう過ぎて愛嬌あいきようが足りない気がするので、少し色を着けるために、須永君から何か御話でもございましたかと聞いて見た。すると相手は、ええ市蔵から御希望を通知して来たのですが、手数てかずだから直接に私の方で御都合を伺いました。じゃ御待ち申しますから、直とうぞ。と云つてそれなり引込んでしまった。敬太郎はまた例の袴はかまを穿はきながら、今度こそ様子が好きそうだと思つた。それからこの間買ったばかりの中折なかおれを帽子掛から取ると、未来に富んだ顔に生気を漲みなぎらして快豁かいかつに表へ出た。外には白い霜しもを一度に摧くだ

いた日が、木枯しにも吹き捲まくられずに、穏おだやかな往来をおつとりと一面に照らしていた。敬太郎はその中を突切つつきる電車の上で、光を割さいて進むような感じがした。

田口の玄関はこの間と違つて蕭条ひっそりしていた。取次とりつきに袴を着けた例の書生が現われた時は、少しきまりが悪かつたが、まさかそんなつては失礼しましたとも云えないので、素知らぬ顔をして叮嚀ていねいに來意を告げた。書生は敬太郎を覚えていたのか、いないのか、ただはあと云つたなり名刺を受取つて奥へ這入はいつたが、やがて出て来て、どうぞこちらへと応接間へ案内した。敬太郎は取次の揃そろえてくれた上靴スリッパを穿はいて、御客らしく通るには通つたが、四五脚ある椅子のどれへ腰をかけていいかちよつと迷つた。

一番小さいのにさえきめておけば間違はあるまいという謙遜から、彼は腰の高い肱懸も裝飾もつかない最も軽そうなのを択つて、わざと位置の悪い所へ席を占めた。

やがて主人が出て来た。敬太郎は使い慣れない切口上を使って、初対面の挨拶やら会見の礼やらを述べると、主人は軽くそれを聞き流すだけで、ただはあはあと挨拶した。そうしていくら区切が来ても、いっこう何とも云つてくれなかつた。彼は主人の態度に失望するほどでもなかつたが、自分の言葉がそう思う通り長く続かないのに弱つた。一応頭の中にある挨拶を出し切つてしまふと、後はそれぎり、手持無沙汰と知りながら黙らなければならなかつた。主人は巻蓑入から敷島を一本取つて、あとを

心持敬太郎のいる方へ押しやった。

「市蔵からあなたの御話しは少し聞いた事もありますが、いったいどういう方を御希望なんですか」

実を云うと、敬太郎には何という特別の希望はなかった。ただ相当の位置さえ得られればとばかり考えていたのだから、こう聞かれるとぼんやりした答よりほかにできなかつた。

「すべての方面に希望を有つています」

田口は笑い出した。そうして機嫌きげんの好い顔つきをして、学士の数のこんなかずに殖ふえて来た今日こんにち、いくら世話をする人があろうとも、そう最初から好い地位が得られる訳のものでないという事情を懇ねんごろに説いて聞かせた。しかしそれは田口から改めて教わる

までもなく、敬太郎のとうから痛切に承知しているところであつた。

「何でもやります」

「何でもやりますつたつて、まさか鉄道の切符切もできないでしょう」

「いえできます。遊んでるよりはましですから。将来の見込のあるものなら本当に何でもやります。第一遊んでいる苦痛を逃れる^{のが}だけでも結構です」

「そう云う御考ならまた私の方でもよく気をつけておきましょう。直^{すぐ}という訳にも行きますまいが」

「どうぞ。——まあ試しに使って見て下さい。あなたの御家^{おうち}の——

—と云つちや余り変ですが、あなたの私わたくしごと事にでもいいから、ちよつと使つて見て下さい」

「そんな事でもして見る気がありますか」

「あります」

「それじゃ、ことに依ると何か願つて見るかも知れません。いつでも構いませんか」

「ええなるべく早い方が結構です」

敬太郎はこれで会見を切り上げて、朗らかな顔をして表へ出た。

穏おだやかな冬の日がまた二三日続いた。敬けいたろう太郎は三階へやの室から、窓に入る空と樹と屋根瓦やねがわらを眺ながめて、自然だいたいを橙だい色いろに暖ためるおとなしいこの日光が、あたかも自分のために世の中を照らしているような愉快を覚えた。彼はこの間の会見で、自分に都合の好い結果が、近い内にわが頭の上に落ちて来るものと固く信ずるようになった。そうしてその結果がどんな異様の形よそおを装よそって、彼の前に現われるかを、彼は最も楽しんで待ち暮らした。彼が田口に依頼した仕事のうちには、普通の依頼者もつの申し出いで以上のものまで含んでいた。彼は一定の職業から生ずる義務を希望したばかりでなく、刺戟しげきに充みちた一時性の用事をも田口から期待した。彼の性質として、もし成效の影が彼を掠かすめて閃ひらめくならば、おそらく尋

常の雑務とは切り離された特別の精彩を帯びたものが、卒然彼の前に投げ出されるのだらうぐらいに考えた。そんな望を抱いて、彼は毎日美しく日光に浴していたのである。

すると四日ばかりして、また田口から電話がかかった。少し頼みたい事ができたが、わざわざ呼び寄せるのも気の毒だし、電話では手間が要いつてかえつて面倒になるし、仕方がないから、速達便で手紙を出す事にしたから、委細いさいはそれを見て承知してくれ。もし分らない事があつたら、また電話で聞き合わせてもいいという通知であつた。敬太郎はぼんやり見えていた遠眼鏡とおめがねの度がびたりと合つた時のように愉快な心持がした。

彼は机の前を一寸いっすんも離れずに、速達便の届くのを待っていた。

そうしてその間絶えず例の想像を逞たくましくしながら、田口のいわゆる用事なるものを胸の中で組み立てて見た。そこにはいつか須永すながの門前で見た後姿の女が、ややともすると断わりなしに入り込んで来た。ふと気がついて、もつと実際的なものであるべきはずだと思ふと、その時だけは自分で自分の空想を叱るようには、彼はもどかしい時を過ぎた。

やがて待ち焦こがれた状袋が彼の手に落ちた。彼はすつと音をさせて、封を裂いた。息も継つがずに巻紙の端はしから端までを一気に読み通して、思はずあつという微かすかな声を揚げた。与えられた彼の用事は待ち設けた空想よりもなお浪漫ロマンチック的であつたからである。手紙の文句は固もとより簡単に用事以外の言葉はいっさい書いてなかつ

た。今日四時と五時の間に、三田方面から電車に乗って、小川町の停留所を下りる四十恰好の男がある。それは黒の中折に霜降の外套を着て、顔の面長い背の高い、瘡せぎすの紳士で、眉と眉の間に大きな黒子があるからその特徴を目標に、彼が電車を降りてから二時間以内の行動を探偵して報知しろというだけであつた。敬太郎は始めて自分が危険なる探偵小説中に主要の役割を演ずる一個の主人公のような心持がし出した。同時に田口が自己の社会的利害を護るために、こんな暗がりの所作をあえてして、他日の用に、他の弱点を握っておくのではなからうかと云う疑を起した。そう思った時、彼は人の狗に使われる不名誉と不徳義を感じて、一種苦悶の膏汗を腋の下に流した。彼は手紙を

手にしたまま、じつと眸ひとみを据すえたなり固かたくなつた。しかし須永の母から聞いた田口の性格と、自分が直じかに彼に会つた時の印象とを纏まとめて考えて見ると、けつしてそんな人の悪そうな男とも思われないので、たとい他人の内ない行こうに探さぐりを入れるにしたらところで、必ずしもそれほど下品な料りよう簡けんから出るとは限らないという推断もついて見ると、いったん硬こう直ちよくになつた筋肉の底に、また温あたたかい血かが通かよい始めて、徳義に逆さからう吐む気かつなしに、ただ興味という一点からこの問題を面白おもしろく眺ながめる余裕よゆうもできてきた。それで世の中に接触する経験の第一着手として、ともかくも田口から依頼された通りにこの仕事をやり終おせて見ようという氣になつた。彼はもう一度とくと田口の手紙を読み直した。そうしてそこに書

いてある特徴と条件だけで、はたして満足な結果が実際に得られるだろうかどうかを確かめた。

二十二

田口から知らせて来た特徴のうちで、本当にその人の身を離れないものは、眉まゆと眉の間の黒子ほくろだけであるが、この日の短かい昨今の、四時とか五時とかいう薄暗い光線もとの下で、乗降のりおりに忙がしい多数の客の中うちから、指定された局部の一点を目標めじるしに、これだと思ふ男を過あやまちなく見つけ出そうとするのは容易の事ではない。ことに四時と五時の間と云えば、ちようど役所の退ひける刻限なの

で、丸の内からただ一筋の電車を利用して、神田橋を出る役人の数^{かず}だけでも大したものである。それにほかと違って停留所が小川町だから、年の暮に間もない左右の見世^{みせ}先に、幕だの楽隊だの、蓄音機だのを飾るやら具^{そな}えるやらして、電灯以外の景気を点^つけて、不時の客を呼び寄せる混雑も勘^{かん}定^{じよう}に入れなければなるまい。それを想像して事の成否を考えて見ると、とうてい一人の手際^{てぎわ}ではという覚^{おぼ}束^{つか}ない心持が起つて来る。けれどもまた尋ね出そうとするその人が、霜^{しも}降^{ふり}の外套^{がいとう}に黒の中折^{なかおれ}という服装^{いでたち}で電車を降りるときまっつて見れば、そこにまだ一縷^{いちる}の望があるようにも思われる。無論霜降の外套だけでは、どんな恰^{かつ}好^{こう}にしろ手がかりになり様^{よう}はずがないが、黒の中折を被^{かぶ}つているなら、色変りよ

りほかに用いる人のない今こんにち日だから、すぐ眼につくだらう。それを目宛めあてに注意したらあるいは成功しないとも限るまい。

こう考えた敬太郎は、ともかくも停留所まで行って見る事だという気になった。時計を眺ながめると、まだ一時を打ったばかりである。四時より三十分前に向むこうへ着くとしたところで、三時頃から宅うちを出ればたくさんなのだから、まだ二時間の猶ゆうよ予がある。彼はこの二時間を最も有益に利用するつもりで、じつとしたまま坐っていた。けれどもただ眼の前に、美土代町みとしろちようと小川町が、丁字ていじになって交叉ざっとうしている三つ角の雑沓ざつたうが入り乱れて映るだけで、これと云つて成功いざなを誘いざなうに足る上じようふんべつ分別は浮ばなかつた。彼の頭は考えれば考えるほど、同じ場所に吸いついたなりまるで動くこと

を知らなかつた。そこへ、どうしても目指す人には会えまいとい
う掛念けねんが、不安を伴つて胸の中をざわつかせた。敬太郎はいつそ
の事時間が来るまで外を歩きつづけに歩いて見ようかと思つた。
そう決心をして、両手を机の縁ふちに掛けて、勢よく立ち上がろうと
する途端とたんに、この間浅草うらで占ないの婆さんから聞いた、「近い内
に何か事があるから、その時にはこうこういうものを忘れないよ
うにしろ」という注意を思い出した。彼は婆さんのその時の言葉
を、解すべからざる謎なぞとして、ほとんど頭の外へ落してしまつた
にもかかわらず、参考のためわざわざ書きつけにして机の抽出ひきだし
に入れておいた。でまたその紙片かみぎれを取り出して、自分のよう
で他人ひとのような、長いようで短かいような、出るようで這入はいるよう

なという句を飽かず眺めた。初めのうちは今まで通りとうてい意味のあるはずがないとしか見えなかつたが、だんだん繰り返して読むうちに、辛抱強く考えさえすれば、こういう妙な特性を有つたものがあるいは出て来るかも知れないという氣になった。その上敬太郎は婆さんに、自分が持っているんだから、いざという場合に忘れないようになさいと注意されたのを覚えていたので、何でも好い、ただ身の周囲の物から、自分のようで他人のような、長いようで短かいような、出るようで這入るようなものを探しあてさえすれば、比較的狭い範囲内で、この問題を解決する事ができる訳になつて、存外早く片がつくかも知れないと思ひ出した。そこでわが自由になるこれから先の二時間を、全くこの謎を解く

ための二時間として大切に利用しようかと決心した。

ところがまず眼の前の机、書物、手拭てぬぐい、座蒲団ざぶとんから順々に進行して行李鞆靴こうかばんづつした下までいったが、いっこうそれらしい物に出合わないうちに、とうとう一時間経ってしまった。彼の頭は焦燥いらだたと共に乱れて来た。彼の観念は彼の室へやの中を駆け廻かめぐるって落ちつけないので、制するのも聞かずに、戸外へ出て縦横に走った。やがて彼の前に、霜降しもふりの外套がいとうを着た黒の中折を被かぶった背の高い瘡やせぎすの紳士が、彼のこれから探そうというその人の權威そなを具えて、ありありと現われた。するとその顔がたちまち大連にいる森本の顔になった。彼はだらしのない髯ひげを生はやした森本の容貌ようぼうを想像の眼で眺ながめた時、突然電流に感じた人のようにあつと云った。

二十三

森本の二字はとうから敬けいたろう太郎の耳に変な響を伝える媒なかだち介となつていたが、この頃ではそれが一層高じて全然一種の符ふちよう徴に變化してしまつた。元からこの男の名前さえ出ると、必ず例の洋ス杖テツキを聯れんそう想したものだが、洋杖が二人を繋つなぐ縁はさに立っていると解釈しても、あるいは二人の中を割さく邪魔はさに挟はさまつていると見み做なしても、とにかく森本とこの竹の棒の間にはある距へだたり離りがあつて、そう一足飛いっそくとびに片方から片方へ移る訳に行かなかつたのに、今ではそれが一つになつて、森本と云えば洋杖、洋杖と云えば森本と

いうくらい劇しく敬太郎の頭を刺戟するのである。その刺戟を受けた彼の頭に、自分の所有のようなまた森本の所有のような、持主のどっちとも片づかないという觀念が、熱った血に流されながら偶然浮び上った時、彼はああこれだと叫んで、乱れ逃げる黒い影の内から、その洋杖だけをうんと捕まえたのである。

「自分のような他人のような」と云った婆さんの謎はこれで解けたものと信じて、敬太郎は一人嬉しがった。けれどもまだ「長いような短かいような、出るような這入るような」というところまでは考えて見ないので、彼はあまる二カ条の特性をも等しくこの洋杖の中から探し出そうという料簡で、さらに新たな努力を鼓舞してかかった。

始めは見方一つで長くもなり短かくもなるくらいの意味かも知れないと思つて、先へ進んで見たが、それでは余り平凡過ぎて、解釈がついたもつかないも同じ事のような心持がした。そこでまた後戻りをして、「長いような短かいような」という言葉を幾度か口の内できり返しながら思索した。が、容易に解決のできる見込は立たなかつた。時計を見ると、自由に使つていい二時間のうちで、もう三十分しか残つていない。彼は抜裏と間違えて袋の口へ這入り込んだ結果、好んで行き悩みの状態に悶えてゐるのでは無かろうかと、自分で自分の判断を危ぶみ出した。出端のない行きどまりに立つくらいなら、もう一遍引き返して、新しい途を探す方がましだとも考えた。しかしこう時間が逼つてゐる

のに、初手しよてから出直しては、とても間に合うはずがない、すでにここまで来られたという一部分の成功を縁喜えんぎにして、是非先へ突き抜ける方が順当だとも考えた。これがよかろうあれがよかろうと右左に思い乱れている中に、彼の想像はふと全体としての杖つえを離れて、握りに刻まれた蛇へびの頭に移った。その瞬間に、鱗うろこのぎらぎらした細長い胴と、匙さじの先に似た短かい頭とを我知らず比較して、胴のない鎌かまくび首だから、長くなければならないはずなのに短かく切られている、そこがすなわち長いような短かいような物であると悟った。彼はこの答案を稲妻いなずまのごとく頭の奥ひらに閃めかして、得意の余り踴躍こおどりした。あとに残った「出るような這入はいるような」ものは、大した苦労もなく約五分の間に解けた。彼は鶏卵たまご

とも蛙かえるとも何とも名状しがたい或物が、半なかば蛇の口に隠れ、半ば蛇の口から現われて、呑のみ尽されもせず、逃のがれ切りもせず、出るとも這入るとも片のつかない状態を思い浮かべて、すぐこれだと判断したのである。

これで万事が綺きれい麗に解決されたものと考えた敬太郎は、躍おどり上るように机の前を離れて、時計の鎖を帯からに絡からんだ。帽子は手に持ったまま、袴はかまも穿はかずはに室へやを出ようとしたが、あの洋スエツキ杖をどうして持つて出たものだろうかという問題がちよつと彼を躊ちゆう躇ちよ躇ちよさした。あれに手を触れるのは無論、たとい傘かさ入いれから引き出したところで、森本が置き去りにして行つてからすでに久こしい今こん日ちとなつて見れば、主人に断とがわらないにしろ、咎とがめられたり怪

しまれたりする氣遣きづかいはないにきまつているが、さて彼らが傍そばに
いない時、またおるにしても見ないうちに、それを提さげて出よう
とするには相当の思慮か準備が必要になる。迷信のはびこる家庭
に成長した敬太郎は、呪まじない禁まじないに使う品物を（これからその目的に
使うんだという料りようけん簡けんがあつて）手に入れる時には、きつと人
の見ていない機会を偷ぬすんでやらなければ利きかないという言い伝え
を、郷里くににいた頃、よく母から聞かされていたのである。敬太郎
は宿の上り口の正面にかけてある時計を見るふりをして、二階の
梯子段はしごだんの中途まで降りて下の様子を窺うかがった。

二十四

主人は六畳の居間に、例の通り大きな瀬戸物の丸火鉢を抱え込んでいた。細君の姿はどこにも見えなかった。敬太郎が梯子段の途中で、及び腰をして、硝子越に障子の中を覗いていると、主人の頭の上で忽然呼鈴が烈しく鳴り出した。主人は仰向いて番号を見ながら、おい誰かいないかねと次の間へ声をかけた。敬太郎はまたそろそろ三階の自分の室へ帰つて来た。

彼はわざわざ戸棚を開けて、行李の上に投げ出してあるセルの袴を取り出した。彼はそれを穿くとき、腰板を後に引き摺つて、室の中を歩き廻つた。それから足袋を脱いで、靴下に更えた。これだけ身装を改めた上、彼はまた三階を下りた。居間を覗くと細

君の姿は依然として見えなかった。下女もそこらにはいなかった。呼鈴ベルも今度は鳴らなかつた。家中ひっそり閑かんとしていた。ただ主人だけは前の通り大きな丸火鉢もたに靠れて、上り口の方を向いたなりじつと坐つていた。敬太郎は段々を下まで降り切らない先に、高い所から斜はすに主人の丸くなつた背中を見て、これはまだ都合が悪いと考えたが、ついに思い切つて上り口へ出た。主人は案あんじょうの上、「御出かけで」と挨拶あいさつした。そうして例いつもの通り下女を呼んで下駄箱たばこにしまつてある履物はきものを出させようとした。敬太郎は主人一人の眼を掠かすめるのにさえ苦心していたところだから、この上下女に出られては敵かなわないと思つて、いや宜よろしいと云いながら、自分で下駄箱の垂たれを上げて、早速靴を取りおろした。旨うまい具合に下

女は彼が土間へ降り立つまで出て来なかった。けれども、亭主は依然としてこつちを向いていた。

「ちよつと御願ですがね。室の机の上に今月の法学協会雑誌があるはずだが、ちよつと取つて来てくれませんか。靴を穿はいてしまつたんで、また上あがるのが面倒だから」

敬太郎はこの主人に多少法律の心得があるのを知つて、わざとこう頼んだのである。主人は自分よりほかのものでは到底とても弁じない用事なので、「はあようがす」と云つて気きさくに立つて梯子はしご段んを上のぼつて行つた。敬太郎はそのひまに例の洋杖ステツキを傘かさ入いれかから抽ぬき取つたなり、抱だき込むように羽織の下へ入れて、主人の座かどに帰らないうちにそつと表へ出た。彼は洋杖の頭の曲つた角かどを、

右の腋わきの下に感じつつ急ぎ足に本郷の通まで来た。そこでいったん羽織の下から杖つえを出して蛇へびの首をじつと眺ながめた。そうして袂たもとのハンケチ手帛で上から下まで綺麗きれいに埃ほこりを拭いた。それから後は普通の杖のように右の手に持って、力任せに振り振り歩いた。電車の上では、蛇の頭へ両手を重ねて、その上に顛あじを載せた。そうしてやつと今一段落ついた自分の努力を顧かえりみて、ほつと一息吐ついた。同時にこれから先指定された停留所へ行ってからの成否がまた気にかかり出した。考えて見ると、これほど骨を折ぬすつて、偷ぬすむように持ち出した洋杖が、どうすれば眉まゆと眉の間の黒子ほくろを見分ける必要品になるのか、全く彼の思量のほかにあった。彼はただ婆さんに云われた通り、自分のような他人ひとのような、長いような短かいよう

な、出るような這入るようなものを、一生懸命に探し当てて、それを忘れないで携たずさえているというまでであつた。この怪しげに見えて平凡な、しかもむやみに軽い竹の棒が、寝かそうと起こそうと、手に持とうと袖そでに隠そうと、未知の人を探す上に、はたして何の役に立つか知らんと疑ぐつた時、彼はちよつとの間ま、瘡ぎやくを振り落した人のようにけろりとして、車内を見廻わした。そうして頭の毛穴から湯気の立つほど業ごうを煮やした先刻さつきの努力を気恥かしくも感じた。彼は自分で自分の所作しよさを紛まぎらす為ために、わざと洋杖を取り直して、電車の床ゆかをとんとんと軽く叩たたいた。

やがて目的の場所へ来た時、彼はとりあえず青年会館の手前から引き返して、小川町の通へ出たが、四時にはまだ十五分ほど間ま

があるので、彼は人通りと電車の響きを横切つて向う側へ渡つた。そこには交番があつた。彼は派出所の前に立つている巡查と同じ態度で、赤いポストの傍そばから、真直まっすぐに南へ走る大通りと、緩いゆるい弧線を描いて左右に廻り込む広い往来とを眺ながめた。これから自分の活躍すべき舞台面を一応こういう風に検分した後で、彼はすぐ停留所の所在を確かめにかかつた。

二十五

赤い郵便函ポストから五六間東へ下くだると、白いペンキで小川町停留所と書いた鉄の柱がすぐ彼の眼に入いつた。ここにさえ待つていれば、

たとい混雑に取り紛れてまぎ注意人物を見失うまでも、刻限に自分の部署に着いたという強味はあると考えた彼は、これだけの安心を胸に握った上、また目標めじるしの鉄の柱を離れて、四辺あたりの光景を見廻した。彼のすぐ後には蔵造くらづくりの瀬戸物屋があつた。小さい盃さかずきのたくさん並んだのを箱入にして額のように仕立てたのがその軒下にかかつていた。大きな鉄製かねせいの鳥籠とりかごに、陶器でできた餌壺えつぼをいくつとなく外から括りくくつけたのも、そこにぶら下がっていた。その隣りは皮屋であつた。眼も爪も全く生きた時のままに残した大きな虎の皮に、緋羅紗ひらしゃの縁へりを取ったのがこの店の重な裝飾おもであつた。敬太郎けいたろうは琥珀こはくに似たその虎の眼を深く見つめて立つた。細長くつて真白な皮でできた襟卷えりまきらしいものの先に、豆狸まめだぬき

のような顔が付着しているのも滑稽こっけいに見えた。彼は時計を出して時間を計りながら、また次の店に移った。そうして瑪瑙めのうで刻ほつた透明な兎うさぎだの、紫水晶むらさきずいしゅうでできた角形かくがたの印材だの、翡翠ひすいの根懸ねがけだの孔雀石くじゃくせきの緒締おじめだの、金の指輪やリンクスと共に、美しく並んでいる宝石商の硝子窓ガラスまどを覗いた。

敬太郎はこうして店から店を順々に見ながら、つい天下堂の前を通り越して唐木細工からきぎの店先まで来た。その時後うしろから来た電車が、突然自分の歩いている往来の向う側でとまったので、もしやという心から、筋違すじかいに通を横切つて細い横町の角にある唐物屋とうぶつやの傍そばへ近寄ると、そこにも一本の鉄の柱に、先刻さつきのと同じような、小川町停留所という文字が白く書いてあった。彼は念のためこの

角かどに立つて、二三台の電車を待ち合わせた。すると最初には青山
というのが来た。次には九段新宿というのが来た。が、いずれも
万世橋まんせいばしの方から真直まっすぐに進んで来るので彼はようやく安心した。
これでよもやの懸念けねんもなくなったから、そろそろ元の位地に帰ろ
うというつもりで、彼は足の向むきを更かえにかかった途端とたんに、南から
来た一台がぐるりと美土代町みとしろちようの角を回転して、また敬太郎の立
つている傍でとまった。彼はその電車の運転手の頭の上に黒く掲
げられた巢鴨すがもの二字を読んだ時、始めて自分の不注意に気がつい
た。三田方面から丸の内を抜けて小川町で降りるには、神田橋の
大通りを真直まっすぐに突き当って、左へ曲つても今敬太郎の立ってい
る停留所で降りられるし、また右へ曲つても先刻さっき彼の検分してお

いた瀬戸物屋の前で降りられるのである。そうして両方とも同じ小川町停留所と白いペンキで書いてある以上は、自分がこれから後あとを跟つけようという黒い中折の男は、どっちへ降りるのだから、彼にはまるで見けんとう当とうがつかない事になるのである。眼を走らせて、二本の赤い鉄柱の距離みちのりを目分量で測つて見ると、一町には足りないくらいだが、いくら眼と鼻の間だからと云つて、一方だけを専門にしてさえ覚おぼつか束つかない彼の監視力に対して、両方共手落なく見張おほり終てぎわせる手際を要求するのは、どれほど自分の敏腕を高く見積りたい今の敬太郎にも絶対の不可能であった。彼は自分の住居すまっている地理上の関係から、常に本郷三田間を連絡する電車にばかり乗つていたため、巣鴨方面から水道橋を通つて同じく三田に続

く線路の存在に、今が今まで気がつかずにいた自己の迂闊うかつを深く後悔した。

彼は困却の余りふと思いついた窮策きゆうさくとして、須永すながの助力でも借りに行こうかと考えた。しかし時計はもう四時七分前に逼せまっていた。ついこの裏通に住んでいる須永だけでも、門前まで駆けつける時間と、かい摘つまんで用事を呑み込のみます時間を勘定に入ればとても間に合いそうにない。よしそのくらいの間まは取れるとしたところで、須永に一方の見張りを頼む以上は、もし例の紳士が彼のいる方へ降りるならば、何かの手段で敬太郎に合図をしなければならない。それもこの人込の中だから、手を挙げたり手ハンケ帛チを振るぐらいではちよつと通じかねる。紛まぎれもなく敬太郎に

分らせようとするには、往来を驚ろかすほどな大きな声で叫ぶに限ると云つてもいいくらいなものだが、そう云う突飛とつぴなよほどな場合でも体裁ていさいを重んずる須永のような男にできるはずがない。万一我慢してやつてくれたところで、こつちから駆かけて行く間には、肝心かんじんの黒の中折帽なかおれぼうを被かぶった男の姿は見えなくなつてしまわないとも云えない。——こう考えた敬太郎はやむを得ないから運を天に任せてどつちか一方の停留所だけ守ろうと決心した。

二十六

決心はしたようなものの、それでは今立っている所を動かない

ための横着と同じ事になるので、わざと成効せいこうを度外に置いて仕事にかかった不安を感じずにはいられなかつた。彼は首を延ばすようにして、また東の停留所を望んだ。位地のせいむきか、向の具合か、それとも自分が始終乗降のりおりに慣れている訳か、どうもそちらの方が陽気に見えた。尋ねる人も何だか向むこうで降りそうな心持がした。彼はもう一度見張るステーションを移そうかと思ひながら、なおかつ決しかねてしばらく躊躇ちゆうちよしていた。するとそこへ江戸川行の電車が一台来てずるととまった。誰も降者おりてがないのを確かめた車掌は、一分と立たないうちにまた車を出そうとした。敬太郎けいたろうは錦町へ抜ける細い横町を背にして、眼の前の車台にはほとんど気のつかないほど、ここにいようかあつちへ行こうかと

迷っていた。ところへ後の横町から突然馳け出して来た一人の男が、敬太郎を突き除けるようにして、ハンドルへ手をかけた運転手の台へ飛び上った。敬太郎の驚ろきがまだ回復しないうちに、電車はがたりと云う音を出してすでに動き始めた。飛び上がった男は硝子戸の内へ半分身体を入れながら失敬しましたと云った。敬太郎はその男と顔を見合せた時、彼の最後の視線が、自分の足の下に落ちたのを注意した。彼は敬太郎に当った拍子に、敬太郎の持つていた洋杖を蹴飛ばして、それを持主の手から地面の上へ振り落さしたのである。敬太郎は直曲んで洋杖を拾い上げようとした。彼はその時蛇の頭が偶然東向に倒れているのに気がついた。そうしてその頭の恰好を何となしに、方角を教える

フインガーポスト

指 標 のように感じた。

「やつぱり東が好かろう」

彼は早足に瀬戸物屋の前まで帰つて来た。そこで本郷三丁目と書いた電車から降りる客を、一人残らず物色する気で立った。彼は最初の二三台を親かたきの敵でも覘ねらうように怖こわい眼つきで吟味ぎんみした後、あと少し心に余裕よゆうができるに連れて、腹の中がだんだん気丈きじょうになつて来た。彼は自分の眼の届く広場を、一面の舞台と見做みなして、その上に自分と同じ態度の男が三人いる事を発見した。その一人は派出所の巡査で、これは自分と同じ方を向いて同じように立っていた。もう一人は天下堂の前にいるポイントマンであつた。最後の一人は広場の真中に青と赤の旗を神聖な象徴シンボルのごとく振り分

ける分別ぶんべつざ盛りの中年ちゅうねんもの者であつた。そのうちでいつ出て来るか知れない用事を期待しながら、人目にはさも退屈そうに立っているものは巡査と自分だろうと敬太郎は考えた。

電車は入れ代り立ち代り彼の前にとまつた。乗るものは無理にも窮屈な箱の中に押し込もうとする、降りるものは権柄けんぺいづくで上から伸のしかかつて来る。敬太郎はどここの何物とも知れない男なんに女よが聚あつまつたり散ちつたりするため、自分の前で無作法に演じ出す一分いっぶんじ時の争を何度となく見た。けれども彼の目的とする黒の中折の男はいくら待つても出て来なかつた。ことに依ると、もうとうに西の停留所から降りてしまったものではなからうかと思ふと、こうして役にも立たない人の顔ばかり見つめて、眼のちら

ちらするほど一つ所に立っているのは、随分馬鹿氣た所作しよさに見えて来る。敬太郎は下宿の机の前で熱に浮かされた人のように夢中で費やした先刻さつきの二時間を、充分須永すながと打ち合せをして彼の援助を得るために利用した方が、遥はるかに常識かなに適あつた遣やり口くちだと考え出した。彼がこの苦にがい氣分を痛切なに嘗なめさせられる頃から空はだんだん光を失なつて、眼に映る物の色が一面あおに蒼あおく沈おんで来た。陰いん鬱うつな冬の夕暮を補たなう瓦斯ガスと電氣の光がぼつぼつそこらの店み陰いん鬱うつな冬の夕暮を補たなう瓦斯ガスと電氣の光がぼつぼつそこらの店み硝子せガラスを彩いろどり始めた。ふと氣がついて見ると、敬太郎から一ひさし間がみばかりの所に、廂ひさし髪がみに結いつた一人の若い女が立っていた。電車の乗降のりおりが始まるたびに、彼は注意の余波なごりを自分の左右に払つていたつもりなので、いつどつちから歩き寄つたか分らない婦人

を思わぬ近くに見た時は、何より先にまずその存在に驚ろかされた。

二十七

女は年に合わせて地味なコートを引き摺ずるように長く着ていた。敬けいたろう太郎は若い人の肉を飾る華はなやか麗な色をその裏に想像した。女はまたわざとそれを世間から押し包むようにして立っていた。襦じ袢ばんの襟えりさえ羽二重はふたえの襟えり巻まきで隠していた。その羽二重の白いのが、夕暮せまの逼せまるに連れて、空気から浮き出して来るほかに、女は身まわりの周囲まわりに何ひとといつて他の注意ひとを惹ひくものを着けていなかった。

けれども時節柄じせつがらに頓とんじやく着やくなく、当人の好尚このみを示したこの一ひと色いろが、敬太郎には何よりも際立きわだって見えた。彼は光の抜けて行く寒さい空の下で、不調和な異いな物に出逢であつた感じよりも、煤すすけた往来わらいに冴さ々さしい一点を認めた気分になつて女の頸くびの辺あたりを注意した。女は敬太郎の視線を正面まともに受けた時、心持からだ身体むきの向を変えた。それでもなお落ちつかない様子をして、右の手を耳の所まで上げて、鬢びんから洩もれた毛うしろを後へ搔かきやる風をした。固もとより女の髪は綺麗きれいに揃そろつていたのだから、敬太郎にはこの挙動が実みのない科しなとしてのみ映つたのだが、その手を見た時彼はまた新たな注意を女から強つよいられた。

女は普通の日本の女によしやう性せいのように絹の手袋を穿はめていなかっ

た。きちりと合う山羊やぎの革製ぎやしゃので、華奢きやしやな指をつつましやかに包んでいた。それが色の着いた蠟ろうを薄く手の甲に流したと見えるほど、肉と革がしつくりくつついたなり、一筋の皺しわも一分の弛いちぶみも余していかなかった。敬太郎は女の手を上げた時、この手袋が女の白い手頸てくびを三寸も深く隠しているのに気がついた。彼はそれぎり眼を転じてまた電車に向った。けれども乗降のりおりの一混雑が済んで、思う人が出て来ないと、また心に二三分の余裕よゆうができるので、それを利用しようとして待ち構えるほどの執着はなかったにせよ、電車の通り越した相間相間あいまには覺さとられないくらいの視力を使つて常に女の方を注意していた。

始め彼はこの女を「本郷行」か「亀沢町行」に乗るのだろうと

考えていた。ところが両方の電車が一順廻つて来て、自分の前に留つても、いつこう乗る様子がないので、彼は少々変に思った。あるいは無理に込み合っている車台に乗つて、押し潰つぶされそうな窮屈を我慢するよりも、少し時間の浪費を忪こらえた方が差引得とくになるという主義の人かとも考えて見たが、満員という札もかけず、一つや二つの空席は充分ありそうなのが廻つて来ても、女は少しも乗る素振そぶりを見せないの、敬太郎はいよいよ変に思った。女は敬太郎から普通以上の注意を受けていると覺つたらしく、彼が少しでも手足の態度を改ためると、雨の降らないうちに傘かさを広げる人のように、わざと彼の觀察を避よける準備をした。そうして故意に反対の方を見たり、あるいは向うへ二三歩あるき出したりした。

それがため、妙に遠慮深いところのできた敬太郎はなるべく露むきだ骨しに女の方を見るのを慎つつしんでいた。がしまいにふと気がついて、この女は不案内のため、自分の勝手に好い加減にきめた停留所の前に来て、乗れもしない電車をいつまでも待つていたのでなからうかと思つた。それなら親切に教えてやるべきだという勇氣が急に起つたので、彼は逡しゆんじゆん巡しゆんする気色けしきもなく、真正面に女の方を向いた。すると女はふいと歩き出して、二三間先の宝石商の窓際まで行つたなり、あたかも敬太郎の存在を認めぬもののごとくに、そこで額まどガラスを窓硝子まどガラスに着けるように、中に並べた指環だの、帯留だの枝珊瑚えださんごの置物だのを眺め始めた。敬太郎は見ず知らずの他人に入らざる好意立こういだてをして、かえつて自分と自分の品

位を落したのを馬鹿らしく感じた。

女の容貌ようぼうは始めから大したものではなかつた。真向まむきに見るとそれほどでもないが、横から眺めた鼻つきは誰の目にも少し低過ぎた。その代り色が白くて、晴々はればれしい心持ひとみのする眸ひとみを有つていた。宝石商の電灯は今硝子ガラスごし越はすに彼女かのおんなの鼻と、豊ふつくらしした頬の一部分と額とを照らして、斜はすかけに立っている敬太郎の眼に、光と陰とから成る一種妙な輪廓りんかくを与えた。彼はその輪廓と、長いコートに包まれた恰好かつこうのいい彼女の姿とを胸に収めて、また電車の方に向つた。

電車がまた二三台来た。そうして二三台共また敬太郎けいたろうの失望をくり返さして東へ去った。彼は成功を思い切った人のごとくに帯の下から時計を出して眺めた。五時はもうとうに過ぎていた。彼は今更いまさら気がついたように、頭の上に被かぶさる黒い空を仰いで、苦にがにが々にがしく舌打したうちをした。これほど骨を折つて網を張つた中へかからない鳥は、西の停留所から平気で逃げたんだと思うと、他ひとを騙だますためにわざわざ拵こしらえた婆さんの予言も、大事そうに持つて出た竹の洋杖ステッキも、その洋杖が与えてくれた方角の暗示も、ことごとく忌々いまいましさの種になった。彼は暗い夜を欺あざむいて眼先にちらちらする電灯の光を見廻して、自分をその中心に見出した時、

この明るい輝きも必^{ひつきょう}竟^{きやう}自分の見残した夢の影なんだろうと考
えた。彼はそのくらい興^{きやう}を覚^さましながらまだそのくらい寝惚^{ねぼ}けた
心持を失わずに立っていたが、やがて早く下宿へ帰って正気の人
間になろうという覚悟をした。洋杖は自分の馬鹿^{あざ}を嘲^{あざ}ける記念^{かたみ}だ
から、帰りがけに人の見ていない所で二つに折って、蛇の頭も鉄
の輪の突がねもめちやめちやに、万世橋から御茶の水へ放り込ん
でやろうと決心した。

彼はすでに動こうとして一歩足を移しかけた時、また先刻^{さつき}の若
い女の存在に気がついた。女はいつの間にか宝石商の窓を離れて、
元の通り彼から一間ばかりの所に立っていた。背が高いので、手
足も人尋常^{ひとなみ}より恰好^{かっこう}よく伸びたところを、彼は快よく始めから

眺めたのだが、今度はことにその右の手が彼の心を惹いた。女は自然のままにそれをすらりと垂れたなり、まるで他の注意を予期しないでいたのである。彼は素直に調子の揃った五本の指と、しなやかな革で堅く括られた手頸と、手頸の袖口の間から微かに現われる肉の色を夜の光で認めた。風の少ない晩であつたが、動かないで長く一所に立ち尽すものに、寒さは辛く当つた。女は心持ち顫を襟巻の中に埋めて、俯目勝にじつとしていた。敬太郎は自分の存在をわざと眼中に置かないようなこの眼遣の底に、かえつて自分が気にかかつているらしい反証を得たと信じた。彼が先刻から蚤取眼で、黒の中折帽を被つた紳士を探している間、この女は彼と同じ鋭い注意を集めて、観察の矢を絶

えずこつちに射がけていたのではなからうか。彼はある男を探偵しつつ、またある女に探偵されつつ、一時間余をここに過ごしたのではなからうか。けれどもどこの何物とも知れない男の、何をするか分らない行動を、何のために探るのだから、彼には何らの考がなかつたごとく、どこの何物とも知れない女から何を仕出かすか分らない人として何のために自分が覘ねらわれるのだから、そこへ行くとはやはりまるで要領を得なかつた。敬太郎はこつちで少し歩き出して見せたら向うの様子もつと鮮明に分るだろうという氣になつて、そろりそろりと派出所の後を西の方へ動いて行つた。もちろん女に勘づかれないために、彼は振向いて後を見る動作を固く憚はばかつた。けれどもいつまでも前ばかり見て先へ行つては、肝か

んじん

心の目的を達する機会がないので、彼は十間ほど来たと思う時分に、わざと見たくもない硝子窓ガラスまどを覗のぞいて、そこに飾つてあるびろうどびろうど天鷲絨えりの襟えりの着いた女の子のマントを眺ながめる風をしながら、そつうしろと後を振り向いた。すると女は自分の背後にいるどころではなかつた。延び上つてもいろいろな人が自分を追越すように後あとから後から来る陰になつて、白い襟えりまき巻も長いコートもさらに彼の眼に入らなかつた。彼はそのまま前へ進む勇氣があるかを自分に疑ぐつた。黒い中折の帽子を被つた人の事なら、定刻の五時を過ぎた今だから、断念してもそれほどの遺憾はないが、女の方はどんなつまらない結果に終ろうとも、最もうすこ少し觀察していたかつた。彼は女から自分が探偵されていると云う疑念を逆に投げ返して、こ

つちから女の行動を今しばらく注意して見ようという物数奇ものずきを起した。彼は落し物を拾いに帰る人の急ぎ足で、また元の派出所近く来た。その暗い陰に身を寄せるようにして窺うかがうと、女は依然としてじつと通りの方を向いて立っていた。敬太郎の戻った事にはまるで気がついていない風に見えた。

二十九

その時敬太郎けいたろうの頭に、この女は処女だろうか細君だろうかという疑が起った。女は現代多数の日本婦人にあまねく行われる廂ひ髪さがみに結いっているのです、その辺の区別は始めから不分明ふぶんみようだつ

たのである。が、いよいよ物陰に来て、半後ななばしろになつたその姿を眺めた時は、第一番にどつちの階級に属する人だろうという問題が、新たに彼を襲おそつて来た。

見かけからいうとあるいは人に嫁とついだ経験がありそうにも思われる。しかし身体からだの発育が尋常より遙はるかに好いからことによれば年は存外取つていないのかも知れない。それならなぜあんな地味な服装つくりをしているのだろう。敬太郎は婦人の着る着物の色や縞しま柄らについて、何をいう権利も有もたない男だが、若い女ならこの陰鬱いんうつな師走しわすの空気を跳ね返すように、派は出な色を肉の上に重ねるものだぐらいの漠ぼつとした観察はあつたのである。彼はこの女が若々しい自分の血に高い熱を与える刺戟しげきせい性の文あやをどこにも見せ

ていないのを不思議に思った。女の身に着けたものの内で、わずかに人の注意を惹くのは頸の周囲を包む羽二重の襟巻だけであるが、それはただ清いと云う感じを起す寒い色に過ぎなかった。あとは冬枯の空と似合つた長いコートですぼりと隠していた。

敬太郎は年に合わせて余りに媚びる気分を失い過ぎたこの衣服を再び後から見て、どうしてもすでに男を知つた結果だと判じた。その上この女の態度にはどこか大人びた落ちつきがあつた。彼はその落ちつきを品性と教育からのみ来た所得とは見做し得なかつた。家庭以外の空気に触れたため、初々しい羞恥が、手帛に振りかけた香水の香のようにならんと抜けてしまつたのではなからうかと疑ぐつた。そればかりではない、この女の落ちつきの中

には、落ちつかない筋肉の作用が、身体^{からだ}全体の運動となつたり、眉^{まゆ}や口の運動となつて、ちよいちよい出て来るのを彼は先刻^{さつき}目撃した。最も鋭敏に動くものはその眼であらうと彼は疾^とくに認めていた。けれどもその鋭敏に動こうとする眼を、強^しいて動かすまいと力^{つと}める女の態度もまた同時に認めない訳に行かなかつた。だからこの女の落ちつきは、自分で自分の神経を殺しているという自覚^{とも}に伴^{とも}なつたものだ^{かんてい}と彼は勘定^{かんてい}していた。

ところが今後^{うしろ}から見た女は身体^{うま}といい気分^{うま}といい比較的沈静^{かのおんな}して両方^{かのおんな}の間に旨^{うま}く調子が取れているように思われた。彼^{かのおんな}女^{おんな}は先刻と違って、別段姿勢を改^かためるでもなく、そろそろ歩き出すでもなく、宝石商の窓へ寄り添^しうでもなく、寒^{しの}さを凌^{しの}ぎかねる風^ふ

情もなく、ほとんど閑雅とでも形容したい様子をして、一段高くなつた人道の端に立つていた。傍には次の電車を待ち合わせる人が二三散らばっていた。彼らは皆向うから来る車台を見つめて、早く自分の傍へ招き寄せたい風に見えた。敬太郎が立ち退いたので大いに安心したらしい彼女は、その中で最も熱心に何かを待ち受ける一人となつて、筋向うの曲り角をじつと注意し始めた。敬太郎は派出所の陰を上へ廻つて車道へ降りた。そうしてペンキ塗の交番を楯に、巡査の立つている横から女の顔を覗かうように見た。そうしてその表情の変化にまた驚ろかされた。今まで後姿を眺めて物陰にいた時は、彼女を包む一色の目立たないコートと、その背の高さと、大きな廂髪とを材料に、想像の国でむしろ

自由過ぎる結論を弄あそんだのだが、こうして彼女の知らない間に、その顔を遠慮なく眺めて見ると、全く新らしい人に始めて出逢つたような気がしない訳に行かなかつた。要するに女は先刻より大變若く見えたのである。切に何物かを待ち受けているその眼もその口も、ただ生々した一種華やかな気色に充ちて、それよりほかの表情は毫も見当らなかつた。敬太郎はそのうちに処女の無邪気ささえ認めめた。

やがて女の見つめている方角から一台の電車が弓なりに曲つた線路を、ぐるりと緩く廻転して来た。それが女のいる前で滑るようにとまった時、中から二人の男が出た。一人は紙で包んだボール箱のようなものを提げて、すたすた巡査の前を通り越して人道

へ飛び上がったが、一人は降りると直すぐに女の前に行つて、そこに立ちどまつた。

三十

敬けい太郎たろうは女の笑い顔をこの時始めて見た。唇の薄い割に口の大おおきいのをその特徴の一つとして彼は最初なから眺ながめていたが、美うつくしい歯を露むき出しに現あらわして、潤うる沢おいいの饒ゆたかな黒い大おおきな眼を、上う下げの睫まつげの触れ合うほど、共に寄せた時は、この女から夢にも予期しなかつた印象が新たに彼の頭に刻まれた。敬太郎は女の笑い顔に見惚みとれると云うよりもむしろ驚ろいて相手の男に視線を移

した。するとその男の頭の上に黒い中折なかおれが乗っているのに気がついた。外套がいとうは判切霜降はつきりしもふりとは見分けられなかったが、帽子と同じ暗い光を敬太郎の眸ひとみに投げた。その上背は高かった。瘡やせぎすでもあった。ただ年齢としの点に至ると、敬太郎にはとかくの判断を下しかねた。けれどもその人が寿命じゆめいの度盛どもりの上において、自分とは遙はるか隔へだたった向うにいる事だけはたしかなので、彼はこの男を躡ちゆうちよ躡ちゆうちよなく四十恰好がっこうと認めた。これだけの特点を前後なくほとんど同時に胸に入れ得た時、彼は自分が先刻さつきから馬鹿を尽してつけ覗ねらった本人がやつと今電車を降りたのだと断定しない訳に行かなかつた。彼は例刻の五時がとうの昔むかしに過ぎたのに、妙な酔す興いきようを起して、やはり同じ所にぶらついていた自分を仕合せだ

と思つた。その酔興を起させるため、自分の好奇心を釣りに若い女が偶然出て来てくれたのをありがたく思つた。さらにその若い女が自分の探す人を、自分よりも倍以上の自信と忍耐をもつて、待ち終おほせたのを幸運の一つに数えた。彼はこのXエックスという男について、田口のために、ある知識を供給する事ができると共に、同じ知識がYワイという女に関する自分の好奇心を幾分か満足させ得るだろうと信じたからである。

男と女はまるで敬太郎の存在に気がつかなかつたと見えて、前後左右に遠慮する気色けしきもなく、なお立ちながら話していた。女は始終微笑を洩もらす事をやめなかつた。男も時々声を出して笑つた。二人が始めて顔を合わせた時の挨拶あいさつの様子から見ても彼らはけ

つして疎遠な間柄ではなかった。異性を繋ぎ合わせるようで、その実両方の仲を堰く、慇懃な男女間の礼義は彼らのどちらにも見出す事ができなかつた。男は帽子の縁に手をかける面倒さえあえてしなかつた。敬太郎はその鍔の下にあるべきはずの大きな黒子を面と向つて是非突き留めたかつた。もし女がいなかつたらば肉の上に取り残されたこの異様な一点を確かめるために、彼はつかつかと男の前へ進んで行つて、何でも好いから、ただ口から出任せの質問をかけたかも知れない。それでなくても、直ちに彼の傍へ近寄つて、満足の行くまでその顔を覗き込んだらう。この際そう云う大胆な行動を妨たげるものは、男の前に立っている例の女であつた。女が敬太郎の態度を悪く疑ぐつたかどうかは問

題として、彼の挙動に不審を抱いた様子は、同じ場所に長く立ち並んだ彼の目に親しく映じたところである。それを承知しながら、再びその視線の内に、自分の顔が無遠慮に突き出すのは、多少紳士的でない上に、嫌疑けんぎの火の手をわざと強くして、自分の目的を自分で打ち毀こわすと同じ結果になる。

こう考えた敬太郎は、自然の順序として相応の機会が廻めぐつて来るまでは、黒子の有る無しを見届けるだけは差し控えた方が得策だろうと判断した。その代り見え隠れに二人の後あとを跟つけて、できるならば断片的でもいいから、彼らの談話を小耳はさに挟はさもうと覚悟した。彼は先方の許諾を待たないで、彼らの言動を、ひそかに我胸に畳み込む事の徳義的価値について、別に良心の相談を受け

る必要を認めなかつた。そうして自分の骨折から出る結果は、世故こに通じた田口によつて、必ず善意に利用されるものとただ淡たんば泊くに信じていた。

やがて男は女を誘いざなう風をした。女は笑いながらそれを拒こぼむように見えた。しまいに半なかば向き合つていた二人が、肩と肩を揃そろえて瀬戸物屋の軒端のきば近く歩き寄つた。そこから手を組み合わせないばかりに並んで東の方へ歩き出した。敬太郎は二三間早足に進んで、すぐ彼らの背後まで来た。そうして自分の歩調を彼らと同じ速度に改ためた。万一女に振り向かれても、疑惑を免まぬかれるために、彼はけつして彼らの後姿には眼を注がなかつた。偶然前後して天下の往来を同じ方角に行くもののごとくに、故意わざとあらぬ方かた

を見て歩いた。

三十一

「だって余あんまりだわ。こんなに人を待たしておいて」

敬けい太郎の耳に入った第一の言葉は、女の口から出たこういう

意味の句であつたが、これに対する男の答は全く聞き取れなかつた。それから五六間行つたと思う頃、二人の足が急に今までの歩調を失つて、並んだ影法師がほとんど敬太郎の前に立ち塞ふさがりさうにした。敬太郎の方でも、後うしろから向うに突き当らない限りは先へ通り抜けなければ跋ぼつが悪くなつた。彼は二人の後戻りを恐れて、

急に傍そばにあつた菓子屋の店先へ寄り添うように自分を片づけた。そうしてそこに並んでゐる大きな硝子壺ガラスつぼの中のビスケットを見つめる風をしながら、二人の動くのを待った。男は外套がითの中へ手を入れるように見えたが、それが済むと少し身体からだを横にして、下向きに右手で持ったものを店の灯ひに映した。男の顔の下に光るものが金時計である事が、その時敬太郎に分つた。

「まだ六時だよ。そんなに遅かあない」

「遅いわあなた、六時なら。あかし妾もう少しで帰かいるところよ」

「どうも御気の毒さま」

二人はまた歩き出した。敬太郎も壺つぼいり入のビスケットを見棄すててその後あとに従したがつた。二人は淡路町あわじちようまで来てそこから駿河台するがだいし

下へ抜ける細い横町を曲った。敬太郎も続いて曲ろうとすると、二人はその角にある西洋料理屋へ入った。その時彼はその門口から射す強い光を浴びた男と女の顔を横から一眼見た。彼らが停留所を離れる時、二人連れ立ってどこへ行くだろうか、敬太郎にはまるで想像もつかなかつたのだが、突然こんな家へ入いられて見ると、何でもない所だけに、かえって案外の感に打たれざるを得なかつた。それは宝亭たからていと云つて、敬太郎の元から知つている料理屋で、古くから大学へ出入でいりをする家であつた。近頃普請ふしんをしてから新らしいペンキの色を半分電車通りに曝さらして、斜はすかけに立ち切られたような棟むねを南向に見せているのを、彼は通り掛りに時々注意した事がある。彼はその薄青いペンキの光る内側で、額

に仕立てたミュンヘン麦酒ビールの広告写真を仰ぎながら、肉刀ナイフと肉フオー又クを凄まじく闘すきかわした数度すどの記憶もさえ有もっていた。

二人の行先については、これという明らかな希望も予期も無かつたが、少しは紫むらさきがかった空気の匂う迷路メイズの中に引き入れられるかも知れないくらいの感じが暗あんに働あらいてこれまで後を跟つけて来た敬太郎には、馬鈴薯じゃがいもや牛肉を揚げる油にあいの臭においが、台所からぶんぶん往来へ溢あふれる西洋料理屋は余りに平凡らしく見えた。けれども自分のとても近寄れない幽玄な所へ姿を隠して、それぎり出て来ないよりは、遥はるかに都合が好いと考え直した彼は、二人の身体が、誰にでも近寄る事のできる、普通の洋食店のペンキの奥に囲われてゐるのをむしろ心丈夫だと覺さとつた。幸い彼はこのくらいな

程度の家で、冬空の外気に刺戟しげきされた食慾を充たすに足るほどの財布を懐中していた。彼はすぐ二人の後あとを追つてその二階上のぼろうとしたが、電灯の強く往来へ射す門かどぐち口まで来た時、ふと気がついた。すでに女から顔を覚えられた以上、ほとんど同時に一つ二階へ押し上つては不味まずい。ひよつとするとこの人は自分を跟つけて来たのだという疑惑ごとさうを故意先方に与える訳になる。

敬太郎は何気ない振をして、往来へ射す光を横切つたまま、黒い小路ここうじを一丁ばかり先へ歩いた。そうしてその小路の尽きる坂下からまた黒い人となつて、自分の影法師を自分の身体からだの中へ畳み込んだようにひっそりと明るい門口まで歸つて来た。それからその門かどを潜くぐつた。時々来た事があるので、彼はこの家の勝手うちをほぼ

承知していた。下には客を通す部屋がなくつて、二階と三階だけで用を弁じているが、よほど込み合わなければ三階へは案内しない、大抵は二階で済むのだから、上つて右の奥か、左の横にある広間を覗けば、大抵二人の席が見えるに違ない、もしそこにいなかったら表の方の細長い室まで開けてやろうぐらいの考で、階段を上りかけると、白服の給仕が彼を案内すべく上り口に立っているのに気がついた。

三十二

敬太郎は手に持った洋杖をそのままに段々を上り切つたの

で、給仕は彼の席を定める前に、まずその洋杖を受取った。同時にこちらへと云いながら背中を向けて、右手の広間へ彼を案内した。彼は給仕の後から自分の洋杖がどこに落ちつくかを一目見届けた。するとそこに先刻注意した黒の中折帽が掛っていた。霜しも降もらしい外がい套とうも、女の着ていた色合のコートも釣つるしてあつた。給仕がその裾すそを動かして、竹の洋杖を突つ込んだ時、大きな模様を抜いた羽は二重ふたえの裏が敬太郎の眼にちらついた。彼は蛇へびの頭がコートコートの裏に隠れるのを待つて、さらにその持主の方に眼を転じた。幸いに女は男と向き合つて、入口の方に背中ばかりを見せていた。新らしい客の来た物音に、振り返りたい気があつても、ぐりりと廻るのが、いったん席に落ちついた品位くずを崩おす恐それがあるの

で、必要のない限り、普通の婦人はそういう動作を避けたがるだろうと考えた敬太郎は、女の後姿を眺めながら、ひとまず安堵の思いをした。女は彼の推察通りはたして後を向かなかつた。彼はその間に女の坐っているすぐ傍まで行つて背中合せに第二列の食卓につこうとした。その時男は顔を上げて、まだ腰もかけず向も改ためない敬太郎を見た。彼の食卓の上には支那めいた鉢に植えた松と梅の盆栽が飾りつけてあつた。彼の前にはスープの皿があつた。彼はその中に大きな匙を落したなり敬太郎と顔を見合せたのである。二人の間に横わる六尺に足らない距離は明らかな電灯が隈なく照らしていた。卓上に掛けた白い布がまたこの明るさを助けるように、潔ぎい光を四方の食卓から反射していた。

敬太郎はこういう都合のいい条件の具備した室で、男の顔を満足するまで見た。そうしてその顔の眉まゆと眉の間に、田口から通知のあつた通り、大きな黒子ほくろを認めた。

この黒子ほくろを別にして、男の容貌ようぼうにこれと云つた特異な点はなかつた。眼も鼻も口も全く人並であつた。けれども離れ離れに見ると凡庸ぼんような道具そろが揃つて、面長おもながな顔の表にそれぞれの位地を占めた時、彼は尋常以上に品格のある紳士としか誰の目にも映らなかつた。敬太郎と顔を合せた時、スープの中に匙さじを入れたまま、啜すする手をしばらくやめた態度などは、どこかにむしろ気高い風を帯びていた。敬太郎はそれなり背中を彼の方に向けて自分の席に着いたが、探偵という文字に普通付着している意味を心のうちで

考え出して、この男の風采態度ふうさいたいどと探偵とはとても釣り合わない性質のものだという気がした。敬太郎から見ると、この人は探偵としてしかるべき何物をも彼の人相の上に有もつていなかったのである。彼の顔の表に並んでいる眼鼻口のいずれを取っても、その奥に秘密を隠そうとするには、余りにできが尋常過ぎたのである。

彼は自分の席へ着いた時、田口から引き受けたこの宵よいの仕事に対する自分の興味が、すでに三分の一ばかり蒸発したような失望を感じた。第一こんな性質たちの仕事を田口から引き受けた徳義上の可否たがひさえ疑がわしくなった。

彼は自分の注文を通したなり、ポカンとして麵麩パンに手も触ふれずにいた。男と女は彼らの傍そばに坐った新らしい客に幾分か遠慮の気

味で、ちよつとの間話を途切らした。けれども敬太郎の前に暖められた白い皿が現われる頃から、また少し調子づいたと見えて、二人の声が互違たがいちがいに敬太郎の耳に入った。――

「今夜はいけないよ。少し用があるから」

「どんな用？」

「どんな用って、大事な用さ。なかなかそう安くは話せない用だ」
「あら好くつてよ。妾あかしちゃんど知ってるわ。――さんざつぱら他ひとを待たした癖に」

女は少し拗すねたような物の云い方をした。男は四辺あたりに遠慮する風で、低く笑った。二人の会話はそれぎり静かになった。やがて思い出したように男の声が出た。

「何しろ今夜は少し遅いから止そうよ」

「ちつとも遅かないわ。電車に乗って行きやあ直じじきやありませんか」

女が勧めている事も男が躊躇ちゆうちよしている事も敬太郎にはよく解った。けれども彼らがどこへ行くつもりなのだか、その肝心かんじんな目的地になると、彼には何らの観念もなかった。

三十三

もう少し聞いている内にはあるいはあたりがつくかも知れない
 敬太郎けいたろうは自分の前に残された皿の上の肉刀ナイフと、その

傍に転がった赤い仁参にんじんの一切ひときりを眺めていた。女はなお男を強しいる事をやめない様子であつた。男はそのたびに何とかかとか云つて逃のがれていた。しかし相手を怒おこらせまいとする優しい態度はいつも変らなかつた。敬太郎の前に新らしい肉と青豌豆あおえんどうが運ばれる時分には、女もとうとう我がを折り始めた。敬太郎は心の内で、女がどこまでも剛情を張るか、でなければ男が好加減いいかげんに降参するか、どつちかになればいいかと、ひそかに祈つていたのだから、思ったほど女の強くないのを発見した時は少なからず残念な気がした。せめて二人の間に名を出す必要のないものとして略されつつあつた目的地だけでも、何かの機会はずみに小耳こみみに挟はさんでおきたかつたが、いよいよ話まが纏まとまらないとなると、男女なんによの問答は自然ほ

かへ移らなければならぬので、当分その望みも絶えてしまった。
「じゃ行かなくなつてもいいから、あれをちようだい」と、やがて
女が云い出した。

「あれつて、ただあれじゃ分らない」

「ほらあれよ。こないだの。ね、分つたでしよう」

「ちつとも分らない」

「失敬ね、あなたは。ちゃんと分つてる癖に」

敬太郎はちよつと振り向いて後うしろが見たくなつた。その時はしご階ごだ
段んを踏む大きな音が聞こえて、二人ばかりの客がどやどやと一
度あがに上つて来た。そのうちの一人はカーキ色の服に長靴を穿はい
た軍人であつた。そうして床ゆかの上を歩く音と共に、腰に釣るした

劍をがちやがちや鳴らした。三人は上つて左側の室へ案内された。この物音が例の男と女の会話を攪き乱したため、敬太郎の好奇心もちらつく劍の光が落ちつくまで中途に停止していた。

「この間見せていただいたものよ。分つて」

男は分つたとも分らないとも云わなかつた。敬太郎には無論想像さえつかなかつた。彼は女がなぜ淡泊たんぱくに自分の欲しいというものはつきりの名を判切云つてくれないかを恨うらんだ。彼は何とはなしにそれが知りたかつたのである。すると、

「あんなもの今ここに持つてるもんかね」と男が云つた。

「誰もここに持つてるつて云やしないわ。ただちようだいつて云うのよ。今度こんだでいいから」

「そんなに欲しけりややってもいい。が……」

「あツ嬉うれしい」

敬太郎はまた振り返つて女の顔が見たくなつた。男の顔もついでに見ておきたかつた。けれども女と一直線になつて、背中合せに坐つている自分の位置を考えると、この際そんな盲動は慎つづしななければならぬので、眼のやりどころに困るといふ風で、ただ正面をぼかんと見廻した。すると勝手の上り口あがくちの方から、給仕ボーイが白い皿を二つ持つて入つて来て、それを古いのと引き更かえに、二人の前へ置いて行つた。

「小鳥だよ。食べないか」と男が云つた。

あたし
「妾あかしもうたくさん」

女は焼いた小鳥に手を触れない様子であつた。その代り暇のできた口を男よりは余計動かした。二人の間答から察すると、女の男にくれと逼せまつたのは珊瑚樹さんごじゆの珠たまか何からしい。男はこういう事に精通しているという口調くちようで、いろいろな説明を女に与えていた。が、それは敬太郎には興味もなければ、解りもしない好事こうじ家の嬉うれしがる知識に過ぎなかつた。練物ねりもので作つたのへ指先の紋もんを押おしつけたりして、時々うま旨くごまかした贗物がんぶつがあるが、それは手障てざわりがどこかざらざらするから、本当の古渡りこわたとは直区別すぐできると叮嚀ていねいに女に教えていた。敬太郎は前後あとさきを綜合すべあして、何でもよほど貴たつとい、また大変珍らしい、今時あつそう容易たやすくは手に入らない時代のついた珠たまを、女が男から貰もらう約束をしたとい

う事が解った。

「やるにはやるが、御前あんなものを貰って何なんにする気だい」

「あなたこそ何になさるの。あんな物を持ってて、男の癖に」

三十四

しばらくして男は「御前御菓子を食べるかい、菓物くだものにするか

い」と女に聞いた。女は「どっちでも好いわ」と答えた。彼らの

食事がようやく終りに近づいた合図とも見られるこの簡単な問答

が、今までうつかりと二人の話に釣り込まれていた敬太郎けいたろうに、

たちまち自分の義務を注意するように響いた。彼はこの料理屋を

出た後の二人の行動をも観察する必要があるものとして、自分で自分の役割を作っていたのである。彼は二人と同時に二階を下りる事の不得策を初めから承知していた。後おくれて席を立つにしても、巻煙草を一本吸わない先に、夜と人と、雜沓ざつとうと暗闇くらやみの中に、彼らの姿を見失なうのはたしかであつた。もし間違ひなく彼らの影を踏んで後あとから喰く付ついて行こうとするなら、どうしても一足先へ出て、相手に氣のつかない物陰か何かで、待ち合わせるよりほかに仕方がないと考えた。敬太郎は早く勘定を済ましておくに若しくはないという氣になつて、早速給仕ボーイを呼んでビルを請求した。

男と女はまだ落ちついて話していた。しかし二人の間に何とりといやりうきまつた題目も起らないので、それを種に意見や感情の交換

も始まる機会おりはなく、ただだらしない雲のようにそれからそれへと流れて行くだけに過ぎなかった。男の特徴に数えられた眉まゆと眉の間の黒子ほくろなども偶然女の口に上のぼった。

「なぜそんな所に黒子なんぞができたんでしよう」

「何も近頃になって急にできやしまいし、生れた時からあるんだ」
「だけどき。見つともなかなくつて、そんな所ところにあつて」

「いくら見つともなくつても仕方がないよ。生れつきだから」

「早く大学へ行つて取つて貰うといいわ」

敬太郎はこの時指フィンガーボール洗せん 椀わんの水に自分の顔の映るほど下を向いて、両手で自分の米こめ 嚙かみを隠すように抑おさえながら、くすくすと笑った。ところへ給仕が釣銭を盆に乗せて持つて来た。敬太郎は

そつと立つて目立たないように階はしご段だんの上り口あがぐちまでおとなしく足を運ぶと、そこに立っていた給仕が大きな声で、「御立あち」と下へ知らせた。同時に敬太郎は先刻さつき給仕に預けた洋杖ステッキを取つて来るのを忘れた事に気がついた。その洋杖はいまだに室の隅へやすみに置いてある帽子掛の下に突き込まれたまま、女の長いコートすその裾すそに隠されていた。敬太郎は室の中なんによにいる男女はばを憚はばかるように、抜き足で後戻りをして、静かにそれを取り出した。彼が蛇の頭を握つた時、すべすべした羽二重はふたえの裏と、柔かい外套がいとうの裏が、優しく手の甲に触れるのを彼は感じた。彼はまた爪先で歩かないばかりに気をつけて階段の上まで来ると、そこから急に調子を変えて、とん、とん、とんと刻きざみ足あしに下へ駆かけ下りた。表へ出るや否

や電車通を直ぐ向うへ横切った。その突き当りに、大きな古着屋のような洋服屋のような店があるので、彼はその店の電灯の光をうしろ後にして立った。こうしてさえいれば料理店から出る二人が大通

りを右へ曲ろうが、左へ折れようが、または中川の角に添って連れ

んじやくちよう雀 町

の方へ抜けようが、あるいは門かどからすぐ小路こうじ伝いに駿す

河台るがだい下へ向おうが、どっちへ行こうと見逃みのがす気遣きづかいはないと彼

は心丈夫に洋杖ステッキを突いて、目指す家の門かどぐち口を見守っていた。

彼は約十分ばかり待った後で、注意の焼しょうてん点てんになる光うちの中に、

いっなつこう人影が射さないのを不審に思い始めた。やむを得ず二階

を眺ながめてその窓だけ明るくなった奥おくを覗のぞくように、彼らの早く席

を立つ事を祈った。そうして待ち草臥くたびれた眼を移すごとに、屋根

の上に広がる黒い空を仰いだ。今まで地面の上を照らしている人間の光ばかりに欺あざむかれて、まるでその存在を忘れていたこの大きな夜は、暗い頭の上で、先刻さつきから寒そうな雨を醸かもしていたらしく、敬太郎の心を侘わびしがらせた。ふと考えると、今までは自分に遠慮してただの話をしていた二人が、自分の立ったのを幸いに、自分の役目として是非聞いておかなければならないような肝かん心じんの相談でもし始めたのではなからうか。彼はこの疑惑と共に黒い空を仰ぎながら、そのうちに二人の向き合った姿をありありと認めた。

彼はあまり注意深く立ち廻つて、かえつて洋食店の門を早く出過ぎたのを悔くやんだ。けれども二人が彼に気兼きがねをする以上は、たとい同じ席にいつまでも根が生えたように腰を据すえていたところで、やっぱり普通の世間話よりほかに聞く訳には行かないのだから、よし今まで坐すわつたまま動かないものと仮定しても、その結果は早く席を立つたと、ほぼ同じ事になるのだと思うと、彼は寒いのを我慢しても、同じ所に見張っているより仕方なかつた。すると帽子ひさしの廂ふたしずくへ雨が一一ふたしずく雫すずくほど落ちたような気がするので、彼はまた仰向あおむいて黒い空を眺めた。闇やみよりほかに何も眼を遮さえぎらない頭の上は、彼の立っている電車通と違つて非常に静であつた。彼は頬ほお

の上に一滴の雨を待ち受けるつもりで、久しく顔を上げたなり、
恰好かつこうさえ分らない大きな暗いものを見つめている間に、今にも
降り出すだろうという掛念けねんをどこかへ失なつて、こんな落ちついで
た空の下にいる自分が、なぜこんな落ちつかない真似まねを好んでや
るのだろうかと偶然考えた。同時にすべての責任が自分の今突いて
いる竹の洋杖ステツキにあるような気がした。彼は例のごとく蛇へびの頭を
握つて、寒さに対する鬱憤うっぶんを晴らすごとくに、二三度それを烈はげ
しく振つた。その時待ち侘びた人の影法師が揃そろつて洋食店の門口
を出た。敬太郎けいたろうは何より先に女の細長い頸くびを包む白い襟えり巻まきに
眼をつけた。二人はすぐと大通りへ出て、敬太郎の向う側を、先
刻とは反対の方角に、元来た道へ引き返しにかかった。敬太郎も

猶予なく向うへ渡つた。彼らは緩い歩調で、賑やかに飾つた店先を軒ごとに覗くように足を運ばした。後から跟いて行く敬太郎は是非共二人に釣り合つた歩き方をしなければならぬので、その遅過ぎるのがだいぶ苦になつた。男は香の高い葉巻を銜えて、行く行く夜の中へ微かな色を立てる煙を吐いた。それが風の具合で後から従がう敬太郎の鼻を時々快ろよく侵した。彼はその香いを嗅ぎ嗅ぎ鈍い足並を我慢して実直にその跡を踏んだ。男は背が高いので後から見ると、ちよつと西洋人のように思われた。それには彼の吹かしている強い葉巻が多少錯覚を助けた。すると聯想がたちまち伴侶の方に移つて、女が旦那から買つて貰つた革の手袋を穿めている洋妾のように思われた。敬太郎がふとこ

ういう空想を起して、おかしいと思ひながらも、なお一人で興を催していると、二人は最前待ち合わせた停留所の前まで来てちよつと立ちどまつたが、やがてまた線路を横切つて向側へ越した。敬太郎も二人のする通りを真似た。すると二人はまた美土代町の角を^{かど}こちらから反対の側へ渡つた。敬太郎もつづいて同じ側へ渡つた。二人はまた歩き出して南へ動いた。角から半町ばかり来ると、そこにも赤く塗つた鉄の柱が一本立っていた。二人はその柱の傍^{そば}へ寄つて立つた。彼らはまた三田線を利用して南へ、帰るか、行くか、する人だとこの時始めて気がついた敬太郎は、自分も是非同じ電車へ乗らなければなるまいと覚悟した。彼らは申し合せたように敬太郎の方を顧み^{かえり}た。固^{もと}より彼のいる方から電車が

横町を曲つて来るからではあるが、それにしても敬太郎は余り好い心持はしなかった。彼は帽子の鍔をひっくり返して、ぐつと下へおろして見たり、手で顔を撫でて見たり、なるべく軒下へ身を寄せて見たり、わざと変な見当を眺めて見たりして、電車の現われるのをつらく待ち侘びた。

間もなく一台来た。敬太郎はわざと二人の乗った後から這入つて、嫌疑を避けようと工夫した。それでしばらく後の方にぐずぐずしていると、女は例の長いコートの裾を踏まえないうばかりに引き摺つて車掌台の上に足を移した。しかしあとから直続くと思つた男は、案外上る気色もなく、足を揃えたまま、両手を外套の隠袋に突き差して立っていた。敬太郎は女を見送りに男がわざわざ

ざここまで足を運んだのだという事にようやく気がついた。実を
 いうと、彼は男よりも女の方に余計興味を持っていたのである。
 男と女がここで分れるとすれば、無論男を捨てて女の先途だけを
 見届けたかった。けれども自分が田口から依託いたくされたのは女と関
 係のない黒い中折帽なかおれぼうを被つた男の行動だけなので、彼は我慢し
 て車台に飛び上がるのを差し控えた。

三十六

女は車台に乗った時、ちよつと男に目礼したが、それぎり中へ
 這入はいってしまった。冬の夜よの事だから、窓硝子まどガラスはことごとく締し

め切つてあつた。女はことさらにそれを開けて内から首を出すほどの愛嬌あいきようも見せなかつた。それでも男はのっそり立つて、車の動くのを待つていた。車は動き出した。二人の間に挨拶あいさつの交やりとり
換かがもう必要でないと認めたとく、電力は急いで光る窓を南の方かたへ運び去つた。男はこの時口くちに銜くわえた葉巻を土の上に投げた。それから足の向を変えてまた三ツ角の交叉点まで出ると、今度は左へ折れて唐物屋とうぶつやの前でとまつた。そこは敬太郎けいたろうが人に突き当られて、竹の洋杖ステツキを取り落した記憶の新らしい停留所であつた。彼は男の後あとを見え隠れにここまで跟ついて来て、また見たくもない唐物屋の店先に飾つてある新柄しんがらの襟飾ネクタイだの、絹帽シルクハットだの、変かわり縞しまの膝掛ひざかけだのを覗のぞき込みながら、こう遠慮をするよう

では、探偵の興も覚めるだけだと考えた。女がすでに離れた以上、自分の仕事に飽あきが来たと云つてはすまないが、前同様であるべき窮屈の程度が急に著るしく感ぜられてならなかつた。彼の依頼されたのは中折の男が小川町で降りてから二時間内の行動に限られているのだから、もうこれで偵察の役目は済んだものとして、下宿へ歸つて寝ようかとも思つた。

そこへ男の待つてゐる電車が来たと見えて、彼は長い手で鉄の棒を握るや否いなや瘠やせた身体からだを体ていよくとまり切らない車台の上に乗せた。今まで躊躇ちゆうちよしてゐた敬太郎は急にこの瞬間を失なつてはという気が出たので、すぐ同じ車台に飛び上つた。車内はそれほど込みあつていなかつたので、乗客は自由に互の顔を見合う余

裕を充分持っていた。敬太郎は箱の中に身体を入れると同時に、すでに席を占めた五六人から一度に視線を集められた。そのうちには今坐すわったばかりの中折の男のも交まじっていたが、彼の敬太郎を見た眼のうちには、おやという認識はあつたが、つけ覘ねらわれているなどという疑惑はさらに現われていなかった。敬太郎はようやく伸び伸びした心持になつて、男と同じ側を扱よつて腰を掛けた。この電車ですこへ連れて行かれる事かと思つて軒先を見ると、江戸川行と黒く書いてあつた。彼は男が乗り換えさえすれば、自分も早速降りるつもりで、停留所へ来るごとに男の様子を窺うかがった。男は始しじゅう終かくし隠袋へ手を突き込んだまま、多くは自分の正面かわが膝ひざの上かを見ていた。その様子を形容すると、何にも考えずに何

か考え込んでいると云う風であった。ところが九段下へかかった頃から、長い首を時々伸ばして、ある物を確かめたいように、窓の外を覗き出した。敬太郎もつい釣り込まれて、見悪い外を透かすように眺めた。やがて電車の走る響の中に、窓硝子にあたつて^{くだ}摧ける雨の音が、ぽつりぽつりと耳元でし始めた。彼は携えて^{たすさ}いる竹の洋杖^{ステツキ}を眺めて、この代りに雨傘^{あまがさ}を持つて来ればよかつたと思ひ出した。

彼は洋食店以後、中折を被つた男の^{かぶ}人柄^{ひとがら}と、世の中にまるで疑^{うたがい}をかけていないその眼つきとを注意した結果、この時ふと、こんな窮屈な思ひをして、いらざる材料を集めるよるも、いつそ露^む骨^{きだし}にこつちから話しかけて、当人の許諾を得た事実だけを田口

に報告した方が、今更遅^{おそまき}蒔^{まき}のようでも、まだ気が利^きいていやしないかと考えて、自分で自分を彼に紹介する便^{べん}法^{ぽう}を工夫し始めた。そのうち電車はとうとう終点まで来た。雨はますます烈しくなつたと見えて、車がとまるとざあという音が急に彼の耳を襲^{おそ}つた。中折の男は困つたなど云いながら、外^{がい}套^{とう}の襟^{えり}を立てて洋袴^{ズボン}の裾^{すそ}を返した。敬太郎は洋杖を突きながら立ち上つた。男は雨の中へ出ると、直^{すぐ}寄^よつて来る俾^{くるまひき}引^{つら}を捕^{つか}まえた。敬太郎も後^{おく}れなように一台雇^かつた。車夫は梶^{かじ}棒^{ぼう}を上げながら、どちらへと聞いた。敬太郎はあの車の後^{あと}について行けと命じた。車夫はへいと云つてむやみに馳^かけ出した。一筋道^{やらい}を矢来^{やらい}の交番の下まで来ると、車夫は又梶棒をとめて、旦那どっちへ行くんですと聞いた。男の

乗った車はいくら幌ほろの内から延び上つても影さえ見えなかつた。
敬太郎は車上に洋杖を突つ張つたまま、雨の音のする中で方角に迷つた。

報告

一

眼が覚めると、自分の住み慣れた六畳に、いつもの通り寝ている自分が、敬太郎けいたろうには全く変に思われた。昨日きのうの出来事はすべ

て本当のようでもあつた。また纏まりまとのない夢のようでもあつた。もつと綿密に形容すれば、「本当の夢」のようでもあつた。酔つた気分で町の中に活動したという記憶も伴なつていた。それよりか、酔つた気分が世の中に充ちみ充ちていたという感じが一番強かつた。停留所も電車も酔つた気分みに充ちていた。宝石商も、革屋かわやも、赤と青の旗振りも、同じ空気に酔つていた。薄青いペンキ塗の洋食店の二階も、そこに席を占めた眉まゆの間に黒子ほくろのある紳士も、色の白い女も、ことごとくこの空気に包まれていた。二人の話しに出て来る、どこにあるか分らない所の名も、男が女にやる約束をした珊瑚さんごの珠たまも、みんな陶然とうぜんとした一種の気分を帯びていた。最もこの気分みに充ちて活躍したものは竹の洋杖ステッキであつた。彼が

その洋杖を突いたまま、幌ほろを打つ雨の下で、方角に迷った時の心持は、この気分の高潮に達した幕前の一区切ひとくぎりとして、ほとんど狐から取り憑つかれた人の感じを彼に与えた。彼はその時店の灯ひで佗わびしく照らされたびしよ濡ぬれの往来と、坂の上に小さく見える交番と、その左手にぼんやり黒くうつる木立とを見廻して、はたしてこれが今日の仕事の結末かと疑ぐつた。彼はやむを得ず車夫に梶かじ棒ぼうを向け直させて、思いも寄らない本郷へ行けと命じた事を記憶していた。

彼は寝ながら天てん井じょうを眺ながめて、自分に最も新らしい昨日の世界を、幾順となく眼の前に循環させた。彼は二日酔ふつかよいの眼と頭をもつて、蚕かいこの糸を吐はくようにそれからそれへと出てくるこの記念かたみ

の画えを飽あかず見みつめていたが、しまいには眼先たに漂たようふわふわした夢うるぎの蒼蠅ささに堪たえなくなつた。それでも後あとから後あとからと向むかうで独ひとり勝手がつて現あわれて来るので、彼は正氣までありながら、何なにかに魅入まられたのではなからうかと云いう疑ぎさえ起おした。彼はこの浅あい疑ぎに関かん聯れんして、例れいの洋杖やうじやうを胸むねに思おもい浮うべざるを得えなかつた。昨日きのうの男おとこも女めも彼の眼まなこには絵えを見るほど明あらかであつた。容よう貌ぼうは固もとより服ふく装なりから歩あきつきに至いたるまでことごとく記憶きこくの鏡かがみに判は切きりと映うつつた。それでいて二人ふたりとも遠とほくの国くににいるよような心持こころもちがした。遠とほくの国くににいないながら、つつい近ちかくにあるものを見るよように、鮮あざやかな色いろと形かたちを備そなへて眸ひとみを侵おかして来きた。この不思議ふしぎな影かげ響きやうが洋杖やうじやうから出でたかも知しれないといいう神しん經けいを敬けい太郎たろうはどどこかに持もつていた。彼

は昨夕ゆうべ法外な車賃を貪ぼられて、宿の門かどぐち口を潜くぐった時、何心なくその洋杖を持ったまま自分の室へやまで帰って来て、これは人の目に触れる所に置くべきものでないという顔をして、寝る前に、戸と棚だなの奥の行李こくりうの後へ投げ込んでしまったのである。

今朝けさは蛇へびの頭にそれほどの意味がないようにも思われた。ことにこれから田口に逢って、探偵の結果を報告しなければならぬと云う實際問題の方が頭に浮いて来ると、なおさらそういう感じが深くなった。彼は一日の午後から宵よいへかけて、妙に一種の空気に酔わされた気分で活動した自覚はたしかにあるが、いざその活動の結果を、普通の人間が処世上に利用できるように、筋の立つた報告に纏まとめる段になると、自分の引き受けた仕事は成せい効こうして

いるのか失敗しているのかほとんど分らなかつた。したがって洋^ステツキ杖の御蔭を蒙^{おかげ}つて^{こうむ}いるのか、いないのかも判然しなかつた。床の中で前後をくり返した敬太郎には、まさしくその御蔭を蒙^{おかげ}つて^{こうむ}いるらしくも見えた。またけつしてその御蔭を蒙^{おかげ}つて^{こうむ}いないようにも思われた。

彼はともかくも二日酔の魔を払い落してからの事だと決心して、急に夜着^{よぎ}を剥^はぐつて跳^はね起きた。それから洗面所へ下りて氷るほど冷めたい水で頭をざあざあ洗った。これで昨日^{きのう}の夢を髪^{かみ}の毛の根本から振り落して、普通の人間に立ち還つたような気になれたので、彼は景気よく三階^{さんかい}の室^{むろ}に上^{のぼ}つた。その窓を潔^{いさ}ぎよく明け放した彼は、東向に直立して、上野の森の上から高く射す太陽の

光を全身に浴びながら、十遍ばかり深呼吸をした。こう精神作用を人間並に刺戟しげきした後で、彼は一服しながら、田口へ報告すべき事柄の順序や条項について力つとめて實際的に思慮を回めぐらした。

二

突きとめて見ると、田口の役に立ちそうな種はまるで上がっていないようにも思われるので、敬太郎けいたろうは少し心細くなって来た。けれども先方では今朝にも彼の報告を待ち受けているように気が急せくので、彼はさっそく田口家へ電話を掛けた。これから直行すぐつていいかと聞くと、だいぶ待たした後あとで、差支さしつかえないという答が、

例の書生の口を通して来たので、彼は猶予なく内幸町へ出かけた。

田口の門前には車が二台待っていた。玄関にも靴と下駄が一足ずつあった。彼はこの間と違って日本間の方へ案内された。そこは十畳ほどの広い座敷で、長い床に大きな懸物が二幅掛かっていた。湯呑のような深い茶碗に、書生が番茶を一杯汲んで出した。桐を刳った手焙も同じ書生の手で運ばれた。柔かい座蒲団も同じ男が勧めてくれただけで、女はいつさい出て来なかつた。敬太郎は広い室の真中に畏まって、主人の足音の近づくのを窮屈に待った。ところがその主人は用談が果てないと見えて、いつまで待ってもなかなか現われなかつた。敬太郎はやむを得ず茶色になつた古そうな懸物の価額を想像したり、手焙の縁を撫で廻し

たり、あるいは袴はかまの膝ひざへきちりと両手を乗せて一人改たまつて見たりした。すべて自分の周囲まわりがあまり綺麗きれいに調ととのっているだけに、居心地がが新らし過ぎて彼は容易に落ちつけなかつたのである。しまいちがいだなに違ちがい棚たなの上にある画帖がじょうらしい物を取りおろしてみようかと思つたが、その立派な表紙が、これは装飾だから手を触れちゃいけないと断ことわるように光るので、彼はついに手を出しかねた。こう敬太郎の神経を悩ました主人は、彼をやや小一時間も待たした後あとで、ようやく応接間から出て来た。

「どうも長い間御待たせ申して。——客がなかなか帰らないものだから」

敬太郎はこの言訳に対して適當と思うような挨拶あいさつを一口と、

それに添えた叮嚀^{ていねい}な御辞儀^{おじぎ}を一つした。それからすぐ昨日^{きのう}の事を云い出そうとしたが、何をどう先に述べたら都合がいいか、この場に臨んで急にまた迷い始めたうちに、切り出す機^{からだ}を逸してしまった。主人はまた冒頭からさも忙がしそうに声も身体^{からだ}も取り扱^あかっている癖^あに、どこか腹の中に余裕^{よゆう}の貯蔵庫^あでもあるように、けっして周章^{あわて}て探偵の結果を聞きたがらなかつた。本郷では氷が張るかとか、三階では風が強^あく当るだろうとか、下宿にも電話があるのかとか、調子は至極^{しごく}面白^あそうだけれども、その実つまらない事ばかり話の種にした。敬太郎は向うの問に従^あつて主人の満足する程度にわが答^あえを運^あんでいたが、相手はこんな無意味な話を進^あめて行くうちに、暗^{あん}に彼の様子^あを注意^あしているらしかつた。そ

こまでは彼もぼんやり気がついた。しかし主人がなぜそんな注意を自分に払うのか、その訳はまるで解らなかつた。すると、

「どうです昨日は。旨く行きましたか」と主人が突然聞き出した。こう聞かれるだろうぐらいの腹は始めから敬太郎にもあつたのだが、正直に答えれば、「どうですか」という他を馬鹿にした生返事になるので、彼はちよつと口籠つた後、

「そうです御通知のあつた人だけはやつと探し当てました」と答えた。

「眉間に黒子がありましたか」

敬太郎は少し隆起した黒い肉の一点を局部に認めたと答えた。
「衣服もこつちから云つて上げた通りでしたか。黒の中折に、

霜降しもふりの外套がいとうを着て」

「そうです」

「それじゃ大抵間違はないでしょう。四時と五時の間に小川町で降りたんですね」

「時間は少し後おくれたようです」

「何分ぐらい」

「何分か知りませんが、何でも五時よつぽど過すぎのようでした」

「よつぽど過すぎ。よつぽど過ならそんな人を待つていなくても好いじゃありませんか。四時から五時までの間と、わざわざ時間を切つて通知して上げたくらいだから、五時を過ぎればもうあなたの義務はすんだも同然じゃないですか。なぜそのまま帰つて、その

通り報知しないんです」

今までおだ穏やかにきげん機嫌よく話していた ちようしや長者から突然こう手てきび厳しくやりつけられようとは、敬太郎は夢にも思わなかった。

三

敬けいたろう太郎は今まで したまちで下町出の旦那を眼の前に描いていた。それ

が突然規律づくめの軍人として彼を威圧して来た時、彼はたちまち心の中心を狂わした。友達に対してなら云い得る「君のためだから」という言葉も あいさつ挨拶も有もつていたのだが、この場合にはそれがまるで役に立たなかった。

「ただ私の勝手で、時間が来てもそこを動かなかったのです」

敬太郎がこう答えるか答えないうちに、田口は今のきつとした態度をすぐ崩くずして、

「そりや私わたしのために大変都合が好かつた」と機嫌きげんの好い調子で受けたが、「しかしあなたあなたの勝手と云うのは何です」と聞き返した。敬太郎は少ししゆんじゆん逡巡しゆんじゆんした。

「なにそりや聞かないでも構いません。あなたの事だから。話したくなければ話さないでも差支さしつかえない」

田口はこう云つて、自分の前に引きつけた手提煙草盆てさげたばこぼんの抽ひきだ出しを開けると、その中から角つのでできた細長い耳搔みみかき搔さがを捜し出した。それを右の耳の中に入れて、さも痒かゆそうに搔かき廻した。敬

太郎は見ないふりをしてわざと自分を見ているような、また耳だけに気を取られているような、田口の蹙しかめつら面を薄気味悪く感じた。

「実は停留所に女が一人立っていたのです」と彼はとうとう自白してしまった。

「年寄ですか、若い女ですか」

「若い女です」

「なるほど」

田口はただ一口こう云っただけで、何とも後を継いでくれなかった。敬太郎も頓挫とんざしたなり言葉を途切とぎらした。二人はしばらく差向いのまま口を聞かずにいた。

「いや、若かろうが年寄だろうが、その婦人の事を聞くのはよくなかった。それはあなただけに關係のある事なんでしょうから、止しにしましょう。私の方じやただ顔に黒子ほくろのある男について、研究の結果さえ何がえばいいんだから」

「しかしその女が黒子のある人の行動に始終しじゅう入り込んでくるのです。第一女の方で男を待ち合わせていたのですから」

「はあ」

田口はちよつと思ひも寄らぬという顔つきをしたが、「じやその婦人はあなたの御知合でも何でもないのですね」と聞いた。敬太郎は固もとより知合だと答える勇氣を有もたなかつた。きまりの悪い思ひをして、見た事も口を利きいた事もない女だと正直に云わな

ければならなかった。田口はそうですかと、穏かに敬太郎の返事を聞いただけで、少しも追窮する気色を見せなかったが、急に摧けた調子になって、

「どんな女なんです。その若い婦人と云うのは。器量からいう」と興味に充ちた顔を提煙草盆の上に出した。

「いえ、なに、つまらない女なんです」と敬太郎は前後の行きがかり上答えてしまつて、實際頭の中でもつまらないような気がした。これが相手と場合しだいでは、うん器量はなかなか好い方だぐらいは固より云い兼ねなかつたのである。田口は「つまらない女」という敬太郎の判断を聞いて、たちまち大きな声を出して笑つた。敬太郎にはその意味がよく解らなかつたけれども、何でも

頭の上で大濤おおなみが崩れたような心持がして、幾分か顔が熱くなつた。

「よござんす、それで。——それからどうしました。女が停留所で待ち合わしているところへ男が来て」

田口はまた普通の調子に戻つて、真面目まじめに事件の経過を聞こうとした。実をいうと敬太郎は自分がこれから話す顛末てんまつを、どうして握る事ができたかの苦心談を、まず冒頭に敷衍ふえんして、二つある同じ名の停留所の迷つた事から、不思議な謎なぞの活いきて働らく洋ス杖テツキを、どう抱かかえ出して、どう利用したかに至るまでを、自分の手柄てがらのなるべく重く響くように、詳しく述べたかつたのであるが、会いうや否いなや四時と五時とのいきさつでやられた上に、勝手に見張

りの時間を延ばした原因になる例の女が、原因にも何にもならな
い見ず知らずの女だったりした不味まずいところがあるので、自分を
広告する勇氣は全く抜けていた。それで男と女が洋食屋へ入つて
から以後の事だけをごく淡泊あっさり話して見ると、宅うちを出る時自分が
心配していた通り、少しも捕つかまえどころのない、あたかも灰色の
雲を一握り田口の鼻の先で開いて見せたと同じような貧しい報告
になった。

四

それでも田口は別段厭いやな顔も見せなかつた。落ちついた腕組を

しまいまで解かずに、ただふんとか、なるほどとか、それからとか云う繋ぎつなの言葉を、時々敬太郎けいたろうのために投げ込んでくれるだけであつた。その代り報告の結末が来ても、まだ何か予期しているように、今までの態度を容易に変えなかつた。敬太郎は仕方なしに、「それだけです。実際つまらない結果で御氣の毒です」と言訳をつけ加えた。

「いやだいが参考になりました。どうも御苦労でした。なかなか骨が折れたでしよう」

田口のこの挨拶あいさつの中に、大した感謝の意を含んでいない事は無論であつたが、自分が馬鹿に見えつつある今の敬太郎にはこれだけの愛あい嬌きょうが充分以上に聞こえた。彼は辛うじて恥を搔かかず

にすんだという安心をこの時ようやく得た。同時に垂味たるみのできた気分が、すぐ田口に向いて働らきかけた。

「いったいあの人は何なんですか」

「さあ何でしょうか。あなたはどうぞ鑑定しました」

敬太郎の前には黒の中折なかおれを被かぶつて、襟開えりあきの広い霜降しもふりの外が套いとを着た男の姿がありありと現われた。その人の様子ようすといい言こと葉遣とばづかいといい歩きつきといい、何から何まで判はつきり切見えたには見えたが、田口に対する返事は一口も出て来なかつた。

「どうも分りません」

「じゃ性質はどんな性質でしょう」

性質なら敬太郎にもほぼ見けんとう当あがついていた。「穏おだやかな人ら

しく思いました」と観察の通りを答えた。

「若い女と話しているところを見て、そう云うんじやありませんか」

こう云つた時、田口の唇くちびるの角に薄笑の影がちらついているのを認めた敬太郎は、何か答えようとした口をまた塞ふさいでしまった。

「若い女には誰でも優やさしいものですよ。あなただつて満まんざら更経験のない事でもないでしょう。ことにあの男と来たら、人一倍そうなのかも知れないから」と田口は遠慮なく笑い出した。けれども笑いながらちゃんと敬太郎の上に自分の眼を注いでいた。敬太郎は傍はたで自分を見たらさぞ気の利きかない愚物ぐぶつになつてゐるんだらうと考えながらも、やつぱり苦しい思いをして田口と共に笑わなけ

ればいられなかつた。

「じゃ女は何物なんでしよう」

田口はここで観察点を急に男から女へ移した。そうして今度は自分の方で敬太郎にこういう質問を掛けた。敬太郎はすぐ正直に「女の方は男よりもなお分り悪いにくです」と答えてしまった。

「素しろ人ろうとだか黒くろ人ろうとだか、大体の区別さえつきませんか」

「さよう」と云いながら、敬太郎はちよつと考がえて見た。革かわの

手袋だの、白い襟えり巻まきだの、美くしい笑い顔だの、長いコートだ

の、続々記憶の表面に込み上げて来たが、それを綜すべ括くくつたところ

でどこからもこの問に応ぜられるような要領は得られなかつた。

「割合に地味なコートを着て、革の手袋を穿はめていましたか……」

女の身に着けた品物の中で、特に敬太郎の注意を惹いたこの二点も、田口には何の興味も与えないらしかった。彼はやがて真面目な顔をして、「じゃ男と女の關係について何か御意見はありませんか」と聞き出した。

敬太郎は先刻自分の報告が滞りなく済んだ証拠に、御苦労さまで云う謝辞さえ受けた後で、こう難問が続発しようとは毫も思いがけなかった。しかも窮しているせいか、それが順をおってだんだんむずかしい方へ競り上って行くように感ぜられてならなかった。田口は敬太郎の行きづまった様子を見て、再び同じ問をほかの言葉で説明してくれた。

「例えば夫婦だとか、兄弟だとか、またはただの友達だとか、

情婦だとかですね。いろいろな関係があるうちで何だと思いますか」

「私も女を見た時に、処女だろうか細君だろうかと考えたんです
が……しかしどうも夫婦じゃないように思います」

「夫婦でないにしてもですね。肉体上の関係があるものと思いま
すか」

五

敬太郎けいたろうの胸にもこの疑うたがは最初から多少萌きざさないでもなかつた。
改ためて自分の心を解剖して見たら、彼ら二人の間に秘密の関係

がすでに成立しているという仮定が遠くから彼を操つて、それがために偵察の興味が一段と鋭く研ぎ澄まされたのかも知れなかつた。肉と肉の間に起るこの關係をほかにして、研究に価する交渉は男女の間に起り得るものでないと主張するほど彼は理論家ではなかつたが、暖たかい血を有つた青年の常として、この觀察点から男女を眺めるときに、始めて男女らしい心持が湧いて来るとは思つていたので、なるべくそこを離れずに世の中を見渡したかつたのである。年の若い彼の眼には、人間という大きな世界があまり判切分らない代りに、男女という小さな宇宙はかく鮮やかに映つた。したがつて彼は大抵の社会的關係を、できるだけこの一点まで切落して楽しんでいた。停留所で逢つた二人の關係

も、敬太郎の氣のつかない頭の奥では、すでにこういう一対いっついの男女として最初から結びつけられていたらしかった。彼はまたその背後に罪悪を想像して要もないのに恐れを抱いだくほどの道德家でもなかつた。彼は世間並な道義心の所有者としてありふれた人間の一人いちにんであつたけれども、その道義心は彼の空想力と違つて、いざという場合にならなければ働らかないのを常とするので、停留所の二人を自分に最も興味のある男女關係に引き直して見ても、別段不愉快にはならずにすんだのである。彼はただ年齢としの上において二人の相違の著るしいのを疑ぐつた。が、また一方ではその相違がかえつて彼の眼に映ずる「男女の世界」なるものの特色を濃く示しているようにも見えた。

彼の二人に対する心持は知らず知らずの間にこう弛ゆるんでいたのだが、いよいよそうかと正式に田口から質問を掛けられて見ると、断然とした返答は、責任のあるなしにかかわらず、纏まとまった形となつて頭の中には現われ悪にくかつた。それでこう云つた。――

「肉体上の関係はあるかも知れませんが、無いかも分りません」

田口はただ微笑した。そこへ例の袴はかまを穿はいた書生が、一枚の名刺を盆のに載せて持つて来た。田口はちよつとそれを受取つたまま、

「まあ分らないところが本当でしょう」と敬太郎に答えたが、すぐ書生の方を見て、「応接間へ通しておいて……」と命令した。

先刻さつきからよほど窮きつしていた矢先だから、敬太郎はこの来客を好いしお機しおに、もうここで切り上げようと思つて身繕みづくろいにかかると、田

口はわざわざ彼の立たない前にそれを遮ぎささえった。そうして敬太郎の辟易へきえきするのに頓とんじやく着やくなくなお質問を進行させた。そのうちで敬太郎の明瞭めいりように答えられるのはほとんど一カ条もなかった。彼は大学で受けた口答試験の時よりもまだ辛いつらい思いをした。「じゃこれぎりにはしますが、男と女の名前は分りましたらう」

田口の最後と断ことわつたこの問に対しても、敬太郎は固もとより満足な返事を有もつていなかった。彼は洋食店で二人の談話に注意を払う間にも何々さんとか何々子とかあるいは御何おなにとかいう言葉がきつとどこかへ交まじつて来るだろうと心待に待っていたのだが、彼らは特にそれを避ける必要でもあるごとくに、御互の名はもちろん、第三者の名もけつして引合にさえ出さなかつたのである。

「名前も全く分りません」

田口はこの答を聞いて、手^{てあぶり}焙の胴に当てた手を動かしながら、拍^{ひょうし}子を取るように、指先で桐^{きり}の縁^{ふち}を敲^{たた}き始めた。それをしばらくくり返した後^{あと}で、「どうしたんだか余^{あん}まり要領を得ませんね」と云ったが、直^{すぐ}言葉を継^ついで、「しかしあなたは正直だ。そこがあなたの美点だろう。分らない事を分つたように報告するよりもよっぽど好いかも知れない。まあ買えばそこをかうんですね」と笑い出した。敬太郎は自分の観察が、はたして実用に向かなかつたのを発見して、多少わが迂^{うかつ}闊に恥じ入る気も起つたが、しかしわずか二三時間の注意と忍耐と推測では、たとい自分より十層倍行き届いた人間に代理を頼んだところで、田口を満足させるよう

な結果は得られる訳のものでないと固く信じていたから、この評価に対してそれほど苦痛も感じなかった。その代り正直と賞められた事も大した嬉しさにはならなかった。このくらいの正直さ加減は全くの世間並に過ぎないと彼には見えたからである。

六

敬太郎は先刻から頭の上らない田口の前で、たった一言で好いから、思い切った自分の腹をずばりと云つて見たいと考えていたが、ここで云わなければもう云う機会はあるまいという気がこの時ふと萌した。

「要領を得ない結果ばかりで私もはなはだ御氣の毒に思っているんですが、あなたの御聞きになるような立ち入った事が、あれだけの時間で、私のような迂闊うかつなものに見極みきわめられる訳はないと思います。こういうと生意氣に聞こえるかも知れませんが、あんな小刀細工をして後あとなんか跟つけるより、直じかに会って聞きたい事だけ遠慮なく聞いた方が、まだ手数てかずが省はぶけて、そうして動かない確かなところが分りやしないかと思うのです」

これだけ云った敬太郎は、定めて世故せこに長たけた相手から笑われるか、冷かされる事だろうと考えて田口の顔を見た。すると田口は案外にもむしろ真面目まじめな態度で「あなたにそれだけの事が解っていましたか。感心だ」と云った。敬太郎はわざと答を控えてい

た。

「あなたのいう方法は最も迂闊のようで、最も簡便なまた最も正当な方法ですよ。そこに気がついていけば人間として立派なものです」と田口が再びくり返した時、敬太郎はますます返答に窮した。

「それほどかんがえの考がちやんとあるあなたに、あんなつまらない仕事を御頼おたのみ申したのは私わたしが悪かった。人物を見損みそくなったのも同然なんだから。が、市蔵があなたを紹介する時に、そう云いましたよ。あなたは探偵のやるような仕事に興味を有もっておいでだって。それでね、ついとんでもない事を御願ごんいして。止よしやあよかった：

…」

「いえ須永君にはそう云う意味の事をたしかに話した覚えがあります」と敬太郎は苦しい思おもいをして答えた。

「そうでしたか」

田口は敬太郎の矛盾をこの一句で切り棄すてたなり、それ以上に追窮する愚ぐをあえてしなかつた。そうして問題をすぐ改めて見せた。

「じゃどうでしょう。黙って後などを跟けずに、あなたのいう通り尋常に玄関からかかつて行っちゃ。あなたにそれだけの勇氣がありますか」

「無い事ありません」

「あんなに跟け廻した後で」

「あんなに跟け廻したって、私はあの人達の不名誉になるような観察はけっしてしていませんつもりです」

「ごもつともだ。そんなら一つ行つて御覧なさい。紹介するから」

田口はこう云いながら、大きな声を出して笑つた。けれども敬

太郎にはこの申し出が万更まんざらの冗談じょうだんとも思えなかつたので、

彼は紹介状を携たずさえて本当に眉間みけんの黒子ほくろと向き合つて話して見よう

かという料簡りょうけんを起した。

「会いますから紹介状を書いて下さい。私はあの人と話して見たい気がしますから」

「宜いいでしょう。これも経験の一つだから、まあ会つて直じかに研究して御覧なさい。あなたの事だから田口に頼まれてこの間の晩後あと

を跟つけましたぐらいきつと云うでしょう。しかしそれは構かわらない。云いたければ云つても宜ようござんす。私わたしに遠慮えんりょは要いらないから。それからあの女との関係もですね、あなたに勇氣ゆうきさえあるなら聞いて御覽ごらんなさい。どうです、それを聞くだけの度胸どこぶがあなたにありますか」

田口はここでちよつと言葉を切らして敬太郎の顔を見たが、答こたの出いないうちにまた自分から話を続けた。

「だが両方とも口へ出せるように自然が持ちかけて来るまでは、聞いても話してもいけませんよ。いくら勇氣ゆうきがあつたつて、常識じょうしきのない奴やつだと思おもわれるだけだから。それどころじゃない、あの男おとこはただでさえ随分会あい悪にくい方ほうなんだから、そんな事をむやみに喋しゃ

べろうものなら、直帰すぐつてくれぐらい云い兼ねないですよ。紹介せうかいをして上げる代りには、そこいらはよく用心しないとね……」

敬太郎は固もとより畏かしこまりましたと答えた。けれども腹の中では黒なかおれ折なの男を田口のように見る事がどうしてもできなかつた。

七

田口は硯すずりばこ箱ばこと巻紙を取り寄せて、さらさらと紹介状を書き始めた。やがて名宛なあてを認め終ると、「ただ通り一遍の文もん言ごんだけ並べておいたらそれで好いでしよう」と云いながら、手焙てあぶりの前に翳かざした手紙を敬太郎けいたろうに読んで聞かせた。その中には書いた当

人の自白したごとく、これといつて特別の注意に^{あた}仕^する事は少しも出て来なかつた。ただこの者は今年大学を卒業したばかりの法学士で、ことによると自分が世話をしなければならぬ男だから、どうか会つて話をしてやつてくれとあるだけだつた。田口は異存のない敬太郎の顔を見届けた上で、すぐその巻紙をぐるぐると巻いて封筒へ入れた。それからその表へ松本恒三様と大きく書いたなり、わざと封をせずに敬太郎に渡した。敬太郎は真面目^{まじめ}になつて松本恒三様の五字を眺^{なが}めたが、肥^{ふと}つた締^{しま}りのない書体で、この人がこんな字を書くかと思つ^{せつ}うほど拙^{せつ}らしくできていた。

「そう感心していつまでも眺^{なが}めていちやあいけない」

「番地^{ばんち}が書いてないようですが」

「ああそうか。そいつは私の失念だ」

田口は再び手紙を受け取って、名宛の人の住所と番地を書き入れてくれた。

「さあこれなら好いでしょう。不味まずくって大きなところは土橋どばしのおおずおおずしりしりゆうゆう大寿司流おおずしりゆうとでも云うのかな。まあ役に立ちさえすればよかろう、

我慢なさい」

「いえ結構です」

「ついでに女の方へも一通書きましようか」

「女も御存じなのですか」

「ことによると知ってるかも知れませんが」と答えた田口は何だか意味のありそうに微笑した。

「御差支おさしつかえさえなければ、おついでに一本書いていただいても宜よろしゅうございます」と敬太郎も冗じょうだん談だん 半分に頼んだ。

「まあ止した方が安全でしょうね。あなたのような年の若い男を紹介して、もし間違でもできると責任問題だから。浪漫ローマン—何とか云うじゃありませんか、あなたのような人の事を。私わたしや学問がないから、今頃流行はやるハイカラな言葉を直忘すぐれちまつて困るが、何とか云いましたっけね、あの、小説家の使う言葉は。……」

敬太郎はまさかそりやこう云う言葉でしようと教える気にもなれなかった。ただエへへと馬鹿みたように笑っていた。そうして長居をすればするほど、だんだん非道ひどく冷かされそうなので、心の内では、この一段落がついたら、早く切り上げて帰ろうと思っ

た。彼は田口のくれた紹介状を懐ふところに収めて、「では二三日内うちにこれを持って行つて参りましょう。その模様でまた伺がう事に致しますから」と云いながら、柔やわらかい座蒲団ざぶとんの上を滑すべり下りた。田口は「どうも御苦勞でした」と叮嚀ていねいに挨拶あいさつしただけで、ロマンチックもコスメチックもすっかり忘れてしまったという顔つきをして立ち上つた。

敬太郎は帰り途に、今会つた田口と、これから会おうという松本と、それから松本を待ち合わせた例の恰好かっこうのいい女とを、合せたり離したりしてしきりにその關係を考えた。そうして考えれば考えるほど一歩メーずつ迷宮メーの奥に引き込まれるような面白味を感じた。今日田口きょうでの獲物えものは松本という名前だけであるが、この名

前がいろいろに錯綜さくそうした事実を自分のために締め括くくっている妙な囊ふくろのように彼には思えるので、そこから何が出るか分らないだけそれだけ彼には楽みが多かった。田口の説明によると、近寄にく悪い人のようにも聞こえるが、彼の見たところでは田口より数倍話しがしやすそうであつた。彼は今日田口から得た印象のうちに、人を取扱とくう点にかけてなるほど老練だという嘆美たんびの声を見出した上、人物としてもどこか偉そうに思われる点が、時々彼の眼を射るようにならちら輝きらやいたにもかかわらず、その前に坐すわっている間、彼は始終しじゅう何物にか縛しばられて自由に動けない窮屈きうくつな感じを取り去る事ができなかつた。絶えず監視もとの下に置かれたようなこの状態は、一時性のものでなくって、いくら面会の度数を重ねても、

けつして薄らぐ折はなかろうとまで彼には見えたくらいである。彼はこういう風に気のおける田口と反対の側に、何でも遠慮なく聞いて怒られそうにない、話し声その物のうちにすでに懐かし味の籠ったような松本を想像してやまなかつた。

八

翌朝よくあささつそく支度をして松本に会いに行こうと思つていとあいにく寒い雨が降り出した。窓を細目に開けて高い三階から外を見渡した時分には、もう世の中が一面に濡ぬれていた。屋根やねがわら瓦わらに徹とおるような佗わびしい色をしばらく眺ながめていた敬太郎けいたろうは、田口

の紹介状を机の上に置いて、出ようか止そうかとちよつと思案したが、早く会つて見たいという気が強く起るので、とうとう机の前を離れた。そうして豆腐屋の喇叭らっぱが、陰気な空気を割さいて鋭どく往来に響く下の方へ降りて行つた。

松本うちの家は矢来やらいなので、敬太郎はこの間の晚狐きつねにつままれたと同じ思いをした交番下の景色けしきを想像しつつ、そこへ来ると、坂下と坂上が両方共ふたまた二股に割れて、勾配こうばいのついた真中はかますそだけがいびつに膨ふくれているのを発見した。彼は寒い雨の袴はかまの裾すそに吹きかけるのも厭いとわずに足を留めて、あの晩車夫が梶かじ棒ぼうを握つたまま立往生をしたのはこのへんだらうと思う所を見廻した。今日も同じように雨がざあざあ落ちて、彼の踏んでいる土は地下の鉛管まで腐

れ込むほど濡れていた。ただ昼だけに周囲は暗いながらも明るいので、立ちどまった時の心持はこの間とはまるで趣が違っていた。敬太郎は後の方に高く黒ずんでいる目白台の森と、右手の奥に朦朧と重なり合った水稲荷の木立を見て坂を上った。それから同じ番地の家の何軒でもある矢来の中をぐるぐる歩いた。始めのうちは小さい横町を右へ折れたり左へ曲つたり、濡れた枳殻の垣を覗いたり、古い椿の生い被さっている墓地らしい構の前を通つたりしたが、松本の家は容易に見当らなかつた。しまいに尋ねあぐんで、ある横町の角にある車屋を見つけて、そこの若い者に聞いたら、何でもない事のようにすぐ教えてくれた。

松本の家はこの車屋の筋向うを這入った突き当りの、竹垣に囲

われた綺麗な住居であつた。門を潜ると子供が太鼓を鳴らしている音が聞こえた。玄関へかかつて案内を頼んでもその太鼓の音は毫もやまなかつた。その代り四辺は森閑として人の住んでいる臭さえしなかつた。雨に鎖された家の奥から現われた十六七の下女は、手を突いて紹介状を受取つたなり無言のまま引つ込んだが、しばらくしてからまた出て来て、「はなはだ勝手を申し上げてすみませんでございりますが、雨の降らない日においてを願えますまいか」と云つた。今まで就職運動のため諸方へ行つて断わられてきている敬太郎にも、この断り方だけは不思議に聞こえた。彼はなぜ雨が降つては面会に差支えるのか直反問したくなつた。けれども下女に議論を仕かけるのも一種変な場合なので、「じゃ御

天氣の日に何がえはば御目にかかれるんですね」と念ねんばら晴しに聞き直して見た。下女はただ「はい」と答えただけであつた。敬太郎は仕方なしにまた雨の降る中へ出た。ざあと云う音が急に烈はげしく聞こえる中に、子供の鳴らす太鼓がまだどんどん響いていた。彼は矢来の坂を下おりながら変な男があつたものだという観念を数す度どくり返した。田口がただでさえ会あい悪にくいと云つたのは、こんなところを指すのではなからうかとも考えた。その日は家うちへ歸つても、気分が中止の姿勢に余儀なく据すえつけられたまま、どの方角へも進行できないのが苦痛になつた。久しぶりに須永すながの家うちへでも行つて、この間からの顛てんまつ末を茶話に半日を暮らそうかと考えたが、どうせ行くなら、今の仕事に一段落つけて、自分にも見けんとう当

の立つた筋を吹ふいちよう聴きするのでなくては話しばいもしないので、
ついに行かずじまいにしてしまった。

あくるひ 翌日は昨日きのう

らゆる濁にごりを雨の力で洗い落したように綺麗きれいに輝やく蒼空あおぞらを、眩まば
ゆそうに仰ぎ見た敬太郎は、今日きようこそ松本に会えると喜こんだ。

彼はこの間の晩行李こくりうしろの後に隠しておいた例の洋杖ステッキを取り出して、

今日は一つこれを持って行って見ようと考がえた。彼はそれを突
いて、また矢来やらいの坂を上りながら、昨日の下女すこが今日も出て来て、
せつかくですが今日は御天気過ぎますから、も少し曇った日にお
いで下さいましと云つたらどんなものだろうと想像した。

九

ところが昨日と違って、門を潜くぐつても、子供の鳴らす太鼓の音は聞こえなかつた。玄関にはこの前目に着かなかつた衝立ついたてが立っていた。その衝立には淡彩たんさいの鶴がたった一羽佇たたずんでいるだけで、姿見のように細長いその格好かつこうが、普通の寸法と違って、意味で敬太郎の注意を促うなががした。取次には例の下女が現われたには相違ないが、その後あとから遠慮のない足音をどんだん立てて二人の小供が衝立の影まで来て、珍らしそうな顔をして敬太郎を眺ながめた。昨日に比べるとこれだけの変化を認めた彼は、最後にどうぞという案内と共に、硝子戸ガラスどの締しまっている座敷へ通つた。その

真中にある金魚鉢のように大きな瀬戸物の火鉢ひばちの両側に、下女ぎぶとん座蒲団を一枚ずつ置いて、その一枚を敬太郎の席とした。その座蒲団は更紗さらせの模様を染めた真丸の形をしたものなので、敬太郎は不思議そうにその上へ坐すわった。床とこの間には刷毛はけでがしがしと粗ぞんざ末いに書いたような山さん水すいの軸じくがかかっていた。敬太郎はどこが樹いでどこが巖いわだか見分のつかない画えを、軽蔑けいべつに値する装飾品のごとく眺ながめた。するとその隣りに銅鑼どらが下さがつていて、それを叩たたく棒ぼうまで添そえてあるので、ますます変へつた室むろだと思おもった。

すると間あいの襖ふすまを開あけて隣座敷ほくろから黒子ほくろのある主人しゅじんが出て来た。

「よくおいでです」と云いつたなり、すぐ敬太郎の鼻はなの先に坐まつたが、その調子てうしはけつして愛あい嬌きやうのある方かたではなかつた。ただど

こかおつとりしているので、相手に余り重きを置かないところが、かえつて敬太郎に楽な心持を与えた。それで火鉢一つを境に、顔と顔を突き合わせながら、敬太郎は別段気がつまる思もせずにいられた。その上彼はこの間の晩、たしかに自分の顔をここの主人に覚えられたに違ないと思ひ込んでいたにもかかわらず、今会つて見ると、覚えているのだから、いないのだから、平然としてそんな素振は、口にも色にも出さないのだから、彼はなおさら気兼ねきがねの必要を感じなくなつた。最後に主人は昨日雨天のため面会を謝絶した理由も言訳も一言も述べなかつた。述べたくなかつたのか、述べなくつても構わないと認めていたのか、それすら敬太郎にはまるで判断がつかなかつた。

話は自然の順序として、紹介者になった田口の事から始まった。

「あなたはこれから田口に使つて貰もらおうというのでしたね」というのを冒頭に、主人は敬太郎の志望だの、卒業の成績だのを一通り聞いた。それから彼のいまだかつて考えた事もない、社会観とか人生観とかいうこむずかしい方面の問題を、時々持ち出して彼を苦しめた。彼はその時心のうちで、この松本という男は世に著あらわれぬ学者の一人なのではなからうかと疑ぐつたくらい、妙な理窟りくつをちらちらと閃ひらめかされた。そればかりでなく、松本は田口を捕つかまえて、役には立つが頭のなっていない男だと罵ののしつた。

「第一だいあ忙まいがしくしていちや、頭の中に組織かん立つた考かんのできる閑ひまがないから駄目です。あいつの脳と来たら、年ねんが年ねん中じゅう摺すりば

鉢ちの中で、搦すりこぎ木かに攪かき廻かされてる味噌みそ見たようなもんでね。

あんまり活動し過ぎて、何の形にもならない」

敬太郎にはなぜこの主人が田口に対してこうまで悪あく体たいを吐つくのかさっぱり訳が分らなかつた。けれども彼の不思議に感じたのは、これほどの激語を放つ主人の態度なり口調なりに、毫ごうも毒々しいところだの、小悪こにくらしい点だのの見えない事であつた。彼の罵のする言葉は、人を罵のした経験けんを知らないような落ちつきを具そなえた彼の声を通して、敬太郎の耳に響くので、敬太郎も強く反抗する気になれなかつた。ただ一種変つた人だという感じが新たに刺戟しげきを受けるだけであつた。

「それでいて、碁ごを打うつ、謡うたいを謡うたう。いろいろな事をやる。もつ

ともいずれも下手糞へたくそなんですが」

「それが余裕よゆうのある証しょうこ拠よこじゃないでしょうか」

「余裕よゆうって君。——僕は昨日雨きのうが降るから天気の良い日に来てくれって、あなたを断ことわわったでしょう。その訳は今云う必要もないが、何しろそんなわがままな断ことわわり方が世間にあると思いますか。田口たがuchiだったらそう云う断ことわり方はけっしてできない。田口たがuchiが好んで人に会うのはなぜだと云って御覽。田口たがuchiは世の中に求めるところのある人だからです。つまり僕のような高こう等とう遊ゆう民みんでないからです。いくら他ひとの感情を害がいしたって、困こまりやしないという余裕よゆうがないからです」

十

「実は田口さんからは何にも伺がわずに参つたのですが、今御使
いになつた高等遊民という言葉は本当の意味で御用いなのですか」
「文字通りの意味で僕は遊民ですよ。なぜ」

松本は大きな火鉢ひばちの縁ふちへ両りよう肱ひじを掛けて、その一方の先にあ
る拳げんこつ骨あぐを顎あごの支えにしなから敬けいたろう太郎を見た。敬太郎は初対面
の客を客と感じていないらしいこの松本の様子に、なるほど高等
遊民の本ほん色しよくがあるらしくも思った。彼は煙草道楽たばこと見えて、
今日は大きな丸い雁がんくび首のついた木製の西洋パイプを口から離さ
ずに、時々思い出したような濃い煙を、まだ火の消えていない証

抛として、狼煙のろしのごとくぱっぱつと揚げた。その煙が彼の顔の傍そばでいつの間にか消えて行く具合が、どこにも締しまりを設ける必要を認めていないらしい彼の眼鼻と相待つて、今まで経験した事のない一種静かな心持を敬太郎に与えた。彼は少し薄くなりかかった髪を、頭の真中から左右へ分けているので、平たい頭がなおの事尋常に落ちついて見えた。彼はまた普通世間の人うわたびが着ないような茶色の無地の羽織を着て、同じ色の上足袋うわたびを白の上に重ねていた。その色がすぐ坊主こころもの法衣れんそうを聯想させるところがまた変に特別な男らしく敬太郎の眼に映った。自分で高等遊民だと名乗るものに会ったのはこれが始めてではあるが、松本の風采ふうさいなり態度なりが、いかにもそう云う階級の代表者らしい感じを、少し不意を打

たれた気味の敬太郎に投げ込んだのは事実であった。

「失礼ながら御家族は大勢でいらつしやいますか」

敬太郎は自みずから高等遊民と称する人に対して、どういふ訳かま
ずこういふ問がかけて見たかつた。すると松本は「ええ子供がた
くさんいます」と答えて、敬太郎の忘れかかつていたパイプから
ぱつと煙を出した。

「奥さんは……」

「妻さいは無論むろんいます。なぜですか」

敬太郎は取り返しぐのつかない愚ぐな問を出して、始末に行かなくなつたのを後悔した。相手がそれほど感情を害した様子を見せないにしろ、不思議そうに自分の顔を眺めて、解決を予期している

以上は、何とか云わなければすまない場合になった。

「あなたのような方が、普通の人間と同じように、家庭的に暮して行く事ができるかと思つてちよつと伺つたまでです」

「僕が家庭的に……。なぜ。高等遊民だからですか」

「そう云う訳でも無いんですが、何だかそんな心持がしたからちよつと伺がつたのです」

「高等遊民は田口などよりも家庭的なものですよ」

敬太郎はもう何も云う事がなくなつてしまつた。彼の頭腦の中では、返事に行き詰まつた困却と、ここで問題を変えようとする努力と、これを緒口いとくちに、革かわの手袋を穿はめた女の關係を確かめたい希望が三ついつしよに働らくので、元からそれほど秩序の立つて

いない彼の思想になおさら暗い影を投げた。けれども松本はそんな事にまるで注意しない風で、困った敬太郎の顔を平気に眺めていた。もしこれが田口であつたなら手際よく相手を打ち据える代りに、打ち据えるとすぐ向うから局面を変えてくれて、相手に見苦しい立ち往生などはけつしてさせない鮮やかな腕を有つているのにと敬太郎は思った。気はおけないが、人を取扱かう点において、全く冴えた熟練を欠いている松本の前で、敬太郎は図らず二人の相違を認めたとような気がしていると、松本は偶然「あなたはそういう問題を考えて見た事がないようですね」と聞いてくれた。

「ええまるで考えていません」

「考える必要はありませんね。一人で下宿している以上は。けれどもいくら一人だつて、広い意味での男対女の問題は考えるでしょう」

「考えると云うよりむしろ興味があるといった方が適當かも知れません。興味なら無論あります」

十一

二人は人間として誰しも利害を感じずるこの問題についてしばらく話した。けれども年齒としの違だか段の違だか、松本の云う事は肝か心んじんの肉を抜いた骨組だけを並べて見せるようで、敬太郎けいたろうの血

の中まで這入り込んで来て、共に流れなければやまないほどの切実な勢をまるで持つていなかった。その代り敬太郎の秩序立たない断片的の言葉も口を出るとすぐ熱を失つて、少しも松本の胸に徹らないらしかつた。

こんな縁遠い話をしている中で、ただ一つ敬太郎の耳に新らしく響いたのは、露西亞の文学者のゴーリキとかいう人が、自分の主張する社会主義とかを實行する上に、資金の必要を感じて、それを調達のため細君同伴で亜米利加へ渡つた時の話であつた。その時ゴーリキは大変な人気を一身に集めて、招待やら驩迎やりに忙殺されるほどの景氣のうちに、自分の目的を苦もなく着々と進行させつつあつた。ところが彼の本国から伴つて来た細君

というのが、本当の細君でなくて単に彼の情婦に過ぎないという事実がどこからか曝露ばくろした。すると今まで狂熱に達していた彼の名声なせうが、たちまちどさりと落ちて、広い新大陸に誰一人として彼と握手するものが無くなってしまったので、ゴオリキはやむを得ずそのまま亜米利加を去った。というのが筋であつた。

「露西亞と亜米利加ではこれだけ男なん女にょ関係の解釈が違ふんです。ゴオリキのやりくちは露西亞ならほとんど問題にならないくらい些細ささいな事件なんでしょうがね。下らない」と松本は全く下らなそうな顔をした。

「日本はどつちでしょう」と敬太郎は聞いて見た。

「まあ露西亞派でしょうね。僕は露西亞派でたくさんだ」と云つ

て、松本はまた狼煙のろしのような濃い煙をぽつと口から吐いた。

ここまで来て見ると、この間の女の事を尋ねるのが敬太郎に取って少しも苦にならないような気がし出した。

「せんだつての晩神田の洋食店で私はあなたに御目にかかったと思うんですが」

「ええ会いましたね。よく覚えています。それから帰りにも電車の中で会ったじやありませんか。君も江戸川まで乗ったようだが、あすこいらに下宿でもしているんですか。あの晩は雨が降って困ったでしょう」

松本ははたして敬太郎を記憶していた。それを初めから口に出すでもなく、今になってようやく気がついたふりをするでもなく、

話してもよし話さないでもよしと云った風の態度が、無邪気から出るのか、度胸から出るのか、または鷹揚おうような彼の生れつきから出るのか、敬太郎にはちよつと判断しかねた。

「御伴おつれがおありのようでしたが」

「ええ別嬪べっぴんを一人伴つれていました。あなたはたしか一人でしたね」

「一人です。あなたも御帰りには御一人じゃなかったですか」
「そうです」

ちよつとはきはき進んだ問答はここへ来てぴたりととまってしまった。松本がまた女の事を云い出すかと思つて待っている、
「あなたの下宿は牛込ですか、小石川ですか」とまるで無関係の

問を敬太郎はかけられた。

「本郷です」

松本は腑ふに落ちない顔をして敬太郎を見た。本郷に住んでいる彼が、なぜ江戸川の終点まで乗ったのか、その説明を聞きたいと云わぬばかりの松本の眼つきを見た時、敬太郎は面倒だからこゝで一つ心持よく万事を打ち明けてしまおうと決心した。もし怒おこられたら、詫あやまるだけで、詫あやまって聞かれなければ、御辞儀おじぎを叮ていね嚀いにして帰れば好かろうと覚悟をきめた。

「実はあなたの後あとを跟つけてわざわざ江戸川まで来たのです」と云つて松本の顔を見ると、案外にも予期したほどの変化も起らないので、敬太郎はまず安心した。

「何のために」と松本はほとんどいつものような緩い口調で聞き返した。

「人から頼まれたのです」

「頼まれた？ 誰に」

松本は始めて、少し驚いた声の中に、並より強いアクセントを置いて、こう聞いた。

十二

「実は田口さんに頼まれたのです」

「田口とは。田口要ようやく作ですか」

「そうです」

「だって君はわざわざ田口の紹介状を持って僕に会いに来たんじやありませんか」

こう一句一句問いつめられて行くよりは、自分の方で一と思いに今までの経過を話してしまう方が楽な気がするので、敬太郎けいたろうは田口の速達便を受取って、すぐ小川町の停留所へ見張みはりに出た冒険の第一節目から始めて、電車が江戸川の終点に着いた後の雨の中の立往生に至るまでの顛末てんまつを包まず打ち明けた。固もとよりただ筋の通るだけ为目的に、誇張は無論布衍ふえんの煩わしわずらさもできる限り避けたので、時間がそれほどかからなかったせいも、松本は話の進行している間一口も敬太郎を遮さえぎらなかつた。話が済んでから

も、直とは声を出す様子は見えなかつた。敬太郎は主人のこの沈黙を、感情を害した結果ではなからうかと推察して、怒り出されないうちに早く詫まるに越した事はないと思ひ定めた。すると主人の方から突然口を利き始めた。

「どうもけしからん奴だね、あの田口という男は。それに使われる君もまた君だ。よつぽどの馬鹿だね」

こういつた主人の顔を見ると、呆れ返つてゐる風は誰の目にも着くが、怒気を帯びた様子は比較的どこにも現われていないので、敬太郎はむしろ安心した。この際馬鹿と呼ばれるぐらいの事は、彼に取つて何でもなかつたのである。

「どうも悪い事をしました」

「詫まつて貰いたくも何ともない。ただ君が御氣の毒だから云うのですよ。あんな者に使われて」

「それほど悪い人なんですか」

「いったい何の必要があつて、そんな愚^ぐな事を引き受けたのです」
物数^{ものずき}奇から引き受けたという言葉は、この場合どうしても敬太

郎の口へは出て来なかつた。彼はやむを得ず、衣食問題の必要上どうしても田口に頼らなければならぬ事情があるので、面白くないとは知りながら、つい承諾したのだという風な答をした。

「衣食に困るなら仕方がないが、もう止した方がいいですよ。余計な事じゃありませんか、寒いのに雨に降られて人の後^{あと}を跟^つけるなんて」

「私も少し懲こりました。これからはもうやらないつもりです」

この述懐を聞いた松本は何とも云わず、ただ苦笑にがわらいをしていました。それが敬太郎には軽蔑けいべつの意味にも憐愍れんみんの意味にも取れるので、彼はいずれにしてもはなはだ肩身の狭い思をした。

「あなたは僕に対してすまん事をしたような風をしているが、実際じつそうなのですか」

根本義さかのに溯さかのほつたらそれほど感じていない敬太郎もこう聞かれると、行がかり上うそうだと思わざるを得えなかつた。またそう答えざるを得えなかつた。

「じゃ田口へ行ってね。この間僕の伴つれていた若い女は高等こうとう淫売ばいだつて、僕自身がそう保証したと云つてくれたまえ」

「本当にそういう種類の女なんですか」

敬太郎はちよつと驚ろかされた顔をしてこう聞いた。

「まあ何でも好いから、高等淫売だと云つてくれたまえ」

「はあ」

「はあじゃいけない、たしかにそう云わなくっちゃ。云えますか、君」

敬太郎は現代に教育された青年の一人として、こういう意味の言葉を、年長者の前で口にする無遠慮を憚はばかるほどの男ではなかつた。けれども松本が強しいてこの四字を田口の耳へ押し込ひめようとする奥底には、何か不愉快なある物が潜ひそんでいるらしく思われるので、そう軽々しい調子で引き受ける気も起らなかつた。彼が挨あ

いさつ
撥に困つてむずかしい顔をしていると、それを見た松本は、
「何、君心配しないでもいいですよ。相手が田口だもの」と云つたが、しばらくしてやつと気がついたように、「君は僕と田口との関係をまだ知らないんでしたね」と聞いた。敬太郎は「まだ何にも知りません」と答えた。

十三

「その関係を話すと、君が田口に向つてあの女の事を高等淫こうとういんば売だいと云う勇氣でにくが出悪くなるだけだからつまり僕には損になるんだが、いつまで罪もない君を馬鹿にするのも気の毒だから、聞

かして上げよう」

こういう前置を置いた上、松本は田口と自分が社会的にどう交渉しているかを説明してくれた。その説明は最も簡単にすむだけに最も敬太郎を驚ろかした。それを一言でいうと、田口と松本は近い親類の間柄だったのである。松本に二人の姉があつて、一人が須永すながの母、一人が田口の細君、という互の縁続きを始めて呑み込んだ時、敬太郎は、田口の義弟に当る松本が、叔父という資格で、彼の娘と時間を極きわめて停留所で待ち合わせた上、ある料理店で会食したという事実を、世間の出来事のうちに最も平凡を極めたものの一つのように見た。それを込み入あやった文でも隠しているように、一生懸命に自分の燃やした陽炎かげろうを散らつかせながら、

後を追か^{あと}けて歩いたのが、さもさも馬鹿馬鹿しくなつて来た。

「御嬢さんは何でまたあすこまで出張^{でば}つていたんですか。ただ私を釣るためなんですか」

「何須永へ行つた帰りなんです。僕が田口で話していると、あの子が電話をかけて、四時半頃あすこで待ち合せているから、ちよつと帰りに降りてくれというんです。面倒だから止そうと思つたけれども、是非何とかとかかとかいうから、降りたところがね。今朝^{けさ}御父さんから聞いたら、叔父さんが御歳暮^{おせいぼ}に指環^{ゆびわ}を買つてやると云つていたから、停留所で待ち伏せをして、逃^{にが}さないようにいっしよに行つて買つて貰えと云われたから先刻^{さつき}からここで待つていたんだつて、人の知りもしないのに、一人で勝手な請求を持ち出

してなかなか動かない。仕方がないから、まあ西洋料理ぐらいでごまかしておこうと思つて、とうとう宝亭へ連れ込んだんです。

——実に田口という男は籠棒べらぼうだね。わざわざそれほどの手数てかずをかけて、何もそんな下らない真似まねをするにも当たらないじゃないか。騙だまされた君よりもよっぽど田口の方が籠棒ですよ」

敬太郎には騙された自分の方が遥はるかに愚物ぐふつに思われた。そうと知つたら、探偵の結果を報告する時にも、もう少しは手加減が出来たものをと、自おのずから赧あかい顔もしなければならなかつた。

「あなたはまるで御承知ない事なんですね」

「知るものかね、君。いくら高等遊民だつて、そんな暇の出るはずがないじゃありませんか」

「御嬢さんはどうでしょう。多分御存じなんだろうと思います」
「そうさ」と云つて松本はしばらく思案していたが、やがて判^{はつき}
切^りした口調で、「いや知るまい」と断言した。「あの籠棒の田
口に、一つ取柄^{とりえ}があると云えば云われるのだが、あの男はね、い
くら悪^{いたずら}戯^わをしても、その悪戯^わをされた当人が、もう少しで恥を
搔^かきそうな際^{きわ}どい時になると、ぴたりととめてしまふか、または
自分がその場へ出て来て、当人の体面にかかわらない内に綺麗^{きれい}に
始末をつける。そこへ行くと籠棒^{べらぼう}には違^{ちが}ないが感心なところが
あります。つまりやりかたは悪^{あく}辣^{らつ}でも、結末には妙^{あた}に温^なかい情^{なさけ}
の籠^{こも}つた人間らしい点を見せて来るんです。今度の事でもおそら
く自分一人で呑^のみ込んであるだけでしょう。君が僕^{うち}の家へ来な

つたら、僕はきつとこの事件を知らずに済むんだつたらう。自分の娘にだつて、君の馬鹿を証明するような策略さくりやくを、始めから吹聴ふいちようするほど無慈悲むじひな男じゃない。だからついでに悪戯いたずらも止せばいいんだがね、それがどうしても止せないところが、要するに篋棒けつぼうです」

田口の性格に対する松本のこういう批評を黙って聞いていた敬太郎は、自分の馬鹿な振舞ふるまいを顧かえりみる後悔よりも、自分を馬鹿にした責任者を怨うらむよりも、むしろ悪戯いたずらをした田口を頼もしいと思う心が、わが胸の裏うちで一番勝を制したのを自覚した。が、はたしてそういう人ならば、なぜ彼の前に出て話をしていている間に、あんな窮屈きよくな感じが起るのだらうという不審おのも自きざずと萌もさない訳に行

かなかつた。

「あなたの御話でだいぶ田口さんが解つて来たようですが、私はあの方の^{かた}前へ出ると、何だか気が落ちつかなくつて変に苦しいです」

「そりや向うでも君に気を許さないからさ」

十四

こう云われて見ると、田口が自分に気を許していない^{めづかい}眼遣^{めづかい}やら言葉つきやらがありありと敬^{けいたろう}太郎の胸に、^{うたがい}疑もない記憶として読まれた。けれども田口ほどの老巧のものに、何で学校を出た

ばかりの青臭いあおくさ自分が、それほど苦になるのか、敬太郎は全く合点がてんが行かなかつた。彼は見た通りのままの自分で、誰の前へ出ても通用するものと今まで固く己れおのを信じていたのである。彼はただかような青年として、他に憚ひとかられたはばり気をおかれたりする資格さえないように自分を見縊みくびっていただけに、経験の程度の違う年長者から、自分の思おもわくと違う待遇を受けるのをむしろ不思議に考え出した。

「私はそんな裏表のある人間と見えますかね」

「どうだか、そんな細かい事は初めて会っただけじゃ分らないですよ。しかしあつても無くつても、僕の君に対する待遇にはいっ
こう関係がないからいいじゃありませんか」

「けれども田口さんからそう思われちゃ……」

「田口は君だからそう思うんじゃない、誰を見てもそう思うんだから仕方がないさ。ああして長い間人を使つてるうちには、だいぶ騙だまされなくっちゃならないからね。たまに自然そのままの美しい人間が自分の前に現われて来ても、やつぱり気が許せないんです。それがああ云う人の因果いんがだと思えばそれで好いじゃないか。田口は僕の義兄だから、こう云うと変に聞えるが、本来は美質なんです。けつして悪い男じゃない。ただああして何年となく事業の成功という事だけを重おもに眼中に置いて、世の中と闘かっているものだから、人間の見方が妙に片寄つて、こいつは役に立つだろうかとか、こいつは安心して使えるだろうかとか、まあそんな事

ばかり考えているんだね。ああなると女に惚れられても、こりや自分に惚れたんだろうか、自分の持つている金に惚れたんだろうか、すぐそこを疑ぐらなくつちやいられなくなるんです。美人でさえそうなんだから君見たいな野郎が窮屈な取扱を受けるのは当然だと思わなくつちやいけない。そこが田口の田口たるころなんだから」

敬太郎はこの批評で田口という男が自分にも判切はつきり呑み込めたような気がした。けれどもこういう風に一々彼を肯うけがわせるほどの判断を、彼の頭に鉄椎てつついで叩たたき込むように入れてくれる松本はそもそも何者だろうか、その点になると敬太郎は依然として茫漠ぼうぼくたる雲に対する思があつた。批評に上のぼらない前の田口でさえ、こ

の男よりはかえつて活きた人間らしい気がした。

同じ松本について見ても、この間の晩神田の洋食屋で、田口の娘を相手にして珊瑚樹さんごじゆの珠たまがどうしたとかこうしたとか云つていた時の方が、よつほど生きて動いていた。今彼の前に坐すわつてゐるのは、大きなパイプを銜くわえた木像の霊が、口を利きくと同じような感じを敬太郎に与えるだけなので、彼はただその人の本体を髻ほ髻うふつするに苦しむに過ぎなかつた。彼が一方では明めい瞭りょうな松本の批評に心服しながら、一方では松本の何者なるかをこういう風に考えつつ、自分は頭腦の悪い、直覺の鈍い、世間並以下の人物じゃあるまいかと疑り始めた時、この漠ばく然ぜんたる松本がまた口を開いた。

「それでも田口が篋べらぼう棒をやってくれたため、君はかえって仕しあわ合せをしたようなものですね」

「なぜですか」

「きつと何か位置を拵こしらえてくれますよ。これなりで放っておきや田口でも何でもありません。それは責任を持って受合あつて上げてても宜いい。が、つまらないのは僕だ。全く探偵のされ損とんだから」

二人は顔を見合せて笑った。敬太郎が丸い更紗さらさの座蒲団ざぶとんの上から立ち上がった時、主人はわざわざ玄関まで送おくつて出た。そこに飾かざつてあつた墨絵の鶴の衝ついたて立たの前に、瘡やせた高い身体からだをしばらく佇たずまして、靴はを穿はく敬太郎の後うしろ姿すがたを眺ながめていたが、「妙な洋杖ステッキを持もつていますね。ちよつと拜見」と云いつた。そうして

それを敬太郎の手から受取つて、「へえ、蛇へびの頭だね。なかなか旨うまく刻ほつてある。買ったんですか」と聞いた。「いえ素しろ人ろうとが刻つたのを貰もらったんです」と答えた敬太郎は、それを振りながらまた矢来やらいの坂を江戸川の方へ下くだつた。

雨の降る日

一

雨の降る日に面会を謝絶した松本の理由は、ついに当人の口か

ら聞く機会を得ずに久しく過ぎた。敬太郎けいたろうもそのうちに取り紛まぎれて忘れてしまった。ふとそれを耳にしたのは、彼が田口の世話で、ある地位を得たのを縁故に、遠慮なく同家へ出入しゅつにゆうのできる身になってからの事である。その時分の彼の頭には、停留所の経験がすでに新しい匂いを失いかけていた。彼は時々須永すながからその話を持ち出されては苦笑するに過ぎなかった。須永はよく彼に向つて、なぜその前に僕の所へ来て打ち明けなかったのだと詰問した。内幸町の叔父が人を担かつぐくらいの事は、母から聞いて知つてゐるはずだのにと窘たしなめる事もあつた。しまいには、君があんまり色気いろけがあり過ぎるからだからと調戯からい出した。敬太郎はそのたびに「馬鹿云え」で通していたが、心の内ではいつも、須永の門前で

見た後姿の女を思い出した。その女がとりも直さず停留所の女であつた事も思い出した。そうしてどこか遠くの方で気恥かしい心持がした。その女の名が千代子ちよこで、その妹の名が百代子ももよこである事も、今の敬太郎には珍らしい報知ではなかつた。

彼が松本に会つて、すべて内幕の消息を聞かされた後あと、田口へ顔を出すのは多少きまりの悪い思をするだけであつたにかかわらず、顔を出さなければ締しめ括くりがつかないという行きがかりから、笑われるのを覚悟の前で、また田口の門を潜くぐつた時、田口ははたして大きな声を出して笑つた。けれどもその笑の中うちには己おのれの機略みちに誇る高慢の響よりも、迷つた人を本来の路みちに返してやつた喜びの勝利が聞こえているのだと敬太郎には解釈された。田口はそ

の時訓戒のためだとか教育の方法だとかいった風の、恩に着せた言葉をいっさい使わなかつた。ただ悪意でした訳でないから、怒つてはいけなと断わつて、すぐその場で相当の位置を拵らえてくれる約束をした。それから手を鳴らして、停留所に松本を待ち合わせていた方の姉娘を呼んで、これが私の娘だとわざわざ紹介した。そうしてこの方は市さんの御友達だよと云つて敬太郎を娘に教えていた。娘は何でこういう人に引き合されるのか、ちよつと解しかねた風をしながら、極めてよそよそしく叮嚀な挨拶をした。敬太郎が千代子という名を覚えたのはその時の事であつた。

これが田口の家庭に接触した始めての機会になつて、敬太郎は

その後も用事なり訪問なりに縁を藉りて、同じ人の門を潜る事が多くなつた。時々は玄関脇の書生部屋へ這入つて、かつて電話で口を利き合つた事のある書生と世間話さえした。奥へも無論通る必要が生じて来た。細君に呼ばれて内向の用を足す場合もあつた。中学校へ行く長男から英語の質問を受けて窮する事も稀ではなかつた。出入の度数がこう重なるにつれて、敬太郎が二人の娘に接近する機会も自然多くなつて来たが、一種間の延びた彼の調子と、比較的引き締つた田口の家風と、差向いで坐る時間の欠乏とが、容易に打ち解けがたい境遇に彼らを置き去りにした。彼らの間に取り換わされた言葉は、無論形式だけを重んずる堅苦しいものではなかつたが、大抵は五分とかからない当用に過ぎないの

で、親しみはそれほど出る暇がなかった。彼らが公然と膝ひざを突き合わせて、例になく長い時間を、遠慮まじの交らない談話に更ふかしたのは、正月なか半ばの歌留多会かるたかいの折であった。その時敬太郎は千代子から、あなた随分鈍のろいのねと云われた。百代子からは、あたしあなたと組むのは厭いやよ、負けるにきまつてるからと怒おこられた。

それからまた一カ月ほど経たつて、梅の音信たよりの新聞に出る頃、敬太郎はある日曜の午後を、久しぶりに須永の二階で暮した時、偶然遊まびに来ていた千代子に出逢であった。三人してそれからそれへと纏まとまらない話を続けて行くうちに、ふと松本の評判が千代子の口のぼに上のぼった。

「あの叔父さんも随分変つてるのね。雨が降ると一しきりよく御

客を断わった事があつてよ。今でもそうかしら」

二

「実は僕も雨の降る日に行つて断られた一人なんだが……」と敬いたろう太郎が云い出した時、須永すながと千代子は申し合せたように笑い出した。

「君も随分運の悪い男だね。おおかた例の洋杖ステッキを持って行かなかつたんだろう」と須永は調戯からかい始めた。

「だって無理だわ、雨の降る日に洋杖なんか持つて行けつたつて。ねえ田川さん」

この理攻めりぜの弁護を聞いて、敬太郎も苦笑した。

「いったい田川さんの洋杖って、どんな洋杖なの。わたしちよつと見たいわ。見せてちょうだい、ね、田川さん。下へ行つて見て来ても好くつて」

「今日は持つて来ません」

「なぜ持つて来ないの。今日はあなたそれでも好い御天気よ」

「大事な洋杖だから、いくら好い御天気でも、ただの日には持つて出ないんだとき」

「本当？」

「まあそんなものです」

「じゃ旗日はたひにだけ突いて出るの」

敬太郎は一人で二人に当っているのが少し苦しくなった。この次内幸町へ行く時は、きつと持つて行つて見せるという約束をしてようやく千代子の追窮を逃れたのが。その代り千代子からなぜ松本が雨の降る日に面会を謝絶したかの原因を話して貰う事にした。

それは珍らしく秋の日の曇つた十一月のある午ひるすぎ過であつた。

千代子は松本の好きな雲丹うにを母からことづかつて矢来やらいへ持つて来た。久しぶりに遊んで行こうかしらと云つて、わざわざ乗つて来た車まで返して、緩ゆつくり腰を落ちつけた。松本には十三になる女かしらを頭に、男、女、男と互たがいちがい違ちがひに順序よく四人の子が揃そろつていた。これらは皆二つ違ひに生れて、いずれも世間並に成長しつつあつ

た。家庭に華はなやかな匂を着けるこの生き生きした装飾物の外に、松本夫婦は取つて二つになる宵よいこ子を、指環に嵌はめた真珠のように大事に抱だいて離さなかつた。彼女は真珠のように透明な青白い皮膚うろしと、漆うるしのように濃い大きな眼を有もつて、前の年の雛ひなの節句の前の宵よいに松本夫婦の手に落ちたのである。千代子は五人のうちで、一番この子を可愛かわいがつていた。来るたんびにきつと何か玩おも具ちやを買つて来てやつた。ある時は余り多量あまに甘いものをあてがつて叔母おこから怒おこられた事さえある。すると千代子は、大事そうに宵子を抱かいて縁えん側がわへ出て、ねえ宵子さんと云つては、わざと二人の親しい様子を叔母に見せた。叔母は笑いながら、何だね喧嘩けんかでもしやしまいしと云つた。松本は、御前そんなにその子が好きなら御

祝いの代りに上げるから、嫁に行くとき持つておいでと調戯からかった。

その日も千代子は坐ると直宵すぐ子を相手にして遊び始めた。宵子は生れてからついで月代さかやきを剃そった事がないので、頭の毛が非常に細く柔やわらかに延びていた。そうして皮膚の青白いせいか、その髪の色が日光に照らされると、潤沢うるおいの多い紫むらさきを含んでぴかぴか縮ちぢれ上つていた。「宵子さんかんかん結いつて上げましょう」と云つて、千代子は鄭寧ていねいにその縮れ毛に櫛くしを入れた。それから乏しい片鬢かたびんを一束割さいて、その根元に赤いリボンを括くくりつけた。宵子の頭は御供おそなえのように平らに丸く開いていた。彼女は短かい手をやつとその御供の片隅かたすみへ乗せて、リボンの端はじを抑えながら、母のいる所までよたよた歩いて来て、イボンイボンと云った。母があ

あ好くかんかんが結えましたねと賞めると、千代子は嬉しうれに笑いながら、子供の後姿を眺めて、今度は御父さんの所へ行つて見せていらつしやいと指図した。宵子はまた足元の危ない歩きつきをして、松本の書齋の入口まで来て、四つ這になつた。彼女が父に礼をするときには必ず四つ這になるのが例であつた。彼女はそこで自分の尻をできるだけ高く上げて、御供のような頭を敷居から二三寸の所まで下げて、またイボンイボンと云つた。書見をちよつとやめた松本が、ああ好い頭だね、誰に結つて貰つたのと聞くと、宵子は頸を下げたまま、ちいちいと答えた。ちいちいと云うのは、舌の廻らない彼女の千代子と呼ぶ常の符徴であつた。後に立って見ていた千代子は小さい唇から出る自分の名前を聞い

て、また嬉しそうに大きな声で笑った。

三

そのうち子供がみんな学校から帰つて来たので、今まで赤いボンに占領されていた家庭が、急に幾色かの華やかさを加えた。幼稚園へ行く七つになる男の子が、巴の紋のついた陣太鼓のよ
うなものを持って来て、宵子さん叩かして上げるからおいでと連れて行つた。その時千代子は巾着のような恰好をした赤い毛織の足袋が廊下を動いて行く影を見つめていた。その足袋の紐の先には丸い房がついていて、それが小さいな足を運ぶたびに

つぱつと飛んだ。

「あの足袋はたしか御前が編あんでやったのだったね」

「ええ可愛かわいらしいわね」

千代子はそのへ坐つて、しばらく叔父と話していた。そのうちに曇つた空から淋しい雨が落ち出したと思うと、それが見る見る音を立てて、空坊主からぼうずになつた梧桐ごとうをしたたか濡ぬらし始めた。松本も千代子も申し合せたように、硝子越ガラスごしの雨の色を眺めて、手て焙あぶりに手てを翳かざした。

「芭蕉ばしょうがあるもんだから余計音がするのね」

「芭蕉はよく持つものだよ。この間から今日は枯れるか、今日は枯れるかと思つて、毎日こうして見ているがなかなか枯れない。

山茶花さざんかが散つて、青桐あおぎりが裸になつても、まだ青いんだからなあ」

「妙な事に感心するのね。だから恒三つねぞうは閑人ひまじんだつて云われるのよ」

「その代り御前の叔父さんには芭蕉の研究なんか死ぬまでできっこない」

「したかないわ、そんな研究なんか。だけど叔父さんは内の御父さんよりか全く学者ね。わたし本当に敬服しててよ」

「生意気なまいき云うな」

「あら本当よあなた。だつて何を聞いても知ってるんですもの」

二人がこんな話をしてしていると、ただいまかたこの方が御見えになりましたと云つて、下女が一通の紹介状のようなものを持って来て

松本に渡した。松本は「千代子待つておいで。今にまた面白い事を教えてやるから」と笑いながら立ち上った。

「厭いやよまたこないだみたいに、西洋煙草たばこの名なんかたくさん覚えさせちゃ」

松本は何にも答えずに客間の方へ出て行つた。千代子も茶の間へ取つて返した。そこには雨に降り込められた空の光を補なうため、もう電気灯が点ともつていた。台所ではすでに夕飯ゆうめしの支度を始めたと見えて、瓦斯七輪ガスしちりんが二つとも忙がしく青いほのおを吐はいていた。やがて小供は大きな食卓に二人ずつ向い合せに坐つた。宵子だけは別に下女がついて食事をするのが例になつていたので、この晩は千代子はその役を引受けた。彼女は小さい朱塗ちの椀わんと小皿に盛

つた魚肉とを盆の上に載せて、横手にある六畳へ宵子を連れ込んだ。そこは家のものの着更をするために多く用いられる室なので、箆笥が二つと姿見が一つ、壁から飛び出したように据えてあつた。千代子はその姿見の前に玩具のような椀と茶碗を載せた盆を置いた。

「さあ宵子さん、まんまよ。御待遠さま」

千代子が粥を一匙ずつ掬つて口へ入れてやるたびに、宵子は旨しい旨しいだの、ちようだいちようだいのいろいろな芸を強いられた。しまいに自分一人で食べると云つて、千代子の手から匙を受け取つた時、彼女はまた丹念に匙の持ち方を教えた。宵子は固より極めて短かい単語よりほかに発音できなかつた。そう

持つのではないと叱られると、きつと御供おそなえのような平たい頭を傾かしげて、こう？　こう？　と聞き直した。それを千代子が面白がつて、何遍もくり返さしているうちに、いつもの通りこう？　と半分言いかけて、心持横にした大きな眼で千代子を見上げた時、突然右の手に持った匙を放り出して、千代子の膝ひざの前に俯伏うつぶせになった。

「どうしたの」

千代子は何の気もつかずに宵子を抱だき起した。するとまるで眠った子を抱えたように、ただ手て応こたえがぐたりとしただけなので、千代子は急に大きな声を出して、宵子さん宵子さんと呼んだ。

四

宵子よいこはうとうと寝入ねいった人のように眼を半分閉じて口を半分開あけたまま千代子の膝ひざの上に支えられた。千代子は平手でその背中を二三度叩たたいたが、何の効目ききめもなかった。

「叔母さん、大変だから来て下さい」

母は驚ろいて箸はしと茶碗を放り出したなり、足音を立てて這入はいつて来た。どうしたのと云いながら、電灯の真下で顔を仰向あおむけにし、て見ると、唇くちびるにもう薄く紫の色が注さしていた。口へ掌てのひらを当てがっても、呼息いきの通う音はしなかった。母は呼吸こきゅうの塞つまったような苦しい声を出して、下女に濡手ぬれてぬぐい拭ぬぐを持って来させた。それを宵子

の額に載^のせた時、「脈^{みやく}はあつて」と千代子に聞いた。千代子はすぐ小さい手頸^{てくび}を握つたが脈はどこにあるかまるで分らなかつた。「叔母さんどうしたら好いでしよう」と蒼^{あお}い顔をして泣き出した。母は茫然^{ぼうぜん}とそこに立つて見ている小供に、「早く御父さんと呼んでいらつしやい」と命じた。小供は四^{よつたり}人とも客間の方へ馳^かけ出した。その足音が廊下の端^{はずれ}で止まつたと思うと、松本が不思議そうな顔をして出て来た。「どうした」と云いながら、蔽^おい被^{かぶ}さるように細君と千代子の上から宵子を覗^{のぞ}き込んだが、一目見ると急に眉^{まゆ}を寄せた。

「医者……」

医者は時を移さず来た。「少し模様^{ようよう}が変です」と云つてすぐ注

射をした。しかし何の効能ききめもなかった。「駄目くちびるでしようか」という苦しく張りつめた問が、固く結ばれた主人の唇くちびるを洩もれた。そうして絶望を怖おそれる怪しい光に充みちた三人の眼が一度に医者の上に据すえられた。鏡を出して瞳どうこう孔を眺めていた医者は、この時宵子の裾すそを捲まくつて肛門こうもんを見た。

「これでは仕方ありません。瞳孔も肛門も開いてしまつていますから。どうも御気の毒です」

医者はこう云つたがまた一筒いっとうの注射を心臓部に試みた。固もとよりそれは何の手段にもならなかつた。松本は透すき徹とおるような娘の肌おのずに針の突き刺される時、自みけんから眉間みけんを險けわしくした。千代子は涙をぽろぽろ膝の上に落した。

「病因は何でしよう」

「どうも不思議です。ただ不思議というよりほかに云いようがないようです。どう考えても……」と医者は首を傾むけた。「辛子湯でも使わして見たらどうですか」と松本は素人料簡しろうつりようけんで聞いた。「好いでしよう」と医者はすぐ答えたが、その顔には毫ごうも奨しょう励れいの色が出なかつた。

やがて熱い湯を盥たらへ汲くんで、湯氣の濛もう々もうと立つ真中へ辛子を一袋空あけた。母と千代子は黙つて宵子の着物を取り除のけた。医者は熱湯の中へ手を入れて、「もう少し注水うめしましょう。余り熱いと火傷やけどでもなさるといけませんから」と注意した。

医者いしやの手に抱だき取られた宵子は、湯の中に五六分浸つけられてい

た。三人は息を殺して柔らかい皮膚の色を見つめていた。「もう好いでしよう。余あんまり長くなると……」と云いながら、医者いしやは宵子たらいを盥たらいから出した。母はすぐ受取うけとつてタオルで鄭寧ていねいに拭ぬぐいて元の着物を着せてやったが、ぐたぐたになつた宵子の様子に、ちつとも前と変かりがないので、「少しの間このまま寝かしておいてやりましょう」と恨うらめしそうに松本の顔を見た。松本はそれがよろうと答こたえたまま、また座敷の方へ取とつて返して、来客を玄関げんかんに送り出した。

小さい蒲団ふとんと小さい枕まくらがやがて宵子のために戸棚とだなから取り出された。その上に常の夜の安らかな眠ねに落ちたとしか思おもえない宵子の姿すがたを眺ながめた千代子ちよこは、わつと云いつて突伏つっぷした。

「叔母さんとんだ事をしました……」

「何も千代ちゃんが生かした訳じゃないんだから……」

「でもあたしが御飯を喫たべさしていたんですから……叔父さんにも叔母さんにもまことにすみません」

千代子は途切とぎれ途切とぎれの言葉で、先刻さつき自分が夕飯ゆうめしの世話をしていた時の、平生ふだんと異なる元氣な様子を、何遍もくり返して聞かした。松本は腕組をして、「どうもやっぱり不思議だよ」と云ったが、「おい御仙おせん、ここへ寝かしておくのは可哀かわいそうだから、あつちの座敷へ連れて行ってやろう」と細君うなを促うながした。千代子も手を貸した。

五

手頃な屏風びょうぶがないので、ただ都合の好い位置をよ択って、何のかこ囲いもない所へ、そつと北枕に寝かした。今朝方玩けさがたおもちゃ弄もにして、いた風船玉を茶の間から持つて来て、御仙がその枕元に置いてやつた。顔へは白い晒さらし木綿もめんをかけた。千代子は時々それを取り除のけて見ては泣いた。「ちよつとあなた」と御仙が松本を顧かえりみて、「まるで観音様かんのんさまのように可愛かわいい顔をしています」と鼻を詰らせた。松本は「そうか」と云つて、自分の坐つている席から宵子の顔を覗のぞき込んだ。

やがて白木の机の上に、櫛しきみと線香立と白団子が並べられて、蠟ろう

燭の灯が弱い光を放った時、三人は始めて眠から覚めない宵子と自分達が遠く離れてしまったという心細い感じに打たれた。彼らは代る代る線香を上げた。その煙の香が、二時間前とは全く違う世界に誘ない込まれた彼らの鼻を断えず刺戟した。ほかの子供は平生の通り早く寝かされた後に、咲子という十三になる長女だけが起きて線香の側を離れなかつた。

「御前も御寝よ」

「まだ内幸町からも神田からも誰も来ないのね」

「もう来るだろう。好いから早く御寝」

咲子は立つて廊下へ出たが、そこで振り回つて、千代子を招いた。千代子が同じく立つて廊下へ出ると、小さな声で、怖いから

いっしよに便所^{はばかり}へ行つてくれろと頼んだ。便所には電灯が点つてなかつた。千代子は燐寸^{マッチ}を擦つて雪洞^{ぼんぼり}に灯^ひを移して、咲子といっしよに廊下を曲つた。歸りに下女部屋を覗^{のぞ}いて見ると、飯^{めした}焚^きが出入^{でいり}の車夫と火鉢^{ひばち}を挟^{はさ}んでひそひそ何か話していた。千代子にはそれが宵子の不幸を細かに語っているらしく思われた。ほかの下女は茶の間で来客の用意に盆を拭いたり茶碗を並べたりしていた。

通知を受けた親類のものがそのうち二三人寄つた。いずれまた来るからと云つて歸つたのもあつた。千代子は来る人ごとに宵子の突然な最後をくり返しくり返し語つた。十二時過から御仙は通^つ夜^やをする人のために、わざと置^{おきこたつ}火燧^{こし}を拵^{へや}らえて室に入れたが、

誰もあたるものはなかつた。主人夫婦は無理に勧められて寢室へ退しりぞいた。その後あとで千代子は幾度か短かくなつた線香の煙を新しく継ついだ。雨はまだ降りやまなかつた。夕方芭蕉ばしやうに落ちた響はもう聞こえない代りに、亜鉛葺トタンぶきの廂ひさしにあたる音が、非常に淋しくて悲しい点てんてき滴を彼女の耳に絶えず送つた。彼女はこの雨の中で、時々宵子の顔に当てた晒さらしを取つては啜すすりなき泣なきをして、うちちに夜が明けた。

その日は女がみんなして宵子の経帷きようかたびら子こを縫ぬつた。百代子ももよこが新たに内幸町から来たのと、ほかに懇意うちの家の細君が二人ほど見えたので、小さい袖そでや裾すそが、方々の手に渡つた。千代子は半紙と筆すずりと硯すずりを持って廻つて、南無阿弥陀仏なむあみだぶつという六字を誰にも一枚

ずつ書かした。「市いっさんも書いて上げて下さい」と云つて、須永すながの前へ来た。「どうするんだい」と聞いた須永は、不思議そうに筆と紙を受取つた。

「細かい字で書けるだけ一面に書いて下さい。後あとから六字ずつを短冊形たんざくがたに剪きつて棺かんの中へ散らしにして入れるんですから」

皆みんなな畏かしこまつて六字の名号みょうごうを認したためた。咲子は見ちや厭いやよ

と云いながら袖屏風そでびょうぶをして曲りくねつた字を書いた。十一にな

る男の子は僕は仮名で書くよと断わつて、ナムアミダブツと電報のようにいくつも並べた。午過ひるすぎになつていよいよ棺に入れると

き松本は千代子に「御前着物を着換さしておやりな」と云つた。

千代子は泣きながら返事もせず、冷たい宵子を裸にして抱だき起

した。その背中には紫むらさきいろ色の斑点が一面に出ていた。着換が済むと御仙が小さい珠数じゆずを手にかけてやった。同じく小さい編笠あみがさと藁草履わらぞうりを棺に入れた。昨日きのうの夕方まで穿はいていた赤い毛糸の足袋たびも入れた。その紐ひもの先につけた丸い珠たまのぶらぶら動く姿がすぐ千代子の眼に浮んだ。みんなのくれた玩具おもちゃも足や頭の所へ押し込んだ。最後に南無阿弥陀仏の短冊たんざくを雪のように振りかけた上へ蓋ふたをして、白綸子しろりんずの被おひをした。

六

友引ともびきは善よくないという御仙おせんの説で、葬式を一日延ばしたため、

家の中は陰気な空気の裡に常よりは賑わった。七つになる嘉吉という男の子が、いつもの陣太鼓を叩いて叱られた後、そつと千代子の傍へ来て、宵子さんはもう帰って来ないのと聞いた。須永が笑いながら、明日は嘉吉さんも焼場へ持つて行って、宵子さんといっしょに焼いてしまうつもりだと調戯うと、嘉吉はそんなつもりなんか僕厭だぜと云いながら、大きな眼をくるくるさせて須永を見た。咲子は、御母さんわたしも明日御葬式に行きたいわと御仙にせびつた。あたしもねと九つになる重子が頼んだ。御仙はようやく気がついたように、奥で田口夫婦と話をしていた夫を呼んで、「あなた、明日いらしつて」と聞いた。

「行くよ。御前も行ってやるが好い」

「ええ、行く事にきめてます。小供には何を着せたらいいでしょう」

「紋もんつき付でいいじゃないか」

「でも余あんまり模様が派手だから」

「袴はかまを穿けばいいよ。男の子は海軍服でたくさんだし。御前は黒

紋付だろう。黒い帯は持つてるかい」

「持つてます」

「千代子、御前も持つてるなら喪服を着て供ともに立つておやり」

こんな世話を焼いた後で、松本はまた奥へ引返した。千代子も

また線香を上げに立った。棺かんの上を見ると、いつの間にか綺麗きれいな

花環はなわが載のせてあった。「いつ来たの」と傍そばにいる妹の百代ももよに聞い

た。百代は小さな声で「先刻さつき」と答えたが、「叔母さんが小供のだから、白い花だけでは淋さみしいって、わざと赤いのを交まぜさしたんですって」と説明した。姉と妹はしばらくそこに並んで坐っていた。十分ばかりすると、千代子は百代の耳に口を付けて、「百代さんあなた宵子さんの死顔を見て」と聞いた。百代は「ええ」と首肯うなずいた。

「いつ」

「ほら先刻さつき御棺に入れる時見たんじやないの。なぜ」

千代子はそれを忘れていた。妹がもし見ないと云ったら、二人で棺ふたの蓋ふたをもう一遍開けようと思ったのである。「御止しなさいよ、怖こわいから」と云って百代は首をふった。

晩には通夜僧つやそうが来て御経を上げた。千代子が傍で聞いてみると、松本は坊さんを捕まえて、三部経さんぶきようがどうだの、和讃わさんがどうだのという変な話をしていた。その会話の中には親鸞しんらん上人しようにんと蓮れんに如上人よしようにんという名がたびたび出て来た。十時少し廻った頃、松本は菓子と御布施おふせを僧の前に並べて、もう宜よろしいから御引取下さいと断ことわつた。坊さんの帰った後あとで御仙がその理由わけを聞くと、「何坊さんも早く寝た方が勝手だあね。宵子だって御経なんか聴くのは嫌きらだよ」とすましていた。千代子と百代子は顔を見合せて微笑した。

あくる日は風のない明らかな空の下に、小さいな棺が静かに動いた。路端みちばたの人はそれを何か不可思議のものでもあるかのよう

に目送もくそうした。松本は白張しらはりの提灯ちようちんや白木しらきの輿こしが嫌だと云つて、宵子の棺を喪車に入れたのである。その喪車の周囲ぐるりに垂れた黒い幕が揺れるたびに、白綸子しろりんずの覆おいをした小さな棺の上に飾つた花環がちらちら見えた。そこいらに遊んでいた子供が駆け寄かつて来て、珍らしそうに車を覗のぞき込んだ。車と行き逢つた時、脱帽して過ぎた人もあつた。

寺では読経どきようも焼香も形式通り済んだ。千代子は広い本堂に坐っている間、不思議に涙も何も出なかつた。叔父叔母の顔を見てもこれといつて憂うれいに鎖とぎされた様子は見えなかつた。焼香の時、重子が香こうをつまんで香炉かうろの裏うちへ燻くべるのを間違えて、灰を一撮ひとつかみ取つて、抹香まっこうの中へ打ち込んだ折には、おかしくなつて吹き出し

たくらいである。式が果ててから松本と須永と別に一二人棺につき添って火葬場へ廻つたので、千代子はほかのものといっしよにまた矢来やらいへ歸つて来た。車の上で、切なさの少し減つた今よりも、苦しいくらい悲しかった昨日きのう一昨日おとといの気分の方が、清くて美しくい物を多量に含んでいたらしく考えて、その時味わつた痛烈な悲哀をかえつて恋しく思つた。

七

骨こつ上あげには御仙おせんと須永すながと千代子とそれに平生ふだん宵子よいこの守まもりをしていた清きよという下女きよがついて都合よつたり四人で行つた。柏木かしわぎの停車場ステーション

を下りると二丁ぐらいな所を、つい気がつかずに宅うちから車に乗つて出たので時間はかえつて長くかかった。火葬場の経験は千代子に取つて生れて始めてであつた。久しく見ずにいた郊外の景色けしきも忘れ物を思い出したように嬉うれしかった。眼に入るものは青い麦むぎ、
 島たけと青い大根島ときわぎと常磐木の中に赤や黄や褐色を雑多に交ぜた森の色であつた。前へ行く須永は時々後うしろを振り返つて、穴八幡あなはちまんだの諏訪すわの森もりだのを千代子に教えた。車が暗いだらだら坂へ来た時、彼はまた小高い杉の木立の中にある細長い塔を千代子のために指ゆびさした。それには弘法こうぼうだいし大師千五十年供養塔くようとうと刻きざんであつた。その下に熊笹くまざさの生い茂つた吹井戸を控えて、一軒の茶見世が橋の袂たもとをいなかみちさも田舎路いなかみちらしく見せていた。折々坊主になりかけた高い

樹の枝の上から、色の変った小さい葉が一つずつ落ちて来た。それが空中で非常に早くきりきり舞う姿が鮮やかに千代子の眼を刺戟した。それが容易に地面の上へ落ちずに、いつまでも途中でひらひらするのも、彼女には眼新らしい現象であった。

火葬場は日当りの好い平地ひらちに南を受けて建てられているので、車を門内に引き入れた時、思ったより陽気な影が千代子の胸に射した。御仙が事務所の前で、松本ですがと云うと、郵便局の受付口みたような窓の中に坐っていた男が、鍵かぎは御持ちでしょうねと聞いた。御仙は変な顔をして急に懐ふところや帯の間を探り出した。

「とんだ事をしたよ。鍵を茶の間の用筆筒ようだんすの上へ置いたなり：

…」

「持つて来なかつたの。じゃ困るわね。まだ時間があるから急いで市いっさんに取つて来て貰うと好いわ」

二人の間答を後うしろの方で冷淡に聞いていた須永は、鍵なら僕が持つて来ているよと云つて、冷たい重いものを袂たもとから出して叔母に渡した。御仙がそれを受付口へ見せている間に、千代子は須永を窘たしなめた。

「市さん、あなた本当に悪にくらしい方かたね。持つてるなら早く出してあげればいいのに。叔母さんは宵子さんの事で、頭がぼんやりしているから忘れるんじゃないやありませんか」

須永はただ微笑して立つていた。

「あなたのような不人情な人はこんな時にはいつそ来ない方がいい

いわ。宵子さんが死んだって、涙一つ零こぼすじやなし」

「不人情なんじやない。まだ子供を持った事がないから、親子の情愛がよく解らないんだよ」

「まあ。よく叔母さんの前でそんな呑のんき気な事が云えるのね。じゃあたしなんかどうしたの。いつ子供持おぼえった覚があつて」

「あるかどうか僕は知らない。けれども千代ちゃんはは女だから、おおかた男より美くしい心を持もつてるんだらう」

御仙は二人の口論を聞かない人のように、用事を済ますとすぐ待合所の方へ歩いて行いつた。そこへ腰をかけてから、立たっている千代子を手招まきした。千代子はすぐ叔母そばの傍へ来て座まに着きいた。須永も続ついて這はい入いつて来きた。そうして二人の向むこう側がわにある涼すずみ

台みたようなものの上に腰をかけた。清もおかけと云つて自分の席を割さいてやつた。

四人が茶を呑のんで待ち合あわしている間あいだに、骨上こつあげの連中が二三組見えた。最初のは田舎染いなかじみた御婆さんだけで、これは御仙と千代子の服装に對して遠慮でもしたらしく口数を多く利きかなかつた。次には尻からを絡かげた親子連おやこづれが来た。活潑かっぱつな声で、壺つぼを下くださいと云つて、一番安いのを十六錢で買つて行つた。三番目には散髪さんぱつに角帯かくおびを締しめた男とも女とも片のつかない盲者めくらが、紫はかまの袴はを穿はいた女の子に手を引かれてやつて来た。そうしてまだ時間はあるだらうねと念を押して、袂たもとから出した巻煙草まきたばこを吸すい始めた。須永はこの盲者の顔を見ると立ち上つてふいと表へ出たぎりなかなか

返つて来なかつた。ところへ事務所のものが御仙の傍へ来て、用意が出来ましたからどうぞと促うながしたので、千代子は須永を呼びに裏手へ出た。

八

真しんちゆう 鍬くわ の掛札に何々殿と書いた並なみとう 等の竈かまを、薄気味悪く左右に見て裏へ抜けると、広い空地あきちの隅すみに松まつまき 薪まきが山のように積んであつた。周囲まわりには綺麗きれいな孟宗藪もうそうやぶが蒼々あおあおと茂つていた。その下が麦むぎ 畠はたけで、麦畠の向うがまた岡おか 続きつづきに高く蜿うねうね 蜒うねうねしているので、北側の眺ながめはことに晴々はればれしかつた。須永すながはこの空地の端はしに

立って広い眼界をぼんやり見渡していた。

「市さん、もう用意ができたんですって」

須永は千代子の声を聞いて黙ったまま帰って来たが、「あの竹た

藪けやぶは大変みごとだね。何だか死人しびとの膏あぶらが肥料こやしになつて、ああ生い

きいき

々延びるような気がするじゃないか。ここにできる筈たけのこはきつと

うま

旨うまいよ」と云つた。千代子は「おお厭いやだ」と云いい放ばなしにして、さつ

なみとう

さとまた並等なみとうを通り抜けた。宵子よいこの竈かまは上等よの一号かまというので、

きのう

扉の上に紫の幕が張つてあつた。その前に昨日きのうの花環はなわが少し凋しぼみ

しぼ

かけて、台の上に静かに横たわっていた。それが昨夜ゆうべ宵子の肉を

ねつき

焼いた熱気ねつきの記念かたみのように思われるので、千代子は急に息苦しく

おんぼう

なつた。御坊おんぼうが三人出て来た。そのうちの一番年を取つたのが

「御封印を……」と云うので、須永は「よし、構わないから開けてくれ」と頼んだ。畏まった御坊は自分の手で封印を切つて、かちやりと響く音をさせながら錠を抜いた。黒い鉄の扉が左右へ開くと、薄暗い奥の方に、灰色の丸いものだの、黒いものだの、白いものだのが、形を成さない一塊となつて朧気に見えた。御坊は「今出しましょう」と断つて、レールを二本前の方に継ぎ足しておいて、鉄の環に似たものを二つ棺台の端にかけたかと思ふと、いきなりがらがらという音と共に、かの形を成さない一塊の焼残が四人の立っている鼻の下へ出て来た。千代子はそのなかで、例の御供に似てふつくらと膨らんだ宵子の頭蓋骨が、生きていた時そのままの姿で残っているのを認めて急に手帛を

口に銜くわえた。御坊はこの頭蓋骨と頬骨と外に二つ三つの大きな骨を残して、「あとは綺麗きれいに篩ふるつて持つて参りましょう」と云つた。

四人は各よつたり自木箸めいめいきばしと竹箸を一本ずつ持つて、台の上の白骨はっこつ

を思い思いに拾つては、白い壺つぼの中へ入れた。そうして誘い合せ

たように泣いた。ただ須永だけは蒼白あおしろい顔をして口も利きかず鼻

も鳴らさなかつた。「齒は別になさいますか」と聞きながら、御

坊が小器用に齒を拾い分けてくれた時、顎あごをくしゃくしゃと潰つぶし

てその中から二三枚よ扱より出したのを見た須永は、「こうなるとま

るで人間のような気がしないな。砂の中から小石を拾い出すと同

じ事だ」と独ひとりごと言ことのように云つた。下女したが三和土たたきの上にぼたぼ

たと涙を落した。御仙おせんと千代子は箸はしを置いて手ハンケチ帛はを顔へ当てた。

車に乗るとき千代子は杉の箱に入れた白い壺を抱いてそれを膝の上に載せた。車が馳け出すと冷たい風が膝掛と杉箱の間から吹き込んだ。高い櫂が白茶けた幹を路の左右に並べて、彼らを送り迎えるごとくに細い枝を揺り動かした。その細い枝が遥か頭の上で交叉するほど繁く両側から出ているのに、自分の通る所は存外明るいのを奇妙に思つて、千代子は折々頭を上げては、遠い空を眺めた。宅へ着いて遺骨を仏壇の前に置いた時、すぐ寄つて来た小供が、蓋を開けて見せてくれというのを彼女は断然拒絶した。やがて家内中同じ室で昼飯の膳に向つた。「こうして見ると、まだ子供がたくさんいるようだが、これで一人もう欠けたんだね」と須永が云い出した。

「生きてる内はそれほどにも思わないが、逝ゆかれて見ると一番惜しいようだね。ここにいる連中のうちで誰か代りになればいいと思うくらいだ」と松本が云った。

「非道ひどいわね」と重子が咲子に耳語ささやいた。

「叔母さんまた奮発して、宵子さんと瓜うりふた二つのような子を拵こしらえてちょうだい。可愛かわいがつて上げるから」

「宵子と同じ子じゃいけないでしょう、宵子でなくつちや。御茶碗や帽子と違って代りができたって、亡なくしたのを忘れる訳にや行かないんだから」

「己おれは雨の降る日に紹介状を持って会いに来る男が厭いやになつた」

須永の話

一

敬太郎^{けいたろう}は須永^{すなが}の門前^{かどまへ}で後姿^{うしろすがた}の女を見て以来、この二人を結びつける縁^{えん}の糸を常に想像した。その糸には一種夢のような匂^{におい}があるのだ、二人を眼の前に、須永としまた千代子として眺^{なが}める時には、かえってどこかへ消えてしまふ事が多かつた。けれども彼らが普通の人間として敬太郎の肉眼に現実の刺戟^{しげき}を与えない折々には、失なわれた糸がまた二人の中を離すべからざる因果^{いんが}のご

とくに繋つないだ。田口の家うちへ出入でいりするようになってからも、須永と千代子の関係については、一ひと口くちでさえ誰からも聞いた事はなし、また二人の様子を直じかに観察しても尋常の従いとこ兄弟以上に何物も仄ほのめいていなかったには違ちがないが、こういう当初からの聯れん想そうに支配されて、彼の頭のどこかに、二人を常に一いつつ対たいの男なん女によとして認める傾かたきを有もっていた。女の連つれ添そわらない若い男や、男の手を組まない若い女は、要するに敬太郎から見れば自然を損そこなつた片輪に過ぎないので、彼が自分の知る彼らを頭のうちでかように組み合あわせたのは、まだ片輪の境遇にまごついている二人に、自然が生みつけた通りの資格を早く与えてやりたいという道義心の要求から起つたのかも知れなかつた。

それはこむずかしい理窟りくつだから、たといどんな要求から起ろうと敬太郎のために弁ずる必要はないが、この頃になつて偶然千代子の結婚談を耳にした彼が、頭の中の世界と、頭の外にある社会との矛盾に、ちよつと首を捻ひねつたのは事實に相違なかつた。彼はその話を書生の佐伯さえきから聞いたのである。もつとも佐伯のようなものが、まだ事の纏まとまらない先から、奥の委くわしい話を知ろうはずがなかつた。彼はただ漠然ぼくぜんとした顔の筋肉をいつもより緊張させて、何でもそんな評判ですと云うだけであつた。千代子を貰う人の名前も無論分らなかつたが、身分の実業家である事はたしかに思われた。

「千代子さんは須永君の所へ行くのだとばかり思っていたが、そ

うじやないのかね」

「そうも行かないでしょう」

「なぜ」

「なぜって聞かれると、僕にも明めいりよう瞭りような答はでき悪にくいんですが、ちよつと考えて見てもむずかしそうですね」

「そうかね、僕はまたちようど好い夫婦だと思ってるがね。親類じやあるし、年だつて五つ六つ違ならおかしかなしき」

「知らない人から見るとちよつとそう見えるでしょうがね。裏面にはいろいろ複雑な事情もあるようですから」

敬太郎は佐伯の云わゆる「複雑な事情」なるものを根掘り葉掘り聞きたくなつたが、何だか自分を門外漢扱いにするような彼の

言葉が癪しやくに障さわるのと、たかが玄関番の書生から家庭の内幕を聞き出したと云われては自分の品格にかかわるのと、最後には、口ほど詳しい事情を佐伯が知っている氣遣きづかいがないのとで、それぎりその話はやめにした。そのおりついでながら奥へ行つて細君に挨拶いさつをしてしばらく話したが、別に平生と何の変る様子もないので、おめでとうございませと云う勇氣も出なかつた。

これは敬太郎が須永の宅うちで矢来やらいの叔父さんの家うちにあつた不幸を千代子から聞いたついで二三日前の事であつた。その日彼が久しぶりに須永を訪問したのも、実はその結婚問題について須永の考えを確かめるつもりであつた。須永がどこの何人なんびとと結婚しようと、千代子がどこの何人に片づこうと、それは敬太郎の關係するところ

ろではなかつたが、この二人の運命が、それほど容易くたやす右左へ未練なく離れ離れになり得るものか、または自分の想像した通りまぼろ幻しに似た糸のようなものが、二人にも見えない縁となつて、彼らを冥々めいめいのうちに繋ぎ合せているものか。それともこの夢で織つた帯とでも形容して然るしかべきちらちらするものが、ある時は二人の眼に明らかに見え、ある時は全たく切れて、彼らをばらばらに孤立させるものか、——そこいらが敬太郎には知りたかつたのである。固もとよりそれは単なる物数奇ものずきに過ぎなかつた。彼は明らかにそうだと自覚していた。けれども須永に対してなら、この物数奇を満足させても無礼に当らない事も自覚していた。そればかりかこの物数奇を満足させる権利があるとまで信じていた。

二

その日は生憎あいにく千代子に妨たげられた上、しまいには須永すながの母
さえ出て来たので、だいぶ長く坐つていたにもかかわらず、立ち
入った話はいっさい持ち出す機会がなかった。ただ敬太郎けいたろうは偶
然にも自分の前に並んだ三人が、ありのままの今の姿で、現に似
合わしい夫婦しゅうとめと姑おおになり終おせているという事にふと思ひ及んだ時、
彼らを世間並まの形式で纏まとめるのは、最も容易い仕事のように考え
て歸つた。

次の日曜がまた幸いな暖かい日和ひよりをすべての勤め人つとにんに恵んだの

で、敬太郎は朝早くから須永を尋ねて、郊外に誘いざなおうとした。無ぶ精しょうでわがままな彼は玄関先まで出て来ながら、なかなか応じそうにしなかつたのを、母親が無理に勧めてようやく靴を穿はかした。靴を穿いた以上彼は、敬太郎の意志通りどっちへでも動く人であつた。その代りいくら相談をかけても、ある判はつきり切した方角へ是非共足を運ばなければならぬと主張する男ではなかつた。彼と矢来の松本といつしよに出ると、二人とも行先を考えずに歩くので、一致してとんでもない所へ到着する事がままあつた。敬太郎は現にこの人の母の口からその例を聞かされたのである。

この日彼らは両国から汽車に乗って鴻こうの台だいの下まで行つて降りた。それから美しい広い河に沿つて土堤どての上をのそのそ歩いた。

敬太郎は久しぶりに晴々はればれした好い気分になつて、水だの岡だの帆ほかけ船だぶねのを見廻した。須永も景色けしきだけは賞ほめたが、まだこんな吹き晴らしの土堤などを歩く季節じやないと云つて、寒いのに伴つれ出した敬太郎を恨うらんだ。早く歩けば暖たかくなると出張した敬太郎はさつさと歩き始めた。須永は呆あきれたような顔をして跟ついて来た。二人は柴しば又またの帝たい釈しゃく天てんの傍そばまで来て、川かわ甚じんという家うちへ這入はいつて飯を食つた。そこで詔あつらえた鰻うなぎの蒲焼かばやきが甘あまたるくて食えないと云つて、須永はまた苦い顔をした。先刻さつきから二人の気分が熟しないので、しんみりした話をする余地が出て来ないので苦しがつていた敬太郎は、この時須永に「江戸つ子は贅ぜい沢たくなものだね。細君を貰うときにもそう贅ぜい沢たくを云うかね」と聞いた。

「云えれば誰だつて云うさ。何も江戸っ子に限りあしない。君みたような田舎ものだつて云うだろう」

須永はこう答えて澄ましていた。敬太郎は仕方なしに「江戸っ子は無愛嬌ぶあいぎようなものだね」と云つて笑い出した。須永も突然おかしくなつたと見えて笑い出した。それから後は二人の気分と同じように、二人の会話も円満に進行した。敬太郎が須永から「君この頃はだいぶ落ちついて来たようだ」と評されても、彼は「少し真面目まじめになつたかね」とおとなしく受けるし、彼が須永に「君はますます偏窟へんくつに傾くじやないか」と調戯からかつても、須永は「どうも自分ながら厭いやになる事がある」と快よく己れの弱点おのを承認するだけであつた。

こういう打ち解けた心持で、二人が差し向いに互の眼の奥を見透とおして恥ずかしがらない時に、千代子の問題が持ち出されたのは、その真相を聞こうとする敬太郎に取って偶然の仕合せであつた。

彼はまず一週間ほど前耳にした彼女が近いうちに結婚するとううわさわかわききりに須永を襲おそつた。その時須永は少しも昂こう奮ふんした様子を見せなかつた。むしろいつもより沈んだ調子で、「また何か縁談が起りかけているようだね。今度は旨うまく纏まとまればいいが」と答えたが、急に口調くちようを更かえて、「なに君は知らない事だが、今までもそう云う話は何度もあつたんだよ」とさも陳腐ちんぷらしそうに説明して聞かせた。

「君は貰もらう気はないのかい」

「僕が貰うように見えるかね」

話しはこんな風に、御互で引き摺ずるようにしてだんだん先へ進んだが、いよいよ際きわどいところまで打ち明けるか、さもなければ題目を更かえるよりほかに仕方がないという点まで押しつめられた時、須永はどうとう敬太郎に「また洋杖ステツキを持って来たんだね」と云つて苦笑した。敬太郎も笑いながら縁側えんがわへ出た。そこから例の洋杖を取つてまた這入つて来たが、「この通りだ」と蛇へびの頭を須永に見せた。

須永すながの話は敬太郎けいたろうの予期したよりも遙はるかに長かつた。――

僕の父は早く死んだ。僕がまだ親子の情愛をよく解しない子供の頃に突然死んでしまった。僕は子がないから、自分の血を分けた温あたたかい肉かたまの塊なりに対する情なさけは、今でも比較的薄いかも知れないが、自分を生んでくれた親を懐なつかしいと思う心はその後ごだいたい発達した。今の心をその時分持っていたならと考える事も稀まれではない。一言いちごんでいうと、当時の僕は父にははなはだ冷淡だったのである。もつとも父もけつして甘い方ではなかつた。今の僕の胸に映る彼の顔は、骨の高い血色すくの勝れない、親しみの薄い、厳格な表情みに充みちた肖像みに過ぎない。僕は自分の顔を鏡うの裏うちに見るたびに、それが胸の中に収めた父の容貌ようぼうと大變似ているのを思い

出しては不愉快になる。自分が父と同じ厭いやな印象を、傍はたの人に与えはしまいかと苦に病んで、そこで気が引けるばかりではない。こんな陰鬱いんうつな眉まゆや額まへが代表するよりも、まだましな温たかい情愛を、血の中に流している今の自分から推して、あんなに冷酷に見えた父も、心の底には自分以上に熱い涙なみだを貯たくわえていたのではなからうかと考えると、父の記念かたみとして、彼の悪い上うわ皮かわだけを覚えていているのが、子としていかにも情ない心持がするからである。父は死ぬ二三日前僕を枕元に呼んで、「市蔵、おれが死ぬと御母さんの厄やつかい介かいにならなくっちゃならないぞ。知ってるか」と云った。僕は生れた時から母の厄介やつかいになつていたので、今更いまさら改あらたためて父からそれを聞かされるのを妙に思った。黙って坐つてい

ると、父は骨ばかりになつた顔の筋を無理に動かすようにして、

「今のよう腕白じや、御母さんも構つてくれないぞ。もう少しおとなしくしないと」と云つた。僕は母が今まで構つてくれたんだからこのままの僕でたくさんだという気が充分あつた。それで父の小言こごとをまるで必要のない余計な事のように考へて病室を出た。

父が死んだ時母は非常に泣いた。葬式が出る間際まぎわになつて、僕は着物を着換えさせられたまま、手持無沙汰てもちぶさただから、一人縁側えんがわへ出て、蒼い空あおぞらを覗き込むように眺めてみると、白無垢しろむくを着た母が何を思つたか不意にそこへ出て来た。田口や松本を始め、供ともに立つものはみんな向むこうの方で混雑ごたごたしていたので、傍はたには誰も見えなかつた。母は突然いきなり自分の坊主頭へ手を載せて、泣き腫はらした

眼を自分の上に据^すえた。そうして小さい声で、「御父さんが御^{おな}亡くなりになつても、御母さんが今まで通り可愛^{かわい}がつて上げるから安心なさいよ」と云つた。僕は何とも答えなかつた。涙も落さなかつた。その時はそれですんだが、両^{ふた}親^{おや}に対する僕の記憶を、生長^{のち}の後^{のち}に至つて、遠くの方で曇らすものは、二人のこの時の言葉であるという感じがその後^{のち}しだいに強く明らかになつて来た。何の意味もつける必要のない彼らの言葉に、僕はなぜ厚い疑惑の裏打をしなければならぬのか、それは僕自身に聞いて見てもまるで説明がつかかなかつた。時々母に向つて直^{じか}に問^{ただ}い糺^{ただ}して見たい気も起つたが、母の顔を見ると急に勇氣が挫^{くじ}けてしまうのが例^{つね}であつた。そうして心の中^{うち}のどこかで、それを打ち明けた

が最後、親しい母子おやこが離れ離れになって、永久今の睦まじさむつに戻
る機会はないと僕に耳語みみごやくものが出て来た。それでなくても、母
は僕の真面目まじめな顔を見守つて、そんな事があつたつけかねと笑い
に紛まぎらしそうなので、そう剥はぐらかされた時の残酷な結果を予想
すると、とても口へ出された義理じゃないと思ひ直しては黙つて
いた。

僕は母に対してけつして柔順な息子むすこではなかつた。父の死ぬ前
に枕元へ呼びつけられて意見されただけあつて、小さいうちから
よく母に逆さからつた。大きくなつて、女親だけになおさら優しくし
てやりたいという分別ができた後あとでも、やっぱり彼女の云う通り
にはならなかつた。この二三年はことに心配ばかりかけていた。

が、いくら勝手を云い合つても、母子おやこは生れて以来の母子で、この貴たつとい観念を傷つけられた覚おぼえは、重手おもてにしる浅手あさてにしる、まだ経験した試こころがないという考えから、もしあの事を云い出して、二人共後悔の癥痕はんこんを遺のこさなければすまない瘡きずを受けたなら、それこそ取返しかえりのつかない不幸だと思つていた。この畏怖いふの念は神経質しんけいしつに生れた僕の頭で拵こしらえるのかも知れないとも疑うたぐつて見た。けれども僕にはそれが現在よりも明らかかな未来として存在している事が多かった。だから僕はあの時の父と母の言葉を、それなり忘れてしまう事ができなかつたのを、今でも情なく感ずるのである。

四

父と母の間はどれほど円満であつたか、僕には分らない。僕は
まだ妻を貰つた経験がないから、そう云う事を口にする資格はな
いかも知れないが、いかな仲の善い夫婦でも、時々は氣不味い思
をしあうのが人間の常だろうから、彼らだつて永く添つているう
ちには面白くない汚点を双方の胸の裏に見出しつつ、世間も知ら
ず互も口にしない不満を、自分一人苦く味わつて我慢した場合も
あつたのだろうと思う。もつとも父は疝癰の強い割に陰性な男
だつたし、母は長唄をうたう時よりほかに、大きな声の出せな
い性分なので、僕は二人の言い争う現場を、父の死ぬまでいま

だかつて目撃した事がなかった。要するに世間から云えば、僕らの宅^{うち}ほど静かに整^{とと}のつた家庭は滅^{めつた}多に見当らなかつたのである。あのくらい他^{ひと}の悪口を露骨にいう松本の叔父でさえ、今だにそう認^まめて間^ま違^{ちが}いもの^いと信じ切っている。

母は僕に対して死んだ父を語るごとに、世間の夫のうちで最も完全に近いもののように説明してやまない。これは幾分か僕の腹の底に濁ったまま沈んでいる父の記憶を清めたいための弁護とも思われる。または彼女自身の記憶に時間の布巾^{ふきん}をかけてだんだん光沢^{つや}を出すつもりとも見られる。けれども慈愛^みに充^みちた親としての父を僕に紹介する時には、彼女の態度が全く一変する。平生僕が目^まのあたりに見ているあの柔^に和^{ゆう}な母が、どうしてこ^まう真^ま面^め目

になれるだろうと驚ろくくらい、厳肅な氣象きしやうで僕を打ち据すえる事さえあつた。が、それは僕が中学から高等学校へ移る時分の昔である。今はいくら母に強請せびつて同じ話をくり返して貰もらつても、そんな氣高けだかい気分にはとてもなれない。僕の情操はその頃から学校を卒業するまでの間に、近頃の小説に出る主人公のように、まるで荒すさみ果てたのだろう。現代の空氣に中毒した自分を呪のろいたくなる、僕は時々もう一遍で好いから、母の前でああ云う崇高な感じに触れて見たいという望のぞみを起すが、同時にその望みがとても遂とげられない過去の夢であるという悲しみも湧わいて来る。

母の性格は吾われわれ々が昔から用い慣れた慈母という言葉で形容さえすれば、それで尽きている。僕から見ると彼女はこの二字のた

めに生れてこの二字のために死ぬと云つても差支ない。まことに
気の毒であるが、それでも母は生活の満足をこの一点にのみ集注
しているのだから、僕さえ充分の孝行ができれば、これに越した
彼女の喜はないのである。が、もしその僕が彼女の意に背く事が
多かつたら、これほどの不幸はまた彼女に取つてけつしてない訳
になる。それを思うと僕は非常に心苦しい事がある。

思い出したからここでちよつと云うが、僕は生れてからの一人
息子ではない。子供の時分に妙ちゃんといふ妹と毎日遊んだ事を
覚えてゐる。その妹は大きな模様のある被布を平生着て、人形の
ように髪を切り下げていた。そうして僕の事を常に市蔵ちゃん市
蔵ちゃんと云つて、兄さんとはけつして呼ばなかつた。この妹は

父の亡なくなる何年前かに実扶ジフ的里亜テリアで死んでしまった。その頃は血清注射がまだ発明されない時分だったので、治療も大変に困難だったのだろう。僕は固もとより実扶的里亜と云う名前さえ知らなかった。宅うちへ見舞に来た松本に、御前も実扶的里亜かと調戯からかわれて、うんそうじゃないよ僕軍人だよと答えたのを今だに忘れずにいる。妹が死んでから当分はむずかしい父の顔がだいぶ優しく見えた。母に向つて、まことに御前には気の毒な事をしたといった顔がこおだやとに穏かだったので、小供ながら、ついその時の言葉まで小ちさい胸に刻みつけておいた。しかし母がそれに対してどう答えたかは全く知らない。いくら思い出そうとしても思い出せないところをもつて見ると、初はじめから覚えなかつたのだろう。これほど鋭敏に父

を觀察する能力を、小供の時から持つていた僕が、母に対する注意に欠けていたのも不思議である。人間が自分よりも余計に他^{ひと}を知りたがる癖のあるものだとするれば、僕の父は母よりもよほど他人らしく僕に見えていたのかも分らない。それを逆に云うと、母は觀察に^{あた}い^いしないほど僕に親しかつたのである。——とにかく妹は死んだ。それからの僕は父に対しても母に対しても一人息子であつた。父が死んで以後の今の僕は母に対しての一人息子である。

五

だから僕は母をできるだけ大事にしなければすまない。が、実

際は同じ源因がかえつて僕をわがままにしている。僕は去年学校を卒業してから今日こんにちまで、まだ就職という問題についてただの一日も頭を使った事がない。出た時の成績はむしろ好い方であった。席次を目安めやすに人を採とる今の習慣を利用しようと思えば、随分友達を羨うらやましがらせる位置に坐り込む機会もなかった。現に一度はある方面から人選にんせんの依託いたくを受けた某教授に呼ばれて意向を聞かれた記憶さえ有もっている。それなのに僕は動かなかつた。固もとより自慢でこう云う話をするのではない。真底を打ち明ければむしろ自慢の反対で、全く信念の欠乏から来た引込み思案ひっこしあんなのだから不愉快である。が、朝から晩まで氣骨を折って、世の中に持て囃はやされたところで、どこがどうしたんだという横着は、無

論断わる時からつけ纏まとっていた。僕は時めくために生れた男ではないと思う。法律などを修おきめないで、植物学か天文学でもやつたらまだ性しょうに合あった仕事为天から授かるかも知れないと思う。僕は世間に対してははなはだ気の弱い癖に、自分に対しては大変辛抱の好い男だからそう思うのである。

こういう僕のがまをわがままなりに通してくれるものは、云うまでもなく父が遺のこして行つたわずかばかりの財産である。もしこの財産がなかったら、僕はどんな苦しい思をして、法学士の肩書を利用して、世間と戦かわなければならぬのだと考えると、僕は死んだ父に対して改ためて感謝の念を捧げたくなると同時に、自分のわがままはこの財産のためにやっと存在を許されて

いるのだからよほど腰の坐らないあさはかなものに違ないと推断する。そうしてその犠牲にされている母が一層気の毒になる。

母は昔堅むかし氣かたぎの教育を受けた婦人の常として、家名を揚げるのが子たるものの第一の務つとめだというような考えを、何より先に抱いだいている。しかし彼女の家名を揚あげるといふのは、名譽の意味か、財産の意味か、権力の意味か、または徳望の意味か、そこへ行くと全く何の分別もない。ただ漠ぼくぜん然と、一つが頭の上に落ちて来れば、すべてその他が後あとを追つて門前に輻ふく湊そうするぐらいに思っている。しかし僕はそういう問題について、何事も母に説明してやる勇氣がない。説明して聞かせるには、まず僕の見識でもっともと認めた家名の揚げ方をした上でないと、僕にその資格ができ

ないからである。僕はいかなる意味においても家名を揚げ得る男ではない。ただ汚けがさなだけでの見識を頭に入れておくばかりである。そうしてその見識は母に見せて喜こんで貰もらえるどころか、彼女とはまるでかけ離れた縁のないものなのだから、母も心細いだろう。僕も淋しい。

僕が母にかける心配の数あるうちで、第一に挙げなければならぬのは、今話した通りの僕の欠点である。しかしこの欠点を矯ためずに母と不足なく暮らして行かれるほど、母は僕を愛していてくれるのだから、ただすまないと思う心を失なわずに、このままで押せば押せない事もないが、このわがままよりもつと鋭どい失望を母に与えそうなので、僕が私ひそかに胸を痛めているのは結婚

問題である。結婚問題と云うより僕と千代子を取り巻く周囲の事情と云った方が適当かも知れない。それを説明するには話の順序としてまず千代子の生れない当時に^{さかの}溯ぼる必要がある。その頃の田口は^{はばき}けつして今ほどの幅利でも資産家でもなかつた。ただ将来見込のある男だからと云うので、父が母の^{いと}妹に当るあの叔母を嫁にやるように周旋したのである。田口は^{もと}固より僕の父を先輩として仰いでいた。なにかにつけて相談もしたり、世話にもなつた。両家の間に新らしく成立したこの親しい関係が、月と共に加速度をもつて円満に進行しつつある際に千代子が生れた。その時僕の母はどう思ったものか、大きくなつたらこの子を市蔵の嫁にくれまいかと田口夫婦に頼んだのだそうである。母の語るところによ

ると、彼らはその折快おりよく母の頼みを承諾したのだと云う。固より後から百代が生まれる、吾一ごいちという男の子もできる、千代子もやろうとすればどこへでもやられるのだが、きつと僕にやらなければならぬほど確かに母に受合うあつたかどうか、そこは僕も知らない。

六

とにかく僕と千代子の間には両方共物心のつかない当時からすでにこういう絆きずがあつた。けれどもその絆は僕ら二人を結びつける上においてすこぶる怪しい絆であつた。二人は固もとより天あがに上る

雲雀ひばりのごとく自由に生長した。絆を縋なつた人でさえ確しかとその端はしを握にぎっている気ではなかつたのだろう。僕は怪しい絆という文字を奇縁という意味でここに使う事のできないのを深く母のために悲しむのである。

母は僕の高等学校に這はい入いつた時分それとなく千代子の事を仄ほのめかした。その頃の僕に色氣のあつたのは無論である。けれども未来の妻さいという觀念はまるで頭に無かつた。そんな話に取り合あう落ちつきさえ持つていながかつた。ことに子供の時からいっしょに遊んだり喧嘩けんかをしたり、ほとんど同じ家に生長したと違ちがわない親しみのある少女は、余り自分に近過ぎるためかはなはだ平凡に見えて、異性に対する普通の刺戟しげきを与えるに足りなかつた。これは僕

の方ばかりではあるまい、千代子もおそらく同感だろうと思う。その証^{しやうこ}拠には長い交際の前後を通じて、僕はいまだかつて男として彼女から取り扱かわれた経験^{けいけん}を記憶する事ができない。彼女から見た僕は、怒^{おこ}ろうが泣^なこうが、科^{しな}をしようが色眼^{しよく}を使おうが、常に変わらない従兄^{いとこ}に過ぎないのである。もつともこれは幾分か、純粹^{きしやう}な氣象^{きしやう}を受けて生れた彼女の性情からも出るのです、そこになるとまた僕ほど彼女を知り抜いているものはないのだが、単にそれだけでああ男^{なん}女^{にょ}の牆^{しょう}壁^{へき}が取り除^のけられる訳のものではあるまい。ただ一度……しかしこれは後で話す方が宜^よかろうと思う。

母は自分のいう事に耳を借さなかつた僕を羞恥^{はにかみや}家と解釈して、

再び時期を待つもののごとくに、この問題を懐ふところに収めた。羞恥は僕といえども否定する勇気がない。しかし千代子に意があるから羞恥はにかんだのだと取った母は、全くの反対を事実と認めたと同じ事である。要するに母は未来に対する準備という考から、僕ら二人をなるべく仲善く育て上げよう育て上げようと力つとめた結果、男女としての二人をしだいに遠ざからした。そうして自分では知らずにいた。それを知らなければならぬようにした僕は全く残酷であつた。

その日の事を語るのが僕には実際の苦痛である。母は高等学校時代ににお句わした千代子の問題を、僕が大学の二年になるまで、じつと懐だに抱いたまま一人であたた温めていたと見えて、ある晩——春休

みの頃の花の咲いたという噂うわさのあつたある日の晩——そつと僕の前に出して見せた。その時は僕もだいぶ大人おとならしくなつていたので、静かにその問題を取り上げて、裏表から鄭寧ていねいに吟味ぎんみする余裕ゆうができていた。母もその時にはただ遠くから匂わせるだけでなくて、自分の希望に正当の形式を与える事を忘れなかつた。僕は何心なく従妹いとこは血属だから厭いやだと答えた。母は千代子の生れた時くれろと頼んでおいたのだから貰つたらいいだろうと云つて僕を驚ろかした。なぜそんな事を頼んだのかと聞くと、なぜでも私わたしの好きな子で、御前も嫌きらうはずがないからだ、赤ん坊には応用の利きかないような挨拶あいさつをして僕を弱らせた。だんだんそこを押しで見ると、しまいに涙ぐんで、実は御前のためではない、全く私

のために頼むのだと云う。しかもどうしてそれが母のためになるのか、その理由はいくら聞いても語らない。最後に何でもかでも千代子は厭いやかと聞かれた。僕は厭でも何でもないと答えた。しかし当人も僕のところへ来る気はなし、田口の叔父も叔母も僕にくれたくはないのだから、そんな事を申し込むのは止した方が好い、先方で迷惑するだけだからと教えた。母は約束だから迷惑しても構わない、また迷惑するはずがないと主張して、昔むかし田口が父の世話になつたり厄やっかい介になつたりした例を数え挙げた。僕はやむを得ないからこの問題は卒業するまで解決を着けずにおこうと云い出した。母は不安の裏うちに一縷いちるの望を現わした顔色をして、もう一遍とくと考えて見てくれと頼んだ。

こういう事情で、今まで母一人で懐ふところに抱だいていた問題を、その後のちは僕も抱かなければならなくなった。田口はまた田口流に、同じ問題を瞬かえしつつかあるのではなからうか。たとい千代子をほかへ縁づけるにしても、いざと云う場合には一応こちらの承諾を得る必要があるとすれば、叔父も気がかりに違いない。

七

僕は不安になった。母の顔を見るたびに、彼女を欺あざむいてその日その日を姑息こそくに送っているような気がしてすまなかつた。一ひとこ頃は思もい直してでき得るならば母の希望通り千代子を貰もらってや

りたいとも考えた。僕はそのためにわざわざ用もない田口の家へ遊びに行つてそれとなく叔父や叔母の様子を見た。彼らは僕の母の肉薄に応ずる準備としてまえもつて僕を疎んずるような素振を口にも拳動にもけつして示さなかつた。彼らはそれほど浅薄なまた不親切な人間ではなかつたのである。けれども彼らの娘の未来の夫として、僕が彼らの眼にいかに憐れむべく映じていたかは、遠き前から僕の見抜いていたところと、ちつとも変化を来さないばかりか、近頃になつてますますその傾が著るしくなるように思われた。彼らは第一に僕の弱々しい体格と僕の蒼白い顔色とを婿として肯がわなうけいむこつつもりらしかつた。もつとも僕は神経の鋭どく動く性質だから、物を誇大に考え過したり、要らぬ僻ひがみを起し

て見たりする弊がよくあるので、自分の胸に収めた委くわしい叔父叔母の觀察を遠慮なくここに述べる非礼は憚はばかりたい。ただ一言で云うと、彼らはその当時千代子を僕の嫁にしようと明言したのだらう。少なくともやってもいいぐらいには考えていたのだらう。が、その後彼らの社会に占め得た地位と、彼らとは背中合せに進んで行く僕の性格が、二重に実行の便宜を奪つて、ただ惚ぼけかかつた空むなしい義理の抜ぬけ殻がらを、彼らの頭のどこかに置き去りにして行つたと思えば差支さしつかえないのである。

僕と彼らとはあらゆる人の結婚問題についても多くを語る機会を持たなかつた。ただある時叔母と僕との間にこんな会話が取り換わされた。

「市いっさんももうそろそろ奥さんを探さなくっちゃなりませんね。

姉さんはとうから心配しているようですよ」

「好いのがあったら母に知らしてやって下さい」

「市さんにはおとなしくって優やさしい、親切な看護婦みたような女がいいでしょう」

「看護婦みたような嫁はないかって探しても、誰も来手きてはあるまいな」

僕が苦笑しながら、自みづから嘲あざけるごとくこう云った時、今まで向うの隅すみで何かしていた千代子が、不意に首を上げた。

「あたし行って上げましょうか」

僕は彼女の眼を深く見た。彼女も僕の顔を見た。けれども両方

共そこに意味のある何物をも認めなかつた。叔母は千代子の方を振り向きもしなかつた。そうして、「御前のようなむきだしのがらがらした者が、何で市さんの気に入るものかね」と云つた。僕は低い叔母の声のうちに、窘たしなめるようなまた怖おそれるような一種の響を聞いた。千代子はただだからからと面白そうに笑つただけであつた。その時百代子も傍そばにいた。これは姉の言葉を聞いて微笑しながら席を立つた。形式を具そなえない断りを云われたと解釈した僕はしばらくしてまた席を立つた。

この事件後僕は同じ問題に関して母の満足を買うための努力をますます屑くずよしとしなくなつた。自尊心の強い父の子として、僕の神経はこういう点において自分でも驚ろくくらい過敏なのであ

る。もちろん僕はその折の叔母に対してけっして感情を害しはしなかつた。こつちからまだ正式の申し込みを受けていない叔母として、ああよりほかに意向の洩もらし方も無かつたのだらうと思ふ。千代子に至つては何を云おうが笑おうが、いつでも蟠わだかまりのない彼女の胸の中を、そのまま外に表わしたに過ぎないと考えていた。僕はその時の千代子の言葉や様子から察して、彼女が僕のところへ来たがつていない事だけは、従前通りたしかに認めしたが、同時に、もし差し向いで僕の母にしんみり話し込まれでもしたら、ええそういう訊わけなら御嫁に来て上げましよう、その場ですぐ承知しないとも限るまいと思つて、私ひそかに掛念けねんを抱いだいたくらいである。彼女はそう云う時に、平気で自分の利害や親の意思を犠牲に

供し得る極^{きわ}めて純粹の女だと僕は常から信じていたからである。

八

意地の強い僕は母を嬉^{うれ}しがらせるよりもなるべく自我を傷^{きず}けな
いようにと祈った。その結果千代子が僕の知らない間に、母から
説き落されてはと掛念して、暗にそれを防ぐ分別をした。母は彼
女の生れ落ちた当初すでに僕の嫁ときめただけあって、多くある
姪^{めい}や甥^{おい}の中で、取り分け千代子を可^{かわ}愛^{あい}がった。千代子も子供の時
分から僕の家を生家のごとく心得て遠慮なく寝泊^{ねとま}りに来た。その
縁故で、田口と僕の家が昔に比べると比較的疎^{うと}くなつた今^{こん}日^{にち}で

も、千代子だけは叔母さん叔母さんと云つて、生の親^{うみ}にでも逢いに来るような朗らかな顔をして、しげしげ出入^{でいり}をしていた。単純な彼女は、自分の身を^{まと}的に時々起る縁談をさえ、隠すところなく母に打ち明けた。人の好い母はまたそれを素直に聞いてやるだけで、恨^{うら}めしい眼つき一つも見せ得なかつた。僕の恐れる懇談は、こういう関係の深い二人の間に、いつ起らないとも限らなかつたのである。

僕の分別というのはまずこの点に関して、当分母の口を塞^{ふさ}いでおこうとする用心に過ぎなかつた。ところがいざ改たまつて母にそれを切り出そうとすると、ただ自分の我^がを通すために、弱い親の自由を奪うのは残酷な子に違ないという心持が、どこにか萌^{きざ}す

ので、ついそれなりにしてやめる事が多かった。もつとも年寄の眉を曇らすのがただ情ないばかりでやめたとも云われない。これほど親しい間柄でさえ今まで思い切ったところを千代子に打ち明け得なかつた母の事だから、たといこのままにしておいても、まあ当分は大丈夫だろうという考が、母に対する僕を多少抑えたのである。

それで僕は千代子に関して何という明瞭な所置も取らずに過ぎた。もつともこういう不安な状態で日を送つた時期にも、まるで田口の家と打絶えた訳ではなかつたので、会には単に母の喜こぶ顔を見るだけの目的をもつて内幸町まで電車を利用した覚えあつたのである。そういうある日の晩、僕は久しぶりに千代子

から、習い立ての珍らしい手料理を御馳走ごちそうするからと引止められて、夕飯の膳ぜんについた。いつも留守るすがちな叔父がその日はちよど内にいて、食事中例の気き作さくな話をし続けにしたため、若い人の陽気な笑い声が障しょうじ子こに響くくらい家の中が賑にぎわった。飯が済んだ後あとで、叔父はどういう考か、突然僕に「市いっさん久しぶりに一局やろうか」と云い出した。僕はさほど気が進まなかつたけれどもせつかくだから、やりましようと答えて、叔父と共に別室しりぞへ退ひいた。二人はそこで二三番打った。固もとより下手と下手の勝負なので、時間のかかるはずもなく、碁石ごいしを片づけてもまだそれほど遅くはならなかつた。二人は煙草たばこを呑みながらまた話を始めた。その時僕は適当な機会を利用してわざと叔父に「千代子さんの縁談はま

だ纏まりまとませんか」と聞いた。それは固より僕が千代子に対して他意のないという事を示すためであつた。がまた一方では、一日も早くこの問題の解決が着けば、自分も安心だし、千代子も幸福だと考えたからである。すると叔父はさすがに男だけあつて、何の躑ちゆうちよ躑ちゆうちよもなくこう云つた。——

「いやまだなかなかそう行きそうもない。だんだんそんな話を持つて来てくれるものはあるが、何しろむずかしくつて弱る。その上調べれば調べるほど面倒になるだけだし、まあ大抵のところでは纏まるなら纏めてしまおうかと思つてる。——縁談なんでもものは妙なものでね。今だから御前に話すが、実は千代子の生れたとき、御前の御母さんが、これを市蔵の嫁に欲しいってね——生れ立て

の赤ん坊をだよ」

叔父はこの時笑いながら僕の顔を見た。

「母は本気でそう云ったんだそうです」

「本気さ。姉さんはまた正直な人だからね。実にいい人だ。今でも時々真面目まじめになつて叔母さんにその話をするそうだ」

叔父は再び大きな声を出して笑つた。僕ははたして叔父がこう軽くこの事件を解釈しているなら、母のために少し弁じてやろうかと考えた。が、もしこれが世慣れた人の巧妙な覺さとらせぶりだとすれば、一口でも云うだけが愚おろかだと思ひ直して黙つた。叔父は親切な人でまた世慣れた人である。彼のこの時の言葉はどちらの眼で見ているのか、僕には今もつて解らない。ただ僕がその時以来

千代子を貰わない方へいよいよ傾いたのは事実である。

九

それから二カ月ばかりの間僕は田口の家へ近寄らなかつた。母さえ心配しなければ、それぎり内幸町へは足を向けずにすましたかも知れなかつた。たとい母が心配するにしても、単に彼女に対する掛念けねんだけが問題なら、あるいは僕の気随きずいをいざという極点まで押し通したかも知れなかつた。僕はそんな風に生みつけられた男なのである。ところが二カ月の末になつて、僕は突然自分の片意地ひるを翻がえさなければ不利だという事に気がついた。実を云う

と、僕と田口と疎遠になればなるほど、母はあらゆる機会を求めて、ますます千代子と接触するように力め出したのである。そうしていつなんどき僕の最も恐れる直接の談判を、千代子に向つて開かないとも限らないように、漸々形勢を切迫させて来たのである。僕は思い切つて、この危機を一帳場先へ繰り越そうとした。そうしてその決心と共にまた田口の敷居を跨ぎ出した。

彼らの僕を遇する態度に固より変りはなかつた。僕の彼らに対する様子もまた二カ月前の通りであつた。僕と彼らとは故のごとく笑つたり、ふぎけたり、揚足の取りつくらをしたりした。要するに僕の田口で費やした時間は、騒がしいくらい陽気であつた。本当のところをいうと、僕には少し陽氣過ぎたのである。したが

つて腹の中が常に空虚な努力に疲れていた。鋭い眼で注意したら、どこかに偽いつわりの影が射して、本来の自分を醜いく彩いろどっていたらうと思う。そのうちで自分の気分と自分の言葉が、半紙の裏表のようににびたりと合った愉快を感じた覚おぼえがただ一遍ある。それは家例として年に一度か二度田口の家族が揃そろって遊びに出る日の出来事であった。僕は知らずに奥へ通つて、千代子一人が閑静に坐つているのを見て驚ろいた。彼女は風邪かぜを引いたと見えて、咽喉のどに湿布をしていた。常にも似ない蒼あおい顔色も淋さびしく思われた。微笑しながら、「今日はあたし御留守居よ」と云つた時、僕は始めて皆みんな出払つた事に気がついた。

その日彼女は病気のせいかもしれないよりもよりしんみり落ちついていた。

僕の顔さえ見ると、きつと冷かし文句を並べて、どうしても悪口
の云い合いを挑いどまなければやまない彼女が、一人ぼっちで妙に沈
んでいる姿を見たとき、僕はふと可憐な心を起した。それで席に
着くや否いなや、優しい慰藉いしやの言葉を口から出す気もなく自おのずから出し
た。すると千代子は一種変な表情をして、「あなたは今日は大変優
しいわね。奥もろさんを貰もらったらそういう風に優しくしてあげなくつ
ちやいけないわね」と云った。遠慮がなくて親しみだけ持つてい
た僕は、今まで千代子に対していくら無愛嬌ぶあいきように振舞つても差さしつ
支かえないものと暗あんに自みずから許していたのだという事にこの時始め
て気がついた。そうして千代子の眼うちの中にどこか嬉しそうな色の
微かすかながら漂かすようのを認めて、自分が悪かったと後悔した。

二人はほとんどいっしょに生長したと同じような自分達の過去を振り返った。昔の記憶を語る言葉が互の唇くちびるから當時を蘇よみがえ生ららせる便たよりとして洩もれた。僕は千代子の記憶が、僕よりも遙はるかに勝すぐれて、細かいところまで鮮あざやかに行き渡っているのに驚ろいた。彼女は今から四年前、僕が玄関に立ったまま袴はかまの綻ほころびを彼女に縫ぬいわせた事まで覚えていた。その時彼女の使ったのは木綿糸もめんいとでなくて絹糸であった事も知っていた。

「あたしあなたの描かいてくれた画えをまだ持つててよ」

なるほどそう云われて見ると、千代子に画を描おぼえてやった覚えがあった。けれどもそれは彼女が十二三の時の事で、自分が田口に買かって貰もらった絵具と紙を僕の前へ押しつけて無理矢理に描かかせた

ものである。僕の画道における嗜好たしなみは、それから以後今日こんにちに至るまで、ついで画筆えふでを握った試しがないのでも分るのだから、赤や緑の単純な刺戟しげきが、一通り彼女の眼に映ってしまえば、興味はそこに尽きなければならぬはずのものであった。それを保存している」と聞いた僕は迷惑そうに苦笑せざるを得なかつた。

「見せて上げましょうか」

僕は見ないでもいいと断つた。彼女は構わず立ち上がって、自分の室へやから僕の画を納めた手文庫を持って来た。

十

千代子はその中から僕の描いた画を五六枚出して見せた。それは赤い椿つばきだの、紫むらさきの東あずまぎく菊きくだの、色変りのダリヤだの、いずれも単純な花卉かきの写生に過ぎなかったが、要いらない所にわざと手を掛けて、時間の浪費を厭いとわずに、細かく綺麗きれいに塗り上げた手際てぎわは、今の僕から見るとほとんど驚ろくべきものであった。僕はこれほど綿密であった自分の昔に感服した。

「あなたそれを描いて下すつた時分は、今よりよっぽど親切だったわね」

千代子は突然こう云った。僕にはその意味がまるで分らなかつた。画から眼を上げて、彼女の顔を見ると、彼女も黒い大きな瞳ひとみを僕の上にじつと据すえていた。僕はどういう訳でそんな事を云う

のかと尋ねた。彼女はそれでも答えずに僕の顔を見つめていた。やがていつもより小さな声で「でも近頃頼んだって、そんなに精出して描いては下さらないでしょう」と云った。僕は描くとも描かないとも答えられなかった。ただ腹の中で、彼女の言葉をもつともだと首肯^{うけが}した。

「それでもよくこんな物を丹念にしまっておくね」

「あたし御嫁に行く時も持つてくつもりよ」

僕はこの言葉を聞いて変に悲しくなった。そうしてその悲しい気分が、すぐ千代子の胸に^{こた}応えそうなのがなお恐ろしかった。僕はその刹那^{せつな}すでに涙の溢^{あふ}れそうな黒い大きな眼を自分の前に想像したのである。

「そんな下らないものは持って行かないがいいよ」

「いいわ、持って行つたつて、あたしのだから」

彼女はこう云いつつ、赤い椿や紫の東菊を重ねて、また文庫の中へしまった。僕は自分の気分を変えるためわざと彼女にいつごろ嫁に行くつもりかと聞いた。彼女はもう直じきに行くのだと答えた。「しかしまだきまつた訳じゃないんだろう」

「いいえ、もうきまつたの」

彼女は明らかに答えた。今まで自分の安心を得る最後の手段として、一いちじつ日も早く彼女の縁談が纏まとまれば好いがと念じていた僕の心臓は、この答と共にどきんと音のする浪なみを打った。そうして毛穴から這はい出すような膏あぶらあせ汗あせが、背中と腋わきの下を不意に襲おそつ

た。千代子は文庫を抱だいて立ち上った。障しょうじ子を開けるとき、上から僕を見下みおろして、「嘘うそよ」と一口判切はつきり云い切つたまま、自分の室へやの方へ出て行つた。

僕は動かんがえく考もなく故もとの席に坐つていた。僕の胸には忌いまいま々しい何物も宿らなかつた。千代子の嫁に行く行かないが、僕にどう影響するかを、この時始めて實際に自覚する事のできた僕は、それを自覚させてくれた彼女の翻ほんろう弄ろうに対して感謝した。僕は今まで気がつかずに彼女を愛していたのかも知れなかつた。あるいは彼女が気がつかないうちに僕を愛していたのかも知れなかつた。――僕は自分という正体が、それほど解り悪い怖こわいものなのだろうかと考えて、しばらく茫ぼうぜん然ぜんとしていた。するとあちらの方で電

話がちりんちりんと鳴った。千代子が縁伝いに急ぎ足でやって来て、僕にいつしよに電話をかけてくれと頼んだ。僕にはいつしよにかけるという意味が呑み込めなかったが、すぐ立って彼女と共に電話口へ行った。

「もう呼び出してあるのよ。あたし声が嘎かれて、咽喉のどが痛くつて話ができないからあなた代理をしてちようだい。聞く方はあたしが聞くから」

僕は相手の名前も分らない、また向うの話の通じない電話をかけるべく、前まえごと屈みになって用意をした。千代子はすでに受話器を耳にあてていた。それを通して彼女の頭へ送られる言葉は、独ひとり彼女が占有するだけなので、僕はただ彼女の小声でいう挨拶あいさつ

を大きくして訳も解らず先方へ取次ぐに過ぎなかつた。それでも始の内は滑稽こっけいも構わず暇がかかるとも厭いとわず平気でやっていたが、しだいに僕の好奇心を挑ちようはつ発するような返事や質問が千代子の口から出て来るので、僕は曲こじんだまま、おいちよいとそれを御貸おかしと声をかけて左手を真直まつすぐに千代子の方へ差し伸べた。千代子は笑いながら否いやいや々々をして見せた。僕はさらに姿勢を正しくして、受話器を彼女の手から奪おうとした。彼女はけっしてそれを離さなかつた。取ろうとする取らせまいとする争が二人の間で起つた時、彼女は手早く電話を切つた。そうして大きな声をあげて笑い出した。――

十一

こういう光景がもし今より一年前に起つたならと僕はその後何遍もくり返しくり返し思つた。そう思うたびに、もう遅過ぎる、時機はすでに去つたと運命から宣告されるような気がした。今からでもこういう光景を二度三度と重ねる機会は捉ま^{つか}えられないか、同じ運命が暗に僕を唆^{そそ}のかす日もあつた。なるほど二人の情愛を互いに反射させ合うためにのみ眼の光を使う手段を憚^{はば}からなかつたなら、千代子と僕とはその日を基点として出立しても、今頃は人間の利害で割^さく事のできない愛に陥^{おち}つていたかも知れない。ただ僕はそれと反対の方針を取つたのである。

田口夫婦の意向や僕の母の希望は、他人の入智慧いれぢえ同様に意味の少ないものとして、単に彼女と僕を裸にした生れつきだけを比較すると、僕らはとてもいっしょになる見込のないものと僕は平生から信じていた。これはなぜと聞かれても満足の行くように答弁ができないかも知れない。僕は人に説明するためにそう信じているのでないから。僕はかつて文学好のある友達からダヌンチオと一少女の話を聞いた事がある。ダヌンチオというのは今の以太利イタリヤで一番有名な小説家だそうだから、僕の友達の主意は無論彼の勢力を僕に紹介するつもりだったのだらうが、僕にはそこへ引合に出された少女の方が彼よりも遥はるかに興味が多かつた。その話はこうである。――

ある時ダヌンチオが招待を受けてある会合の席へ出た。文学者を国家の装飾のようにもてはやす西洋の事だから、ダヌンチオはその席に群むらがるすべての人から多大の尊敬と愛あいきよう嬌きようをもつて偉人のごとく取扱かわれた。彼が満堂の注意を一身に集めて、衆人の間をあちこち徘徊はいかいしているうち、どういう機会はすみか自分の手ハンケ巾チを足もとの下へ落した。混雑の際と見えて、彼は固もとより、傍はたのものもいっこうそれに気がつかずにいた。するとまだ年の若い美しい女が一人その手巾ゆかを床の上から取り上げて、ダヌンチオの前へ持つて来た。彼女はそれをダヌンチオに渡すつもりで、これはあなたなのでしょうと聞いた。ダヌンチオはありがとうと答えたが、女の美しい器量きりように対してちよつと愛あいきよう嬌きようが必要ひつやうになつたと見

えて、「あなたのにして持つていらつしやい、進上しますから」とあたかも少女の喜びを予想したような事を云つた。女は一口の答もせず黙つてその手巾を指先でつまんだまま暖^{ストーヴ}炉^{そば}の傍まで行つていきなりそれを火の中へ投げ込んだ。ダヌンチオは別にしてその他の席に居合せたものはことごとく微笑を洩^もらした。

僕はこの話を聞いた時、年の若い茶褐色の髪毛を有^もつた以太利生れの美人を思い浮べるよりも、その代りとしてすぐ千代子の眼と眉^{まゆ}を想像した。そうしてそれがもし千代子でなくつて妹の百代子であつたなら、たとい腹の中はどうあろうとも、その場は礼を云つて快よく手巾を貰い受けたに違いあるまいと思つた。ただ千代子にはそれができないのである。

口の悪い松本の叔父はこの姉きょうだい妹あだなに渾名をつけて常に大蝦蟇おおがまと小蝦蟇ちいがまと呼んでいる。二人の口が唇くちびるの薄い割に長過ぎるところが銀貨入れの臺がまぐち口だと云つては常に二人を笑わせたり怒らせたりする。これは性質に關係のない顔形の話であるが、同じ叔父が口癖のようにこの姉妹を評して、小臺ちいがまはおとなしくつて好いが、大臺おおがまは少し猛烈過ぎると云うのを聞きたびに、僕はあの叔父がどう千代子を觀察しているのだろうと考えて、必ず彼の眼識うたがいに疑さしはを挟ささみたくなる。千代子の言語なり挙動なりが時に猛烈に見え
るのは、彼女が女らしくない粗野なところを内に蔵かくしているからではなくつて、余り女らしい優しい感情に前後を忘れて自分を投げかけるからだ。僕は固く信じて疑がわないのである。彼女の有も

つてゐる善悪是非の分別はほとんど學問や經驗と獨立してゐる。ただ直覺的に相手を目当に燃え出すだけである。それだから相手は時によると稲妻いなずまに打たれたような思いをする。当りの強く烈はげしく来るのは、彼女の胸から純粹な塊かたまりが一度に多量に飛んで出るといふ意味で、刺とげだの毒だの腐蝕劑ふしょくざいだのを吹きかけたり浴びせかけたりするのはまるで訳が違ふ。その証拠にはたとひどれほど烈はげしく怒おこられても、僕は彼女から清いもので自分の腸はらわたを洗われたような氣持のした場合が今までに何遍もあつた。氣高けだかいものに出會つたといふ感じさえ稀まれには起したくらいである。僕は天下の前にただ一人立つて、彼女はあらゆる女のうちでもつとも女らしい女だと弁護したいくらいに思つてゐる。

十二

これほど好く思っている千代子を妻としてどこが不都合なのか。——実は僕も自分で自分の胸にこう聞いた事がある。その時理由も何もまだ考えない先に、僕はまず恐ろしくなった。そうして夫婦としての二人を長く眼前に想像するにたえなかつた。こんな事を母に云つたら定めし驚ろくだろう、同年輩の友達に話してもあるいは通じないかも知れない。けれども強いて沈黙のなかに記憶を埋める必要もないから、それを自分だけの感想に止めないでここに自白するが、一口に云うと、千代子は恐ろしい事を知らない

女なのである。そうして僕は恐ろしい事だけ知った男なのである。だからただ釣り合わないばかりでなく、夫婦となればまさに逆にでき上るよりほかに仕方がないのである。

僕は常に考えている。「純粹な感情ほど美しいものはない。美しいものほど強いものはない」と。強いものが恐れないのは当たり前である。僕がもし千代子を妻にするとしたら、妻の眼から出る強烈な光に堪^たえられないだろう。その光は必ずしも怒^{いかり}を示すとは限らない。情^{なさけ}の光でも、愛の光でも、もしくは渴^{かつこう}仰^いの光でも同じ事である。僕はきつとその光のために射^い竦^{すく}められるにきまつている。それと同程度あるいはより以上の輝くものを、返礼として彼女に与えるには、感情家として僕が余りに貧弱だからであ

る。僕は芳烈な一樽の清酒を貰つても、それを味わい尽くす資格を持たない下戸げことして、今日こんにちまで世間から教育されて来たのである。

千代子が僕のところへ嫁に来れば必ず残酷な失望を経験しなければならぬ。彼女は美しくしい天賦てんぷの感情を、あるに任せて惜気おしげもなく夫の上に注ぎ込む代りに、それを受け入れる夫が、彼女から精神上的の營養を得て、大いに世の中に活躍するのを唯一の報酬として夫から予期するに違ひない。年のいかない、学問の乏しい、見識の狭い点から見ると気の毒と評して然るべき彼女は、頭と腕を挙げて実世間に打ち込んで、肉眼で指す事のできる権力か財力を攫つかまなくつては男子でないと考えている。単純な彼女は、たと

い僕のところへ嫁に来て、やはりそう云う働きぶりを僕から要求し、また要求さえすれば僕にできるものとのみ思いつめている。二人の間に横たわる根本的の不幸はここに存在すると云つても差さしつかえ支しないのである。僕は今云つた通り、妻さいとしての彼女の美しい感情を、そう多量に受け入れる事のできない至つて燻くすぶつた性質たちなのだが、よし焼石に水を濺そそいだ時のように、それをことごとく吸い込んだところで、彼女の望み通りに利用する訳にはとても行かない。もし純粋な彼女の影響が僕のどこかに表われるとすれば、それはいくら説明しても彼女には全く分らないところに、思いも寄らぬ形となつて発現するだけである。万一彼女の眼にとまつても、彼女はそれをコスメチックで塗り堅めた僕の頭や羽はぶ二

重たえの足袋たびで包んだ僕の足よりもありがたがらないだろう。要するに彼女から云えば、美くしいものを僕の上に永久浪費して、しだいしだいに結婚の不幸を嘆くに過ぎないのである。

僕は自分と千代子を比較するごとに、必ず恐れない女と恐れる男という言葉をくり返したくなる。しまいにはそれが自分の作った言葉でなくつて、西洋人の小説にそのまま出ているような氣を起す。この間講釈好きの松本の叔父から、詩と哲学の区別を聞かされて以来は、恐れない女と恐れる男というと、たちまち自分に縁の遠い詩と哲学を想おもい出す。叔父は素しろ人うと学問ながらこんな方面に興味を有もっているだけに、面白い事をいろいろ話して聞かしたが、僕を捕つかまえて「御前ごぜんのような感情家は」と暗あんに詩人らしく

僕を評したのは間違っている。僕に云わせると、恐れないのが詩人の特色で、恐れるのが哲人の運命である。僕の思い切った事のできずにぐずぐずしているのは、何より先に結果を考えて取越とりこし苦勞くろうをするからである。千代子が風のごとく自由に振舞うのは、先の見えないほど強い感情が一度に胸に湧わき出るからである。彼女は僕の知っている人間のうちで、最も恐れない一人いちにんである。だから恐れる僕を軽蔑けいべつするのである。僕はまた感情という自分の重みでけつまずきそうな彼女を、運命のアイロニーを解せざる詩人として深く憐れあわむのである。否時いなによると彼女のために戦慄せんりつするのである。

十三

須永すながの話の末段は少し敬太郎けいたろうの理解力を苦しめた。事実を云えば彼はまた彼なりに詩人とも哲学者とも云い得る男なのかも知れなかつた。しかしそれは傍はたから彼を見た眼の評する言葉で、敬太郎自身はけつしてどつちとも思つていなかつた。したがつて詩とか哲学とかいう文字も、月の世界でなければ役に立たない夢のようなものとして、ほとんど一顧あたいに値みしないくらいに見限みかぎつていた。その上彼は理窟りくつが大嫌いだいきらいであつた。右か左へ自分の身体からだを動かかし得ないただの理窟は、いくら旨うまくできても彼には用のない贗が造紙幣んぞうしへいと同じ物であつた。したがつて恐れる男とか恐れない女

とかいう辻占つじうらに似た文句を、黙って聞いているはずはなかったのだが、しつとりと潤うるおった身の上話の続きとして、感想がそこへ流れ込んで来たものだから、敬太郎もよく解らないながら素直に耳を傾むけなければすまなかつたのである。

須永もそこに気がついた。

「話が理窟張りくつばつてむずかしくなつて来たね。あんまり一人で調子に乗って饒舌しゃべつているものだから」

「いや構わん。大変面白い」

「ステツキ洋杖きぎめの効果がありませんか」

「どうも不思議にあるようだ。ついでにもう少し先まで話す事にしようじゃないか」

「もう無いよ」

須永はそう云い切つて、静かな水の上に眼を移した。敬太郎もしばらく黙つていた。不思議にも今聞かされた須永の詩だか哲学だか分らないものが、形の判はつきり然しない雲の峰のように、頭の中に聳そびえて容易に消えそうにしなかつた。何事も語らないで彼の前に坐すわつてゐる須永自身も、平生の紋切形もんきりがたを離れた怪しい一種の人物として彼の眼に映じた。どうしてもまだ話の続きがあるに違ちがはないと思つた敬太郎は、今の一番しまいの物語はいつごろの事かと須永に尋ねた。それは自分の三年生ぐらいの時の出来事だと須永は答えた。敬太郎は同じ関係が過去一年余りの間にどういう径路を取つてどう進んで、今はどんな解釈がついてゐるかと思ひ返

した。須永は苦笑して、まず外へ出てからにしようと云った。二人は勘定かんじょうを済まして外へ出た。須永は先へ立つ敬太郎の得意に振り動かす洋杖の影を見てまた苦笑した。

柴又しばまたの帝釈天たいしゃくてんの境内けいだいに來た時、彼らは平凡な堂宇どううを、

義理に拝ませられたような顔をしてすぐ門を出た。そうして二人共汽車を利用してすぐ東京へ帰ろうという氣を起した。停車場ステーション

へ來ると、間怠まだるこい田舎汽車いなかの発車時間にはまだだまいぶ間まがあった。二人はすぐそこにある茶店に入つて休息した。次の物語はその時敬太郎が前約を楯たてに須永から聞かして貰つたものである。

僕が大学の三年から四年に移る夏休みの出来事であつた。宅うちの

二階に籠こもつてこの暑中をどう暮らしたら宜よかろうと思案している
と、母が下から上あがつて来て、閑ひまになったら鎌倉へちよつと行つて
来たらどうだと云つた。鎌倉にはその一週間ほど前から田口のもの
が避暑に行つていた。元来叔父は余り海うみべ辺を好まない性質たちな
で、一家いっけのものは毎年軽井沢の別荘へ行くのを例にしていただけだ
が、その年は是非海水浴がしたいと云う娘達の希望を容いれて、材
木座にある、ある人の邸宅やしきを借り入れたのである。移る前に千代
子が暇いとま乞こいかたがた報知しらせに来て、まだ行つては見ないけれども、
山陰の涼しい崖がけの上に、二段か三段に建てた割合手広な住居すまいだそ
うだから是非遊びに來いと母に勧めていたのを、僕は傍そばで聞いて
いた。それで僕は母にあなたこそ行つて遊んで來たら氣保養きぼようにな

つてよかろうと忠告した。母は懐ふところから千代子の手紙を出して見せた。それには千代子と百代子の連名で、母と僕にいつしよに来るようにと、彼らの女親の命令を伝えるごとく書いてあつた。母が行くとすれば年寄一人を汽車に乗せるのは心配だから、是非僕がついて行かなければならなかつた。変窟へんくつな僕からいうと、そう混雑ごたごたした所へ二人で押しかけるのは、世話にならないにしても気の毒で厭いやだつた。けれども母は行きたいような顔をした。そうしてそれが僕のために行きたいような顔に見えるので僕はますます厭になつた。が、とどのつまりとうとう行く事にした。こう云つても人には通じないかも知れないが、僕は意地の強い男で、また意地の弱い男なのである。

十四

母は内気な性分なので平生へいぜいから余り旅行を好まなかつた。昔風に重きをおかなければ承知しない厳格な父の生きている頃は外へもそうたびたびは出られない様子であつた。現に僕は父と母が娯楽の目的をもつていつしよに家を留守にした例を覚えていない。父が死んで自由が利きくようになつてからも、そう勝手な時に好きな所へ行く機会は不幸にして僕の母には与えられなかつた。一人で遠くへ行つたり、長く宅うちを空あけたりする便宜べんぎを有もたない彼女は、母子おやこ二人の家庭にこうして幾年を老いたのである。

鎌倉へ行こうと思ひ立つた日、僕は彼女のために一個の鞆かばたすきを携もえて直ちよつこう行の汽車に乗った。母は車の動き出す時、隣に腰をかけた僕に、汽車も久しぶりだねと笑いながら云った。そう云われた僕にも実は余り頻ひんぱん繁な経験ではなかつた。新らしい氣分に誘われた二人の会話は平生ふだんよりは生々いきいきしていた。何を話したか自分にもいつこう覚えのない事を、聞いたり聞かれたりして断続に任せているうちに車は目的地に着いた。あらかじめ通知をしてないので停車場ステーションには誰も迎むかえに來ていなかったが、車を雇うとき某なにがしさんの別荘と注意したら、車夫はすぐ心得て引き出した。僕はしばらく見ないうちに、急に新らしい家の多くなつた砂道を通りながら、松の間から遠くに見える畠はたなか中の黄色い花を美しく眺ながめ

た。それはちよつと見るとまるで菜種の花と同じ趣おもむきを具えた目新らしいものであった。僕は車の上で、このちらちらする色は何だろうと考え抜いた揚句あげく、突然唐茄子とうなすだと気がついたので独りひとおかしがった。

車が別荘の門に着いた時、戸障子としようじを取り外はずした座敷の中に動く人の影が往来からよく見えた。僕はそのうちに白い浴衣ゆかたを着た男のいるのを見て、多分叔父が昨日きのうあたり東京から来て泊つてるのだらうと思つた。ところが奥にいるものがことごとく僕らを迎えるために玄関へ出て来たのに、その男だけは少しも顔を見せなかつた。もちろん叔父ならそのくらいくらいの事はあるべきはずだと思つて、座敷へ通つて見ると、そこにも彼の姿は見えなかつた。僕

はきよろきよろしているうちに、叔母と母が汽車の中はさぞ暑かつたろうとか、見晴しの好い所が手に入つて結構だとか、年寄の女だけに口数の多い挨拶のやりとりを始めた。千代子と百代子は母のために浴衣を勧めたり、脱ぎ捨てた着物を晒干してくれたりした。僕は下女に風呂場へ案内して貰つて、水で顔と頭を洗つた。海岸からはだいぶ道程のある山手だけれども水は存外悪かつた。手拭を絞つて金盥の底を見ていると、たちまち砂のような滓が澱んだ。

「これを御使いなさい」という千代子の声が突然後でした。振り返ると、乾いた白いタオルが肩の所に出ていた。僕はタオルを受取つて立ち上つた。千代子はまた傍にある鏡台の抽出から櫛を

出してくれた。僕が鏡の前に坐すわって髪を解かしている間、彼女は風呂場の入口の柱に身体からだを持たして、僕の濡ぬれた頭を眺めていたが、僕が何も云わないので、向うから「悪い水でしょう」と聞いた。僕は鏡の中を見たなり、どうしてこんな色が着いているのだろうと云った。水の問答が済んだとき、僕は櫛を鏡台の上に置いて、タオルを肩にかけてまま立ち上った。千代子は僕より先に柱を離れて座敷の方へ行こうとした。僕は藪やぶから棒うしろに後から彼女の名を呼んで、叔父はどこにいるかと尋ねた。彼女は立ち止まって振り返った。

「御父さんは四五日前ちよつといらしたけど、一昨日おとといまた用が出来たって東京へ御帰りになったぎりよ」

「ここにやいないのかい」

「ええ。なぜ。ことによると今日の夕方吾ごいち一さんを連れて、またいらつしやるかも知れないけども」

千代子は明日あしたもし天気が好ければ皆みんなと魚を漁りに行くはずになつているのだから、田口が都合して今日の夕方までに来てくれないければ困るのだと話した。そうして僕にも是非いつしよに行けと勧めた。僕は魚の事よりも先刻さつき見た浴衣ゆかたがけの男の居所が知りたかつた。

十五

「先刻誰だか男の人が一人座敷にいたじやないか」

「あれ高木さんよ。ほら秋子さんの兄さんよ。知ってるでしょう」

僕は知つていてもいなくても答えなかつた。しかし腹の中では、この高木と呼ばれる人の何者かをすぐ了解した。百代子の学
校朋輩ほうばいに高木秋子という女のある事は前から承知していた。そ
の人の顔も、百代子といつしよに撮とつた写真で知つていた。手しゅせ
蹟きも絵端書えはがきで見た。一人の兄が亜米利加アメリカへ行つてい
るのだとか、今歸つて来たばかりだとかいう話もその頃耳にした。困らない家
庭なのだろうから、その人が鎌倉へ遊びに来ているぐらいは怪し
むに足らなかつた。よしここに別荘を持つていたところで不思議
はなかつた。が、僕はその高木という男の住んでいる家を千代子

から聞きたくなつた。

「ついこの下よ」と彼女は云つたぎりであつた。

「別荘かい」と僕は重ねて聞いた。

「ええ」

二人はそれ以外を語らずに座敷へ歸つた。座敷では母と叔母がまだ海の色がどうだとか、大仏がどつちの見当にあたるとかいうさほどでもない事を、問題らしく聞いたり教えたりしていた。百代子は千代子に彼らの父がその日の夕方までに来ると云つて、わざわざ知らせて来た事を告げた。二人は明日魚あすを漁とりに行く時の樂みを、今眼まの当りに描えがき出して、すでに手の内に握つた人のごとく語り合つた。

「高木さんもいらつしやるんでしよう」

「市いっさんもいらつしやい」

僕は行かないと答えた。その理由として、少し宅うちに用があつて、今夜東京へ帰えらなければならぬからという説明を加えた。しかし腹の中ではただでさえこう混ごたごた雑ざつしているとところへ、もし田口が吾一でも連れて来たら、それこそ自分の寝る場所さえ無くなるだろうと心配したのである。その上僕は姉きょうだい妹まいの知っている高木という男に会うのが厭いやだった。彼は先刻さつきまで二人と僕の評判をしていたが、僕の来たのを見て、遠慮して裏から帰つたのだと百代子から聞いた時、僕はまず窮屈な思のいを逃のがれて好かつたと喜こんだ。僕はそれほど知らない人を怖こわがる性分なのである。

僕の帰ると云うのを聞いた二人は、驚ろいたような顔をしてとめにかかった。ことに千代子は躍起やつきになった。彼女は僕を捉つらまえて変人だと云った。母を一人残してすぐ帰る法はないと云った。帰ると云つても帰さないと云った。彼女は自分の妹や弟に対してよりも、僕に対しては遙はるかに自由な言葉を使い得る特権を有もつていた。僕は平生から彼女が僕に対して振舞うごとく大胆に率直に（ある時は善意ではあるが）威圧的に、他人に向つて振舞う事ができたなら、僕のような他に欠点の多いものでも、さぞ愉快に世の中を渡つて行かれるだろうと想像して、大いにこの小さな暴タイラ君ントを羨うらやましがっていた。

「えらい権幕けんまくだね」

「あなたは親不孝よ」

「じゃ叔母さんに聞いて来るから、もし叔母さんが泊って行く方がいいって、おつしやったら、泊っていらつしやい。ね」

百代子は仲裁を試みるような口調でこう云いながら、すぐ年寄の話している座敷の方へ立って行った。僕の母の意向は無論聞くまでもなかった。したがって百代子の年寄二人から齎もたらした返事もここに述べるのは蛇足だそくに過ぎない。要するに僕は千代子の捕虜になつたのである。

僕はやがてちよつと町へ出て来るといふ口い実まの下もとに、午後ごの暑い日を洋傘こうもりで遮さぎりえながら別荘の附近を順序なく徘徊はいかいした。久しく見ない土地の昔を偲しのぶためと云えば云えない事もないが、

僕にそんな寂びた心持を嬉しがる風流があつたにしたらとところで、今はそれに耽る落ちつきも余裕も与えられなかつた。僕はただうろろとそこらの標札を読んで歩いた。そうして比較的立派な平屋建の門の柱に、高木の二字を認めた時、これだろうと思つて、しばらく門前に佇んだ。それから後は全く何の目的もなしになお緩漫な歩行を約十五分ばかり続けた。しかしこれは僕が自分の心に、高木の家を見るためにわざわざ表へ出たのではないと申し渡したと同じようなものであつた。僕はさつさと引き返した。

十六

実を云うと、僕はこの高木という男について、ほとんど何も知らなかった。ただ一遍百代子から彼が適当な配偶を求めつつある由を聞いただけである。その時百代子が、御姉さんにはどうかしらと、ちようど相談でもするように僕の顔色を見たのを覚えてい
る。僕はいつもの通り冷淡な調子で、好いかも知れない、御父さ
んか御母さんに話して御覧と云つたと記憶する。それから以後僕
の田口の家うちに足を入れた度数は何遍あるか分らないが、高木の名
前は少くとも僕のいる席ではついぞ誰の口にも上のぼらなかつたので
ある。それほど親しみの薄い、顔さえ見た事のない男の住居すまいに何
の興味があつて、僕はわざわざ砂の焼ける暑さを冒おかして外出した
のだろう。僕は今こんにち日までその理由を誰にも話さずにいた。自分

自身にもその時にはよく説明ができなかつた。ただ遠くの方にある一種の不安が、僕の身体からだを動かしに来たという漠ばくたる感じが胸に射さしたばかりであつた。それが鎌倉で暮らした二日の間に、紛まぎれもないある形を取つて発展した結果を見て、僕を散歩に誘い出したのもやはり同じ力に違いないと今から思うのである。

僕が別荘へ歸つて一時間経たつか経たないうちに、僕の注意した門札と同じ名前の男がたちまち僕の前に現われた。田口の叔母は、高木さんですと云つて叮ていねい嘖いにその男を僕に紹介した。彼は見るからに肉の緊しまつた血色の好い青年であつた。年から云うと、あるいは僕より上かも知れないと思つたが、そのきびきびした顔つきを形容するには、是非共青年という文字が必要になつたくらい彼

は生氣に充ちていた。僕はこの男を始めて見た時、これは自然が反対を比較するために、わざと二人を同じ座敷に並べて見せるのではなくるかと思つた。無論その不利益な方面を代表するのが僕なのだから、こう改たまつて引き合わされるのが、僕にはただ悪い洒落しやれとしか受取られなかつた。

二人の容貌ようぼうがすでに意地の好くない対照を与えた。しかし様子とか応おうたい対たいぶりとかになると僕はさらにはなはだしい相違を自覚しない訳に行かなかつた。僕の前にはいるものは、母とか叔母とか従妹いとことか、皆親しみの深い血属ばかりであるのに、それらに取り捲まかれている僕が、この高木に比べると、かえつてどこからか客にでも来たように見えたくらい、彼は自由に遠慮なく、しかも

ある程度の品格を落す危険なしに己を取扱かう術すべを心得ていたのである。知らない人を怖おそれる僕に云わせると、この男は生れるや否や交際場裏に棄すてられて、そのまま今日まで同じ所で人と成つたのだと評したかった。彼は十分と経たないうちに、すべての会話を僕の手から奪つた。そうしてそれをことごとく一身に集めてしまった。その代り僕を除のけ物ものにしないための注意を払つて、時々僕に一句か二句の言葉を与えた。それがまた生あいに憎僕には興味くの乗らない話題ばかりなので、僕はみんなを相手にする事もできず、高木一人を相手にする訳にも行かなかつた。彼は田口の叔母を親しげに御母さん御母さんと呼んだ。千代子に対しては、僕と同じように、千代ちゃんという幼おさな馴染なじみに用いる名を、自然に命

ぜられたかのごとく使った。そうして僕に、先ほど御着おうわさになった時は、ちようど千代ちゃんとおあなたの御噂おうわさをしていたところでしたと云った。

僕は初めて彼の容貌を見た時からすでに羨うらやましかつた。話をするとところを聞いて、すぐ及ばないと思つた。それだけでもこの場合に僕を不愉快にするには充分だったかも知れない。けれどもだんだん彼を觀察しているうちに、彼は自分の得意な点を、劣者の僕に見せつけるような態度で、誇り顔に發揮するのではなからうかという疑が起つた。その時僕は急に彼を憎にくみ出した。そうして僕の口を利きくべき機会が廻つて来てもわざと沈黙を守つた。

落ちついた今の気分でその時の事を回顧して見ると、こう解釈

したのはあるいは僕の僻^{ひが}みだったかも知らない。僕はよく人を疑ぐる代りに、疑ぐる自分も同時に疑がわずにはいられない性質^{たち}だから、結局他^{ひと}に話をする時にもどつちと判^{はつきり}然したところが云い悪^{にく}くなるが、もしそれが本当に僕の僻^{ひが}み根^{こんじょう}性^{せい}だとすれば、その裏面にはまだ凝結した形にならない嫉^{しつと}が潜^{ひそ}んでいたのである。

十七

僕は男として嫉の強い方か弱い方か自分にもよく解らない。競争者のない一人息子としてむしろ大事に育てられた僕は、少なくとも家庭のうちで嫉を起^もす機会を有^もたなかった。小学や中学

は自分より成績の好い生徒が幸いにしてそう無かつたためか、至極ごく太平に通じ抜けたように思う。高等学校から大学へかけては、席次にさほど重きをおかないのが、一般の習慣であつた上、年ごとに自分を高く見積る見識というものが加わつて来るので、点数の多少は大した苦にならなかつた。これらをほかにして、僕はまだ痛切な恋に落ちた経験がない。一人の女を二人で争つた覚おぼえはなおさらない。自白すると僕は若い女ことに美くしい若い女に対しては、普通以上に精密な注意を払い得る男なのである。往来を歩いて綺麗な顔きれいと綺麗な着物を見ると、雲間から明らかな日が射した時のように晴やかな心持になる。会たまにはその所有者になつて見たいと云う考かんがえも起る。しかしその顔とその着物がどうかなく変

化し得るかをすぐ予想して、酔よいが去つて急にぞつとする人のあさましさを覚える。僕をして執しゅうね念く美しくしい人に附つけまつ纏まとわらせないものは、まさにこの酒に棄すてられた淋しみの障害に過ぎない。僕はこの気分に移り移られるたびに、若い時分が突然老人としよりか坊主おちいに變つたのではあるまいかと思つて、非常な不愉快に陥る。が、あるいはそれがために恋の嫉あやまりというものを知らずにすまず事が出来たかも知れない。

僕は普通の人間でありたいという希望を有もつているから、嫉心のないのを自慢にしたくも何ともないけれども、今話したような訳で、眼まの当りにこの高木という男を見るまでは、そういう名のつく感情に強く心を奪われた試ためしがなかつたのである。僕はその

時高木から受けた名状しがたい不快を明らかに覚えてゐる。そうして自分の所有でもない、また所有する気もない千代子が原因で、この嫉心おきが燃え出したのだと思つた時、僕はどうしても僕の嫉心を抑えおさつけなければ自分の人格に対して申し訳がないような気がした。僕は存在の権利を失つた嫉心いだを抱いて、誰にも見えない腹の中で苦悶くもんし始めた。幸い千代子と百代子が日が薄くなつたから海へ行くと云い出したので、高木が必ず彼らに跟ついて行くに違ちがはないと思つた僕は、早く跡に一人残りたいと願つた。彼らははたして高木を誘つた。ところが意外にも彼は何とか言訳こしらを拵こしらえて容易に立とうとしなかつた。僕はそれを僕に対する遠慮だろうと推察して、ますます眉まゆを暗くした。彼らは次に僕を誘つた。僕

は固もとより応じなかつた。高木の面前から一刻も早く逃のがれる機会は、与えられないでも手を出して奪いたいくらいに思つていたのだが、今の気分では二人と浜辺まで行く努力がすでに厭いやであつた。母は失望したような顔をして、いっしょに行つておいでなど云つた。僕は黙つて遠くの海の上を眺ながめていた。姉きょうだい妹は笑いながら立ち上つた。

「相変らず偏へんくつ窟ねあなたは。まるで腕白小僧見たいだわ」

千代子にこう罵ののしられた僕は、實際誰の目にも立派な腕白小僧として見えたらう。僕自身も腕白小僧らしい思いをした。調子の好い高木は縁側えんがわへ出て、二人のために菅笠すげがさのように大きな麦む藁帽ぎわらぼうを取つてやつて、行つていらつしやいと挨拶あいさつをした。

二人の後姿が別荘の門を出た後で、高木はなおしばらく年寄を相手に話していた。こうやって避暑に来てみると気楽で好いが、どうして日を送るかが大問題になってかえって苦痛になるなどと、実際活気に充ちた身体みからだを暑さと退屈さに持ち扱かっている風に見えた。やがて、これから晩まで何をして暮らそうかしらとひとりごと独言ひとごとのように云つて、不意に思い出したごとく、玉たまはどうですと僕に聞いた。幸いにして僕は生れてからまだ玉突という遊戯を試みた事がなかったのですぐ断つた。高木はちようど好い相手が出てきたと思つたのに残念だと云いながら歸つて行つた。僕は活潑かつぱつに動く彼の後影を見送つて、彼はこれから姉きょうだい妹いもうとのいる浜辺の方へ行くに違いないという気がした。けれども僕は坐すわっている席

を動かかなかつた。

十八

高木の去つた後、母と叔母はしばらく彼の噂をした。初対面の人だけに母の印象はことに深かつたように見えた。気のおけない、至つて行き届いた人らしいと云つて賞めていた。叔母はまた母の批評を一々实例に照らして確かめる風に見えた。この時僕は高木について知り得た極めて乏しい知識のほとんど全部を訂正しなければならぬ事を発見した。僕が百代子から聞いたのでは、亜米利加帰りという話であつた彼は、叔母の語るところによると、そ

うではなくって全く英吉利イギリスで教育された男であつた。叔母は英国流の紳士という言葉を誰かから聞いたと見えて、二三度それを使つて、何の心得もない母を驚ろかしたのみか、だからどことなく品ひんの善いところがあるんですよと母に説明して聞かせたりした。母はただへえと感心するのみであつた。

二人がこんな話をしている内、僕はほとんど一口も口を利きなかつた。ただ上部うわべから見て平生の調子と何の変るところもない母が、この際高木と僕を比較して、腹の中でどう思っているだろうと考えると、僕は母に対して気の毒でもありませんまた恨うらめしくもあつた。同じ母が、千代子対僕と云う古い関係を一方に置いて、さらに千代子対高木という新らしい関係を一方に想像するなら、はた

してどんな心持になるだろうと思うと、たとい少しの不安でも、避け得られるところをわざと与えるために彼女を連れ出したも同じ事になるので、僕はただでさえ不愉快な上に、年寄にすまないという苦痛をもう一つ重ねた。

前後の模様から推おすだけで、実際には事実となつて現われて来なかつたから何とも云い兼ねるが、叔母はこの場合を利用して、もし縁があつたら千代子を高木にやるつもりでいるぐらいの打うちあ明けばなし話を、僕ら母子おやこに向つて、相談とも宣告とも片づかない形式もとの下に、する気だつたかも知れない。すべてに気がつく癖に、こうなるとかえつて僕よりも迂遠うとい母はどうだか、僕はその場で叔母の口から、僕と千代子と永久に手を別つべき談判の第一節を

予期していたのである。幸か不幸か、叔母がまだ何も云い出さないうちに、姉妹は浜から広い麦藁帽の縁をひらひらさして帰つて来た。僕が僕の占いの的中しなかつたのを、母のために喜こんだのは事実である。同時に同じ出来事が僕を焦躁しがらせたのも嘘ではない。

夕方になつて、僕は姉妹と共に東京から来るはずの叔父を停車場に迎えるべく母に命ぜられて家を出た。彼らは揃の浴衣を着て白い足袋を穿いていた。それを後から見送つた彼らの母の眼に彼らがいかなる誇として映じたらう。千代子と並んで歩く僕の姿がまた僕の母には画として普通以上にどんなに価が高かつたらう。僕は母を欺むく材料に自然から使われる自分を心苦しく思つ

て、門を出る時振り返って見たら、母も叔母もまだこつちを見ていた。

途中まで来た頃、千代子は思い出したように突然とまって、

「あつ高木さんを誘うのを忘れた」と云った。百代子はすぐ僕の顔を見た。僕は足の運びを止め^とたが、口は開かなかつた。「もう好いじゃないの、ここまで来たんだから」と百代子が云った。

「だってあたし先刻誘^{さつき}ってくれて頼まれたのよ」と千代子が云った。百代子はまた僕の顔を見て^{ためら}った。

「市^{いっ}さんあなた時計持^いっていらして。今何時」

僕は時計を出して百代子に見せた。

「まだ間に合わない事はない。誘^いつて来るなら来ると好い。僕は

先へ行つて待つてゐるから」

「もう遅いわよあなた。高木さん、もしいらつしやるつもりならきつと一人でもいらしつてよ。後から忘れましてたつて詫あやまつたらそれで好よかないの」

姉妹は二三度押問答の末ついに後戻りをしない事にした。高木は百代子の予言通りまだ汽車の着かないうちに急ぎ足で構内へ這は入つて来て、姉妹に、どうも非道ひどい、あれほど頼んでおくのにと云つた。それから御母さんとは聞いた。最後に僕の方を向いて、先ほどはと愛想あいその好あい挨拶あいさつをした。

十九

その晩は叔父と従弟を待ち合わせた上に、僕ら母子が新たに食卓に加わったので、食事の時間がいつもより、だいぶ後れたばかりでなく、私かに恐れた通りはなはだしい混雑の中に箸と茶碗の動く光景を見せられた。叔父は笑いながら、市さんまるで火事場のようだろう、しかし会にはこんな騒ぎをして飯を食うのも面白いものだよと云って、間接の言訳をした。閑静な膳に慣れた母は、この賑やかさの中に實際叔父の言葉通り愉快らしい顔をしていた。母は内気な癖にこういう陽気な席が好きなのである。彼女はその時偶然口の上った一塩にした小鯔の焼いたのを美味いと云ってしきりに賞めた。

「漁師りようしに頼んどくといくらでも拵こしらえて来てくれますよ。何なら、
 帰りに持つていらつしやいな。姉さんが好きだから上げたいと思
 つてたんですが、ついついでも無かつたもんだから、それにすぐ
 腐わるくなるんでね」

「わたしもいつか大磯おおいそあつらで逃にげてわざわざ東京まで持つて帰った
 事があるが、よつぽど気をつけないと途中でね」

「腐るの」千代子が聞いた。

「叔母さん興津鯛おきつだい御嫌おきらひ。あたしこれよか興津鯛の方が美味おいしい
 わ」と百代子が云った。

「興津鯛はまた興津鯛で結構ですよ」と母はおとなしい答をした。
 ことなくくだくだしい会話を、僕がなぜ覚えているかと云うと、

僕はその時母の顔に表われた、さも満足らしい気持をよく注意して見ていたからであるが、もう一つは僕が母と同じようにひとしお一塩ひとしおのこあじ小鱈を好いていたからでもある。

ついでだからここで云う。僕は自分の嗜好しこうや性質の上において、母に大変よく似たところと、全く違つたところと両方有もつていて、これはまだ誰にも話さない秘密だが、実は単に自分の心得として、過去幾年かの間、僕は母と自分とどこがどう違つて、どこがどう似ているかの詳しい研究を人知れず重ねたのである。なぜそんな真似まねをしたかと母に聞かれては云い兼ねる。たとい僕が自分に聞き糺ただして見ても判切はつきり云えなかつたのだから、理由わけは話せない。しかし結果からいうとこうである。——欠点でも母と共に具そなえて

いるならば僕は大変嬉うれしかった。長所でも母になくって僕だけ有もつているとはなはだ不愉快ふげきになった。そのうちで僕の最も気になるのは、僕の顔が父にだけ似て、母とはまるで縁のない眼鼻立めばしらにでき上あっている事であつた。僕は今でも鏡を見るたびに、器量けりりやうが落ちても構かまわないから、もつと母の人相にんさうを多量たりやうに受け継ついでおいたら、母の子らしくつてさぞ心持こころもちが好よいだらうと思う。

食事おくの後ごれた如ごとく、寝る時間じゆんぐりも順じゆんぐり繰くりに延ひびてだいぶ遅おそくなつた。その上急いそに人数にんずが増あえたので、床とこの位置ちゐやら部屋割へやわりをきめるだけが叔母おぢいに取とつてのひとほねおり一ひと骨折こつぱであつた。男三人おとこさんはいいつしよに固かためられて、同じ蚊帳かやに寝た。叔父おぢいは肥ふとつた身体からだを持もち扱あかつて、団扇うちわをしきりにばたばた云いわした。

「市いっさんどうだい、暑いじゃないか。これじゃ東京の方がよっぽど楽だね」

僕も僕の隣にいる吾一も東京の方が楽だと云った。それでは何を苦しんでわざわざ鎌倉下りくだまで出かけて来て、狭い蚊帳へ押し合うように寝るんだか、叔父にも吾一にも僕にも説明のしようがなかった。

「これも一いっ興きようだ」

疑問は叔父の一句でたちまち納りおさまがづいたが、暑さの方はなかなか去らないので誰もすぐは寝つかれなかった。吾一は若いだけに、明日あしたの魚さかな捕との事を叔父に向つてしきりに質問した。叔父はまた真面目まじめだか冗談じょうだんだか、船に乗りさえすれば、魚の方で

風を望んで降るような旨い話をして聞かせた。それがただ自分の
伴を相手にするばかりでなく、時々はねえ市さんと、そんな事に
まるで冷淡の僕まで聴手にするのだから少し変であつた。しかし
僕の方はそれに対して相当な挨拶をする必要があるので、話の
済む前には、僕は当然同行者の一人として受答をするように
なつていた。僕は固より行くつもりでも何でもなかつたのだから、
この変化は僕に取つて少し意外の感があつた。気楽そうに見える
叔父はそのうち大きな鼾声をかき始めた。吾一もすやすや寝入つ
た。ただ僕だけは開いている眼をわざと閉じて、更けるまでいろ
いろな事を考えた。

二十

翌日あくるひ眼が覚さめると、隣に寝ていた吾一の姿がいつの間にかもう見えなくなっていた。僕は寝足らない頭を枕の上に着けて、夢とも思索とも名のつかない路みちを辿たどりながら、時々別種の人間を偷ぬすみ見るような好奇心をもつて、叔父の寝顔なごを眺ながめた。そうして僕も寝ている時は、傍はたから見ると、やはりこう苦くがない顔をしているのだらうかと考えなどした。そこへ吾一が這はい入いつて来て、市いっさんどうだらうと天気はと相談した。ちよつと起きて見ると促うながすので、起き上あつて縁えん側がわへ出ると、海の方には一面に柔かい靄もやの幕がかかつて、近い岬みさきの木立さえ常の色には見えなかった。降ふつてるの

かねと僕は聞いた。吾一はすぐ庭先へ飛び下りて、空を眺め出したが、少し降つてると答えた。

彼は今日の船遊びの中止を深く氣遣うもののごとく、二人の姉まで縁側へ引張出して、しきりにどうだろうどうだろうをくり返した。しまい到最后の審判者たる彼の父の意見を必要と認めたまのか、まだ寝ている叔父をとうとう呼び起した。叔父は天気などはどうでも好いと云つたような眠たい眼をして、空と海を一応見渡した上、なにこの模様なら今にきつと晴れるよと云つた。吾一はそれで安心したらしかつたが、千代子は当にならぬ無責任な天気予報だから心配だと云つて僕の顔を見た。僕は何とも云えなかつた。叔父は、なに大丈夫大丈夫と受合つて風呂場の方へ行つ

た。

食事を済ます頃から霧のような雨が降り出した。それでも風がないので、海の上は平生よりもかえって穏やかに見えた。あいにくな天気なので人の好い母はみんなに気の毒がった。叔母は今にきつと本降になるから今日は止したが好かろうと注意した。けれども若いものはことごとく行く方を主張した。叔父はじや御婆さんだけ残して、若いものが揃って出かける事にしようと言った。すると叔母が、では御爺さんはどっちになさるのとわざと叔父に聞いて、みんなを笑わした。

「今日は何れでも若いものの部だよ」

叔父はこの言葉を証拠立てるためだか何だか、さっそく立つ

て浴衣ゆかたの尻はしよを端折はしよつて下へ降りた。

姉きょうだい 弟だい 三人もそのままの姿

で縁から降りた。

「御前達も尻まくを捲まくるが好い」

「厭いやな事」

僕は山賊けずねのような毛脛むきだを露出むきだにした叔父しずかごぜんと、静御前かきの笠かさに似た恰好かつこうの麦藁帽むぎわらぼうを被かぶつた女二人と、黒い兵児帯へこおびをこま結びにした弟を、縁の上から見下して、全く都離れのした不思議な団体のごとく眺ながめた。

「市いっさんがまた何か悪口を云おうと思つて見ている」と百代子が薄笑いをしながら僕の顔を見た。

「早く降りていらつしやい」と千代子が叱るように云つた。

「市さんに悪い下駄げたを貸して上げるが好い」と叔父が注意した。

僕は一も二もなく降りたが、約束のある高木が来ないので、それがまた一つの問題になった。おおかたこの天気だから見合わしているのだろうと云うのが、みんなの意見なので、僕らがそろそろ歩いて行く間に、吾一が馳かけあし足むかえで迎に行つて連れて来る事にした。

叔父は例の調子でしきりに僕に話しかけた。僕も相手になつて歩調を合せた。そのうちに、男の足だものだから、いつの間にか姉きょうだい妹いを乗り越えた。僕は一度振り返つて見たが、二人は後おくれた事にいつこう頓とんじやく着やくしない様子で、毫ごうも追いつこうとする努力を示さなかつた。僕にはそれがわざと後あとから来る高木を待ち合

せるためのようになし取れなかつた。それは誘つた人に対する礼儀として、彼らの取るべき当然の所作しよさくだつたのだろう。しかしその時の僕にはそう思えなかつた。そう思う余地があつても、そうは感ぜられなかつた。早く来いという合図をしようという考で振り向いた僕は、合図を止やめてまた叔父と歩き出した。そうしてそのまま小坪こつぼへ這入る入口の岬みさきの所まで来た。そこは海へ出張でばつた山の裾すそを、人の通れるだけの狭い幅はばに削けずつて、ぐるりと向う側へ廻り込まれるようにした坂道であつた。叔父は一番高い坂の角まで来てとまった。

彼は突然彼の体格に相応した大きな声を出して姉妹を呼んだ。自白するが、僕はそれまでに何度も後うしろを振り返つて見ようとしたのである。けれども気が咎とがめると云うのか、自尊心が許さないと云うのか、振り向こうとするごとに、首いが猪のししのように堅くなつて後へ回らなかつたのである。

見ると二人の姿はまだ一町ほど下にあつた。そうしてそのすぐ後に高木と吾一が続いていた。叔父が遠慮のない大きな声を出して、おおいと呼んだ時、姉妹は同時に僕らを見上げたが、千代子はすぐ後にいる高木の方を向いた。すると高木は被かぶつていた麦むぎわ藁らぼう帽ぼうを右の手に取つて、僕らを目当にしきりに振つて見せた。

けれども四人のうちで声を出して叔父に応じたのはただ吾一だけであつた。彼はまた学校で号令の稽古けいこでもしたものと見えて、海と崖がけに反響するような答と共に両手を一度に頭の上に差し上げた。

叔父と僕は崖の鼻に立つて彼らの近寄るのを待った。彼らは叔父に呼ばれた後のちも呼ばれない前と同じ遅い歩調で、何か話しながら上あがつて来た。僕にはそれが尋常でなくつて、大いにふざけているように見えた。高木は茶色のだぶだぶした外がい套とうのようなものを着て時々ポケット隠袋へ手を入れた。この暑いのにまさか外套は着られまいと思つて、最初は不思議に眺ながめていたが、だんだん近くなるに従がつて、それが薄い雨レインコート除である事に気がついた。その時叔父が突然、市いっさんヨットに乗つてそこいらを遊んで歩くのも面

白いだろうねと云ったので、僕は急に気がついたように高木から
 眼を転じて脚の下を見た。すると磯に近い所に、真白に塗った空
 らふね
 船が一艘、静かな波の上に浮いていた。糠雨とまでも行かな
 そう
 い細かいものがなお降りやまないの、海は一面に暈されて、平
 つも
 生なら手に取るように見える向う側の絶壁の樹も岩も、ほとんど
 ひといろ
 一色に眺められた。そのうち四人はようやく僕らの傍まで来
 よつたり
 た。

「どうも御待たせ申しまして、実は髭を剃っていたものだから、
 途中でやめる訳にも行かず……」と高木は叔父の顔を見るや否や
 いいわけ
 云訳をした。

「えらい物を着込んで暑かありませんか」と叔父が聞いた。

「暑くつたつて脱ぐ訳に行かないのよ。上はハイカラでも下は蛮んから殻かなんだから」と千代子が笑った。高木は雨外套レインコートの下に、直じかに半袖はんそでの薄い襯衣シャツを着て、変な半洋袴はんズボンから余った脛すねを丸出しにして、黒足袋くろたびに俎下駄まないたげたを引っかけていた。彼はこの通りと雨外套の下を僕らに示した上、日本へ帰ると服装が自由で貴女レディーの前でも気兼きがねがなくなつて好いと云つていた。

一同がぞろぞろ揃そろつて道幅の六尺ばかりな汚むさくる苦しい漁村はに入ると、一種不快においな臭がみんなの鼻を撲うつた。高木は隠袋ポツケツトから白い手巾ハンケチを出して短かい髭の上を掩おおつた。叔父は突然そこに立つて僕らを見ていた子供に、西の者で南の方から養子に來たものうちの宅はどこだと奇体な質問を掛けた。子供は知らないと云つた。僕

は千代子に何でそんな妙な聞き方をするのかと尋ねた。昨夕ゆうべ聞き合せに人をやった家の主人うちが云うには、名前は忘れたからこれこれの男と云つて探して歩けば分ると教えたからだ。と千代子が話して聞かした時、僕はこの呑気のんきな教え方と、同じく呑気な聞き方を、いかにも余裕なくこせついている自分と比べて見て、妙うらやに羨ましく思った。

「それで分るんでしょうか」と高木が不思議な顔をした。

「分つたらよっぽど奇体だわね」と千代子が笑つた。

「何大丈夫分るよ」と叔父が受合つた。

吾一は面白半分人の顔さえ見れば、西のもので南の方から養子に來たものの宅はどこだと聞いては、そのたびにみんなを笑わし

た。一番しまいに、編笠あみがさを被かぶつて白い手てっこう甲きやと脚はん絆はんを着けた。月琴げつきん弾ひきの若い女の休やすんでいる汚よごない茶店の婆ばあさんに同じと間まをかけたら、婆ばあさんは案外あなごにもすぐそこだと容易たやすく教えてくれたので、みんながまた手を拍うつて笑わらつた。それは往来わらいから山手やまての方かたへ三級さんけいばかりに仕切しきられた石段いしだんを登のぼり切きつた小高こたかい所ところにある小こさい藁わらの家いへであつた。

二十二

この細こい石段いしだんを思おもい思おもいの服装ふくそうをした六人むにんが前後ぜんごしてぞろぞろ登のぼる姿すがたは、傍はたで見みていたら定めさだめし変かなものだつたらうと思おもう。そ

の上六人のうちで、これから何をするか明瞭はつきりした考を有もつていたものは誰もないのだからはなはだ気楽である。肝心かんじんの叔父さえただ船に乗る事を知っているだけで、後は網だか釣だか、またどこまで漕こいで出るのがかいつこう弁別わきまえないらしかった。百代子の後あとから足の力で擦すり減へらされて凹おみの多くなつた石段を踏んで行く僕はこんな無意味な行動に、己おのれを委ゆだねて悔ないところを、避暑おもむきの趣きとでも云うのかと思いつつ上のぼつた。同時にこの無意味な行動のうちに、意味ある劇の大切な一幕が、ある男とある女の間あんに暗あんに演あげられつつあるのでは無なかろうかと疑うつた。そうしてその一幕の中で、自分の務つとめなければならぬ役割がもしあるとすれば、穏おだやかな顔をした運命に、軽かろく翻ほん弄ろうされる役割よりほか

にあるまいと考えた。最後に何事も打算しないでただ無雑作むぞうさにや
つて除のける叔父が、人に気のつかないうちに、この幕を完成する
としたら、彼こそ比類のない巧妙な手際てぎわを有もつた作者と云わなけ
ればなるまいという気を起した。僕の頭にこういう影が射した時、
すぐ後あとから跟ついて上あがつて来る高木が、これじや暑くつてたまらな
い、御免蒙ごめんこうむつて雨衣レインコートを脱ぬごうと云い出した。

家は下から見たよりもなお小さくて汚なかつた。戸口に杓しゃくし子
が一つ打ちつけてあつて、それに百日風ひやくにちかぜ邪野平吉一家一同と
書いてあるので、主人の名がようやく分つた。それを見つけ出し
て、みんなに聞のぞこえるように読んだのは、目敬めぎとい吾一の手柄であ
つた。中を覗くと天井も壁もことごとく黒く光っていた。人間と

しては婆さんが一人いたぎりである。その婆さんが、今日は天氣がよくないので、おおかたおいでじゃあるまいと云つて早く海へ出ましたから、今浜へ下りて呼んできましようかと断わりを述べた。舟へ乗つて出たのかねと叔父が聞くと、婆さんは多分あの船だろうと答えて、手で海の上を指した。靄はまだ晴れなかつたけれども、先刻よりは空がだいぶ明るくなつたので、沖の方は比較的判切見える中に、指された船は遠くの向うに小さく横わつていた。

「あれじや大変だ」

高木は携えて来た双眼鏡を覗きながらこう云つた。

「随分呑気ね、迎いに行くつて、どうしてあんな所へ迎に行けるんでしよう」と千代子は笑いながら、高木の手から双眼鏡を受取

つた。

婆さんは何直じきですと答えて、草履ぞうりを穿はいたまま、石段を馳かけ下りて行つた。叔父は田舎者いなかもものは気楽だなど笑つていた。吾一は婆さんの後あとを追かけた。百代子はぼんやりして汚ない縁へ腰をおろした。僕は庭を見廻した。庭という名のもつたいなく聞こえる縁先は五坪いつつぽにも足りなかつた。隅すみに無花果いちじくが一本あつて、腥なまぐさい空気の中に、青い葉を少しばかり茂らしていた。枝にはまだ熟しない実みが云い訳わけほど結なつて、その一本の股またの所に、空からの虫籠むしかごがかかつていた。その下には瘠やせた鶏けいが二三羽むやみに爪を立てた地面の中を餓うえた嘴くちばしでつついていた。僕はその傍そばに伏せてある鉄網かなあみの鳥籠とりかごらしいものを眺ながめて、その恰かっこう好こうがちようど仏ぶしゆ

手柑かんのごとく不規則に歪ゆがんでいるのに一種滑稽こっけいな思いをした。すると叔父が突然、何分臭くさいねと云い出した。百代子は、あたしもう御魚なんかどうでも好いから、早く帰りたくなつたわと心細たそうな声を出した。この時まで双眼鏡で海の方を見ながら、断たえず千代子と話していた高木はすぐ後うしろを振り返つた。

「何をしているだろう。ちよつと行つて様子を見て来ましょう」

彼はそう云いながら、手に持った雨外套レインコートと双眼鏡を置くために後うしろの縁かえりを顧かえりみた。傍そばに立つた千代子は高木の動かない前に手を出した。

「こつちへ御出しなさい。持つてるから」

そうして高木から二つの品を受け取つた時、彼女は改めてまた

彼の半袖姿はんそですがたを見て笑いながら、「とうとう蛮殻ばんからになつたのね」と評した。高木はただ苦笑しただけで、すぐ浜の方へ下りて行つた。僕はさも運動家らしく発達した彼の肩の肉が、急いで石段を下りるために手を振るごとに動く様を後から無言のまま注意して眺ながめた。

二十三

船に乗るためにみんなが揃そろつて浜に下り立つたのはそれから約一時間の後のちであつた。浜には何の祭の前すぎか過か、深く砂の中に埋うめられた高い幟のぼりの棒が二本僕の眼を惹ひいた。吾一はどこからか磯いそ

へ打ち上げた枯枝を拾つて来て、広い砂の上に大きな字と大きな顔をいくつも並べた。

「さあ御乗り」と坊主頭の船頭が云つたので、六人は順序なくごたごたに船縁ふなべりから這はい上つた。偶然の結果千代子と僕は後あとのものに押されて、仕切りの付いた舳へさきの方に二人膝ひざを突き合せて坐つた。叔父は一番先に、胴どうの間まというのか、真中の広い所に、家かちよ長うらしく胡坐あぐらをかいてしまった。そうして高木をその日の客として取り扱あうつもりか、さあどうぞと案内したので、彼は否いや応おうなしに叔父の傍そばに座を占めた。百代子と吾一は彼らの次の間まと云つたような仕切の中に船頭といっしよに這入つた。

「どうぞですこつちが空すいてますからいらつしやいませんか」と高

木はすぐ後の百代子を顧み^{かえり}た。百代子はありがとうといったきり席を移さなかつた。僕は始めから千代子と一つ薄縁^{うすべり}の上に坐るのを快く思わなかつた。僕の高木に対して嫉妬^{しつと}を起した事はすでに明かに自白しておいた。その嫉妬は程度において昨日も今日も同じだったかも知れないが、それと共に競争心はいまだかつて微塵^{じん}も僕の胸に萌^{きざ}さなかつたのである。僕も男だからこれから先いづどんな女を的^{まと}に劇烈な恋に陥^{おちい}らないとも限らない。しかし僕は断言する。もしその恋と同じ度合の劇烈な競争をあえてしなければ思う人が手に入らないなら、僕はどんな苦痛と犠牲を忍んでも、超然と手を懐^{ふとこ}ろにして恋人を見棄ててしまうつもりでいる。男らしくないとも勇氣に乏しいとも、意志が薄弱だとも、他^{ひと}から評し

たらどうにでも評されるだろう。けれどもそれほど切ない競争をしなければわがものにできにくいほど、どっちへ動いても好い女なら、それほど切ない競争に^{あた}い^{たい}ない女だとしか僕には認められないのである。僕には自分に^なま^びかかない女を無理に^だ抱く喜こびよりは、相手の恋を自由の野に放つてやった時の男らしい気分で、わが失恋の^きず^あと痕を^さみ^みしく見つめている方が、どのくらい良心に対して満足が多いか分らないのである。

僕は千代子にこう云った。――

「千代ちゃん行つちやどうだ。あっちの方が広くつて^{らく}楽なようだから」

「なぜ、ここにいちや邪魔なの」

千代子はそう云つたまま動こうとしなかつた。僕には高木がいるからあつちへ行けというのだというような説明は、露骨と聞こえるにしろ、厭味いやみと受取られるにしろ、全く口にする勇氣は出なかつた。ただ彼女からこう云われた僕の胸に、一種の嬉うれしさが閃ひらめいたのは、口と腹とどう裏表になつてゐるかを曝露ばくろする好い証し拠よで、自分で自分の薄弱な性情を自覚しない僕には痛い打撃であつた。

昨日きのう会つた時よりは気のせいか少し控目になつたように見える高木は、千代子と僕の間につつたこの問答を聞きながら知らぬふりをしてゐた。船いそが磯いそを離れたとき、彼は「好い案あんばい排はいに空模様くうもようが直つて来ました。これじゃ日がかんかん照るよりかえつて結構

です。船遊びには持つて来いという御天氣で」というような事を叔父と話し合つたりした。叔父は突然大きな声を出して、「船頭、いったい何を捕るんだ」と聞いた。叔父もその他のものも、この時まで何を捕るんだかいつこう知らずにいたのである。坊主頭の船頭は、粗ぞんざい末な言葉で、蛸たこを捕るんだと答えた。この奇抜な返事には千代子も百代子も驚ろくよりもおかしかったと見えて、たちまち声を出して笑つた。

「蛸はどこにいるんだ」と叔父がまた聞いた。

「ここいらにいるんだ」と船頭はまた答えた。

そうして湯屋の留とめおけ桶を少し深くしたような小判形こばんなりの桶の底つっこに、硝子ガラスを張つたものを水に伏せて、その中に顔を突込むように

押し込みながら、海の底を覗き出した。船頭はこの妙な道具を鏡かがみと称とえて、二つ三つ余分に持ち合わせたのを、すぐ僕らに貸してくれた。第一にそれを利用したのは船頭の傍そばに座を取った吾一と百代子であつた。

二十四

鏡がそれからそれへと順々に回つた時、叔父はこりや鮮あざやかだね、何でも見えると非道ひどく感心していた。叔父は人間社会の事に大抵通じているせいか、万よろに高たかを括くくる癖に、こういう自然界の現象おそに襲おそわれるとじき驚ろく性質たちなのである。自分は千代子から渡

された鏡を受け取つて、最後に一枚の硝子越に海の底を眺めたが、かねて想像したと少しも異なるところのない極めて平凡な海の底が眼に入つただけである。そこには小さい岩が多少の凸凹を描いて一面に連なる間に、蒼黒い藻草が限りなく蔓延つていた。その藻草があたかも生温るい風に颯られるように、波のうねりで静かにまた永久に細長い茎を前後に揺かした。

「市さん蛸が見えて」

「見えない」

僕は顔を上げた。千代子はまた首を突込んだ。彼女の被つていたへなへなの麦藁帽子の縁が水に浸つて、船頭に操つられる船の勢に逆らうたびに、可憐な波をちよろちよろ起した。僕はその

後に見える彼女の黒い髪と白い頸筋を、その顔よりも美しくく眺めていた。

「千代ちゃんには、目付かったかい」

「駄目よ。蛸なんかどこにも泳いでいやしないわ」

「よっぽど慣れないとなかなか目付ける訳に行かないんだそうです」

これは高木が千代子のために説明してくれた言葉であった。彼女は両手で桶を抑えたまま、船縁から乗り出した身体を高木の方へ捻じ曲げて、「道理で見えないのね」といったが、そのまま水に戯れるように、両手で抑えた桶をぶくぶく動かしていた。百代子が向うの方から御姉さんと呼んだ。吾一は居所も分らない蛸

をむやみに突き廻した。突くには二間ばかりの細長い女竹めだけの先に一種の穂先を着けた変なものをを用いるのである。船頭は桶を齒で銜くわえて、片手に棹さおを使いながら、船の動いて行くうちに、蛸の居所を探しあてるや否いなや、その長い竹で巧みにぐにやぐにやした怪物を突き刺した。

蛸は船頭一人の手で、何なんびき疋も船の中に上がったが、いずれも同じくらいな大きさで、これはと驚ろくほどのものはなかった。始めのうちこそ皆珍みんならしがって、捕とれるたびに騒いで見たが、しまいにはさすが元氣な叔父も少し飽あきて来たと見えて、「こう蛸ばかり捕つても仕方がないね」と云い出した。高木は煙草たばこを吹かしながら、舟底ふなぞこにかたまつた獲物えものを眺め始めた。

「千代ちゃん、蛸の泳いでるところを見た事がありますか。ちょっと来て御覧なさい、よつぽど妙ですよ」

高木はこう云つて千代子を招いたが、傍そばに坐っている僕の顔を見た時、「須永すながさんどうです、蛸が泳いでいますよ」とつけ加えた。僕は「そうですか。面白いでしょう」と答えたなり直席すぐを立つともしなかつた。千代子はどれと云いながら高木の傍へ行つて新らしい座を占めた。僕は故もとの所から彼女にまだ泳いでるかと尋ねた。

「ええ面白いわ、早く来て御覧なさい」

蛸は八本の足を真直そろに揃えて、細長い身体を一気にすすつと区切りつつ、水の中を一直線に船板に突き当るまで進んで行くの

であつた。中には烏賊いかのように黒い墨を吐くはのも交まじつていた。僕は中腰になつてちよつとその光景を覗いたなり故の席に戻つたが、千代子はそれぎり高木の傍を離れなかつた。

叔父は船頭に向つて蛸はもうたくさんだと云つた。船頭は歸るのかと聞いた。向うの方に大きな竹籃たけかごのようなものが二つ三つ浮いていたので、蛸ばかりで淋さむしいと思つた叔父は、船をその一つの側わきへ漕こぎ寄せさせた。申し合せたように、舟ふね中ぢゆう立ち上つて籃かごの内を覗くと、七八寸もあろうと云う魚が、縦横に狭い水中を馳かけ廻つていた。その或ものは水の色を離れない蒼あおい光うろこを鱗うろこに帯びて、自分の勢で前後左右に作る波を肉の裏とに透とおすように輝やいた。

「一つ掬すくつて御覧なさい」

高木は大きな掬網たまの柄えを千代子に握らした。千代子は面白半分それを受取つて水の中で動かそうとしたが、動きそうにもしないので、高木は己おのれの手を添えて二人いっしょに籃かごの中を覚束おぼつかなく攪かき廻した。しかし魚は掬すくえるどころではなかつたので、千代子はすぐそれを船頭に返した。船頭は同じ掬網たまで叔父の命まずるまに何疋でも水から上へ扱より出した。僕らは危怪きかいな蛸たこの単調を破るべく、鶏魚いさぎ、すずき、鱸うなぎ、黒鯛くろだいの変化を喜よろこんでまた岸のぼに上つた。

二十五

僕はその晩一人東京へ帰った。母はみんなに引きとめられて、帰るときには吾一か誰か送つて行くという条件の下に、なお二三日鎌倉に留まる事を肯んじた。僕はなぜ母が彼らの勧めるままに、人を好く落ちついているのだらうと、鋭どく磨がれた自分の神経から推して、悠長過ぎる彼女をはがゆく思った。

高木にはそれから以後ついで顔を合せた事がなかつた。千代子と僕に高木を加えて三つ巴を描いた一種の關係が、それぎり發展しないで、そのうちの劣敗者に当る僕が、あたかも運命の先途を予知したごとき態度で、中途から渦巻の外に逃れたのは、この話を聞くものにとつて、定めし不本意であろう。僕自身も幾分か火の手のまだ収まらないうちに、取り急いで纏を撤したような心

持がする。と云うと、僕に始からある目論見もくろみがあつて、わざわざ鎌倉へ出かけたとも取れるが、嫉妬しつとしん心だけあつて競争心を有たもない僕にも相応の己惚うぬぼれは陰気な暗い胸のどこかで時々ちらちら陽炎かげろつたのである。僕は自分の矛盾をよく研究した。そうして千代子に対する己惚うぬぼれをあくまで積極的に利用し切らせないために、他の思想やら感情やらが、入れ代り立ち替り雑然として吾心を奪いにくる煩わづらわしさに悩んだのである。

彼女は時によると、天下に只ただ一人の僕を愛しているように見えた。僕はそれでも進む訳に行かないのである。しかし未来に眼を塞ふさいで、思い切った態度に出ようかと思索しているうちに、彼女はたちまち僕の手から逃れて、全くの他人と違わない顔になつ

てしまうのが常であつた。僕が鎌倉で暮した二日の間に、こういう潮しおの満干みちひはすでに二三度あつた。或時は自分の意志でこの変化を支配しつつ、わざと近寄つたり、わざと遠退とのおいたりするのでなからうかという微かすかな疑惑をさえ、僕の胸に煙らせた。そればかりではない。僕は彼女の言行を、一いつの意味に解釈し終つたすぐ後から、まるで反対の意味に同じものをまた解釈して、その実じつどつちが正しいのか分らないいたずらな忌いまい々しさを感じた例ためしも少なくなかつた。

僕はこの二日間に娶めとるつもりのない女に釣られそうになつた。そうして高木という男がいやしくも眼の前に出没する限りは、厭いやでもしまいまで釣られて行きそうな心持がした。僕は高木に対し

て競争心を有たないと先に断つたが、誤解を防ぐために、もう一度同じ言葉をくり返したい。もし千代子と高木と僕と三人が巴になつて恋か愛か人情かの旋風つむじかぜの中に狂うならば、その時僕を動かす力は高木に勝とうという競争心でない事を僕は断言する。それは高い塔の上から下を見た時、恐ろしくなると共に、飛び下りなければいられない神経作用と同じ物だと断言する。結果が高木に対して勝つか負けるかに帰着する上部うわべから云えば、競争と見えるかも知れないが、動力は全く独立した一種の働きである。しかもその動力は高木がいさえしななければつして僕を襲おそつて来ないのである。僕はその二日間に、この怪しい力の閃きらめきを物凄ものすごく感じた。そうして強い決心と共にすぐ鎌倉を去つた。

僕は強い刺戟しげきに充みちた小説を読むに堪たえないほど弱い男である。強い刺戟に充みちた小説を実行する事はなおさらできない男である。僕は自分の気分が小説になりかけた刹那せつなに驚ろいて、東京へ引き返したのである。だから汽車の中の僕は、半分は優者で半分は劣者であつた。比較的乗客の少ない中等列車のうちで、僕は自分で書き出して自分と裂すき棄すてたようなこの小説の続きをいろいろに想像した。そこには海があり、月があり、磯いそがあつた。若い男の影と若い女の影があつた。始めは男が激げきして女が泣いた。後あとでは女が激して男が宥なだめた。ついには二人手を引き合つて音のしない砂の上を歩いた。あるいは額がくがあり、畳があり、涼しい風が吹いた。二人の若い男がそこで意味のない口論をした。それがだんだ

ん熱い血を頬に呼び寄せて、ついには二人共自分の人格にかかわるような言葉使いをしなければすまなくなつた。果は立ち上つて拳を揮い合つた。あるいは……。芝居に似た光景は幾幕となく眼の前に描かれた。僕はそのいずれをも嘗め試ろみる機会を失つてかえつて自分のために喜んだ。人は僕を老人みたようだと云つて嘲けるだろう。もし詩に訴えてのみ世の中を渡らないのが老人なら、僕は嘲けられても満足である。けれどももし詩に涸れて乾びたのが老人なら、僕はこの品評に甘んじたくない。僕は始終詩を求めてもがいているのである。

二十六

僕は東京へ帰ってから、の気分を想像して、あるいは刺戟しげきを眼の前に控えた鎌倉にいるよりもかえって焦躁いらいらつきはしまいかと心配した。そうして相手もなく一人焦躁つく事のはなはだしい苦痛をいたずらに胸うちの中に描いて見た。偶然にも結果は他の一方に外それた。僕は僕の希望した通り、平生に近い落ちつきと冷静と無頓むとんじ着やくとを、比較的容易に、淋さみしいわが二階の上に齋もたらし帰る事ができた。僕は新らしい匂においのする蚊帳かやを座敷いっぱいにつけて、軒に鳴る風鈴ふうりんの音を楽しんで寝た。宵よいには町へ出て草花の鉢はちを抱かかえながら格子こうしを開ける事もあつた。母がいないので、すべての世話は作さくという小間使がした。鎌倉から帰って、始めてわが家の膳ぜん

に向つた時、給仕のために黒い丸盆を膝の上に置いて、僕の前に
畏こまつた作の姿を見た僕は今更のように彼女と鎌倉にいる姉

妹との相違を感じた。作は固より好い器量の女でも何でもな

かつた。けれども僕の前に出て畏こまる事よりほかに何も知つて

いない彼女の姿が、僕にはいかに慎ましやかに控目に、い

かに女として憐れ深く見えたらう。彼女は恋の何物であるかを考

えるさえ、自分の身分ではすでに生意氣過ぎると思ひ定めた様子

で、おとなしく坐つていたのである。僕は珍らしく彼女に優しい

言葉を掛けた。そうして彼女に年はいくつだと聞いた。彼女は十

九だと答えた。僕はまた突然嫁に行きたくはないかと尋ねた。彼

女は赧い顔をして下を向いたなり、露骨な問をかけた僕を気の毒

がらせた。僕と作とはそれまでほとんど用の口よりほかに利いた事がなかつたのである。僕は鎌倉から新らしい記憶を持つて歸つた反動として、その時始めて、自分の家に使っている下婢の女らしいところに気がついた。愛とは固より彼女と僕の間もとに云い得べき言葉でない。僕はただ彼女の身の周囲まわりから出る落ちついた、氣安い、おとなしやかな空気を愛したのである。

僕が作のために安慰を得たと云つては、自分ながらおかしく聞こえる。けれども今考えて見てもそれよりほかの原因は全く考えつかないようだから、やっぱり作が——作がというより、その時の作が代表して僕に見せてくれた女によし性しょうのある方面の性質が、想像の刺戟しげきにすら焦躁いらだ立ちたがっていた僕の頭を静めてくれたの

だろうと思う。白状すれば鎌倉の景色は折々眼に浮かんだ。その景色のうちには無論人間が活動していた。ただそれが僕の遠くにいる、僕とはとても利害を一にし得ない人間の活動らしく見えたのは幸福であった。

僕は二階に上つて書架の整理を始めた。綺麗好きな母が始終氣をつけて掃除を怠たらなかつたにかかわらず、一々書物を並べ直すとなると、思わぬ埃の色を、目の届かない陰に見つけるので、残らず揃えるまでには、なかなか手間取った。僕は暑中に似合わしい閑事業として、なるべく時間のかかるように、気が向けば手にした本をいつまでも読み耽つてみようという気楽な方針で、蝸牛のごとく進行した。作は時ならない払塵の音を聞きつけて、

梯子段はしごだんから銀杏返いちようがえしの頭を出した。僕は彼女に書架の一部を雑巾ぞうきんで拭いて貰もらった。しかしいつまでかかるか分らない仕事の手伝を、済むまでさせるのも気の毒だと思つて、すぐ階下したへ下げた。僕は一時間ほど書物を伏せたり立てたりして少し草臥くたびれたから煙草たばこを吹かして休んでいると、作がまた梯子段から顔を出した。そうして、私でよろしければ何ぞ致しましょうかと尋ねた。僕は作に何かさせてやりたかった。不幸にして西洋文字の読めない彼女には手の出せない書物の整理なので、僕は気の毒だけでも、なに好いよと断つてまた下へ追いやつた。

作の事をそう一々云う必要もないが、つい前からの関係で、彼女のその時の行動を覚えていたから話したのである。僕は一本の

巻煙草まきたばこを呑み切った後あとでまた整理にかかった。今度は作のためにわれ一人いちにんの世界を妨さまたげられる虞おそれなしに、書架の二段目を一気に片づけた。その時僕は久しく友達に借りて、つい返すのを忘れていた妙な書物を、偶然たなうしろ棚の後から発見した。それはむしろ薄い小形の本だったので、ついほかのものの向側むこうがわへ落ちたなり埃だらけになって、今日きょうまで僕の眼を掠かすめていたのである。

二十七

僕にこの本を貸してくれたものはある文学好ずきの友達であった。

僕はかつてこの男と小説の話をして、思慮の勝ったものは、万事

に考え込むだけで、いつこう華やかな行動を仕切る勇氣がないから、小説に書いてもつまらないだろうと云った。僕の平生からあまり小説を愛読しないのは、僕に小説中の人物になる資格が乏しいので、資格が乏しいのは、考え考えしてぐずつくせいだろうとかねがね思っていたから、僕はついこういう質問をかけて見たくなったのである。その時彼は机上にあつたこの本を指して、ここに書いてある主人公は、非常に目覚ましい思慮と、恐ろしく凄まじい思い切つた行動を具えていると告げた。僕はいつたいどんな事が書いてあるのかと聞いた。彼はまあ読んで見ると云つて、その本を取つて僕に渡した。標題にはゲダンケという独乙字ドイツが書いてあつた。彼は露西亞ロシア物の翻訳だと教えてくれた。僕は薄い書物を

手にしながら、重ねてその梗こうがいを彼に尋ねた。彼は梗などはどうでも好いと答えた。そうして中に書いてある事が嫉妬しつとなのだか、復讐ふくしゅうなのだか、深刻な悪戯いたずらなのだか、酔興すいきような計略なのだか、真面目まじめな所作なのだか、氣狂きちがいの推理なのだか、常人の打算なのだか、ほとんど分らないが、何しろ華々はなばなしい行動と同じく華々しい思慮が伴なっているから、ともかくも読んで見ると云った。僕は書物を借りて帰った。しかし読む気はしなかった。僕は読み耽ふけらない癖に、小説家というものをいっさい馬鹿にしていた上に、友達のような事にはちつとも心を動かすべき興味を有もたなかつたからである。

この出来事をすっかり忘れていた僕は、何の気もつかずにその

ゲダンケを今柵たなうしろの後から引き出して厚い塵ちりを払った。そうして見みおぼえ
覚のある例の独乙字の標題に眼をつけると共に、かの文学好の
友達と彼のその時の言葉とを思い出した。すると突然どこから起
つたか分らない好奇心に駆かられて、すぐその一頁ページを開いて初めか
ら読み始めた。中には恐るべき話が書いてあつた。

ある女に意いのあつたある男が、その婦人から相手にされないの
みか、かえつてわが知り合の人の所へ嫁入られたのを根に、新婚
の夫を殺そうと企てた。ただただ殺すのではない。女房が見て
いる前で殺さなければ面白くない。しかもその見ている女房が彼
を下手人と知っていないながら、いつまでも指を銜くわえて、彼を見てい
るだけで、それよりほかにどうにも手のつけようのないという複

雑な殺し方をしなければ気がすまない。彼はその手段として一種の方法を案出した。ある晩餐ばんさんの席へ招待された好機を利用して、彼は急に劇しい発作ほっさに襲おそわれたふりをし始めた。傍はたから見るとまるで狂人としか思えない挙動をその場であえてした彼は、同席の一人残らずから、全くの狂人と信じられたのを見すまして、心の内で凶に当った策略を祝賀した。彼は人目に触れやすい社交場裡りで、同じ所作しよさをなお二三度くり返した後、発作のために精神に狂くるいの出る危険な人という評判を一般に博し得た。彼はこの手数てかずのかかった準備の上に、手のつけようのない殺人罪を築き上げるつもりでいたのである。しばしば起る彼の発作が、華はなやかな交際の色を暗く損そこない出してから、今まで懇意ゆきぎに往来していた誰彼の門戸

が、彼に対して急に固く鎖とぎされるようになった。けれどもそれは彼の苦にするところではなかった。彼はなお自由に出入でいりのできる一軒の家を持っていた。それが取りも直さず彼のまさに死の国に蹴落けおとそうとしつつある友とその細君の家だったのである。彼はあゝる日何気ない顔をして友の住居すまいを敲たたいた。そこで世間話に時を移すと見せて、暗に目の前の人に飛びかかる機うかがを窺うかがった。彼は机の上にあつた重い文鎮ぶんちんを取つて、突然これで人が殺せるだろうかと尋ねた。友は固もとより彼の間を真まに受けなかつた。彼は構わずできるだけの力を文鎮に込めて、細君の見ている前で、最愛の夫を打ち殺した。そうして狂人の名もとの下に、瘋癲院ふうてんいんに送られた。彼は驚ろくべき思慮と分別と推理の力とをもつて、以上の顛末てんまつを

基礎に、自分のけつして狂人でない訳をひたすら弁解している。かと思うと、その弁解をまた疑っている。のみならず、その疑いをまた弁解しようとしている。彼は必^{ひつきよう}竟^{ひつきよう}正気なのだろうか、狂人なのだろうか、——僕は書物を手にしたまま慄^{りっせん}然^{りっせん}として恐れた。

二十八

僕の頭^{ヘッド}は僕の胸^{ハート}を抑^{おさ}えるためにできていた。行動の結果から見て、はなはだしい悔^{くい}を遺^{のこ}さない過去^{かえり}を顧^{かえり}みると、これが人間の常体かとも思う。けれども胸^{ハート}が熱^{あつ}しかけるたびに、厳^{げん}肅^{じゆ}な頭^{ヘッド}の威力

を無理に加えられるのは、普通誰でも経験する通り、はなはだし
い苦痛である。僕は意地張いじはりという点において、どつちかという
むしろ陰性の癩癩かんしゃくもち持だから、発作ほつきに心を襲おそわれた人が急に理
性のために喰い留められて、劇はげしい自動車の速力を即時に殺すよ
うな苦痛は滅多めったに嘗なめた事がない。それですらある場合には命の
心棒を無理に曲げられるとでも云わなければ形容しようのない活
力の燃焼を内に感じた。二つの争いが起るたびに、常に頭の命令
に屈従して来た僕は、ある時は僕の頭が強いから屈従させ得るの
だと思ひ、ある時は僕の胸が弱いから屈従するのだとも思つたが、
どうしてもこの争いは生活のための争いでありながら、人知れず、
わが命を削けずる争いだという畏怖いふの念から解脱げだつする事ができなかつ

た。

それだから僕はゲダンケの主人公を見て驚ろいたのである。親友の命を虫の息のように軽く見る彼は、理と情との間に何らの矛盾をも扞格をも認めなかつた。彼の有する凡ての知力は、ことごとく復讐の燃料となつて、残忍な兇行を手際よく仕遂げる方便に供せられながら、毫も悔ゆる事を知らなかつた。彼は周密なる思慮を率いて、満腔の毒血を相手の頭から浴びせかけ得る偉大なる俳優であつた。もしくは尋常以上の頭脳と情熱を兼ねた狂人であつた。僕は平生の自分と比較して、こう顧慮なく一心にふるまえるゲダンケの主人公が大いに羨ましかつた。同時に汗の滴るほど恐ろしかつた。できたらさぞ痛快だろうと思つた。でか

した後は定めし堪えがたい良心の拷問に逢うだろうと思つた。

けれどももし僕の高木に対する嫉妬がある不可思議の径路を取

つて、向後今の数十倍に烈しく身を焼くならどうだろうと僕は考

えた。しかし僕はその時の自分を自分で想像する事ができなかつ

た。始めは人間の元来からの作りが違ふんだから、とてもこんな

真似はしえまいという見地から、すぐこの問題を棄却しよう

した。次には、僕でも同じ程度の復讐が充分やって除けられ

るに違いないという気がし出した。最後には、僕のように平生は

頭と胸の争いに悩んでぐずついているものにして始めてこんな猛

烈な兇行を、冷静に打算的に、かつ組織的に、逞ましゆうするの

だと思ひ出した。僕は最後になぜこう思つたのか自分にも分らな

い。ただこう思った時急に変な心持に襲われた。その心持は純然たる恐怖でも不安でも不快でもなく、それらよりは遥かに複雑なものに見えた。が、纏まとつて心に現われた状態から云えば、ちょうどおとなしい人が酒のために大胆になつて、これなら何でもやれるという満足を感じつつ、同時に酔に打ち勝たれた自分は、品性の上において平生の自分より遙に墮落したのだと気がついて、そうして墮落は酒の影響だからどこへどう避けても人間としてとても逃のがれる事はできないのだと沈痛に諦あきらめをつけたと同じような変な心持であつた。僕はこの変な心持と共に、千代子の見ている前で、高木の脳天に重い文ぶん鎮ちんを骨の底まで打ち込んだ夢を、大きな眼を開あきながら見て、驚ろいて立ち上つた。

下へ降りるや否いなや、いきなり風呂場ふろばへ行つて、水をぎあぎあ頭へかけた。茶の間の時計を見ると、もう午過ひるすぎなので、それを好い機会しおに、そこへ坐すわつて飯を片づける事にした。給仕には例の通り作さくが出た。僕は二た口三口無言で飯の塊かたまりを頬張つたが、突然彼女に、おい作僕の顔色はどうかあるかいと聞いた。作は吃びつく驚りした眼を大きくして、いいえと答えた。それで問答が切れると、今度は作の方がどうか遊ばしましたかと尋ねた

「いいや、大してどうもしない」

「急に御暑うございますから」

僕は黙つて二杯の飯を食い終つた。茶を注つがして飲みかけた時、僕はまた突然作に、鎌倉などへ行つて混雑ごたごたするより宅うちにいる方

が静しずかで好いねと云った。作は、でもあちらの方が御涼しゅうございましようと言った。僕はいやかえつて東京より暑いくらいだ、あんな所にいると気ばかりいらいらしていけないと説明してやった。作は御隠居さまはまだ当分あちらにおいてでございませうかと尋ねた。僕はもう帰るだろうと答えた。

二十九

僕は僕の前に坐すわっている作さくの姿を見て、一筆ひとふでがきの朝あさ貌がほのような気がした。ただ貴たつとい名家めいけの手にならないのが遺憾いかんであるが、心の中はそう云う種類の画えと同じく簡略かんりやくにでき上っていると

しか僕には受取れなかつた。作の人柄ひとがらを画えに喩たとえて何のためになると聞かれるかも知れない。深い意味もなからうが、実は彼女の給仕を受けて飯を食う間に、今しがたゲダンケを読んだ自分と、今黒塗の盆を持ってかしこ畏かしこまっている彼女とを比較して、自分の腹はなぜこうしつこい油絵のように複雑なのだろうと呆あきれたからである。白状すると僕は高等教育を受けた証しょうこ拠ことして、今こんにち日まで自分の頭かぶが他ひとより複雑に働らくのを自慢ひとにしていた。ところがいつかその働はたららきに疲つかれていた。何の因果いんがでこうまで事を細かに刻まなければ生きて行いかれないのかと考かんえて情なさなかつた。僕は茶ちやわ碗わんを膳ぜんの上に置きながら、作の顔かほを見て尊たつとい感じかんじを起おこした。

「作御前さくごぜんでもいろいろ物を考かんえる事ことがあるかね」

「私なんぞ別に何も考えるほどの事がございませんから」

「考えないかね。それが好いね。考える事がないのが一番だ」

「あつても智慧ちえがございませんから、筋道が立ちません。全く駄目でございます」

「仕合せだ」

僕は思わずこう云つて作を驚ろかした。作は突然僕から冷かさ
れたとでも思つたらう。気の毒な事をした。

その夕暮に思いがけない母が出し抜けに鎌倉から歸つて来た。

僕はその時ひ日の限りかけた二階の縁に籐椅子とすを持ち出して、作が
跣足はだしで庭先へ水を打つ音を聞いていた。下へ降りて玄関へ出た時、
僕は母を送つて来るべきはずの吾一の代りに、千代子が彼女のあと後

に跟ついて沓くつぬぎ脱あがから上つたのを見て非常に驚ろいた。僕は籐椅子の上で千代子の事を全く考えずにいたのである。考えても彼女と高木とを離す事はできなかつたのである。そうして二人は当分鎌倉の舞台を動き得ないものと信じていたのである。僕は日に焼けて心持色の黒くなつたと思われる母と顔を見合あひあひあして挨拶あいさつを取り替かわす前に、まず千代子に向つてどうして来たのだと聞きたかつた。實際僕はその通りの言葉を第一に用いたのである。

「叔母さんを送つて来たのよ。なぜ。驚ろいて」

「そりやありがとう」と僕は答えた。僕の千代子に対する感情は鎌倉へ行く前と、行つてからとでだいぶ違つていた。行つてからと歸つて来てからとでもまただいぶ違つていた。高木といつしよ

に束ねられた彼女に対するのと、こう一人に切り離された彼女に
対するのでもまただいぶ違っていた。彼女は年を取った母を吾
一に托するのが不安だったから、自分で随ついて来たのだと云つ
て、作が足を洗っている間に、母の単衣ひとえを箆筒たんすから出したり、そ
れを旅行着と着換えさせたりなどして、元の千代子の通り豆まめやか
にふるまった。僕は母にあれから何か面白い事がありましたかと
尋ねた。母は満足らしい顔をしながら、別にこれという珍らしい
事も無かったと答えたが、「でもね久しぶりに好いい気保養きほようをしま
した。御蔭で」と云った。僕にはそれが傍そばにいる千代子に対して
の礼の言葉と聞こえた。僕は千代子に今日これからまた鎌倉へ帰
るのかと尋ねた。

「泊って行くわ」

「どこへ」

「そうね。内幸町へ行っても好いけど、あんまり広過ぎて淋さむしいから。——久しぶりにここへ泊ろうかしら、ねえ叔母さん」

僕には千代子が始めから僕の家に戻るつもりで出て来たように見えた。自白すれば僕はそこへ坐つて十分と経たないうちに、また眼の前にいる彼女の言語動作を一種の立場から観察したり、評価したり、解釈したりしなければならぬようになったのである。僕はそこに気がついた時、非常な不愉快を感じた。またそういう努力には自分の神経が疲れ切っている事も感じた。僕は自分が自分に逆さからつて余儀なくこう心を働かすのか。あるいは千代子が厭いや

がる僕を無理に強いて動くようにするのか。どっちにしても僕は腹立たしかつた。

「千代ちゃんが出来なくても吾一さんでたくさんなのに」

「だってあたし責任があるじゃありませんか。叔母さんを招待したのはあたしでしょう」

三十

「じゃ僕も招待を受けたんだから、送って来て貰えもらば好かつた」
「だから他のひとの云う事を聞いて、もつといらつしやれば好いいのに」
「いいえあの時にさ。僕の帰つた時にさ」

「そうするとまるで看護婦みたようね。好いわ看護婦でも、ついて来て上げるわ。なぜそう云わなかったの」

「云つても断られそうだったから」

「あたしこそ断られそうだったわ、ねえ叔母さん。たまに招待に応じて来ておきながら、厭いやにむずかしい顔ばかりしているんですもの。本当にあなたは少し病気よ」

「だから千代子について来て貰もらいたかったのだろう」と母が笑いながら云った。

僕は母の帰るつい一時間前まで千代子の来る事を予想し得なかった。それは今改めてくり返す必要もないが、それと共に僕は母が高木について齎もたらす報道をほとんど確実な未来として予期して

いた。^{おだ}穏やかな母の顔が不安と失望で曇る時の気の毒さも予想していた。僕は今この予期と全く反対の結果を眼の前に見た。彼らは二人とも常に変らない親しげな叔母姪^{めい}であつた。彼らの各自^{おのおの}は各自に特有な温^{あた}か味^みと清^{すが}々^{すが}しさを、いつもの通り互いの上に、また僕の上に、心持よく加えた。

その晩は散歩に出る時間を儉約して、女二人と共に二階^{あが}に上つて涼みながら話をした。僕は母の命ずるまま軒端^{のきば}に七草^{ななくさ}を描^かいた。岐阜^{ぎふち}提灯^{ちようちん}をかけて、その中に細い蠟燭^{ろうそく}を点けた。熱いから電灯を消そうと発議^{ほつぎ}した千代子は、遠慮なく畳の上を暗くした。風のない月が高く上^{のぼ}つた。柱^{むら}に凭^{もた}れていた母が鎌倉を思い出すと云つた。電車の音のする所で月を看^みるのは何だかおかしい気がする。

ると、この間から海辺に馴染なんだ千代子が評した。僕は先刻さつきの籐と椅子いすの上に腰をおろして団扇うちわを使つていた。作が下から二度ばかり上つて来た。一度は煙草盆たばこぼんの火を入れ更かえて、僕の足の下に置いて行つた。二返目には近所から取り寄せた氷菓アイスクリーム子を盆に載のせて持つて来た。僕はそのたびごと階級制度の嚴重な封建の代よに生れたように、卑しい召使の位置を生しょうが涯がいの分と心得ている。この作と、どんな人の前へ出ても貴女レディーとしてふるまつて通るべき氣位そなを具えた千代子とを比較しない訳に行かなかつた。千代子は作が出て来ても、作でないほかの女が出て来たと同じように、なんにも氣に留めなかつた。作の方ではいつたん起たつて梯子段はしごだんの傍そばまで行つて、もう降りようとする間際まぎわにきつと振り返つて、千

代子の後姿うしろすがたを見た。僕は自分が鎌倉で高木を傍そばに見て暮した二日間を思い出して、材料がないから何も考えないと明言した作に、千代子というハイカラな有毒の材料が与えられたのを憐あわれに眺ながめた。

「高木はどうしたろう」という問が僕の口元までしばしば出た。けれども単なる消息の興味以外に、何かためにする不純なものが自分を前に押し出すので、その都度卑怯つどだと遠くで罵ののられるためか、つい聞くのをいさぎよしとしなくなった。それに千代子が帰って母だけになりさえすれば、彼の話は遠慮なくできるのだからとも考えた。しかし実を云うと、僕は千代子の口から直下じかに高木の事を聞きたかったのである。そうして彼女が彼をどう思ってい

るか、それを判^{はつきり}切胸に畳み込んでおきたかったのである。これは嫉妬^{しつと}の作用なのだろうか。もしこの話を聞くものが、嫉妬だというなら、僕には少しも異存がない。今の料^{りようけん}簡^{かん}で考えて見ても、どうもほかの名はつけ悪い^{にく}ようである。それなら僕がそれほど千代子に恋していたのだろうか。問題がそう推移すると、僕も返事^{きゆう}に窮するよりほかに仕方がなくなる。僕は實際彼女に対して、そんなに熱烈な愛を脈^{みやくはく}搏^{はく}の上^{じょう}に感じていなかったからである。すると僕は人より二倍も三倍も嫉妬^{しつとぶか}深い訳になるが、あるいはそうかも知れない。しかしもつと適当に評したら、おそらく僕本来のわがままが原因なのだろうと思う。ただ僕は一言^{いちごん}それにつけ加えておきたい。僕から云わせると、すでに鎌倉を去った後^{あと}なお

高木に対しての嫉妬心がこう燃えるなら、それは僕の性情に欠陥があつたばかりでなく、千代子自身に重い責任があつたのである。相手が千代子だから、僕の弱点がこれほどに濃く胸を染めたのだと僕は明言して憚^{はば}らない。では千代子のどの部分が僕の人格を墮落させるだろうか。それはとても分らない。あるいは彼女の親切じやないかとも考えている。

三十一

千代子の様子はいつもの通り明^{あけ}つ放^{はな}しなものであつた。彼女はどんな問題が出てても苦もなく口を利^きいた。それは必^{ひつき}竟^{きよう}腹の中

に何も考えていない証しょうこ拠よこだとしか取れなかつた。彼女は鎌倉へ行つてから水泳を自習し始めて、今では背の立たない所まで行くのが楽みだと云つた。それを用心深い百代子が剣けん呑のんがつて、詫あやまるように悲しい声を出して止とめるのが面白いと云つた。その時母は半なかば心配で半あきば呆れたような顔をして、「何ですぬ女の癖にそんな軽かる機はずみな真似をして。これからは後ご生しょうだから叔母さんに免じて、あぶない悪ふぎは止よしておくれよ」と頼んでいた。千代子はただ笑いながら、大丈夫よと答えただけであつたが、ふと縁えん側がわの椅子に腰を掛けている僕を顧かえりみて、市いちさんもそう云う御お転てん婆ばは嫌きらいでしようと聞いた。僕はただ、あんまり好きじゃないと云つて、月の光の隈くまなく落ちる表を眺ながめていた。もし僕が自分

の品格に対して尊敬を払う事を忘れたなら、「しかし高木さんには気に入るんだろう」という言葉をその後あとにきつとつけ加えたに違ちがない。そこまで引き摺ずられなかったのは、僕の体面上まだ仕合せであつた。

千代子はかくのごとく明けつ放しであつた。けれども夜が更ふけて、母がもう寝ようと言い出すまで、彼女は高木の事をとうとう一口も話頭のぼに上のせなかつた。そこに僕ははなはだしい故意こゝいを認めた。白い紙の上に一点の暗い印インキ気が落ちたような気がした。鎌倉へ行くまで千代子を天下の女によし性のうちで、最も純粋いちにんな一人と信じていた僕は、鎌倉で暮したわずか二日の間に、始めて彼女の技巧アートを疑うたがい出したのである。その疑うたがが今うたがようやく僕の胸に根をお

ろそうとした。

「なぜ高木の話をしなのだろう」

僕は寝ながらこう考えて苦しんだ。同時にこんな問題に睡眠の時間を奪われる愚さおろかを自分でよく承知していた。だから苦しむのが馬鹿馬鹿しくてなお癩かんが起った。僕は例の通り二階に一人寝ていた。母と千代子は下座敷に蒲団ふとんを並べて、一つ蚊帳かやの中に身を横たえた。僕はすやすや寝ている千代子を自分のすぐ下に想像して、必ひつきよう竟ひつきようのつそつ苦しがる僕は負けているのだと考えない訳に行かなくなつた。僕は寝返りを打つ事さえ厭いやになつた。自分がまだ眠られないという弱味を階下したへ響かせるのが、勝利の報知として千代子の胸に伝わるのを恥辱と思つたからである。

僕がこうして同じ問題をいろいろに考えているうちに、同じ問題が僕にはいろいろに見えた。高木の名前を口へ出さないのは、全く彼女の僕に対する好意に過ぎない。僕に気を悪くさせまいと思ふ親切から彼女はわざとそれだけを遠慮したのである。こう解釈すると鎌倉にいた時の僕は、あれほど単純な彼女をして、僕の前に高木の二字を公おおよけにする勇気を失わしめたほど、不合理に機嫌を悪くふるまったのだらう。もしそうだとすれば、自分は人の気を悪くするために、人の中へ出る、不愉快な動物である。宅うちへ引ひっこ込んで交つきあ際あいさえしなればそれで宜いい。けれどももし親切を冠かむらない技巧アートが彼女の本義なら……。僕は技巧という二字を細かに割って考えた。高木を媒鳥おとりに僕を釣るつもりか。釣るのは、最

後の目的もない癖に、ただ僕の彼女に対する愛情を一時的に刺戟しげきして楽しむつもりか。あるいは僕にある意味で高木のようになれというつもりか。そうすれば僕を愛しても好いというつもりか。あるいは高木と僕と戦うところを眺ながめて面白かったというつもりか。または高木を僕の眼の前に出して、こういう人がいるのだから、早く思い切れというつもりか。——僕は技巧の二字をどこまでも割って考えた。そうして技巧なら戦争だと考えた。戦争ならどうしても勝負に終るべきだと考えた。

僕は寝つかれないで負けている自分を口惜くやしく思った。電灯は蚊帳を釣るとき消してしまったので、室へやの中に隙間すきまもなく蔓延はびこる暗闇くらやみが窒息するほど重苦しく感ぜられた。僕は眼の見えないと

ころに眼を明けて頭だけ働らかす苦痛に堪えなくなつた。寝返りさえ慎んで我慢していた僕は、急に起つて室を明るくした。ついでに縁側へ出て雨戸を一枚細目に開けた。月の傾むいた空の下には動く風もなかつた。僕はただ比較的冷かな空気を肌と咽喉に受けただけであつた。

三十二

翌日はいつも一人で寝ている時より一時間半も早く眼が覚めた。
あくるひ
 すぐ起きて下へ降りると、銀杏返しの上へ白地の手拭を被つて、
ながひばち
 長火鉢の灰を篩つていた作が、おやもう御目覚めと云いな
ふる
さく
てぬぐい
かぶ
おめざめ

がら、すぐ顔を洗う道具を風呂場へ並べてくれた。僕は帰りに埃
だらけの茶の間を爪つまさき先で通り抜けて玄関へ出た。その時ついで
に二人の寝ている座敷を蚊帳かやご越しに覗のぞいて見たら、目敏めざとい母も昨
日の汽車の疲うが出たせいか、まだ静かな眠ねむりを貪むさぼっていた。千代
子もとは固もより夢の底うすに埋うまっているように正体なく枕の上に首を落
していた。僕は目的あてもなく表へ出た。朝の散歩おもむきの趣おもむきを久しく忘れ
ていた僕には、常とこに変わらない町の色が、暑あつさと雑ざつ沓とうとに染め
つけられない安息日のごとく穏おだやかに見えた。電車の線路が研とぎ
澄あまされた光を真ま直つに地面の上に伸ばすのも落ちついた感じで
あった。けれども僕は散歩がしたくつて出たのではなかった。た
だ眼が早く覚さめ過ぎて、中は有したに延ひびた命の断片を、運動で埋うめる

つもりで歩くのだから、それほどの興味は空にも地にも乃至町にも見出す事ができなかつた。

一時間ばかりして僕はむしろ疲れた顔を母からも千代子からも怪しまれに戻つて来た。母はどこへ行つたのと聞いたが、後から、いろつや色沢が好くないよ、どうかおしかいと尋ねた。

「ゆうべよ昨夜好く寝られなかつたんでしよう」

僕は千代子のこの言葉に対して答うべき術すべを知らなかつた。実を云うと、昂然こうぜんとしてなに好く寝られたよと云いたかつたのである。不幸にして僕はそれほどの技巧家アーチストでなかつた。と云つて、正直に寝られなかつたと自白するには余り自尊心が強過ぎた。僕はついに何も答えなかつた。

三人が同じ食卓で朝飯を済ますや否や、母が昨日涼しいうちに
と頼んでおいた髪結が来た。洗い立の白い胸掛をかけて、敷居
越に手を突いた彼女は、御帰りなさいましと親しい挨拶をし
た。彼女はこの職業に共通なめでたい口ぶりを有っていた。それ
を得意に使って、内気な母に避暑を誇の種に話させる機会を一句
ごとに作った。母は満足らしくも見えたが、そう蝶蝶しくは
饒舌り得なかつた。髪結はより効目のある相手として、すぐ年の
若い千代子を選んだ。千代子は固より誰彼の容赦なく一様に気易
く応対のできる女だったので、御嬢様と呼びかけられるたびに相
当の受答をして話を勢ました。千代子の泳の噂が出た時、髪
結は活漕で宜しゆうございます、近頃の御嬢様方はみんな水泳

の稽古けいこをなさいますと誰が聞いても拵こしらえたような御世辞を云った。妙な事を吹ふい聴ちようするようでおかしいが、実をいうと僕は女の髪を上げるところを見ているのが好きであつた。母が乏ともしい髪を工面して、どうかこうか鬻まげに結ゆい上げる様子は、いくら上じようず手が纏まとめるにしても、それほど見栄みばえのある画えではないが、それでも退ま屈しを凌しのぐには恰かつ好こうな慰みであつた。僕は髪結の手の動く間まに、自然とでき上つて行く小さな母の丸まる鬻まげを眺ながめていた。そうして腹の中で、千代子の髪を日本流に櫛くしを入れたらさぞみごとだろうと思つた。千代子は色の美しい、癖のない、長くて多過ぎる髪かみの所有者だつたからである。この場合いつもの僕なら、千代ちゃんもついでに結いつて御貰ごもらいいなときつと勧めるところであつた。し

かし今の僕にはそんな親しげな要求を彼女に向つて投げかける氣が出悪でにくかつた。すると偶然にも千代子の方で、何だかあたしも一つ結つて見たくなつたと云い出した。母は御結おひいよ久しぶりにと誘いざななつた。髪結かみひは是非御上げ遊ばせな、私始めて御髪おぐしを拝見した時から束髪そくはつにしていらつしやるのはもつたないと思つとりましたとさも結ひいたそうな口ぶりを見せた。千代子はとうとう鏡台の前に坐つた。

「何に結おうかしら」

髪結は島田を勧めた。母も同じ意見であつた。千代子は長い髪を背中に垂れたまま突然いっ市さんと呼んだ。

「あなた何が好き」

「旦那様だんなさまも島田が好きだときつとおっしゃいますよ」

僕はぎくりとした。千代子はまるで平気のように見えた。わざと僕の方をふり返って、「じゃ島田に結って見せたげましょうか」と笑った。「好いだろう」と答えた僕の声はいかにも鈍どんに聞こえた。

三十三

僕は千代子の髪のでき上らない先に二階へ上あがった。僕のような神経質しんけいしつなものが拘こだわって来ると、無関係の人の眼にはほとんど小供しょうこらしいと思われるような所作しよさくをあえてする。僕は途中で鏡台の

傍そばを離れて、美くしい島田鬻しまだまげをいただく女が男から強奪ごうだつする嘆賞の租税を免まぬかれたつもりでいた。その時の僕はそれほどこの女の虚栄心に媚こびる好意を有もたなかつたのである。

僕は自分で自分の事をかれこれ取り繕つくろつて好く聞えるように話したくない。しかし僕ごときものでも長火鉢ながひばちの傍はたで起るこんな戦術よりはもう少し高尚な問題に頭を使い得るつもりでいる。ただそこまで引き摺ずり落された時、僕の弱点としてどうしても脱線する気になれないのである。僕は自分でそのつまらなさ加減をよく心得ていただけに、それをあえてする僕を自分で憎にくみ自分で鞭むちうった。

僕は空威張からいばりを卑劣と同じく嫌きらう人間であるから、低くても小ち

さくても、自分らしい自分を話すのを名誉と信じてなるべく隠さない。けれども、世の中で認めている偉い人とか高い人とかいうものは、ことごとく長火鉢や台所の卑しい人生の葛藤かつとうを超越しているのだろうか。僕はまだ学校を卒業したばかりの経験しか有もたない青二才に過ぎないが、僕の知力と想像に訴えて考えたころでは、おそらくそんな偉い人高い人はいつの世にも存在していないのではなからうか。僕は松本の叔父を尊敬している。けれども露骨なことを云えば、あの叔父のようなのは偉く見える人、高く見せる人と評すればそれで足りていると思う。僕は僕の敬愛する叔父に対しては偽物きがつがんぶつ贋物の名を加える非礼と僻見へきけんとを憚はばからりたい。が、事実上彼は世俗に拘泥こうでいしない顔をして、腹の中で

拘泥しているのである。小事に齷齪あくそくしない手を拱こまぬいで、頭の奥で齷齪あくそくしているのである。外へ出さないだけが、普通より品ひんが好いと云つて僕は讃辞を呈したく思っている。そうしてその外へ出さないのは財産の御蔭おかげ、年齢としの御蔭、学問と見識と修養の御蔭である。が、最後に彼と彼の家庭の調子が程好く取れているからでもあり、彼と社会の關係げんけいが逆さかなようぎやくで実は順じゆんに行くからである。——話がつい横道よこみちへ外それた。僕は僕のこせこせしたところを余り長く弁護し過ぎたかも知れない。

僕は今いう通り早く二階へ上あがつてしまった。二階は日が近いので、階下したよりはよほど凌しのぎ悪にくいのだけれども、平生いつけたせいで、僕は一日の大部分をここで暮らす事ことにしていたのである。僕

はいつもの通り机の前に坐つたなりただ頼杖を突いてぼんやりしていた。今朝煙草の灰を棄てたマジヨリカの灰皿が綺麗に掃除されて僕の肱の前に載せてあつたのに気がついて、僕はその中に現わされた二羽の鷺鳥を眺めながら、その灰を空けた作の手を想像に描いた。すると下から梯子段を踏む音がして誰か上つて来た。僕はその足音を聞くや否や、すぐそれが作でない事を知つた。僕はこうぼんやり屈托しているところを千代子に見られるのを屈辱のように感じた。同時に傍にあつた書物を開けて、先刻から読んでいたふりをするほど器用な機転を用いるのを好まなかつた。

「結えたから見てちょうだい」

僕は僕の前ですぐこう云いながら坐る彼女を見た。

「おかしいでしょう。久しく結わないから」

「大変美しくできたよ。これからいつでも島田に結うといい」

「二三度壊しちや結い、壊しちや結いしないといけないのよ。毛が馴染まなくって」

こんな事を聞いたり答えたり三四返しているうちに、僕はいつの間にか昔と同じように美しく素直な邪気のない千代子を眼の前に見る気がし出した。僕の心持が何かの調子で和らげられたのか、千代子の僕に対する態度がどこかで角度を改めたのか、それは判然と云い悪い。こうだと説明のできる捕どころは両方になかったらしく記憶している。もしこの気易い状態が一二時間も長

く続いたなら、あるいは僕の彼女に対して抱いた変な疑惑を、過去に溯さかのぼって当初から真直まっすぐに黒い棒で誤解という名なの下もとに消し去る事ができたかも知れない。ところが僕はつい不味まずい事をしたのである。

三十四

それはほかでもない。しばらく千代子と話しているうちに、彼女が単に頭を見せに上あがつて来たばかりでなく、今日これから鎌倉へ帰るので、そのさようならを云いにちよつと顔を出したのだと云う事を知った時、僕はつい用意の足りない躓つまずき方をしたので

ある。

「早いね。もう帰るのかい」と僕が云った。

「早かないわ、もう一晩泊ったんだから。だけどこんな頭をして帰ると何だかおかしいわね、御嫁にでも行くようで」と千代子が云った。

「まだみんな鎌倉にいるのかい」と僕が聞いた。

「ええ。なぜ」と千代子が聞き返した。

「高木さんも」と僕がまた聞いた。

高木という名前は今まで千代子も口にせず、僕も話頭に上すののほをわざと憚はばかっていたのである。が、何かの機会はずみで、平生通りいつもの打ち解けた遠慮のない気分が復活したので、その中に引き込まれ

た矢先、つい何の気もつかずに使ってしまったのである。僕はふらふらとこの問をかけて彼女の顔を見た時たちまち後悔した。

僕が煮え切らないまた捌さばけない男として彼女から一種の軽蔑けいべつを受けている事は、僕のとうに話した通りで、実を云えば二人の交際はこの黙許を認め合つた上の親しみに過ぎなかつた。その代り千代子が常に畏おそれる点を、幸さいわいにして僕はただ一つ有もつていた。

それは僕の無口である。彼女のように万事明けつ放しに腹を見せなければ気のすまない者から云うと、いつでも、しんねりむつつりと構えている僕などの態度は、けつして気に入るはずがないのだが、そこにまた妙みな見透すかせない心の存在ほのが仄めくので、彼女は昔から僕を全然知り抜く事のできない、したがって軽蔑しながら

らもどこかに恐ろしいところを有つた男として、ある意味の尊敬を払っていたのである。これは公おおやけにこそ明言しないが、向うでも腹の底で正式に認めるし、僕も冥めいめい々めいめいのうちに彼女から僕の権利として要求していた事実である。

ところが偶然高木の名前を口にした時、僕はたちまちこの尊敬を永久千代子に奪い返されたような心持がした。と云うのは、

「高木さんも」という僕の間を聞いた千代子の表情が急に化したのである。僕はそれを強あながちに勝利の表情とは認めたくない。けれども彼女の眼のうちに、今まで僕がいまだかつて彼女に見出した試しのない、一種の侮ぶべつ蔑べつが輝ひらやいたのは疑いもない事実であった。僕は予期しない瞬間に、平手ひらてで横よこ面つらを力任せに打たれた人

のごとくにぴたりと止まった。

「あなたそれほど高木さんの事が気になるの」

彼女はこう云つて、僕が両手で耳を抑おさえたいくらいな高笑いをした。僕はその時鋭い侮辱を感じた。けれどもとつさの場合何という返事も出し得なかつた。

「あなたは卑怯ひきょうだ」と彼女が次に云つた。この突然な形容詞にも僕は全く驚ろかされた。僕は、御前こそ卑怯だ、呼ばないでもの所へわざわざ人を呼びつけて、と云つてやりたかつた。けれども年弱な女に対して、向うと同じ程度の激語を使うのはまだ早過ぎると思つて我慢した。千代子もそれなり黙つた。僕はようやくにして「なぜ」というわずか二字の問をかけた。すると千代子の

濃い眉が動いた。彼女は、僕自身で僕の卑怯な意味を充分自覚していながら、たまたま他の指摘を受けると、自分の弱点を相手に隠すために、取り繕ろって空つとぼけるものとのこの問を解釈したらしい。

「なぜって、あなた自分でよく解ってるじゃありませんか」

「解らないから聞かしておくれ」と僕が云った。僕は階下に母を控えているし、感情に訴える若い女の気質もよく呑み込んだつもりでいたから、できるだけ相手の気を抜いて話を落ちつかせるために、その時の僕としては、ほとんど無理なほどの、低いかつ緩い調子を取ったのであるが、それがかえって千代子の気に入らなかったと見える。

「それが解らなければあなた馬鹿よ」

僕はおそらく平生いづもより蒼い顔あおをしたろうと思う。自分ではただ眼を千代子の上にじつと据すえた事だけを記憶している。その時何物も恐れない千代子の眼が、僕の視線と無言のうちに行き合つて、両方共しばらくそこに止とまつていた事も記憶している。

三十五

「千代ちゃんのような活潑かつぱつな人から見たら、僕見たいに引込ひっこみ思案しあんなものは無む論卑怯ひきようなんだろう。僕は思った事をすぐ口へ出したり、またはそのまま所作しよさにあらわしたりする勇氣のない、

極めてきわ因いんじゆん循ゆんな男おとこなんだから。その点で卑怯ひせつだと云うなら云わ
れても仕方がないが……」

「そんな事を誰が卑怯だと云うもんですか」

「しかし軽蔑けいべつはしているだろう。僕はちゃんと知ってる」

「あなたこそあたしを軽蔑けいべつしているじゃありませんか。あたしの
方がよっぽどよく知ってるわ」

僕はことさらに彼女のこの言葉を肯定する必要を認めなかつた
から、わざと返事を控えた。

「あなたはあたしを学問がくもんのない、理窟りくつの解らない、取るに足らな
い女だと思つて、腹の中で馬鹿ばかにし切きつてゐるんです」

「それは御前ごぜんが僕をぐずと見縊みくびつてゐるのと同じ事だよ。僕は御前

から卑怯と云われても構わないつもりだが、いやしくも徳義上の意味で卑怯というなら、そりや御前の方が間違っている。僕は少なくとも千代ちゃんに關係ある事柄について、道德上卑怯なふるまいをした覚おぼえはないはずだ。ぐずとか煮え切らないとかいうべきところに、卑怯という言葉を使われては、何だか道義的勇氣を欠いた——というより、徳義を解しない下劣な人物のように聞えてはなはだ心持が悪いから訂正して貰いたい。それとも今いった意味で、僕が何か千代ちゃんに対してすまない事でもしたのなら遠慮なく話して貰おう」

「じや卑怯の意味を話して上げます」と云つて千代子は泣き出した。僕はこれまで千代子を自分より強い女と認めていた。けれど

も彼女の強さは単に優しい一閃から出た女気の凝り塊りとのみ解
釈していた。ところが今僕の前に現われた彼女は、ただ勝気に充
ちただけの、世間にありふれた、俗っぽい婦人としか見えなかつ
た。僕は心を動かすところなく、彼女の涙の間からいかなる説明
が出るだろうと待ち設けた。彼女の唇を洩れるものは、自己の体
面を飾る強弁よりほかに何もあるはずがないと、僕は固く信じて
いたからである。彼女は濡れた睫毛を二三度繁叩いた。

「あなたはあたしを御転婆の馬鹿だと思つて始終冷笑している
んです。あなたはあたしを……愛していないんです。つまりあな
たはあたしと結婚なさる気が……」

「そりゃ千代ちゃんの方だつて……」

「まあ御聞きなさい。そんな事は御互だと云うんでしよう。そんならそれで宜うござんす。何も貰つて下さいとは云やしません。ただなぜ愛してもいず、細君にもしようと思つていないあたしに對して……」

彼女はここへ来て急に口籠つた。不敏な僕はその後へ何が出て来るのか、まだ覺れなかつた。「御前まへに對して」と半ば彼女を促うなががすように問をかけた。彼女は突然物を衝つき破つた風に、「なぜ嫉妬しつとなさるんです」と云い切つて、前よりは劇はげしく泣き出した。僕はさつと血が顔のほに上る時の熱ほてりを両方ほおの頬ほおに感じた。彼女はほとんどそれを注意ちやういしないかのごとくに見えた。

「あなたは卑怯ひきようです、徳義的に卑怯ひきようです。あたしが叔母さんと

あなたを鎌倉へ招待した料簡りょうけんさえあなたはすでに疑うたぐつていらつしやる。それがすでに卑怯ひせつです。が、それは問題ひとじゃありません。あなたは他の招待ひとに応じておきながら、なぜ平生ふだんのように愉快ひとにして下さる事ができないんです。あたしはあなたを招待したために恥かを搔かいたも同じ事です。あなたはあたしの宅うちの客に侮辱うぶを与えた結果、あたしにも侮辱うぶを与えています」

「侮辱うぶを与えた覚はない」

「あります。言葉や仕打はどうでも構かまわないんです。あなたの態度が侮辱うぶを与えているんです。態度が与えていないでも、あなたの心が与えているんです」

「そんな立ち入った批評を受ける義務は僕ぼくにないよ」

「男は卑怯だから、そう云う下らない挨拶あいさつができるんです。高木さんは紳士だからあなたを容れる雅量みやうりやうがいくらでもあるのに、あなたは高木さんを容れる事がけつしてできない。卑怯だからです」

松本の話

一

それから市蔵と千代子との間がどうなったか僕は知らない。別

にどうもならないんだろう。少なくとも傍はたで見ていると、二人の
関係は昔から今こんにち日に至るまで全く変らないようだ。二人に聞け
ばいろいろな事を云うだろうが、それはその時限りの気分に制せ
られて、まことしやかに前後に通じない嘘うそを、永久の価値あるご
とく話すのだと思えば間違ない。僕はそう信じている。

あの事件ならその当時僕も聞かされた。しかも両方から聞かさ
れた。あれは誤解でも何でもなし。両方でそう信じているので、
そうしてその信じ方に両方とも無理がないのだから、極きわめてもつ
ともな衝突と云わなければならぬ。したがって夫婦になろうが、
友達として暮らそうが、あの衝突だけはとうてい免まぬかれる事ので
きない、まあ二人の持つて生れた、因果いんがと見るよりほかに仕方が

なからう。ところが不幸にも二人はある意味で密接に引きつけられて
いる。しかもその引きつけられ方がまた傍はたのものにどうする
権威もない宿命の力で支配されているんだから恐ろしい。取り澄
ました警句を用いると、彼らは離れるために合い、合うために離
れると云った風の気の毒な一いっつい対を形づくっている。こう云つて
君に解るかどうかわからないが、彼らが夫婦になると、不幸を醸かもす
目的で夫婦になったと同様の結果に陥おちいるし、また夫婦にならな
いと不幸を続ける精神で夫婦にならないのと扱えらぶところのない不
満足を感じるのである。だから二人の運命はただ成なり行ゆきに任せて、
自然の手で直接に発展させて貰もらうのが一番上策だと思う。君だの
僕だのが何のかのと要いらぬ世話を焼くのはかえって当人達のため

に好くあるまい。僕は知つての通り、市蔵から見ても千代子から見ても他人ではない。ことに須永すながの姉からは、二人の身分について今まで頼まれたり相談を受けたりした例ためしは何度もある。けれども天の手際てぎわでうま行く行かないものを、どうして僕の力で纏まとめる事ができよう。つまり姉は無理な夢を自分一人で見ているのである。

須永の姉も田口の姉も、僕と市蔵の性質が余りよく似ているので驚ろおどろいている。僕自身もどうしてこんな変り者が親類に二人揃そろつてできたのだろうかと考えるには不思議に思う。須永の姉の料りょう簡けんでは、市蔵の今こんにち日は全く僕の感化を受けた結果に過ぎないと見ているらしい。僕が姉の気に入らない点をいくらでも有もつている内で、最も彼女を不愉快にするものは、不明なる僕のわが甥おい

に及ぼしたと認められているこの悪い影響である。僕は僕の市蔵に對する今日までの態度に顧みて、この非難をもつともだと肯ずる。それがために市蔵を田口家から疎隔したという不服もついでに承認して差支ない。ただ彼ら姉二人が僕と市蔵とを、同じ型からでき上った偏窟人のように見倣して、同じ眉を僕らの上に等しく擧めるのは疑もなく誤っている。

市蔵という男は世の中と接触するたびに内へとぐるを捲き込む性質である。だから一つ刺戟を受けると、その刺戟がそれからそれへと廻転して、だんだん深く細かく心の奥に喰い込んで行く。そうしてどこまで喰い込んで行っても際限を知らない同じ作用が連続して、彼を苦しめる。しまいにはどうかしてこの内面の活動

から逃のがれたいと祈るくらいに気を悩ますのだけれども、自分の力ではいかんともすべからざる呪のろいのごとくに引つ張られて行く。

そうしていつかこの努力のために斃たおれなければならぬ、たった

一人で斃れなければならぬという怖おそれを抱いだくようになる。そう

して気きちが狂がいのように疲れる。これが市蔵の命めいこん根よこたに横よこたわる一大不

幸である。この不幸を転さじて幸さいわいとするには、内へ内へと向く彼の

命の方向を逆にして、外へとぐるを捲まき出させるよりほかに仕方

がない。外にある物を頭へ運び込むために眼を使う代りに、頭で

外にある物を眺ながめる心持で眼を使うようにしなければならぬ。

天下にたった一つで好いから、自分の心を奪い取るような偉いも

のか、美うつくしいものか、優やさしいものか、を見出さなければならぬ

い。一口に云えば、もつと浮氣うわきにならなければならぬ。市蔵は始め浮氣を軽蔑けいべつしてかかった。今はその浮氣を渴望している。彼は自己の幸福のために、どうかして翩へん々ぺんたる軽薄才子になりたいたいと心しんから神に念じているのである。軽薄に浮かれ得るよりほかに彼を救う途みちは天下に一つもない事を、彼は、僕が彼に忠告する前に、すでに承知していた。けれども実行はいまだにできないでもがいている。

二

僕はこういう市蔵を仕立て上げた責任者として親類のものから

暗あんに恨うらまれてゐるが、僕自身もその点については疚やましいところが大きいにあるのだから仕方がない。僕はつまり性格に應じて人を導すべく術すべを心得なかつたのである。ただ自分の好尚こうしようを移せるだけ市蔵の上に移せばそれで充分だという無分別から、勝手しだいに若いものの柔らかい精神を動かして来たのが、すべての禍わざわいの本になつたらしい。僕がこの過失に気がついたので今から二三年前である。しかし気がついた時はもう遅かつた。僕はただなす能力のない手を拱こまぬいて、心の中うちで嘆息しただけであつた。

事実を一言いちごんでいうと、僕の今やつてゐるような生活は、僕に最も適當なので、市蔵にはけつして向かないのである。僕は本来から氣の移りやすくでき上つた、極きわめて安価な批評をすれば、生れ

ついでに浮気ものに過ぎない。僕の心は絶えず外に向つて流れている。だから外部の刺戟しだいでどうにでもなる。と云つただけではよく腑に落ちないかも知れないが、市蔵は在来の社会を教育するために生れた男で、僕は通俗な世間から教育されに出た人間なのである。僕がこのくらい好い年をしながら、まだ大變若いところがあるのに引き更えて、市蔵は高等学校時代からすでに老成していた。彼は社会を考える種に使うけれども、僕は社会の考えにこつちから乗り移つて行くだけである。そこに彼の長所があり、かねて彼の不幸が潜んでいる。そこに僕の短所があり、また僕の幸福が宿っている。僕は茶の湯をやれば静かな心持になり、骨董を捻くれば寂びた心持になる。そのほか寄席、芝居、相撲、

すべてその時々^の心持になれる。その結果あまり眼前の事物に心を奪われ過ぎるので、自然に己^{おのれ}なき空疎な感に打たれざるを得ない。だからこんな超然生活を営んで強いて自我を押し立てようとするのである。ところが市蔵は自我よりほかに当初から何物を有^もっていない男である。彼の欠点を補なう——というより、彼の不幸を切りつめる生活の径路は、ただ内に潜^{もぐ}り込まないで外に応ずるよりほかに仕方がないのである。しかるに彼を幸福にし得るその唯一の策を、僕は間接に彼から奪ってしまった。親類が恨^{うら}むのはもつともである。僕は本人から恨まれないのをまだしもの仕合せと思つているくらいである。

今からたしか一年ぐらい前の話だと思ふ。何しろ市蔵がまだ学

校を出ない時の話だが、ある日偶然やつて来て、ちよつと挨拶をしたぎりすぐどこかへ見えなくなった事がある。その時僕はあ
る人に頼まれて、書齋で日本の活いけばな花の歴史を調べていた。僕は
調べものの方に気を取られて、彼の顔を出した時、やあとただふ
り返っただけであつたが、それでも彼の血色がはなはだ勝すぐれない
のを苦にして、仕事の区切がつくや否や彼を探しに書齋を出た。
彼は妻さいとも仲が善よかつたので、あるいは茶の間で話でもしている
事かと思つたら、そこにも姿は見えなかつた。妻に聞くと子供の
部屋だろうというので、縁伝いに戸ドアを開けると、彼は咲子の机の
前に坐すわつて、女の雑誌の口絵に出ている、ある美人の写真を眺め
ていた。その時彼は僕を顧かえりみて、今こういう美人を発見して、先さ

刻つきから十分ばかり相對しているところだと告げた。彼はその顔が眼の前にある間、頭の中の苦痛を忘れて自おのずから愉快になるのだそうである。僕はさっそくどこの何者の令嬢かと尋ねた。すると不思議にも彼は写真の下に書いてある女の名前をまだ読まずにいた。僕は彼を迂闊うかつだと云った。それほど気に入った顔ならなぜ名前から先に頭に入れないかと尋ねた。時と場合によれば、細君として申し受ける事も不可能でないと僕は思ったからである。しかるに彼はまた何の必要があつて姓名や住所を記憶するかと云った風の眼めづかい使をして僕の注意を怪しんだ。

つまり僕は飽あくまでも写真を実物の代表として眺ながめ、彼は写真をただの写真正として眺めていたのである。もし写真の背後に、本

当の位置や身分や教育や性情がつけ加わって、紙の上の肖像を活かしにかかったなら、彼はかえって気に入ったその顔まで併せて打ち棄ててしまったかも知れない。これが市蔵の僕と根本的に違うところである。

三

市蔵の卒業する二三カ月前、たしか去年の四月頃だったろうと思う。僕は彼の母から彼の結婚に関して、今までにない長時間の相談を受けた。姉の意思は固もとより田口の姉嬢を彼の嫁として迎えたいという単純にしてかつ頑固がんこなものであった。僕は女に理窟りくつを

聞かせるのを、男の恥のように思う癖があるので、むずかしい事はなるべく控えたが、何しろこういう問題について、できるだけ本人の自由を許さないのは親の義務に背くのも同然だという意味を、昔風の彼女の腑ふに落ちるように砕いて説明した。姉は御承知の通り極めて穏おだやかな女ではあるが、いざとなると同じ意見を何度でもくり返して憚はばからぬ婦人に共通な特性を一人前以上に具そなえていた。僕は彼女の執しつ拗ようを悪にくむよりは、その根氣の好過よすぎるところにかえって妙な憐あわれみを催もよおした。それで、今親類中に、市蔵の尊敬しているものは僕よりほかにないのだから、ともかくも一遍呼び寄せてとくと話して見てくれぬかという彼女の請こいを快よく引受けた。

僕がこの目的を果す^{はた}ために市蔵とこの座敷で会見を遂^とげたのは、それから四日目の日曜の朝だと記憶する。彼は卒業試験間近の多忙を目の前に控えながら座に着いて、何試験なんかどうなつたつて構やしませんかと苦笑した。彼の説明によると、かねてその話は彼の母から何度も聞かされて、何度も決答をくり延ばした陳腐^{ちんぷ}なものであつた。もつとも彼のそれに対する態度は、問題の陳腐と反比例にすこぶる切なさそうに見えた。彼は最後に母から口説^{くど}かれた時、卒業の上、どうとも解決するから、それまで待つて呉^くれろと母に頼んでおいたのだそうである。それをまだ試験も済まない先から僕に呼びつけられたので、多少迷惑らしく見えたばかりか、年寄は気が短かくって困ると言葉に出してまで訴えた。僕

ももつともだと思つた。

僕の推測では、彼が学校を出るまでとかくの決答を延ばしたのは、そのうちに千代子の縁談が、自分よりは適当な候補者の上に纏まといつくに違ないと勘定かんていして、直接に母を失望させる代りに、周圀の事情が母の意思を翻ひるがえさせるため自然と彼女に圧迫を加えて来るのを待つ一種の逃避手段に過ぎないと思われた。僕は市蔵にそうじゃ無いかと聞いた。市蔵はそうだと答えた。僕は彼にどうしても母を満足させる気はないかと尋ねた。彼は何事によらず母を満足させたいのは山々であると答えた。けれども千代子を貰もらおうとはけつして云わなかつた。意地づくで貰わないのかと聞いたら、あるいはそうかも知れないと云い切つた。もし田口がやつて

も好いと云い、千代子が来ても好いと云つたらどうだと念を押し
たら、市蔵は返事をしらずに黙つて僕の顔を眺^{なが}めていた。僕は彼の
この顔を見ると、けつして話を先へ進める気になれないのである。
畏^{いふ}怖^ふという^ぎと仰^{よう}山^{さん}すぎるし、同情という^{あわ}とまるで憐^{あわ}れつぽく
聞こえるし、この顔から受ける僕の心持は、何と云つていかほ
とんど分らないが、永久に相手を諦^{あき}らめてしまわなければならな
い絶望に、ある凄^{すこ}味^みと優^{やさ}し味^みをつけ加えた特殊の表情であつた。
市蔵はしばらくして自分はなぜこう人に嫌^{きら}われるんだらうと突
然意外な述懐をした。僕はその時ならないのと平生の市蔵に似合
しからないのとで驚ろかされた。なぜそんな愚痴^{ぐち}を零^{こぼ}すのかと窘^{たし}
なめるような調子で反問を加えた。

「愚痴じやありません。事実だから云うのです」

「じや誰が御前を嫌っているかい」

「現にそういう叔父さんからして僕を嫌っているじやありませんか」

僕は再び驚ろかされた。あまり不思議だから二三度押問答の末推測して見ると、僕が彼に特有な一種の表情に支配されて話の進行を停止した時の態度を、全然彼に対する嫌悪けんおの念から出たと受けているらしかった。僕は極力彼の誤解を打破しに掛った。

「おれが何で御前を悪にくむ必要があるかね。子供の時からの関係でも知れているじやないか。馬鹿を云いなさんな」

市蔵は叱られて激した様子もなくますます蒼あおい顔をして僕を見

つめた。僕は燐火りんかの前に坐すわっているような心持がした。

四

「おれは御前の叔父だよ。どこの国に甥おいを憎にくむ叔父があるかい」
市蔵はこの言葉を聞くや否やたちまち薄くちびるい唇を反そらして淋さみしく笑った。僕はその淋しみの裏に、奥深い軽侮すくの色を透すかし見た。自白するが、彼は理解の上において僕よりも優すぐれた頭の所有者である。僕は百もそれを承知でいた。だから彼と接触するときには、彼から馬鹿にされるような愚ぐをなるべく慎んで外に出さない用心おこたを怠おこたらなかつた。けれども時々は、つい年長者の傲おごる心から、親

しみの強い彼を眼下に見下して、浅薄と心付ながら、その場限りの無意味にもつたいをつけた訓戒などを与える折も無いではなかつた。賢かしい彼は僕に恥を搔かかせるために、自分の優越を利用するほど、品位を欠いた所作しよさをあえてし得ないのであるが、僕の方ではその都度つど彼に対するこつちの相場が下落して行くような屈辱を感じるのが例であつた。僕はすぐ自分の言葉を訂正しにかかつた。

「そりや広い世の中だから、敵かたきど同志どうしの親子もあるだろうし、命あやを危あやめ合う夫婦もいないとは限らないさ。しかしまあ一般に云えば、兄弟とか叔父甥とかの名で繋つながつている以上は、繋つながついてるだけの親しみはどこかにあろうじやないか。御前は相応の教育

もあり、相応の頭もある癖に、何だか妙に一種の癖ひがみがあるよ。それが御前の弱点だ。是非直さなくつちやいけない。傍はたから見ても不愉快だ」

「だから叔父さんまで嫌きらつていると云うのです」

僕は返事に窮した。自分で気のつかない自分の矛盾を今市蔵から指摘されたような心持もした。

「僻ひがみさえさらりと棄すててしまえば何でもないじゃないか」と僕はさも事もなげに云つて退のけた。

「僕ひがに僻ががあるでしょうか」と市蔵は落ちついて聞いた。

「あるよ」と僕は考えずに答えた。

「どういうところが僻ひがんでいるでしょう。判はつきり然聞かして下さい」

「どういふところが、——あるよ。あるからあると云うんだよ」

「じゃそういう弱点があるとして、その弱点はどこから出たんでしよう」

「そりや自分の事だから、少し自分で考えて見たらよかろう」

「あなたは不親切だ」と市蔵が思い切った沈痛な調子で云った。

僕はまずその調子に度を失^どつた。次に彼の眼の色を見て萎縮^{いしゆく}した。その眼はいかにも恨めし^{うら}そうに僕の顔を見つめていた。僕は彼の前に一言の挨拶^{あいさつ}さえする勇気を振り起し得なかつた。

「僕はあなたに云われない先から考えていたのです。おつしやるまでもなく自分の事だから考えていたのです。誰も教えてくれ手

がないから独りひとりで考えていたのです。僕は毎日毎夜考えました。余り考え過ぎて頭も身体からだも続かなくなるまで考えたのです。それでも分らないからあなたに聞いたのです。あなたは自分から僕の叔父だと明言していらつしやる。それで叔父だから他人より親切だと云われる。しかし今の御言葉はあなたの口から出たにもかかわらず、他人より冷刻なものとしか僕には聞こえませんでした」

僕は頬ほおを伝わって流れる彼の涙を見た。幼少の時から馴染なじんで今日こんにちに及んだ彼と僕との間に、こんな光景シーンはいまだかつて一回も起らなかつた事を僕は君に明言しておきたい。したがってこの昂こうふん奮した青年をどう取り扱っていいかの心得が、僕にまるで無かつた事もついでに断っておきたい。僕はただ茫然ぼうぜんとして手を

拱こまぬいていた。市蔵はまた僕の態度などを眼中において、自分の言葉を調節する余裕を有もたなかつた。

「僕は僻ひがんでいるでしょうか。たしかに僻ひがんでいるでしょう。あなたがおつしやらないでも、よく知っているつもりです。僕は僻ひがんでいます。僕はあなたからそんな注意を受けないでも、よく知っています。僕はただどうしてこうなったかその訳が知りたいのです。いいえ母でも、田口の叔母でも、あなたでも、みんなよくその訳を知っているのです。ただ僕だけが知らないのです。ただ僕だけに知らせないのです。僕は世の中の人間の中うちであなたを一番信用しているから聞いたのです。あなたはそれを残酷に拒絶した。僕はこれから生しょうがい涯がいの敵としてあなたを呪のろいます」

市蔵は立ち上った。僕はそのとっさの際に決心をした。そうして彼を呼びとめた。

五

僕はかつてある学者の講演を聞いた事がある。その学者は現代の日本の開化を解剖して、かかる開化の影響を受けるわれらは、
上滑りうわすべにならなければ必ず神経衰弱おちに陥おちいるにきまつていると
いう理由を、臆面おくめんなく聴衆の前に曝露ばくろした。そうして物の真相
は知らぬ内こそ知りたいものだが、いざ知つたとなると、かえつ
て知らぬが仏ほとけですましていた昔が羨うらやましくつて、今の自分を後悔

する場合も少なくはない、私の結論などもあるいはそれに似たものかも知れませんが、苦笑して壇を退しりぞいた。僕はその時市蔵の事を思い出して、こういう苦にがい真理を承うけたまわらなければならぬ我々日本人も随分気の毒なものだが、彼のようにたった一人の秘密を、攫つかもうとしては恐れ、恐れてはまた攫つかもうとする青年は一層見み惨じめに違あるまいと考えながら、腹の中で暗に同情の涙を彼のために濺そそいだ。

これは単に僕の一族内の事で、君とは全く利害の交渉を有もたない話だから、君が市蔵のためにせっかく心配してくれた親切に対する前からの行ゆきがかりさえなければ、打ち明けないはずだったが、実を云うと、市蔵の太陽は彼の生れた日からすでに曇っているの

である。

僕は誰にでも明言して憚はばからない通り、いつさいの秘密はそれを開放した時始めて自然かえに復らくちやく落らくちやく着らくちやくを見る事ができるという主義を抱いだいているので、穩便とか現状維持とかいう言葉には一般人ほど重きを置いていない。したがって今こんにち日まで自分から進んで、市蔵の運命を生れた当時に溯さかのぼつて、逆に照らしてやらなかったのは僕としてはむしろ不思議な手落と云つてもいいくらいである。今考えて見ると、僕が市蔵に呪まじわわれる間際まで、なぜこの事件を秘密にしていたものか、その意味がほとんど分らない。僕はこの秘密に風を入れたところで、彼ら母子おやこの間柄が悪くなるうとは夢にも想像し得なかつたからである。

市蔵の太陽は彼の生れた日からすでに曇つていたという僕の言葉の裏に、どんな事実が含まれているかは、彼と交りまじわの深い君の耳で聞いたたら、すでに具体的な響となつて解つていられるかも知れない。一ひとくち口でいうと、彼らは本当の母子ではないのである。なお誤解のないように一いちげん言つけ加えると、本当の母子よりも遥かに仲の好い継母まははと継子ままごなのである。彼らは血を分けて始めて成立する通俗な親子関係を軽蔑けいべつしても差支さしつかえないくらい、情愛の糸で離れられないように、自然からしつかり括くくりつけられている。どんな魔の振る斧おのの刃はでもこの糸を絶ち切る訳に行かないのだから、どんな秘密を打ち明けても怖こわがる必要はさらになのである。それなのに姉は非常に恐れていた。市蔵も非常に恐れていた。姉は

秘密を手に握ったまま、市蔵は秘密を手に握らせられるだろうと待ち受けたまま、二人して非常に恐れていた。僕はとうとう彼の恐れるものの正体を取り出して、彼の前に他意なく並べてやったのである。

僕はその時の問答を一々くり返して今君に告げる勇氣に乏しい。僕には固^{もと}よりそれほどの大事件とも始から見えず、またなるべく平気を装う必要から、つまり何でもない事のように話したのだが、市蔵はそれを命がけの報知として、必死の緊張の下^{もと}に受けたからである。ただ前の続きとして、事実だけを一口に約^{つづ}めて云うと、彼は姉の子でなくって、小間使の腹から生れたのである。僕自身の家に起った事でない上に、二十五年以上も経^たった昔の話だから、

僕も詳しい顛末てんまつは知ろうはずがないが、何しろその小間使が須永の種を宿した時、姉は相当の金をやって彼女に暇を取らしたのだそうである。それから宿さがへ下った妊婦が男の子を生んだという報知を待つて、また子供だけ引き取つて表おもてむき向自分の子として養育したのだそうである。これは姉が須永に対する義理からでもあろうが、一つは自分に子のできないのを苦しめていた矢先だから、本気に吾子として愛いづくしむ考も無論手伝つたに違ない。實際彼らは君の見るごとく、また吾われわれ々の見るごとく、最も親しい親子として今こんにち日まで発展して来たのだから、御互に事情を明あかし合つたところで毫ごうも差支さしつかえの起る訳がない。僕に云わせると、世間にあるりがちな反そりの合あわない本当の親子よりもどのくらい肩身が広いか分

りやしない。二人だつて、そうと知つた上で、今までの睦^{むつ}まじさを回顧した時の方が、どんなに愉快が多いだろう。少なくとも僕ならそうだ。それで僕は市蔵のために特にこの美くしい点を力のあらん限り^{いろど}彩^{おこた}る事を怠^{おこた}らなかつた。

六

「おれはそう思うんだ。だから少しも隠す必要を認めていない。御前だつて健全な精神を持つているなら、おれと同じように思うべきはずじゃないか。もしそう思う事ができないというなら、それがすなわち御前の僻^{ひが}みだ。解^{ひが}つたかな」

「解りました。善く解りました」と市蔵が答えた。僕は「解つたらそれで好い、もうその問題についてかれこれというのは止しにしようよ」と云つた。

「もう止します。もうけつしてこの事について、あなたを煩わづらす日は来ないでしょう。なるほどあなたのおつしやる通り僕は僻ひんだ解釈ばかりしていたのです。僕はあなたの御話を聞くまでは非常に怖こわかったです。胸の肉が縮ちぢまるほど怖こわかったです。けれども御話を聞いてすべてが明白になったら、かえつて安心して氣が楽になりました。もう怖い事も不安な事ありません。その代り何だか急に心細くなりました。淋さびしいです。世の中にたった一人立っているような氣がします」

「だって御母さんは元の通りの御母さんなんだよ。おれだって今までのおれだよ。誰も御前に対して変るものはありません。おれだって今よ。神経を起しちやいけない」

「神経は起きなくつても淋しいんだから仕方ありません。僕はこれから宅へ帰つて母の顔を見るときつと泣くにきまつています。今からその時の涙を予想しても淋しくつてたまりません」

「御母さんには黙っている方がよからう」

「無論話しやしません。話したら母がどんな苦しい顔をするか分りません」

二人は黙然として相對した。僕は手持無沙汰に煙草盆の灰吹を叩いた。市蔵はうつむいて袴の膝を見つめていた。やがて

彼は淋^{さみ}しい顔を上げた。

「もう一つ伺っておきたい事がありますが、聞いて下さいますか」
「おれの知っている事なら何でも話して上げる」

「僕を生んだ母は今どこにいるんです」

彼の実の母は、彼を生むと間もなく死んでしまったのである。

それは産後の肥立^{ひだち}が悪かったせいだとも云い、または別の病^{やまい}だと

も聞いているが、これも詳しい話をしてやるほどの材料に欠乏し

た僕の記憶では、とうてい餓^うえた彼の眼を静めるに足りなかった。

彼の生母^{せいぼ}の最後の運命に関する僕の話は、わずか二三分で尽きて

しまった。彼は遺憾^{いかん}な顔をして彼女の名前を聞いた。幸^{さいわい}にして僕

は御弓^{おゆみ}という古風な名を忘れずにいた。彼は次に死んだ時の彼女は

の年齢としを問うた。僕はその点に関して、何という確しかとした知識をも有もっていないかった。彼は最後に、彼の宅うちに奉公していた時分の彼女に会った事があるかと尋ねた。僕はあると答えた。彼はどんな女だと聞き返した。気の毒にも僕の記憶はすこぶる朦朧もうろうとしていた。事実僕はその当時十五六の少年に過ぎなかつたのである。

「何でも島田に結いつてた事がある」

このくらいよりほかに要領を得た返事は一つもできないので、僕もはなはだ残念に思った。市蔵はようやく諦あきらめたという眼つきをして、一番うましまいに、「じゃせめて寺だけ教えてくれませんか。母がどこへ埋うまっているんだか、それだけでも知っておきたいと思おもいますから」と云った。けれども御弓の菩提所ぼだいじを僕が知ろう

はずがなかった。僕は呻吟しんぎんしながら、已やむを得なければ姉に聞くよりほかに仕方あるまいと答えた。

「御母さんよりほかに知ってるものは無いでしょうか」

「まああるまいね」

「じや分らないでもよござんす」

僕は市蔵に対して気の毒なようなまたすまないような心持がした。彼はしばらく庭の方を向いて、麗うらちかな日脚ひあしの中に咲く大きな椿つばきを眺ながめていたが、やがて視線をもとに戻した。

「御母さんが是非千代ちゃんを貰えというのも、やっぱり血統上の考えから、身縁みよりのものを僕の嫁にしたいという意味なんですよ
うね」

「全くそこだ。ほかに何にもないんだ」

市蔵はそれでは貰おうとも云わなかった。僕もそれなら貰うかとも聞かなかつた。

七

この会見は僕にとって美しい経験の一つであつた。双方で腹蔵なくすべてを打ち明け合う事ができたという点において、いまだに僕の貧しい過去を飾っている。相手の市蔵から見ても、あるいは生れて始めての慰藉いしやではなかつたかと思う。とにかく彼が帰つたあとの僕の頭には、善い功德くどくを施こしたという愉快的感じが

残ったのである。

「万事おれが引き受けてやるから心配しないがいい」

僕は彼を玄關に送り出しながら、最後にこういう言葉を彼の背に暖かくかけてやった。その代り姉に会見の結果を報告する時ははなはだまずかった。已^{やむ}を得ないから、卒業して頭に暇さえできれば、はつきりどうにか片をつけると云っているから、それまで待つが好かろう、今かれこれ突つくのは試験の邪魔になるだけだからと、姉が聞いても無理のないところで、ひとまず宥^{なだ}めておいた。

僕は同時に事情を田口に話して、なるべく市蔵の卒業前に千代子の縁談が運ぶように工夫^{くふう}した。委細を聞いた田口の口振は平生

の通り如才なくかつ無雑作むぞうさであつた。彼は僕の注意がなくなつても、その辺は心得ているつもりだと答えた。

「けれども必竟は本人のために嫁入かたづけるんで、（そう申しちや角が立つが、）姉さんや市蔵べんぎの便宜のために、千代子の結婚を無理にくり上げたり、くり延べたりする訳にも行かないものだから」

「ごもつともだ」と僕は承認せざるを得なかつた。僕は元來田口家と親類並つきあいの交際つきあいをしているにはいるが、その実彼らの娘の縁談に、進んで口を出したこともなければ、また向うから相談を受けた例ためしも有たないのである。それで今日こんにちまで千代子にどんな候補者があつたのか、間接にさえほとんどその噂うわさを耳にしなかつた。ただ前の年鎌倉の避暑地とかで市蔵が会つて、気を悪くしたとい

う高木だけは、市蔵からも千代子からも名前を教えられて覚えていた。僕は突然ながら田口にその男はどうなつたかと尋ねた。田口は愛嬌あいきょうらしく笑つて、高木は始めから候補者として打つて出たのではないと告げた。けれども相当の身分と教育があつて独身の男なら、誰でも候補者になり得る権利は有つているのだから、候補者でないとはけつして断言できないとも告げた。この曖昧あいまいな男の事を僕はなお委くわしく聞いて見て、彼が今上シャンハイ海にいる事を確かめた。上海にいるけれどもいつ帰るか分らないという事も確かめた。彼と千代子との間柄はその後何らの発展も見ないが、信書の往復はいまだに絶えない、そうしてその信書はきつと父母ふぼが眼を通した上で本人の手に落つるといふ条件つきの往復である

という事まで確めた。僕は一も二もなく、千代子には其男それが好いじやないかと云った。田口はまだどこかに慾があるのか、または別に考かんがえを有っているのか、そうするつもりだとは明言しなかつた。高木のいかなる人物かをまるで解しない僕が、それ以上勧める権利もないから、僕はついそのままにして引き取つた。

僕と市蔵はその後久しく会わなかつた。久しくと云つたところでわずか一カ月半ばかりの時日に過ぎないのだが、僕には卒業試験を眼の前に控えながら、家庭問題に屈くつたく托しなければならぬ彼の事が非常に気にかかつた。僕はそつと姉を訪ねてそれとなく彼の近況を探つて見た。姉は平気で、何でもだいぶ忙がしそうだよ、卒業するんだからそのはずさねと云つて澄ましていた。僕は

それでも不安心だったから、ある日一時間の夕を僕と会食するた
めに割かせて、彼の家の近所の洋食店で共に晚餐を食いながら、
ひそかに彼の様子を窺った。彼は平生の通り落ちついていて。な
に試験なんかどうにかこうにかやつつけまさあと受合ったところ
に、満更の虚勢も見えなかつた。大丈夫かいと念を押しした時、
彼は急に情なそうな顔をして、人間の頭は思ったより堅固にでき
ているもんですね、実は僕自身も怖くつてたまらないんですが、
不思議にまだ壊れません、この様子ならまだ当分は使えるでしょ
うと云つた。冗談らしくもあり、また真面目らしくもあるこ
の言葉が、妙に憐れ深い感じを僕に与えた。

八

若葉の時節が過ぎて、湯上りの単衣の胸に、団扇の風を入れたく思うある日、市蔵がまたふらりとやって来た。彼の顔を見るや否いなや僕が第一にかけた言葉は、試験はどうだったという一語であつた。彼は昨日きのうようやくすんだと答えた。そうして明日あすからちよつと旅行して来るつもりだから暇いとまご乞こに來たと告げた。僕は成績もまだ分らないのに、遠く走る彼の心理状態を疑つてまた多少の不安を感じた。彼は京都附近から須磨明石を経て、ことに因よると、広島辺へんまで行きたいという希望を述べた。僕はその旅行の比較的大袈裟おおげさなのに驚ろいた。及第とさえきまつていればそれで

も好かろうがと間接に不賛成の意を仄めかして見ると、彼は試験の結果などには存外冷淡な挨拶をした。そんな事に気を遣う叔父さんこそ平生にも似合わしからんじやありませんかと云つて、ほとんど相手にならなかつた。話しているうちに、僕は彼の思い立が及落の成績に係のない別方面の動機から萌しているという事を発見した。

「実はあの事件以来妙に頭を使うので、近頃では落ちついて書齋に坐っている事が困難になりましたね。どうしても旅行が必要なんですから、まあ試験を途中で已めなかつたのが感心だぐらいに賞めて許して下さい」

「そりや御前の金で御前の行きたい所へ行くのだから少しも差

支かえはないさ。考えて見れば少しは飛び歩いて気を換えるのも好
かろう。行つて来るがいい」

「ええ」と云つて市蔵はやや満足らしい顔をしたが、「実は大き
な声で話すのも気の毒でもつたいたいんですが、叔父さんにあの
話を聞いてから以後は、母の顔を見るたんびに、変な心持になつ
てたまらないんです」とつけ足した。

「不愉快になるのか」と僕はむしろおごそ厳かに聞いた。

「いいえ、ただ気の毒なんです。始めは淋さびしくつて仕方がなかつ
たのが、だんだんだんだん気の毒に変化して来たのです。実はこ
こだけの話ですけれども、近頃では母の顔を朝夕見るのが苦痛な
んです。今度の旅行こんだだつて、かねてから卒業したら母に京大阪と

宮島を見物させてやりたいと思つていたのだから、昔の僕なら供をする気で留守を叔父さんにでも頼みに出かけて来るところなんです、今云つたような訳で、関係がまるで逆になつたもんだから、少しでも母の傍を離れたらという気ばかりして」

「困るね、そう変になつちやあ」

「僕は離れたらまたきつと母が恋しくなるだろうと思ふんですが、どうでしょう。そう旨くはいかないもんでしょうか」

市蔵はさも懸念らしくこういう問をかけた。彼より経験に富んだ年長者をもつて自任する僕にも、この点に関する彼の未来はほとんど想像できなかつた。僕はただ自分に信念がなくなつて、わが心の事を他に尋ねて安心したいと願う彼の胸の裏を憐れに思つた。

上部うわべはいかにも優しそうに見えて、実際は極きわめて意地の強くでき上った彼が、こんな弱い音ねを出すのは、ほとんど例ためしのない事だったからである。僕は僕の力の及ぶ限り彼の心に保証を与えた。

「そんな心配はするだけ損だよ。おれが受合つてやる。大丈夫だから遊んで来るが好いい。御前の御母さんはおれの姉だ。しかもおれよりも学問をしないだけに、よほど純良にできている、誰からも敬愛されべき婦人だ。あの姉と君のような情愛のある子がどうして離れつ切りに離れられるものか。大丈夫だから安心するが好いい」

市蔵は僕の言葉を聞いて実際安心したらしく見えた。僕もやや安心した。けれども一方では、このくらい根のない慰藉いしやの言葉が、

明^{めい}晰^{せき}な頭腦を有^もつた市蔵に、これほどの影響を与えたとすれば、それは彼の神経がどこか調子を失なっているためではなからうかという疑も起つた。僕は突然極端の出来事を予想して、一人身の旅行を危ぶみ始めた。

「おれもいつしよに行こうか」

「叔父さんといつしよじゃ」と市蔵が苦笑した。

「いけないかい」

「平生^{ふだん}ならこつちから誘つても行つて貰いたいんだが、何しろいつどこへ立つんだか分らない、云わば氣の向きしだい予定の狂う旅行だから御氣の毒でね。それに僕の方でもあなたがいると束縛があつて面白くないから……」

「じや止よそう」と僕はすぐ申し出を撤回した。

九

市蔵が帰った後あとでも、しばらくは彼の事が変に気にかかった。暗い秘密を彼の頭に判で押した以上、それから出る一切の責任は、当然僕が背負しよつて立たなければならぬ気がしたからである。僕は姉に会って、彼女の様子を見もし、また市蔵の近況を聞きもしたくなった。茶の間にいた妻さいを呼んで、相談かたがた理由わけを話すと、存外物に驚ろかない妻は、あなたがあんまり余計なおしやべりをなさるからですよと云って、始めはほとんど取り合わなかつ

たが、しまいに、なんで市いっさんに間違があるもんですか、市さんは年こそ若いひとが、あなたよりよっぽど分別のある人ですもの、
独りで受合ひとつていた。

「すると市蔵の方で、かえつておれの事を心配している訳になるんだね」

「そうですとも、誰だつてあなたの懐ふところ手ばかりして、舶来ふとのパイプを銜くわえているところを見れば、心配になりますわ」

そのうち子供が学校から帰つて来て、家うちの中が急に賑にぎやかなつたので、市蔵の事はいつ忘れたぎり、夕方までとうとう思い出す暇がなかつた。そこへ姉が自分の方から突然尋ねて来た時は、僕も覚えひやず冷りとした。

姉はいつもの通り、家族の集まっている真中に坐つて、無沙汰ぶさたの詫わびやら、時候の挨拶あいさつやらを長々しく妻さいと交換していた。僕もそこに座を占めたまま動く機会を失つた。

「市蔵が明日あすから旅行するつて云うじゃありませんか」と僕は好い加減な時分に聞き出した。

「それについてね……」と姉はやや真面目まじめになつて僕の顔を見た。僕は姉の言葉を皆まで聞かずに、「なに行きたいなら行かしておやんなさい。試験で頭をさんざん使つた後あとだもの。少しは楽もさせないと身体からだの毒になるから」とあたかも市蔵の行動を弁護するように云つた。姉は固もとより同じ意見だと答えた。ただ彼の健康状態が旅行に堪たえるかどうかを氣遣きづかうだけだと告げた。最後に僕の

見るところでは大丈夫なのかと聞いた。僕は大丈夫だと答えた。

妻も大丈夫だと答えた。姉は安心というよりも、むしろ物足りない顔をした。僕は姉の使う健康という言葉が、身体に關係のない精神上の意味を有^もつているに違ないと考えて、腹の中で一種の苦痛を感じた。姉は僕の顔つきから直覺的に影響を受けたらしい心細さを額に刻^{きざ}んで、「恒^{つね}さん、先刻^{さつき}市蔵がこちらへ上つた時、何か様子の変つたところでもありやしませんでしたかい」と聞いた。

「何そんな事があるもんですか。やっぱり普通の市蔵でさあ。ねえ御仙^{おせん}」

「ええちつとも違つておいでじゃありません」

「わたしもそうかと思うけれども、何だかこの間から調子が変で

ね」

「どんななんです」

「どんなだと云われるとまた話しようもないんだが」

「全く試験のためだよ」と僕はすぐ打ち消した。

「姉さんの神経きでんですよ」と妻も口を出した。

僕は夫婦して姉を慰さめた。姉はしまいにやや納得なっとくしたら

しい顔つきをして、みんなと夕ゆうめし食を共にするまで話し込んだ。

帰る時には散歩がてら、子供を連れて電車まで見送ったが、それでも気がすまないのです、子供を先へ返して、断わる姉の傍そばに席を取ったなり、とうとう彼女の家まで来た。

僕は幸い二階にいた市蔵を姉の前に呼び出した。御母さんが御

前の事を大層心配してわざわざ矢来^{やらい}まで来たから、今おれがいろいろに云つてようやく安心させたところだと告げた。したがつて旅行に出すのは、つまり僕の責任なんだから、なるべく年寄に心配をかけないように、着いたら着いた所から、立つなら立つ所から、また逗留^{とうりゆう}するなら逗留する所から、必ず音信^{たより}を怠^{おこ}たらないようにして、いつでも用ができしだいこつちから呼び返す事のできる注意をしたら好かろうと云つた。市蔵はそのくらい面倒なら僕に注意されるまでもなくすでに心得ていると答えて、彼の母の顔を見ながら微笑した。

僕はこれで幾分か姉の心を柔らげ得たものと信じて十一時頃まで電車で矢来へ歸つて来た。

僕を迎むかえに玄関に出た妻は、待ちかねたように、どうでしたと尋ねた。僕はまあ安心だろうよと答えた。実際僕は安心したような心持だったのである。で、明あくる日は新橋へ見送りにも行かなかつた。

十

約束の音信たよりは至る所からあつた。勘かんじょう定じょうすると大抵日に一本ぐらいの割になつている。その代り多くは旅先の画端書えはがきに二三行の文句を書き込んだ簡略なものに過ぎなかつた。僕はその端書が着くたびに、まず安心したという顔つきをして、妻さいからよく笑わ

れた。一度僕がこの様子なら大丈夫らしいね、どうも御前の予言の方が適中したらしいと云った時、妻は愛想もなく、当り前ですわ、三面記事や小説見たような事が、滅多にあつてたまるもんですかと答えた。僕の妻は小説と三面記事とを同じ物のごとく見倣す女であつた。そうして両方とも嘘と信じて疑わないほど浪漫斯に縁の遠い女であつた。

端書に満足した僕は、彼の封筒入の書翰に接し出した時さらに眉を開いた。というのは、僕の恐れを抱いていた彼の手が、陰鬱な色に巻紙を染めた痕迹が、そのどこにも見出せなかつたからである。彼の状袋の中に巻き納めた文句が、彼の端書よりもいかに鮮かに、彼の変化した気分を示しているかは、実際それを

読んで見ないと分らない。ここに二三通取つてある。

彼の気分を變化するに与あずかつて効力のあつたものは京都の空氣だの宇治の水だのいろいろある中に、上かみがた方地方の人の使う言葉が、東京に育つた彼に取つては最も興味の多い刺戟しげきになつたらしい。何遍もあの辺を通過した経験のあるものから云うと馬鹿げているが、市蔵の当時の神経にはああ云う滑なめらかで静かな調子が、鎮ちんけいざい経剤以上に優しい影響を与え得たのではなからうかと思う。なに若い女の？ それは知らない。無論若い女の口から出れば効き目きめが多いだろう。市蔵も若い男の事だから、求めてそう云う所へ近づいたかも知れない。しかしここに書いてあるのは、不思議に御婆さんの例である。――

「僕はこの辺の人の言葉を聞くと微かすかな酔に身を任せたような気分になります。ある人はべたついて厭いやだと云いますが、僕はまるで反対です。厭なのは東京の言葉です。むやみに角度の多い金こんべ米糖いとうのような調子を得意になつて出します。そうして聴手ききての心を粗暴にして威張ります。僕は昨日京都から大阪へ来ました。今日朝日新聞にいる友達を尋ねたら、その友人が箕面みのおという紅葉もみじの名所へ案内してくれました。時節が時節ですから、紅葉は無論見られませんでしたが、溪川たにがわがあつて、山があつて、山の行き当りに滝があつて、大変好い所でした。友人は僕を休ませるために社の倶楽部クラブとかいう二階建の建物の中へ案内しました。そこへ這は入つて見ると、幅の広い長い土間が、豎たてに家の間口を貫ぬいてい

ました。そうしてそれがことごとく敷しきがわら瓦わらで敷きつめられてい
る模様が、何だか支那の御寺へでも行ったような沈んだ心持を僕
に与えました。この家は何でも誰かが始め別荘こしらに拵こしらえたのを、朝
日新聞で買い取って倶楽部用にしたのだとか聞きましたが、よし
別荘にせよ、瓦かわらを畳んで出来ている、この広々とした土間は何の
ためでしょう。僕はあまり妙だから友人に尋ねて見ました。とこ
ろが友人は知らんと云いました。もつともこれはどうでも構わな
い事です。ただ叔父さんがこう云う事に明らかだから、あるいは
知っておいでも知れないと思つて、ちよつと蛇足だそくに書き添えた
だけです。僕の御報知したいのは実はこの広い土間ではなかつた
のです。土間の上に下りていた御婆おばあさんが問題だったので。御

婆さんは二人いました。一人は立つて、一人は椅子いすに腰をかけて
いました。ただし両方ともくりくり坊主です。その立つている方
が、僕らが這はい入るや否いなや、友人の顔を見て挨拶あいさつをしました。そ
うして『おや御免ごめんやす。今八十六の御婆さんの頭を剃そつとるとこ
ろだすよつて。——御婆さんじつとしていなはれや、もう少しだ
けれ。——よう剃つたけれ毛は一本もありやせんよつて、何も恐
ろしい事ありやへん』と云いました。椅子に腰をかけた御婆さん
は頭を撫なでて『大きに』と礼を述べました。友人は僕を顧かえりみて野
趣があると笑いました。僕も笑いました。ただ笑っただけではあ
りません。百年も昔の人に生れたような暢のんびり気した心持がしまし
た。僕はこういう心持を御土産おみやげに東京へ持つて帰りたいと思いま

す」

僕も市蔵がこういう心持を、姉へ御土産として持って来てくれればいいがと思った。

十一

次のは明石^{あかし}から来たもので、前に比べると多少複雑なだけに、市蔵の性格をより鮮^{あざ}やかに現わしている。

「今夜ここに来ました。月が出て庭は明らかですが、僕の部屋は影になってかえって暗い心持がします。飯を食って煙草^{たばこ}を呑んで海の方を眺^{なが}めていると、——海はつい庭先にあるのです。漣^{さざなみ}さえ

打たない静かな晩だから、河縁かわべりとも池の端はたとも片のつかない渚なぎさの景色けしきなんです、そこへ涼み船が一艘そう流れて来ました。その船の形かっこう好は夜でよく分らなかつたけれども、幅の広い底の平たい、どうしても海に浮ぶものとは思えない穩おだやかな形を具そなえていました。屋根は確かあつたように覚えます。その軒から画の具で染めた提灯ちようちんがいくつもぶら下がっていました。薄い光の奥には無論人が坐すわっているようでした。三味線の音も聞こえました。けれども惣そうたい体がいかにも落ちついて、滑すべるように楽しんで僕の前を流れて行きました。僕は静かにその影を見送つて、御祖父おじいさんの若い時分の話というのを思い出しました。叔父さんは固もとより御存じでしょう、御祖父さんが昔の通人のした月見の舟ふねあそび遊あそびを實際

にやった話を。僕は母から二三度聞かされた事があります。屋根船を綾瀬川まで漕ぎ上せて、静かな月と静かな波の映り合う真中に立って、用意してある銀扇を開いたまま、夜の光の遠くへ投げるのだと云うじやありませんか。扇の要がぐるぐる廻って、地紙に塗った銀泥をきらきらさせながら水に落ちる景色は定めてみごとだろうと思います。それもただの一本なのですが、船のものかそうがかりで、ひらひらする光を投げ競う光景は想像しても凄艶です。御祖父さんは銅壺の中に酒をいっぱい入れて、その酒で徳利の爛をした後をことごとく棄てさしたほどの豪華な人だと云うから、銀扇の百本ぐらい一度に水に流しても平気なのでしょう。そう云えば、遺伝だか何だか、叔父さんにも貧乏な割

にはと云つては失礼ですが、どこかに贅ぜいたく沢なところがあるよう
ですし、あんな内気な母にも、妙に陽気な事の好きな方面が昔か
ら見えていました。ただ僕だけは、——こういうとまたあの問題
を持ち出したなど早はや合がてん点なさるかも知れませんが、僕はもうあ
の事について叔父さんの心配なさるほど屈くつ托たくしていません。もう
ですから安心して下さい。ただ僕だけはと断ことわるのはけつして苦にがい
意味で云うのではありません。僕はこの点において、叔父さんと
も母とも生れつき違っていると申したいのです。僕は比較的楽に
育った、物質的に幸福な子だから、贅ぜいたく沢と知らずに贅ぜいたく沢をして平
気でいました。着物などでも、母の注意で、人前へ出て恥かしく
ないようなものを身に着けながら、これが当然だと澄ましていま

した。けれどもそれは永く習慣に養われた結果、自分で知らない不明から出るので、一度そこに気がつく、急に不安になります。着物や食事はまあどうでもいいとして、僕はこの間ある富豪のむやみに金を使う様子を聞いて恐ろしくなつた事があります。その男は芸者はほうかん 幫間を大勢集めて、かばん 鞆の中から出したさつ 札の束を、その前でずたずたに裂いて、それを御祝儀とか称とえて、みんなにやるのだそうです。それから立派な着物を着たまま湯にはい 這入つて、あとはさんすけ 三助にくれるのだそうです。彼の乱行はまだたくさんありましたが、いずれも天を恐れない暴慢きわ 極まるもののみでした。僕はその話を聞いた時無論彼をにく 悪みました。けれども氣概に乏しい僕は、悪むよりもむしろ恐れしました。僕から彼のしよぎよう 所行を見

ると、強盜が白刃しらばの拔身を畳に突き立てて良民を脅迫おびやかしているのと同じような感じになるのです。僕は実に天とか、人道とか、もしくは神仏とかに対して申し訳がないという、真正に宗教的な意味において恐れたのです。僕はこれほど臆病な人間なのです。

驕奢きょうしや

に近づかない先から、驕奢の絶頂に達して躍り狂う人の、

一転化のちの後を想像して、怖こわくてたまらないのであります。——僕

はこんな事を考えて、静かな波の上を流れて行く涼み船を見送りながら、このくらいな程度の慰さみが人間としてちようど手頃なんだらうと思いました。僕も叔父さんから注意されたように、だんだん浮気うわきになつて行きます。賞ほめて下さい。月の差す二階の客は、神戸から遊びに来たとかで、僕の厭いやな東京語ばかり使って、

折々詩吟などをやります。その中に艶めかしい女の声も交っていました。二三分前から急におとなしくなりました。下女に聞いたらもう神戸へ帰ったのだそうです。夜もだいぶ更けましたから、僕も休みます」

十二

「昨夕も手紙を書きましたが、今日もまた今朝以来の出来事を御報知します。こう続けて叔父さんにばかり手紙を上げたら、叔父さんはきつと皮肉な薄笑いをして、あいつどこへも文をやる所がないものだから、己を得ず姉と己に對してだけ、時間を費やして

音信たよりを怠おこたらないんだと、腹の中で云うでしょう。僕も筆とを執りながら、ちよつとそう云う考えを起しました。しかし僕にもしそんな愛人ができたら、叔父さんはたとい僕から手紙もらを貰わなくても、喜こんで下さるでしょう。僕も叔父さんに音信を怠つても、その方が幸福だと思ひます。実は今朝起きて二階あがへ上つて海を見下みおろしている、そういう幸福な二人連が、磯いそづた通いに西の方へ行きました。これはことによると僕と同じ宿に泊っている御客かも知れません。女がクリーム色の洋傘こうもりを翳さして、素足に着物すその裾を少し捲まくりながら、浅い波の中を、男と並んで行く。後うしろすがた姿を、僕は羨うらやましそうに眺ながめたのです。波は非常に澄んでゐるから高い所から見下すと、陸おかに近いあたりなどは、日の照る空気の中と変りな

く何でも透すいて見えます。泳いでいる海月くらげさえ判はつきり切見えます。

宿の客が二人出て来て泳ぎ廻まわっていますが、彼らの水中でやる所よ作よが、一挙一動ことごとく手に取るように見えるので、芸としての水泳の価値が、だいぶ下落するようです。（午前七時半）

「今度は西洋人が一人水に浸つかっています。あとから若い女が出て来ました。その女が波の中に立って、二階に残っているもう一人の西洋人を呼びます。『ユー、カム、ヒヤ』と云って英語を使います。『イツト、イズ、ヴェリ、ナイス、イン、ウォーター』と云うような事をしきりに申します。その英語はなかなか達者で流り暢ゆうで羨うらやましいくらい旨うまく出ます。僕はとても及ばないと思つて感心して聞いていました。けれども英語の達者なこの女から呼

ばれた西洋人はなかなか下りて来ませんでした。女は泳げないんだか、泳ぎたくないんだか、胸から下を水に浸けたまま波の中に立っていました。すると先へ下りた方の西洋人が女の手を執つて、深い所へ連れて行こうとしました。女は身を竦めるようにして拒みました。西洋人はとうとう海の中で女を横に抱きました。女の跳ねて水を蹴る音と、その笑いながら、きやつきやつ騒ぐ声が、遠方まで響きました。（午前十時）」

「今度は下の座敷に芸者を二人連れて泊っていた客が端艇を漕ぎに出て来ました。この端艇はどこから持って来たか分りませんが、極めて小さいかつすこぶる危しいものです。客は漕いでやるからと云つて、芸者を乗せようと思いますが、芸者の方では怖いからと

断つてなかなか乗りません。しかしとうとう客の意の通りになりました。その時年の若い方が、わざわざ喫驚びつくりして見せる科しなが、よほど馬鹿らしゅうございました。端艇がそこいらを漕ぎ廻つて帰つて来ると、年上の芸者が、宿屋のすぐ裏に繋つないである和船に向つて、船頭はん、その船空あいていまつかと、大きな声で聞きました。今度は和船の中に、御馳走ごちそうを入れて、また海の上に出る相談らしいのです。見ていると、芸者が宿の下女を使つて、麦酒ビールだの水菓子だの三味線だのを船の中へ運び込ましておいて、しまいに自分達も乗りました。ところが肝かんじん、心の御客はよほど威勢のいい男で、遥はるか向うの方にまだ端艇を漕ぎ廻していました。誰も乗せ手がなかったと見えて、今度は黒くろはだか裸だかの浦の子僧を一人いけど捕

っていました。芸者はあきれた顔をして、しばらくその方を眺めていましたが、やがて根かぎりの大きな声で、阿呆と呼びました。すると阿呆と呼ばれた客が端艇をこつちへ漕ぎ戻して来ました。

僕は面白い芸者でまた面白い客だと思いました。（午前十一時）

「僕がこんなくだくだしい事を物珍らしそうに報道したら、叔父さんは物数奇だと云つて定めし苦笑なさるでしょう。しかしこれは旅行の御蔭で僕が改良した証拠なのです。僕は自由な空気と共に往来する事を始めて覚えたのです。こんなつまらない話を一々書く面倒を厭わなくなつたのも、つまりは考えずに観るからではないでしょうか。考えずに観るのが、今の僕には一番薬だと思えます。わずかの旅行で、僕の神経だか性癖だかが直つたと云つ

たら、直り方があまり安っぽくって恥ずかしいくらいです。が、僕は今より十層倍も安っぽく母が僕を生んでくれた事を切望して已まないので。白帆しらほが雲のごとく簇むらつて淡路島あわじしまの前を通りま
す。反対の側の松山の上に人丸ひとまるの社やしろがあるそうです。人丸とい
う人はよく知りませんが、閑ひまがあつたらついでだから行つて見よ
うと思います」

結末

敬太郎けいたろうの冒険は物語に始まって物語に終つた。彼の知ろうと

する世の中は最初遠くに見えた。近頃は眼の前に見える。けれども彼はついにその中に這はい入つて、何事も演じ得ない門外漢に似ていた。彼の役割は絶えず受話器を耳にして「世間」を聴く一種の探訪たんぼうに過ぎなかつた。

彼は森本の口を通して放浪生活の断片を聞いた。けれどもその断片は輪廓りんかくと表面から成る極きわめて浅いものであつた。したがつて罪のない面白味を、野性の好奇心に充みちた彼の頭に吹き込んだだけである。けれども彼の頭の中の隙間すきまが、瓦斯ガスに似た冒險譚だんで膨脹ぼうちようした奥に、彼は人間としての森本の面影おもかげを、夢現ゆめうつのごとく見る事を得た。そうして同じく人間としての彼に、知識以外の同情と反感を与えた。

彼は田口と云う實際家の口を通して、彼が社会をいかに眺めて
いるかを少し知った。同時に高等遊民と自称する松本という男か
らその人生觀の一部を聞かされた。彼は親しい社会的關係によつ
て繋がれていながら、まるで毛色の異なったこの二人の対照を胸
に据えて、幾分か己れの世間的經驗が広くなつたような心持がし
た。けれどもその經驗はただ広く面積の上において延びるだけで、
深さはさほど増したとも思えなかつた。

彼は千代子という女性によしやうの口を通して幼児の死を聞いた。千
代子によつて叙せられた「死」は、彼が世間並に想像したものと
違つて、美くしい画えを見るようなところに、彼の快感を惹ひいた。
けれどもその快感のうちには涙が交つていた。苦痛を逃のがれるため

に已^{やむ}を得ず流れるよりも、悲哀をできるだけ長く抱^{いだ}いていた意味から出る涙が交^{まじ}つていた。彼は独身ものであった。小児に対する同情は極めて乏しかった。それでも美しくいものが美しく死んで美しく葬られるのは憐^{あわ}れであった。彼は雛^{ひなまつり}祭^{よひ}の宵^{よひ}に生れた女の子の運命を、あたかも御雛様のそれのごとく可憐^{かれん}に聞いた。

彼は須永^{すなが}の口から一調子^{ひとちょうし}狂^{おやこ}った母子の関係を聞かされて驚いた。彼も国元に一人の母を有^もつ身であった。けれども彼と彼の母との関係は、須永ほど親しくない代りに、須永ほどの因果^{いんが}に纏^て綿^{めん}されていなかった。彼は自分が子である以上、親子の間を解し得たものと信じて疑わなかった。同時に親子の間は平凡なもの

と諦^{あき}らめていた。より込み入った親子は、たとえ想像が出来るにしても、いっそう腹にはこたえなかつた。それが須永のために深く掘り下げられたような気がした。

彼はまた須永から彼と千代子との間柄を聞いた。そうして彼らは必^{ひつきよう} 竟 夫婦として作られたものか、朋友^{ほうゆう}として存在すべきものか、もしくは敵^{かたき}として睨^{にら}み合うべきものかを疑つた。その疑いの結果は、半分の好奇と半分の好意を駆^かつて彼を松本に走らしめた。彼は案外にも、松本をただ舶来のパイプを銜^{くわ}えて世の中を傍観している男でないと発見した。彼は松本が須永に対してどんな考でどういう所置を取つたかを委^{くわ}しく聞いた。そうして松本のそういう所置を取らなければならなくなつた事情も審^{つまび}らかにした。

かえり

顧みると、彼が学校を出て、始めて實際の世の中に接触して見たいと志ぎしてから今こんにち日までの経歴は、単に人の話をそこそこと聞き廻つて歩いただけである。耳から知識なり感情なりを伝えられなかつた場合は、小川町の停留所で洋杖ステッキを大事そうに突いて、電車から下りる霜降しもふりの外套がいとうを着た男が若い女といつしよに洋食屋に這入る後あとを跟つけたくらいのものである。それも今になつて記憶の台に載のせて眺ながめると、ほとんど冒険とも探検とも名づけようのない兇戯じぎであつた。彼はそれがために位地いちちにありつく事はできた。けれども人間の経験としては滑稽こっけいの意味以外に通用しない、ただ自分にだけ真面目まじめな、行動に過ぎなかつた。

要するに人世に対して彼の有する最近の知識感情はことごとく

鼓膜の働らきから来ている。森本に始まつて松本に終る幾席かの長話は、最初広く薄く彼を動かしつつ漸々深く狭く彼を動かすに至つて突如としてやんだ。けれども彼はついにその中に這入れなかつたのである。そこが彼に物足らないところで、同時に彼の仕合せなところである。彼は物足らない意味で蛇の頭を呪い、仕合せな意味で蛇の頭を祝した。そうして、大きな空を仰いで、彼の前に突如としてやんだように見えるこの劇が、これから先どう永久に流転して行くだろうかを考えた。

青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年3月29日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集第五卷」筑摩書房

1971（昭和46）年8月1日初版第1刷発行

※訂正注記にあたっては、底本の親本を参照しました。

入力：柴田卓治

校正：伊藤時也

1999年9月18日公開

2011年5月3日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

彼岸過迄

夏目漱石

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>